

平成 27 年度
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

山口大学のFD報告書は、どのくらい読まれているのだろうか。毎年度FD報告書を作成している目的は、(1)FD活動を記録として残す、(2)その年度の活動を振り返り来年度の課題を見出す、(3)全学でFD活動の情報を共有する、の3点だと思う。(1)と(2)までは、各学部・研究科のFD担当者が報告書を作成することによって達成されるが、(3)の「情報共有」については心許ない。私自身、所属学科のFD担当者として、FD報告書の原稿を書いたことはあるものの、大学教育センター長の職に就くまで全学のFD報告書を読み通したことは無かった。FD報告書を読んでも、各学部・研究科におけるさまざまな活動が、成功例ばかりではなく、順調には行かなかった例についても記載されている。各学部・研究科の特性があるので、成功例であってもそのまま同じことをできるとは限らないが、問題意識を持って読むとさまざまなヒントが得られる。本報告書からいくつか例を挙げると、(1)初年次入門講義や基礎セミナーについての検討、(2)iPadを利用した化学演習の試み、(3)実習ログブック導入のその後、(4)博士課程(後期3年)の教育についての論考と研究指導FD、(5)ピア・レビューの問題、などがある。報告書全体に目を通して、どの部局の報告であるかを見つけていただきたい。

今回から、平成27年度に設置された国際総合科学部からの報告が新たに加わった。「カリキュラムの全体像を教職員全員が理解した上で学修指導を実践していく体制を整えるために」、合計13回もの研修会を実施されたとのことである。詳細は報告をご覧くださいとして、国際総合科学部が開講部局となっている共通教育科目「山口と世界」についての、授業スタイルと評価基準を揃えるための研修も行われた。これは、共通教育の開講部局におけるFD研修の数少ない例として注目される。平成25年度から始まった「新しい共通教育」は平成28年度で4年目を迎え、検証作業を行うべき時期に入る。共通教育の一般教養科目の開講部局となっている各学部でもFD活動を行っていただき、担当科目のみならず共通教育全体についても、問題点のご指摘、改善のためのご提案などをお願いしたい。

山口大学 大学教育機構
大学教育センター長
朝日 孝尚

第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	1
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	12
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	83
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	85
第1節 実施方法・実施状況	85
第2節 授業評価の結果について（全学）	92
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	107

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	119
第1節 授業公開（ピアレビュー）	119
第2節 学部・研究科主催FD研修会	123
第3節 教育改善に関する活動	127
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	133
第5節 FD実施経費報告書	137
第6節 来年度の課題	137
第5章 教育学部のFD活動	138
第1節 授業公開	138
第2節 学部・研究科主催FD研修会	139
第3節 教育改善に関する活動	147
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	147
第5節 FD実施経費報告書	148
第6節 来年度の課題	148
第6章 経済学部のFD活動	148
第1節 授業公開	148
第2節 学部・研究科主催FD研修会	148
第3節 教育改善に関する活動	149
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	149
第5節 FD実施経費報告書	151
第6節 来年度の課題	151
第7章 理学部のFD活動	151
第1節 授業公開	151
第2節 学部・研究科主催FD研修会	159
第3節 教育改善に関する活動	163

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	168
第5節	F D実施経費報告	170
第6節	来年度の課題	170
第8章	医学部のF D活動	171
第1節	授業公開	171
第2節	学部・研究科主催F D研修会	172
第3節	教育改善に関する活動	183
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	185
第5節	F D実施経費報告書	185
第6節	来年度の課題	186
第9章	工学部のF D活動	188
第1節	授業公開	188
第2節	学部・研究科主催F D研修会	188
第3節	教育改善に関する活動	191
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	192
第5節	F D実施経費報告書	195
第6節	来年度の課題	195
第10章	農学部のF D活動	196
第1節	授業公開	196
第2節	学部・研究科主催F D研修会	197
第3節	教育改善に関する活動	203
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	205
第5節	F D実施経費報告書	210
第6節	来年度の課題	210
第11章	共同獣医学部のF D活動	210
第1節	授業公開	210
第2節	学部・研究科主催F D研修会	213
第3節	教育改善に関する活動	215
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	216
第5節	F D実施経費報告書	218
第6節	来年度の課題	218
第12章	国際総合科学部のF D活動	219
第1節	授業公開	219
第2節	学部・研究科主催F D研修会	219
第3節	教育改善に関する活動	225
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	227

第5節	F D実施経費報告書	227
第6節	来年度の課題	227
第13章	人文科学研究科のF D活動	228
第1節	授業公開	228
第2節	学部・研究科主催F D研修会	228
第3節	教育改善に関する活動	228
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	228
第5節	F D実施経費報告書	229
第6節	来年度の課題	229
第14章	教育学研究科のF D活動	230
第1節	授業公開	230
第2節	学部・研究科主催F D研修会	230
第3節	教育改善に関する活動	230
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	230
第5節	F D実施経費報告書	230
第6節	来年度の課題	230
第15章	経済学研究科のF D活動	231
第1節	授業公開	231
第2節	学部・研究科主催F D研修会	231
第3節	教育改善に関する活動	232
第4節	学生授業評価・教員自己評価	232
第5節	F D実施経費報告書	233
第6節	来年度の課題	233
第16章	医学系研究科のF D活動	233
第17章	理工学研究科のF D活動	234
理学系		
第1節	授業公開	234
第2節	学部・研究科主催F D研修会	235
第3節	教育改善に関する活動	235
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	236
第5節	F D実施経費報告書	237
第6節	来年度の課題	237
工学系		
第1節	授業公開	237
第2節	学部・研究科主催F D研修会	238
第3節	教育改善に関する活動	238

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	238
第5節	F D実施経費報告書	238
第6節	来年度の課題	238
第18章	農学研究科のF D活動	239
第1節	授業公開	239
第2節	学部・研究科主催F D研修会	239
第3節	教育改善に関する活動	245
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	247
第5節	F D実施経費報告書	252
第6節	来年度の課題	252
第19章	東アジア研究科のF D活動	253
第1節	東アジア研究科の教育改善活動	253
第2節	博士課程でのF D活動	253
第3節	平成27年度の「研究指導F D」の実施状況	255
第4節	平成27年度の「研究指導F D」で表明された「研究指導」に対する意見等	256
第5節	平成27年度の「研究指導F D」の成果分析と課題	257
第6節	まとめ	258
第20章	大学院技術経営研究科のF D活動	259
第1節	授業公開	259
第2節	学部・研究科主催F D研修会	259
第3節	教育改善に関する活動	263
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	263
第5節	F D実施経費報告書	264
第6節	来年度の課題	264
第21章	連合獣医学研究科のF D活動	265
第1節	授業公開	265
第2節	学部・研究科主催F D研修会	265
第3節	教育改善に関する活動	265
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	270
第5節	F D実施経費報告	276
第6節	来年度の課題	276
平成27年度	山口大学 教学委員会 名簿	277
平成27年度	山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿	278
平成27年度	山口大学 大学教育センター 名簿	279

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む^{*}）。
^{*}FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成27年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は85名であった。また研修会は16種類・計23回開催され、参加者は計1078名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計403名であった。延べ1566名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	教員の協働がアクティブラーニングを深化させるー教員の協働によるアクティブラーニングの深化の可能性を探るー	平成27年8月6日(木)	13:30～16:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア棟情報メディア講義室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	河村律子(立命館大学国際関係学部教授)、大澤直樹(金沢工業大学工学部電気電子工学科准教授)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	教員協働によるアクティブラーニングに取り組んでいる理系・文系のそれぞれの2つの先進大学の先生方を招聘し、教員の協働によるアクティブラーニングがどのようにして大学の授業の中で展開され、学びを深化させるのかについて紹介。さらに、教員協働によるアクティブラーニングを実施する上で留意すべき点や課題についてパネルディスカッションを通して明らかにする。	教職員85名
									参加者計85名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	平成27年4月3日(金)	15:00～17:05	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア講義室 工学部D11講義室 医学部総合研究棟多目的室	岡 正朗(学長)、瀧瀬厚(副学長)、三池秀敏(副学長)、山内直樹(副学長)、朝日孝尚(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、木下真(大学教育センター准教授)	平成26年9月10日以降に新規採用された助教以上の教育職員	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員52名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	共通教育TA・SA研修会	平成27年4月8日(水)	13:00～14:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	朝日孝尚(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、林透(大学教育センター准教授)、森本宏志(保健管理センター准教授)、徳永和之(共通教育係長)	共通教育においてTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員17名 学生196名
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会	平成27年5月13日(水)	17:40～18:40	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	朝日孝尚(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFDコーディネータ	各学部・研究科のFDコーディネータを対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員18名
4	FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション(第1回)」	平成27年5月27日(水)	16:10～17:00	吉田地区	共通教育21番教室	野村厚志(教育学部教授・大学教育センター主事)	希望者	学生授業評価及び教員授業自己評価の趣旨、閲覧及び入力方法の説明、実際にIYOCANシステムにログインし学生授業評価の閲覧及び教員授業自己評価の入力を行う。また各自の評価結果に基づき、授業改善のための意見交換を行う。	教職員4名
5	アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！ー大人数授業、理系基礎科目を事例にしてー	平成27年7月9日(木)	16:10～18:00	吉田地区	総合図書館アカデミックフォレスト	新田英雄(東京学芸大学自然科学系教授)、山口達也(KEEPAD JAPAN ICT & テクニカルサポートマネージャー)	希望者	「大人数授業、理系基礎科目」の事例紹介を通して、アクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会とする。	教職員43名 学生14名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	FDワーク ショップ「教員 授業自己評価 の入力と授業 改善のための グループディス カッション(第2 回)」	平成27年7月 29日(水)	16:10～ 17:00	吉田 地区	共通教育21 番教室	野村厚志(教 育学部教授・ 大学教育セン ター主事)	希望者	学生授業評価及び 教員授業自己評価 の趣旨、閲覧及び 入力方法の説明、 実際にIYOCANシ ステムにログインし 学生授業評価の閲 覧及び教員授業自 己評価の入力を行 う。また各自の評 価結果に基づき、 授業改善のための 意見交換を行う。	教職員5名
7	発達障害学生 は何を悩み、 どのようなサ ポートを求めて いるのかーコ ミュニケーショ ン・サポート・ ルーム(CSR) から見えてき た本学の発達 障害学生への 合理的配慮ー	平成27年9月 1日(火)	13:00～ 14:00	小串 地区	医学部保健 学科第2研究 棟HD1-1	木谷秀勝(教 育学部附属 教育実践総 合センター教 授)	希望者	教員が授業やゼミ などの教育活動 をする際に発達障 害学生を巡るさま ざまな問題にどの ように理解し、対 応・支援してい たらよいかにつ いて具体的な事 例を交えて話す。 さらに、発達障 害学生の対応・ 支援に関するそ れぞれの学部 独自の課題につ いても具体的な 方向性を共有す る。	教職員34名
8	就職・採用活 動時期の後ろ 倒しと山口大 学の就職支援 Ver2.0	平成27年9月 15日(火)	14:30～ 15:30	吉田 地区	農学部・共同 獣医学部本 館 2階会議 室	平尾元彦(学 生支援セン ター教授)	希望者	平成27年度の4年 生から就職活動 の時期が変更さ れ、3月広報開 始、8月選考開 始の新ルール のもとで活動 がはじまった。 企業の採用活 動の実際と学 生への影響を 伝えるとともに 、山口大学の 就職支援の現 状と課題を語 る。	教職員24名
9	共育ワーク ショップ2015 「みんなで山 大の教育(共 育)について 語ろう！」	平成27年9月 28日(月)	13:30～ 17:30	吉田 地区	総合図書館 アカデミック フォレスト	曾根健吾(横 浜国立大学 大学教育総 合センター助 手)	希望者	大学教育とは、教 員、職員、学生 が共に創り上げ るもの(共創)で あり、かつ、共 に育み合うもの (共育)である。 山口大学 共育 ワークショップ では、教員、職 員、学生が一緒 になり、様々な 観点から語り 合い、考え合う 場を提供する。	教員16名 職員12名 学生36名 その他2名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	新任教員研修会(第2回)	平成27年9月29日(火)	15:45～17:40	小串地区	医学部霜仁会館3階多目的室	小川 勤(大学教育センター副センター長)、木下真(大学教育センター准教授)他	平成26年9月10日以降に新規採用された助教以上の教育職員	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員54名
11	授業科目シラバスから作成するルーブリック—観点別到達目標を活かして—	平成27年9月30日(水)	13:30～15:30	吉田地区	共通教育棟15番教室(アクティブ・ラーニング教室)	林透(大学教育センター准教授)、河島広幸(大学教育センター助教)、野村厚志(教育学部教授)、星野晋(国際総合科学部講師)	希望者	共通教育におけるアクティブ・ラーニング教室環境において、タブレット端末(iPad)利用を通じたアクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会とする。	教員14名 学生4名
12	大学における精神障害の実態と支援	平成27年10月14日(水)	13:00～14:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	奥屋 茂(保健管理センター所長)	希望者	大学生で認められる代表的な精神障害を取り上げて、日常の教育活動の際に、精神障害学生を巡る様々な問題にどのように対応・支援していったら良いかについて語る。精神障害をもつ学生においては、大学生活のいろいろな場面で困難を生じることが多く、ケースバイケースで対応することが必要である。	教職員44名
13	アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2—アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—	平成27年10月29日(木)	16:10～18:00	吉田地区	共通教育棟15番教室(アクティブ・ラーニング教室)	岩居弘樹(大阪大学全学教育推進機構教授)、SCSK株式会社、鷹岡 亮(教育学部教授)	希望者	共通教育におけるアクティブ・ラーニング教室環境において、タブレット端末(iPad)利用を通じたアクティブ・ラーニングのコツを学び、実践に活かす機会とする。	教職員40名 学生9名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
14	大学における精神障害の実態と支援	平成27年11月11日(水)	14:10～ 14:50	常盤地区	工学部D11番教室	奥屋 茂(保健管理センター所長)	希望者	大学生で認められる代表的な精神障害を取り上げて、日常の教育活動の際に、精神障害学生を巡る様々な問題にどのように対応・支援していったら良いかについて語る。精神障害をもつ学生においては、大学生活のいろいろな場面で困難を生じることが多く、ケースバイケースで対応することが必要である。	教職員69名
15	FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション(第3回)」	平成27年11月25日(水)	16:10～ 16:50	吉田地区	共通教育21番教室	野村厚志(教育学部教授・大学教育センター主事)	希望者	学生授業評価及び教員授業自己評価の趣旨、閲覧及び入力方法の説明、実際にIYOCANシステムにログインし学生授業評価の閲覧及び教員授業自己評価の入力を行う。また各自の評価結果に基づき、授業改善のための意見交換を行う。	教職員2名
16	最近の大学生が抱える悩みと対応について	平成27年12月16日(水)	14:30～ 15:15	吉田地区	人文・理学部大会議室	今井 佳子(学生相談所カウンセラー:臨床心理士)	希望者	最近の学生相談所の様子を紹介しながら、学生が抱える悩みの傾向や学生対応の話をする。できればロールプレイも取り入れ、実際の学生対応と一緒に考える。	教職員40名
17	反転授業の導入方法を学ぼうー学びのパラダイムシフトを誘発する反転授業の可能性と課題ー	平成27年12月16日(水)	15:50～ 16:30	吉田地区	教育学部21番教室	小川 勤(大学教育センター副センター長・教授)	希望者	最初に反転授業の具体的な導入方法を他大学の導入事例を交えて解説する。その後、反転授業の普及の背景やその教育効果および導入をめぐる留意すべき課題について説明する。	教職員76名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
18	山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2015『大学職員の専門性について考えてみよう!』	平成27年12月18日(金)	13:30～17:15	吉田地区	大学会館2階会議室	吉武博通(筑波大学ビジネスサイエンス系教授)、中村早苗(山口県立大学経営企画部財務グループ)、中嶋智久(徳山大学学生支援センター入試室)	希望者	昨年2月の中央教育審議会大学分科会『大学のガバナンス改革の推進について(審議まとめ)』を踏まえながら、大学経営に求められる企画力をテーマに、専門家を招へいた基調講演を行うほか、参加者一同によるグループワークを通して、山口地域の高等教育ネットワークの向上を図ることを目的とする。	教職員129名(第2部は90名)
19	FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション(第4回)」	平成28年1月13日(水)	16:10～16:40	常盤地区	工学部D33番教室	野村厚志(教育学部教授・大学教育センター主事)	希望者	学生授業評価及び教員授業自己評価の趣旨、閲覧及び入力方法の説明、実際にIYOCANシステムにログインし学生授業評価の閲覧及び教員授業自己評価の入力を行う。また各自の評価結果に基づき、授業改善のための意見交換を行う。	教職員1名
20	最近の大学生が抱える悩みと対応について	平成28年1月20日(水)	15:10～15:40	吉田地区	教育学部21番教室	今井 佳子(学生相談所カウンセラー:臨床心理士)	希望者	最近の学生相談所の様子を紹介しながら、学生が抱える悩みの傾向や学生対応の話をする。できればロールプレイも取り入れ、実際の学生対応を一緒に考える。	教職員72名
21	YU-AP&IR室合同企画FD・SDワークショップ「教学マネジメント強化のためのIRとは—データ活用方策を理解し、実践に活かすために—」	平成28年3月7日(月)	13:30～16:30	吉田地区	総合図書館アカデミックフォレスト	鳥居朋子(立命館大学教育開発推進機構教授)、川那部隆司(立命館大学教育開発推進機構准教授)	希望者	教学マネジメント強化のためのIRを機能させ、学生の学びの振り返りや修学指導、さらにはカリキュラムの改善充実を資するため、IRの意義を理解しながら、具体的なデータ活用方策のコツを学び、実践に活かす機会とする。	教職員(学内)24名(学外)17名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
22	FDワーク ショップ「教員 授業自己評価 の入力と授業 改善のための グループディス カッション(第5 回)」	平成28年3月 23日(水)	16:10～ 17:50	吉田 地区	共通教育棟 21番教室	野村厚志(教 育学部教授・ 大学教育セン ター主事)	希望者	学生授業評価及び 教員授業自己評価 の趣旨、閲覧及び 入力方法の説明、 実際にIYOCANシ ステムにログインし 学生授業評価の閲 覧及び教員授業自 己評価の入力を行 う。また各自の評 価結果に基づき、 授業改善のための 意見交換を行う。	教職員1名
23	平成27年度 第 1回障害学生 支援のための 研修会	平成28年3月 28日(月)	16:00～ 17:30	吉田 地区	共通教育棟 演習室2A		障害学生修 学支援に関 わる教職員・ 学生	発達障害のある学 生の修学状況の把 握と修学支援の方 法および授業中・ 授業外における支 援方法を学ぶ。	教職員9名
									参加者 計1078名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成27年10月21日(水)	13:00～ 13:50	吉田地区	経済学部第1会議室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員56名
2	大学教育センターと農学部、農学研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成27年10月21日(水)	14:30～ 15:30	吉田地区	総合研究棟3階	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員30名
3	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成27年11月18日(水)	14:30～ 15:30	吉田地区	人文・理学部大会議室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員43名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	対象者	内容	参加人数
4	大学教育センターと技術経営研究科(MOT)との教育改善FD研修会	平成27年12月1日(火)	14:30～15:20	常盤地区	大学院技術経営研究科棟1階会議室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員10名
5	大学教育センターと医学部医学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成27年12月1日(火)	17:00～17:50	小串地区	医学部総合研究棟8階多目的室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員9名
6	大学教育センターと理学部、理工学研究科(理学系)・医学系研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成27年12月16日(水)	13:00～14:00	吉田地区	人文学部小講義室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員36名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
7	大学教育センターと工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成28年1月6日(水)	14:10～ 14:50	常盤地区	工学部D棟1階 D11教室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成28年4月からの障害者差別解消法施行に向けて、本学の全学的な支援体制の現状を紹介するとともに、各学部・学科における障害学生支援体制や支援内容を見直すために、意見交換を行う。 また、コミュニケーション・サポート・ルーム(CSR)の室長およびカウンセラーを交えて、CSRの利活用の方法や学部・学科との連携・協力関係の在り方について意見交換を行う。	教員69名
8	大学教育センターと共同獣医学部・連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	平成28年1月13日(水)	13:00～ 13:50	吉田地区	農学部・共同獣医学部本館2階会議室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成28年4月からの障害者差別解消法施行に向けて、本学の全学的な支援体制の現状を紹介するとともに、各学部・学科における障害学生支援体制や支援内容を見直すために、意見交換を行う。 また、コミュニケーション・サポート・ルーム(CSR)の室長およびカウンセラーを交えて、CSRの利活用の方法や学部・学科との連携・協力関係の在り方について意見交換を行う。	教員22名
9	大学教育センターと医学部保健学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成28年2月15日(月)	13:00～ 13:50	小串地区	保健学科第2研究棟HD1-1	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員34名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	大学教育センターと国際総合科学部との教育改善FD研修会	平成28年2月17日(水)	14:50～ 15:50	吉田地区	共通教育棟28番教室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)を取り上げ、本事業取組のテーマⅠ(アクティブ・ラーニング)の主要課題であるALポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ(学修成果の可視化)の主要課題である学修成果測定の概要について紹介しながら、各学部等との意見交換を行う。	教員23名
11	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	平成28年2月17日(水)	16:00～ 16:30	吉田地区	教育学部21番教室	林透(大学教育センター准教授・IR室長)	各学部・研究科の全教員	平成28年4月から障害者差別解消法施行に向けて、本学の全学的な支援体制の現状を紹介するとともに、各学部・学科における障害学生支援体制や支援内容を見直すために、意見交換を行う。また、コミュニケーション・サポート・ルーム(CSR)の室長およびカウンセラーを交えて、CSRの利活用の方法や学部・学科との連携・協力関係の在り方について意見交換を行う。	教員71名
									参加者 計403名

第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

教員の協働がアクティブラーニングを深化させる

―教員の協働によるアクティブラーニングの深化の可能性を探る―

日時：平成27年8月6日（木）13:30～16:30

会場：吉田地区：メディア棟情報メディア講義室,常盤地区：工学部 E31 教室、小串地区：医学部総研究棟8階 多目的室

参加者：参加総数 85名（昨年138名）（教職員 85名）

（内訳）山口大学64名（吉田地区43名（昨年度66名）、小串地区13名（昨年度33名）、常盤地区8名（昨年度7名））、徳山大学10名（昨年度5名）、山口学芸大学7名（昨年度8名）、東亜大学4名（昨年度1名）；アンケート回収数44枚

講師：立命館大学国際関係学部 河村 律子 教授、金沢工業大学工学部電気電子工学科 大澤 直樹 准教授

内容

講演会は3部構成で行われた。第1部では、朝日孝尚大学教育センター長より、参加者間の共通理解を得るために「アクティブラーニングとは何か」をテーマにアクティブラーニングの定義や導入することの意義、さらに、昨年度、山口大学が大学教育再生加速プログラムに採択され、共通教育を中心に組織的に実施されている取組の概要について説明があった。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	10	22.7%
良かった	25	56.8%
どちらとも言えない	7	15.9%
あまり良くなかった	2	4.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	44	100.0%



河村律子教授（立命館大学国際関係学部）の講演の様子



大澤直樹准教授（金沢工業大学工学部）の講演の様子

第2部では、教員の協働の下で実現している先進的なアクティブラーニングを実践している立命館大学国際関係学部（文系）と金沢工業大学工学部電気電子工学科（理系）の2つの大学の先生方から、それぞれの大学において、どのような方法で教員の協働が実現し、アクティブ・ラーニングが進化していったのかを紹介していただいた。また、それぞれの大学で教員協働によるアクティブラーニングを実施する上で現在、課題となっていることを併せて紹介していただいた。具体的には、河村教授からは、立命館大学国際関係学部が学部全体の教員が協働で取り組んでいるアクティブラーニングである「グローバル・シミュレーション・ゲーミング」の概要や取組事例について、また、大澤准教授からは、金沢工業大学での技術者育成のカリキュラムや学修方法について紹介があった。

第3部では、大学教育センターの林准教授から、「アクティブラーニングの3つのポイント」、「主体的学びとは何か？」について説明があった後に、「教員の協働で実現されるアクティブラーニングの有効性と課題を考える」をテーマとし、パネルディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、3人のパネリストに対して参加者より多くの質問や活発な議論があり、参加者のアクティブラーニングに対する理解が深化するとともに、取り組むべき課題を考える有意義な講演会となった。

講演会後のアンケート結果では、「非常に良かった」および「良かった」を合わせて79.5%（昨年度86.9%）であり、参加者の約8割近い方が内容に満足度したという結果になった。

しかし、講演内容は大変興味深いものであったが、参加者はここ3年間の全学講演会の中で85名と最も少なく（昨年度（26年度）138名、一昨年度（25年度）116名）、講演会の企画内容や広報活動に課題を残した。3つのキャンパスの参加者合計も64名と昨年度（106名）より42名少ない結果となり、アクティブラーニングそのものが全学的にある程度浸透し、先生方があまり魅力を感じなかったのか、または、「教員協働によるアクティブラーニング」というテーマ設定がわかりづらかったのか、これから分析し、来年度の全学講演会の企画立案に活かす必要があると感じた。



縦横機構長の冒頭の挨拶



朝日大学教育センター長の講演



パネルディスカッションの様子



全学FD・SD講演会の様子

2. 研修会

(1) 平成 27 年度 新任教員研修会（第 1 回）

日時：平成 27 年 4 月 3 日（金）15:00～17:05

会場：吉田地区：メディア講義室、常盤地区：工学部 D11 講義室、小串地区：総合研究棟多目的室（8F）

参加者：参加人数 52 名 内訳：吉田地区 25 名、小串地区 17 名、常盤地区 10 名

内容

当該研修会が年 2 回（第 1 回目 4 月、2 回目 9 月）開催されることになって 5 年目を迎えた。4 月に第 1 回目を開催する趣旨としては新任教員に対して就任当初の時期から本学の大学改革の方向性と現状、さらに教育と研究に関する方針、さらに具体的な教育への取組方法等について理解を深めていただくためである。岡学長からは本学の大学改革の状況と今後の本学の進むべき方向性等について講話をしていただいた。また、三池理事兼副学長（学術研究担当）には本学の研究活動や競争的研究資金獲得の状況、新たな研究支援の取組等について、瀨瀬理事兼副学長（教育学生担当）からは大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えや本学の大学改革の方向性について講話をしていただいた。その後、朝日大学教育センター長から「山口大学における教育の特徴について」というテーマで昨年度から実施されている「新しい共通教育」や本学が現在推進している AP 事業について説明があった（図 1 参照）。また、山内副学長（学術情報担当）からは大学情報機構の概要と本学の情報戦略、教員の情報セキュリティ・モラルの重要性について説明があった。

研修会後半では、小川大学教育センター副センター長・教授から「授業の実施方法について」というテーマで、大学における教育改善の具体的な取組方法や本学の障害学生支援方法について説明があった（図 2 参照）。特にシラバスをしっかりと記載することの重要性について説明があった。木下大学教育センター准教授からは「山口大学における授業評価と FD 活動」というテーマで、本学の授業評価の方法や研修体制について説明があった。

研修会に参加した先生方の全体的な感想としては概ね好評であった（表 1 参照）。先生方からの意見としては、「山口大学の大学改革に対する取り組みの熱心さが伝わってきた」、「大学の概要がよく分かってよかった」、「コンパクトに大学の全体像が把握することができた」、「前任校ではこのような研修会がなかったので新鮮であった」、「授業の組み立て方などが将来に役立つことが多くよかった」、「しばらく大学教育から離れていたもので、現状はどうなっているのかについて知識が得られたので有意義であった」という意見があった。その一方で「もう

少し詳しい内容が聞けるとよかった」、「予定時間を超えて講義時間が長すぎる」、「研修内容が多すぎる」という意見もあり、次年度以降、研修内容を改善する必要性も感じた。

当該研修会の開催時期については、入学式直後というタイミングが新任教員にとって概ね好評であり、この時期の開催が定着してきたと感じた。また、開催場所については概ね好評であった。その他の意見としては、「研修時間は長すぎる」という研修時間を



図 1 講演中の朝日大学教育センター長

表 2 アンケート集計結果

設問1	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	12.5%
良かった	30	62.5%
どちらとも言えない	8	16.7%
あまり良くなかった	4	8.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	48	100.0%

問題視する意見があり、今後、検討する必要性を感じた。また、研修会の開始時間が遅れたことに対する不満が参加者の多くから寄せられた。

今回は年 2 回実施される当該研修会の第 1 回目の研修会であり、スタートアップ的性格を持つが、その意義は十分に果たせたと感じている。



図 2 講演中の小川大学教育センター教授



図 3 研修会場（吉田地区）の様子

(2) 平成 27 年度 共通教育 TA・SA 研修会

主催：山口大学大学教育機構

日時：平成 27 年 4 月 8 日（水）13:00～14:30

場所 全体研修：吉田地区：共通教育メディア講義室
常盤地区：工学部 E 棟 31 番教室
小串地区：医学部総合研究棟 8 階多目的室
個別研修：共通教育棟（分科会ごと）

参加者：共通教育において TA・SA として採用される大学生・学部生、TA・SA を採用する教員
参加者総数 213 名（学生 196 名、教職員 17 名）

内訳：吉田地区 174 名（学生 159 名、教職員 15 名）、常盤地区 33 名（学生 31 名、教職員 2 名）、小串地区 6 名（学生 6 名）アンケート回収 173 枚

内容：TA・SA の制度を十分に活用できるように、TA・SA の職務内容、望まれること、注意点、採用する教員が知っておくべき点など。

報告

共通教育の授業補助を行うティーチングアシスタント（TA）およびスチューデントアシスタント（SA）のための研修会を 4 月 8 日（水）の 13 時 00 分から吉田・常盤・小串地区で同時開催した。本研修会は年 1 回実施し、今年で 9 年目（9 回目）となる。参加者数は全体で 213 名であり、昨年度の 184 名から 29 名増加した。研修会は 2 部構成で、内容は以下の通りであった。

第 1 部（13:00～14:00）

朝日大学教育センター長から「新しい共通教育の特徴と TA・SA の職務内容・注意点」について説明があった。現在の共通教育カリキュラムは平成 25 年度からスタートし、教養コア科目・英語・一般教養科目・専門基礎科目がある。一部の授業科目を除き、クォーター制が導入された。TA・SA に



はきめ細かな指導という重要な役割を期待するが、それと同時に、各自将来の職業のための知識・技能を獲得する機会として欲しい。

小川大学教育センター副センター長からは、「障がいを持つ学生の対応について」について説明があった。障害者差別解消法により、平成 28 年 4 月から国立大学においては、差別的取扱いの禁止や合理的配慮の不提供の禁止が法的義務となる。山口大学では「学生特別支援室」（仮称）を設置し、障害学生を支援する体制を構築しつつある。授業担当教員から TA・SA に支援の依頼がある場合があるので、十分な事前打ち合わせのもと支援してほしい。また、TA・SA は 2 級アクセシビリティリーダー取得のための講座を無料で受講できる。

林大学教育センター准教授から、「出席確認システムと修学支援システムの宿題提出機能の使い方」について説明があった。共通教育棟では学生証による出席登録のシステムが稼働しているので、授業で学生に出席登録を促してほしい。学生証を忘れた者への対応など、よくある質問への回答・対応方法は資料を参照のこと。また、宿題提出機能については修学支援システムを経由して利用できる。

山口大学労働安全衛生管理室・主任：保健管理センター・森本准教授からは、「大学の授業における安全衛生（教職員・TA・SA の責務と安全衛生健康管理）」について、平成 27 年度版「安全・衛生と健康の手引き」や安全力 Quiz 等の配布資料のもと、安全配慮義務等について説明があった。

最後に、教育支援課共通教育係より TA・SA の諸手続きについて、未だ手続きを完了していない教員は速やかに TA・SA 雇用の手続きを行って欲しいこと、TA・SA は出勤簿への押印を忘れないことの説明があった。

第 2 部（14:00～14:30）

個別研修として、各分科会に分かれて研修を実施した。情報処理基礎、化学実験・生物学実験・地球科学実験、数学 I・II、スポーツ運動実習、多人数・講義系授業科目の分科会に分かれて、それぞれの授業を補助する際の特設設備・機器・試薬の使用法・手順などの安全にかかわる事項や、出席管理・レポート作成・情報機器の操作方法に関する事項の注意・説明があった。

第 1 部終了後に回収したアンケートについて、選択式の設問に対する回答の集計結果を下表に示す。また、自由記述については概ね次の通りであった。

- 希望する研修内容：障がいを持つ学生への対応や安全衛生に関するもの、具体的な機器の操作方法などを希望する回答が目立った。
- 実施時期：就職活動と重なっており時間を指定されると難しい、研究・実験等の他の用務で忙しい、他の行事（フレッシュマンセミナー）と重なっているなどの意見があり、時期をもう少し早くすることや複数回に分けて実施するなどの提案があった。
- 実施場所：吉田地区の会場の収容人数が少なく、立ち見が出る状況となった。そのため、広い会場を希望する等の記述が多かった。
- その他：資料配布で十分ではないか、TA・SA によっては 2 回目の研修であり、内容が過去のものとなりあまり変わり無いという指摘があった。

なお、回収されたアンケートの内、公開可のものは大学教育センター・ウェブサイト上で学内スタッフのみに公開される。

質問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数(人)	割合(%)
非常に良かった	15	8.7
良かった	99	57.2
どちらとも言えない	38	22.0
あまり良くなかった	14	8.1
良くなかった	5	2.9
無回答	2	1.2
合計	173	100.0

質問：実施時期はいかがですか？

選択肢	人数(人)	割合(%)
良い	163	94.2
良くない	9	5.2
無回答	1	0.6
合計	173	100.0

質問：興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

選択肢	人数(人)	割合(%)
是非参加したい	9	5.2
できるだけ参加したい	106	61.3
あまり参加したくない	42	24.3
参加したくない	13	7.5
無回答	3	1.7
合計	173	100.0

質問：実施場所はいかがですか？

選択肢	人数(人)	割合(%)
良い	108	62.4
良くない	63	36.4
無回答	2	1.2
合計	173	100.0

(3) 平成 27 年度 F D コーディネータ研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 27 年 5 月 13 日（水）17:40～18:40

場所：各地区第 1 テレビ会議室

対象：各学部・研究科 F D コーディネータ（参加者：18 名、アンケート回収数 13 名）

報告

最初に朝日大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨の説明があった。その後、大学教育センターの林准教授から、今回から F D 担当者から F D コーディネータに名称が変更された趣旨説明があった。特に、YU-AP 事業の関係から今後、学部教育の中でアクティブラーニングを導入していく必要がある。そのために F D 活動を積極的に推進する必要があり、コーディネータとして、その役割を果たして欲しい旨、説明があった。

次に、大学教育センターの小川副センター長・教授より、本年度の教育機構主催の研修会の概要と F D コーディネータに対する依頼事項の説明があった。本年度は、教員・職員および学生が一体になって実施される「山口大学共育ワークショップ」を引き続き開催するとともに、全学 F D ワークショップとしてアクティブラーニング関係の研修が多く開催される予定であることなどの説明があった。また、A L ポイント導入の趣旨や A P 事業全般について説明し、意見交換を行う教育改善 F D 研修会の開催や他大学の教員協働によるアクティブラーニングの実施事例の紹介等をメインテーマにした全学講演会の開催が予定されていること



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	7	53.8%
どちらとも言えない	4	30.8%
あまり良くなかった	1	7.7%
良くなかった	1	7.7%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

が明らかにされた。特に、全学講演会では立命館大学と金沢工業大学における教員協働による組織的なアクティブラーニングの導入例を紹介していただくとともに、パネルディスカッションを実施するので多くの教職員の参加をお願いしたい旨、説明があった。

依頼事項としては、講師派遣型研修会の開催日時の報告、全学講演会の参加依頼、教育改善研修会の開催日時の報告については、締め切り期日（5月末）までにそれぞれ報告をしてほしい旨、説明があった。

次に、各学部がFD計画を立てる際に、必要となるFD予算要求について、大学教育センターの林准教授から説明があった。本年度は教育機構のFD予算が昨年度に引き続いて減額されることが予想されるため、必ずしもすべての予算要求に応えられない旨、説明があった。

最後の意見交換では、各学部・研究科からは特に意見がなかった。

当該研修会後のアンケートでは、研修全体の感想は約53.8%の先生方から良かったという感想をいただいた。満足度が比較的低いのでは、FD・SDに関する連絡事項が多いことが原因であると考えられる。研修時期については84.6%がこの時期でよいという回答であった。また、今後参加してみたい研修としては「国際化の諸問題に関する研修」や「PBLに関する研修」などが挙げられていた。

自由記述欄に記載されていた意見としては、「研修計画の全体的な位置付けが理解できた。」という感想とともに、「FD計画の提出が5月末と早いので、もう少し、後ろにして欲しい」という要望があった。また、FDの内容に関しては「FDのためのFDではなく、できるだけ具体的な取組に関する研修」や「授業改善に役立つ研修」の開催を希望する意見があった。

(4) FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション（第1回）」

主催：大学教育機構

日時：平成27年5月27日（水）16:10～17:00

場所：共通教育21番教室

参加者 4名（アンケート回収数：4枚）

報告

研修会は前半と後半に分かれ、前半は講師による学生授業評価及び教員授業自己評価についての説明があり、後半はIYOCANシステムの利用方法や参加者同士の意見交換であった。

前半の具体的な説明内容は次の通りであった。山口大学では学生授業評価・教員授業自己評価を通じて授業改善に取り組んでいる。授業の最終回において、学生授業評価アンケートにより学生からの意見を聴く。その後、教員は自分の授業を自己評価し、学生授業評価の結果と照らし合わせることで、授業に関する気づきを持ち、次年度の授業シラバスや実際の授業に反映させる。これを継続的に繰り返すことにより、授業改善につなげる試みである。

後半では、まず実際に参加者がIYOCANシステムにログインし、操作方法を確認した（但し、参加者は全て新任教員であったため、現在のところ対象となる授業はなかった）。また、参考として「成績分布共有システム」の紹介があった。さらに、参加者同士の意見交換として、前任校と比較しての山口大学での学生の様子や、授業で困っていること、参加者の取り組みなど、以下のような話題があった。

- ・ 学生がおとなしい、授業に参加させるにはどうすればよいか。

- ・ スマートフォンなどを触って、なかなか授業に集中できていない。スマートフォンが机の上にあるとつい見てしまうのではないか。授業ではしまっておくよう、指導してよいか。
- ・ 授業形態によっては、逆にスマートフォンを積極的に活用する進め方もできる。
- ・ 授業が退屈だとスマートフォンなどを触ってしまうこともあるので、授業の進め方にも工夫が必要。
- ・ 多くの教室が講義中心を前提としており、グループディスカッション等がやりにくい構造である。

アンケート結果

研修会に参加した感想として「授業評価の仕組み・目的、システムの概要が分かってよかった」という回答が、また、今後参加したいと思う研修内容として「具体的な授業改善の工夫・方法、教育で困っていることを共有・相談できるような研修の場」を希望する回答があった。

質問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	25.0
良かった	3	75.0
どちらともいえない	0	0.0
あまり良くなかった	0	0.0
良くなかった	0	0.0
合計	4	100.0

質問：興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

選択肢	人数	割合(%)
ぜひ参加したい	3	75.0
できるだけ参加したい	1	25.0
あまり参加したくない	0	0.0
参加したくない	0	0.0
合計	4	100.0

質問：実施時期はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	4	100.0
良くない	0	0.0
合計	4	100.0

質問：実施場所はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	4	100.0
良くない	0	0.0
合計	4	100.0

(5) FD・SDワークショップ「アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！—大人数授業、理系基礎科目を事例にして—」

共同企画：山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブラーニング研究会

日時：平成 27 年 7 月 9 日 (木) 16:10 ~ 18:00

場所：山口大学総合図書館アカデミックフォレスト

参加者：57 名

内容：

平成 27 年 7 月 9 日 (木) に、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) & KEEPAD JAPAN アクティブ・ラーニング研究会 共同企画 FD・SD ワークショップ『アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう！—大人数授業、理系基礎科目を事例にして—』が、学内外から合計 57 名 (学内教職員 27 名、



学生 14 名、学外教職員 16 名) の参加者を集めて、本学吉田キャンパス総合図書館アカデミックフォレストにて開催された。本ワークショップは山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム (AP) におけるアクティブ・ラーニング推進のための取り組みの一環として実施された。

冒頭、瀨瀬 厚 山口大学理事・副学長 (教育学生担当) より開会挨拶と趣旨説明があり、AL ポイント認定制度をはじめとして山口大学がアクティブ・ラーニングの推進に力を入れていることが述べられた。最後に、本ワークショップで得た成果を大いに活用して、さらなるアクティブ・ラーニングの推進への期待感が述べられた。

第一部では事例報告が行われた。まずは、山口大学経済学部 鍋山祥子 教授より、「やればできる、大人数による双方向型授業」と題して報告があり、200 名の受講者を超える学部専門教育での実践について紹介があった。この大人数授業では、「アクティブ・ラーニングシート」の活用を通して、学生同士のグループワークをして、教員と学生の双方向での講義が可能になっている。こうした、双方向型での学びが学生の学習意欲を高める効果があることが実践を通して感じられていることが述べられた。

次に、東京学芸大学自然科学系 新田英雄 教授より、「理系基礎科目におけるアクティブ・ラーニング〜クリッカー活用によるピア・インストラクション〜」と題して、事例報告があった。はじめに相互作用型授業や教育効果の定量的比較、またアクティブ・ラーニングの優位性について話があった。続いて、ピア・インストラクションについてクリッカーの実演を通して紹介があった。クリッカーを活用した講師と参加者とのコミュニケーションの効果は高く、会場の参加者が身を乗り出して、本報告に集中している姿をみることができた。

最後に、KEEPAD JAPAN 山口達也 ICT&テクニカルサポートマネージャーより、「今すぐ始められるクリッカー利用方法」と題して報告があった。報告では、実演を通して、パソコンとクリッカーさえあれば簡単にクリッカーを活用した講義を行うことができる方法について紹介があった。



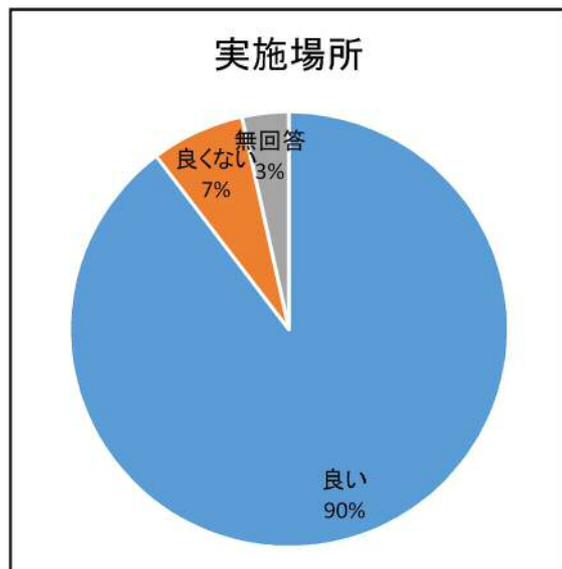
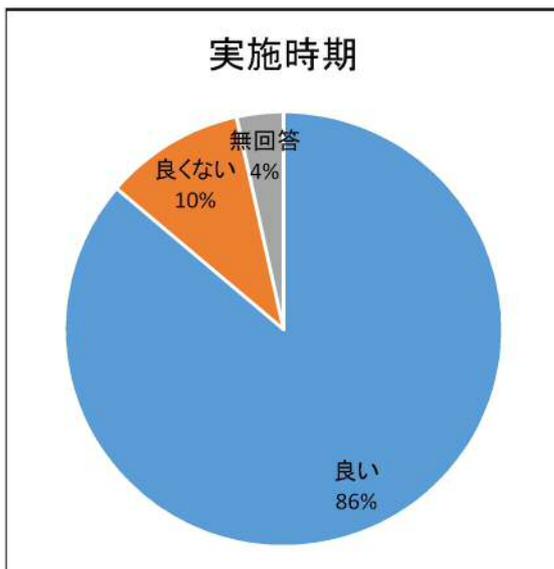
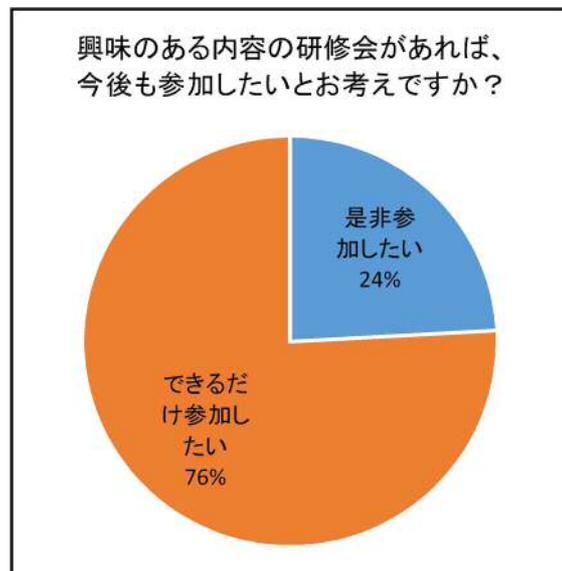
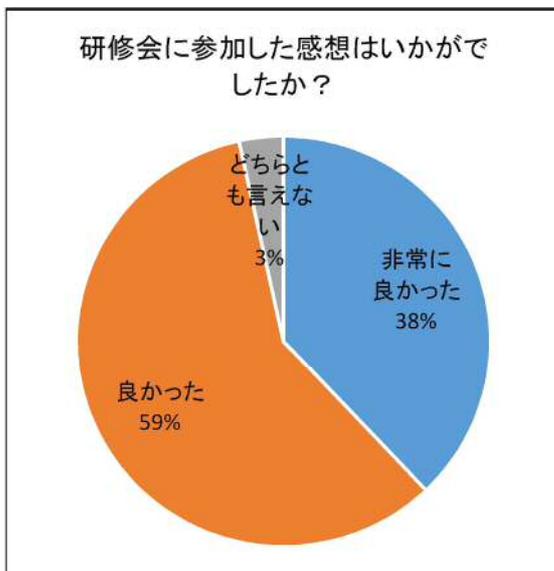
第二部のグループワークセッションでは、大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授のファシリテーションにより、「学生の学びを促進するアクティブ・ラーニングであるために！」というテーマでグループワークを行った。グループワークでは、参加者の気づきや講師への質問など、意見交換が活発に行われた。最後に各グループでまとめた意見を林准教授により全体での共有がなされた。

まとめ：

近年、大学において学生の汎用的能力が涵養されることが社会的にも求められており、アクティブ・ラーニングへの関心と期待が高まっている。本ワークショップでも多くの参加者がアクティブ・ラーニングに対して高い関心を持っていることが伺われた。さらに、クリッカーを活用した講師と参加者のコミュニケーションは非常に効果的 (象徴的) であった。本ワークショップには、学生も参加しており、学生ならではの視点で、アクティブ・ラーニングについて意見が述べられていた。こうした学生もクリッカーの実演を通して、聞く (学ぶ) 態度が能動的 (アクティブ) に変わっていく姿を

みることができた。

クリッカーの活用はアクティブ・ラーニングの一手法であるものの、学習者の学びの態度をアクティブ・ラーニングへと転換するには効果的であることが参加者同士（教員・職員・学生）でも確認しあえるワークショップとなった。今後も山口大学におけるクリッカー活用の普及を進めることで、アクティブ・ラーニングがさらに推進されることが期待される。



(6) FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション（第2回）」

主催：大学教育機構・共通教育情報処理部会

日時：平成27年7月29日（水）16:10～17:00

場所：共通教育21番教室

参加者：5名（アンケート回収数：5枚）

報告

最初に、今回のFDワークショップについて次のような趣旨説明があった。平成28年度より授業科目「情報リテラシー演習」では、クォーターの授業回数：7～8回のうち2回程度を共通の内容で、残りの5～6回程度を担当教員の計画した内容で実施することになった。そこで、この授業を担当してきた教員が集い、平成28年度に向けた授業計画・改善のための情報交換・議論を行う。これまでの具体的な授業内容や改善の試みなどを、学生授業評価結果を参考にしながら、議論を深める。次に、講師及び参加者から、「情報リテラシー演習」についてそれぞれの授業内容や工夫・気を付けていること・授業の様子などの報告があった。

- ・ 授業内容としては、「ネットワークマナーブック」（山口大学メディア基盤センター刊行）を用いた学内IT環境・電子メールの利用法（1回）、図書館ガイダンス（1回）、ワープロソフト（3回）・表計算ソフト（2回）などである。授業で使う資料を作成し、それに沿って授業を進めているが、学生授業評価結果によると、資料はあまり評価されておらず、この点が課題と考えている。
- ・ 上記の内容に加えて、プレゼンテーションも行っている。実際に授業を担当した印象では、学生によってスキルの違いが大きい。意外とコンピュータの扱いに不慣れな学生もいる。
- ・ 毎回コメントシート（手書き）を書いてもらい、質問を受け付けている。質問に対しては、次の授業で全て回答するようにしている。多くの質問が受講生からあるが、その内容は受講生の所属によって随分異なる。コメントシートの整理や回答の準備に手間はかかるが、質問に丁寧に答えていくことで、学生の理解度や受講生の所属による違いなどの特性を知ることができ、授業改善にも役立っている。
- ・ 電子メールの書き方を特に意識して指導している。また、ワープロソフトの利用法としては、学会の論文スタイルを真似た文書作成を行っている。なお、今回のFDワークショップの趣旨からは少し離れるが、「情報セキュリティ・モラル」の授業内容に課題を感じている。
- ・ 一般の教員から、「情報リテラシー演習」の授業で、電子メールの書き方をしっかり身に付けさせて欲しいという意見を伺っている。そこで、毎回の授業で電子メールを教員に送信させ指導している。また、コンピュータのスキルについては個人差が大きい。受講生が多数の場合には教員・TAだけでは対応できないこともあるので、学生同士も教え合うように指導している。そのため、初回の授業で、受講生がお互いに打ち解けあうような活動を行っている。
- ・ 1年次にコンピュータを活用する授業ということで、教える側としても受講生が大学での学習等に困らないようにという視点で指導している。そのためか、この授業が終わった後でも、パソコンについて困ったことがあると、情報リテラシー演習を担当した教員に質問・相談に来ることがある。このように、情報リテラシー演習の担当教員は、長期に渡って学生から頼りにされるケースがある。PC-SOSセンターもあるが、時間制限や心理的なバリアもあり、情報リテラシー演習の担当教員はパソコンサポートの役割も果たしている。
- ・ 情報リテラシー演習は7～8回の授業であり、2回程度を共通の決められたことに費やすと、残りの5～6回でワープロ・表計算・プレゼンテーションなどを全て取り入れることは時間的に難しい。そこで、十分な予習を課すなど反転授業のような試みを取り入れて授業を計画してみたい。

- ・ 毎回コメントシートを書かせている授業については、受講生からの質問・意見などを集約し、受講生の所属等による特性の違いを明らかにできれば（一般化）、教員間で共有することも考えられ、有意義であると思う。

上記のような参加者からの発言より、本報告者は次のような認識に至った。「情報リテラシー演習」は山口大学の全学生が1年次（ほとんどが前期 Q1）に履修する。そのため、山口大学の学生として身に付けるべき情報リテラシーをこの授業で修得することが求められる。その具体的な内容としては、電子メールやネットワークのマナー、山口大学での LAN・Wi-Fi に接続するための手順、図書館の利用法などが挙げられる。さらには、受講学生の所属にもよるが、教員免許取得のための必修科目にもなっており、学校教育現場における ICT の利活用に発展する内容も求められている。その一方で、受講生は多様である。従って、7～8回の限られた時間数の中で多様な受講生に対して多様な内容をどのようにして定着させるかが共通の課題となっている。それに対して授業担当者らは、受講生同士で教え合いを促す試み、受講生と教員との電子メールやコメントシートなどによる密なコミュニケーションを取る試み、毎回の課題による習慣づけによって定着させる試み、専門教育につながる継続的なサポートなど、授業改善・工夫を定常的に行っていることが分かった。今後の課題としては、少ない授業時間数の中で多様な内容をどのように定着させていくか（あるいは、授業内容を取捨選択するか）、「情報セキュリティ・モラル」の内容と伴に検討する必要がある。

6. アンケート結果

アンケート集計結果は下表の通りであった。また、自由記述として、「他の教員がどのような授業をしているか知ることができた」、「情報セキュリティ・モラルの考え方についての FD ワークショップを希望する」、「開催時期としては試験期間が終わってからにしてほしい」といった回答があった。

質問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	40
良かった	3	60
どちらともいえない	0	0
あまり良くなかった	0	0
良くなかった	0	0
合計	5	100

質問：興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

選択肢	人数	割合(%)
ぜひ参加したい	2	40
できるだけ参加したい	3	60
あまり参加したくない	0	0
参加したくない	0	0
合計	5	100

質問：実施時期はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	4	80
良くない	1	20
合計	5	100

質問：実施場所はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	5	100
良くない	0	0
合計	5	100

(7) 発達障害学生は何を悩み、どのようなサポートを求めているのか

日時：平成 27 年 9 月 1 日(火)

[吉田地区] 13:00~14:00

場所：医学部保健学科第 2 研究棟 HD1-1

(小串キャンパス)

講師：木谷 秀勝

(教育学部附属教育実践総合センター 教授)

参加者：34 名(アンケート 31 枚回収)



内容

今回の研修会では、発達障害のうち自閉症スペクトラム障害 (以下、ASD) の学生はどのようなことが苦手で何を悩んでいるか、学生自身はどのように自分をとらえているのか、これらの学生に対してどのようなサポートが求められているのかについて事例をもとに説明がなされた。

講師が担当する面接では、面接対象者の年齢の幅は広く、生後 12 ヶ月から 57 歳である。現在の研究においては ASD を有する乳児は生後 8 ヶ月から 10 ヶ月で健常な乳児と発達が異なることが知られており、ASD の支援はなるべく早期の段階からの予防的な対応が効果的であることがわかっている。幼稚園や小学校から継続的に支援してきた学生と、高校から大学にかけて不適応を起こして事例化した学生たちを比較すると、明らかに幼少期から支援を受けた人の方が適応できることがわかっている。これは、支援開始が遅かった場合、それまでに周りから叱られ続けてきたために『何をやっても自分はだめだ』という気持ちが強く、達成感を感じることができないことが一因にある。大学においても、それ以前の早期に対応したケースと、入学後に周囲が気づいて支援を開始するケースでは大きく適応が異なる。また、支援の成否にかかわらず、早期からの支援を継続することによって、困ったときに『大人はきちんと話を聞いてくれる存在である』という安心感を得ることができる。これによって、何か困った事態が生じたときにパニックに陥らずに、周囲に相談ができるようになる。従って、支援を通じて自分を理解してくれる大人と出会う機会を得ることも重要である。

講師の研究室では、ASD の学生を集めて合宿を行っている。この合宿では、これまで継続してきた支援の最終ゴールとして全員が告知を受けていること、自分についての理解を深めるとともに自分の特性を他者にアピールできるようになることを目標としている。具体的には、パワーポイントを用いて自己 PR (自分史の紹介等) とモットーを書かせるようにしている¹。この過程では「自分は何が得意なのか」についての気づきを重視し、苦手とすることに対して「がんばれ」と言うのではなく、どのようなツールを用いれば克服できるのかを検討することを重視している²。寝食を共にするこの合宿を通じて、ASD の人たちの心の世界が、行動のレベルから見える表面的な姿と如何に大きく乖離しているかを実感している。

Student special Support Room (以下、SSR) への相談には、これまで診断を受けたことのない学生が来訪するケースがある³。これらの多くは入学時からのケアではなく、入学後に周囲が気づく場合で

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	22	71.0%
良かった	8	25.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.2%
合計	31	100.0%

¹ ASD の学生は口頭による発言が困難であるが、パワーポイントやスライドを用いるとうまくまとめることができる。

² ツールの例としては、ノイズキャンセリングヘッドフォンなど。

³学生特別支援室ホームページ

ある。例年、前期の講義が半分近く終わった5月の連休明けまでの間に、その時点で授業に出席していないという状況から教員が気づくケースがよくみられる。これは、発達障害学生は心身に生じた小さな異常に気づきにくく、状態が悪化して鬱や引きこもりになった段階で周囲が気づくケースが多いためと考えられる。従って、教職員や事務職員には学生の健康面にも注意をしていただきたい。

発達障害学生が困っている点には、次の4つがある。1点目は、困っていることを上手く伝える方法がわからないことにある。そのため、相談する際に、非常に遠回しな話し方をしたり、表現がたどたどしい場合がある。また、鬱的な傾向がある場合は、何年も前の事をフラッシュバックするように思い出し、最近の事のように話す等の時系列的な混乱が伴う場合も少なくない。従って、話を聞く際はそれがいつ生じたかを確認・整理しながら聞く、口頭や文章による表現が苦手であれば直前一週間で困ったことを2つだけ箇条書きにさせるなどの工夫が効果的である。2点目は、相手に伝わったという実感を感じ取れないことにある。そのため、同じ話を何度も繰り返すことがある。このような場合には、話が伝わったときに出すサインをあらかじめ決めておいて、話が伝わったときにはサインで示すと効果的である。3点目には、自分の話を伝えるタイミングがつかめないことがある。例えば、ASDの学生はその場の雰囲気を読めないため、教員が多忙な時に来訪することがある。この場合には、曜日と時間を明確に決め、日程をパターン化すると効果的である。4点目は、様々な感覚が鈍いことにある。例えば、冬に半袖シャツを着る、話すときに相手に接近しすぎて大声でしゃべる、時間感覚が鈍いため遅刻するなど様々なパターンがある。これについては個々に応じて検討が必要であるためSSRにご相談頂きたい。

ASDの学生が抱えるこのような困難の背景には、困ったときの対処方法の獲得が難しい、達成感を感じることができない、同時処理が難しい、自分の得意さを活かす機会がみつけれられないことがあげられる。これらの背景にもご理解を頂き、ASDの学生に接していただきたい。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1

大学生になって発達障害と診断された場合、保護者はどのような反応を示すか。

A1

保護者の反応は、大きく2つに分かれる。ひとつは、「ああ、やっぱり」と納得する場合である。これは、大人しいアスペルガータイプの子供を持つ保護者に多い。もうひとつは大学に対して非常に攻撃的になる場合がある。これらの保護者は先回りをして事が起こらないように対処してきたケースが多く、本人は勉強面よりも生活が苦手な傾向がある。安易に受診を勧めるとトラブルに発展するケースもある。従って、教員個人で対応せずにSSRに相談していただきたい。

Q2

発達障害が疑われる学生に対して、どのように受診を促せば良いか。また、このような学生が休学した場合、その期間中の過ごし方はどのように指導すれば良いか。

A2

共通教育の講義で心理学を担当しているが、その中で発達障害についても取り上げるようにしている。そこでは、発達障害によるリスクとそれ以上に発達障害の可能性について話をしている。そうすると、「同級生にいる」、「うちの兄弟もそうだ」、「自分もそうかも知れない」というように、学生が自分で気づく事が多い。従って、講義の中で発達障害に関して説明をすることによって、「もしかして自分も」ということを伝えてゆくことと、そういった場合にどのようなケアがあればそのような人たちが伸びるのかということ積極的に説明するようにしている。そうすれば、学生自身で問題に気づくことがある。保健学科の専門教育の中で発達障害について取り上げる機会があると効果的ではないかと考える。

<http://ssr.ssc.oue.yamaguchi-u.ac.jp/>

休学中は、「何もすることがない」という学生が多い。この場合、リフレッシュのために余暇を楽しむための過ごし方について話をすることもある。また、復学後には講義や実験に出席するには体力が必要不可欠であるが、休学中に昼夜逆転等の不規則な生活によって体力が減退する学生がみられる。そのため休学中に体力が減退しないように、生活リズムを整え、体力を維持するように運動を取り入れるように指導をしている。

本研修会後のアンケートでは、「青年期からの関わりよりも、乳児期からの支援が望ましいことがわかった」、「サポートが必要なこと、サポートがあれば適応できることはわかった。どこまでサポートすべきなのか悩むことがある」、「具体的な話で非常に良かった」、「面白かった。ためになった」、「具体的に事例を挙げて説明されたので、とても理解しやすかったです」、「学位を取るサポートとしては、発達障害者にも考慮して接する必要があると思いますが、医療の専門職として育てて、実践の場に出してもいいものかは疑問に思います」、「個別の支援内容についても聞かせて頂きたかった。引き続き同じテーマで続けてほしい」、「具体的な事例が聞けた。ポジティブに対応したいと思った」、「看護の立場でもやはり専門家に相談して適切に対応すべきだと思います」との回答があった。

また、今後希望する研修会については、「学生と関わりについて」、「具体的なサポート内容について。医療系での就職先でのサポート体制や具体的な内容」、「木谷先生の研究内容をもと、さらに詳しく聞きたいです」、「今回のようなテーマ。科研で検証されたお話はエビデンスありで有意義でした」との回答があった。

(8) 就職・採用活動時期の後ろ倒しと山口大学の就職支援 Ver2.0

日程：平成27年9月15日(火) 14:30～15:30

場所：農学部・共同獣医学部本館 2階 会議室

講師：平尾 元彦 (学生支援センター教授)

参加者：24名(アンケート回収16名)

内容

農学部FD担当より、講師の紹介があり、研修に入った。内容としてはおおよそ以下のような内容であった。

学生の就職活動なので先生方非常に心配されていると思うし、当然、教育研究活動への影響はあると思う。そこを如何に上手にやりながらしっかり力を付けて社会で活躍する人材を育成し実際に活躍してもらうのが我々のミッションだと思う。

ご存じの通り、就職活動・採用活動の後ろ倒しが今年から始まった。4年生、M2の学生から始まって現在進行中。現在の状況は8月に事実上の解禁になって一気に内定が出ているという状況で、おそらく10月現在の数字は昨年とそれほど変わらないと予想される。

就職活動・採用活動の後ろ倒しの背景、元々は大学からの問題提起がスタートになっている。経済界が主に採用することもあり、日本経団連が中心になって採

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	31.3%
良かった	8	50.0%
どちらとも言えない	2	12.5%
あまり良くなかった	1	6.3%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	16	100.0%



用の秩序をどのようにしていくのか、一時期協定がなくなった時期もあるが、倫理憲章と言う形で日本経団連を中心に、3年生の10月採用広報の解禁、4年生の4月採用選考の解禁となっていたのが少し後ろ倒しになり12月解禁、4月解禁というのが良く知っているルール。それに対して大学がどのように言ってきたかと言うと、従来学生の就職採用活動の早期化・長期化の是正を大学関係団体の総意として経済団体にずっと要請してきた。倫理憲章の23年3月の改訂で12月解禁にしたが、依然として大学の授業、学事日程と重複し、学生の成長が最も期待される3年次の教育に支障または留学の断念という傾向が見られるので、更に見直して欲しいということを大学側の総意として経済界に要請をしていたという経緯がある。それに対して経済界は、それは分かるけどぬくらの反応で終わっていたが、2013年4月に安倍首相の経済界への要請があり、学生の就職活動に関して早期化長期化を是正せよと、それを受けて文部科学大臣から大学に次のような要請が来ている。

政府として経済界に後ろ倒しの要請を行いました。経済界もそうしますと答えています。それについて大学等においては時間を十分に活用して国民や社会の期待に応える人材を育成することが求められる。具体的には、1、大学改革の実行、2、ここでわざわざインターンシップという言葉を入れて来て、インターンシップをはじめとした初年次からのキャリア教育、職業教育等を各大学は充実してください。3、地域の産業界のニーズを踏まえたカリキュラムを作成してください。4、海外留学の促進とそのための体制整備を行ってください。

同時に今年は初年次なので就職活動時期の見直しにより、就職活動期間が短縮されることになるため学生に不安と混乱が生じないようにきめ細かく丁寧な対応を行って頂きたい。それによって学生が不利にならないようにして欲しいという要請も合わせて行われている。

当初、採用活動が後ろ倒しにされた関係で、就職できない学生が増えるのではないかと懸念された。今でもその懸念はあるが、それについてそういう事がないようにということも含めてのきめ細かな対応の要請。これが今回の後ろ倒しの背景になる。

改めてこの期間何が起きているのか、特に今年何が起きているのか、先生方が直面している問題について改めて説明すると、3年生の12月だった採用広報の解禁を3年生の3月に行う。採用広報と採用選考という2つの言葉が出て来るが経団連の倫理憲章に解説が出ている。採用広報は、我が社はこういう採用しますよ、募集人員何名ですよと、具体的な選考の情報を伝える、一方、採用選考は実際に面接をして選考する。数年前から3年生の12月解禁だった。12月くらいになるとエントリーシート書いたり、福岡ドームの合同説明会や単独説明会に行ったりしていたのが3月になった。

守れるのかという議論もあったが、就職ナビ各社はオープンを3月1日にしているので、3月以前に学生にメールを出したり、学生から何か受け付けたりするのがかなり難しくなっておりほぼ守られた。

インターンシップについてはその前も自由なので、1月、2月もインターンシップのサイトはオープンして動いていたがおそらく一部の学生に留まっている。首都圏ではかなり動いていたと聞いているが、地方では学生はそんなに行けない、企業もあまりやってない、大きな流れにはなっていない。もしかすると1月、2月はインターンシップに行っていますという学生もいたかもしれないが、1月、2月の期間は比較的穏やかだった。

採用選考活動は4年次の4月だったのが8月に一気に後ろ倒しになった。これについてはいろんな批判があるが、元々は大学からの要請に基づいている。元々大学は4年次になってから就職活動、採用選考については8月以降にしてほしいと言っていたのでその通りになった。それが良いかどうかは別の問題だが、久しぶりに8月選考に戻ったという状況。これについては、8月を守った会社もあるが守ってない会社もあった。

採用選考はいろんな形がある。面接の他に筆記試験やエントリーシート等、いろんな選考があるが、日本経団連の指針によると、エントリーシート、webテスト、テストセンターは8月よりも前でも良いと書かれている。会場に呼んで何かをやるのはその日その時間に行かないといけないのでかなり学

生を拘束する。エントリーシートを家で書く、あるいは web テストを家で受ける、テストセンターに行きたい時に行くということに関しては比較的自由度が高いのでこれは 8 月以前にやっても良いとなっているので、ここは趣旨として知っておいてもらいたい。4 月締切もあれば、6 月締切もあれば、7 月締切と言う大手企業もあった。それは経団連の指針上は可能だということになる。

これは民間企業の話で、公務員に関してはこの話に準ずるといってこの通りには動いていない。国家公務員採用試験、地方公務員採用試験は若干後ろに下がった。1 週間程度。大きく変わってはいない。国家公務員は 6 月に試験、採用面接は 8 月以降で、もうほぼ国家総合職、一般職、県庁の内定が出ている状況。市役所はこれからだがここ数日以内に続々出て来ると思われる。

これが今年の状況。

吉岡就職問題懇談会座長(立教大学総長)より緊急メッセージが 7 月 30 日に発表された。8 月 1 日から始まる採用選考活動の直前に大学の総意として発表され新聞でも報道されていた。要するに学生の過度な拘束、あるいはオワハラと言われているハラスメントがないようにと企業側に要請して、今回の 8 月解禁が無事に円滑にスタートする万全の体制を取ったということかと思う。

平成 28 年度、今後については、経団連の会長の記者会見の中で必要であれば見直すという話が出て来た。あそこまで言うということは多分見直すんだろうなと思う。10 月から経団連は経済界に、文科省は大学にこの新しいスケジュールに関してどうですか、何か問題点はないかと、どうしたら良いですかと調査すると来ている。これに関しては学生支援センターが取りまとめて文科省に提出すると思う。先生方からも意見、トラブルあれば報告して頂きたい。10 月からの実態調査と聞いているので、10 月になってから文科省から来ると思う。

今回の要請、大学から企業側に要請したことの一つとして、就職活動の時期を後ろにしてくれと言うのもあるが、もう 1 つ重要な要請がある。それは、学業成果(成績や履修履歴)をもって評価して欲しいと合わせて要請している。あまり注目されていないが要請している。

今までだと 4 年生になってすぐと言うことで、あまり修論、卒論のこと話し出来なかったが、今回、出来るようになってきているだろうと。あるいは 3 年生までに勉強してきたことも含めて評価してくださいと要請が成されている。これについてはまだ分からないが、学生から聞く限りは若干聞かれているらしい。若干増えたという印象は持っているが、より強く企業が行動したかどうかはわかってない。これについては、我々大学教育をしっかりとやっていく中で、そのことを評価してほしいと言う思いがあるので、これが実現できるように今後も働きかけていきたい。

各時期の活動内容、今の状況が具体的にどうかと言うと、先生方の研究室の学生に聞いている通りではないかと思うが、世の中全体的に言うとういわれているかと言うと、一言でいうと、間延び就活と言われている。なぜそうなったかと言うと、時期を追っていくと、3 年生の 12~2 月、前年に関しては 12 月オープンで、福岡ドームなりなんなりで合同説明会がかなりなされていたが、今年は流石になくなった。12~2 月の学業の影響はかなり少なくなったと思う。インターンシップが増えて短期のものに学生は行っているが、それは一部の学生だけで大きな流れではなかったと思う。この時期の 2 月のインターンシップはその後の選考で重要になって来ると言われている。今年の特徴はいろいろな言葉で言われているが、インターンシップ採用、という言葉が出て来ている。インターンシップ来た学生に特別ルートで特別な日に呼んで繋がっていくという企業の活動起きているので、2 月のインターンシップは結果的に言うと結構重要だったよねと言う結果が多分出て来ると思う。2 月のインターンシップは増えている。

3 年生の 3 月 1 日解禁、これまでの 12 月解禁だと理系の学生だと実験等で離れられないというのがあってなかなか緩やかなスタートだったが、今回 3 月スタートになった関係で一斉に各社動きだした。3 月の前半各地で合同説明会、単独説明会開催されてどこの会場も超満員で予想上回ったと聞いている。一方で後半は各社が個別の説明会に動いたので、合同説明会は軒並み集客が苦戦したという状況もある。企業も学生もスタートをダッシュした。春休み中なので 学業への影響は抑えられているが、これを見ても学生は大変だったと予想出来る。

だいたい3~4月に説明会がされて、4~6月、中小企業中心に選考動いている。うちは変わらないという中小企業もあるが、考えてみれば昨年と変わらずに同じ5~6月に選考している会社がたくさんあるが、そちらからすれば、大手が勝手に最初にやっていたのを後ろに持って行っただと、それだけだと思いが、5、6月くらいはかなり中小企業中心に活発に動いていた感じがある。リクルーターの動きも活発になっている。

学生達は6月くらいにかけては、毎日ではないがちょくちょく呼び出されるのでなかなか実験出来ないと聞いている。先生方も指導に困られた時期と思う。

7月になると大手企業が動き出している。後々検証が出て来ると思うが、結構な割合で大手企業は事実上の面接を7月になるとやっている。この時期に内々定出た学生もいるが、選考は8月と言うことで、8月1日2日くらいに内定出た学生もいると思う。実際話聞いていると、ほぼ、お盆前くらいで選考を終了させている。短期間に圧縮して選考しているので重複内定、一人で沢山内定をもらって、大量の辞退が発生しているという状況がある。

4年生の10月までに決まれば良いよねと言うのが大方の考え方だが、10月の内定式本当に来てくれるかと企業はびくびくしているところ。山口大学としての内定状況調査、最初9月30日現在で各学部の調査をして取りまとめるが、ほぼ昨年度並みに落ち着くのではないかと予想している。以後の動きに関してはほぼこれまでと同様な動きになるのではないかと予想している。

4年生の12月以降になると、毎年一定数いるが、進路未定の学生の問題は生じるだろうし、と同時に今年出て来るんじゃないかと思うのが採用出来ない特に中小企業増えだろろうと思う。後ろ倒しの影響なのか、人手不足の影響なのかかわからないが、非常に今採用意欲が高い。これは大手企業が数を増やしているという面もあるが、それ以上に中小企業において採用する会社増えてきているという現状がある。この前も交流会等で話をしたら、これから担う人材を採用したいんだと。なかなか今、転職市場も非常に厳しい状況なので転職でも取れない。高校生もなかなか取り難い状況になっている。そういった中で大学生をと、そういうニーズが確実に広がっている感じがある。

このような活動の中で、2つの問題の話をする。オワハラ、就職終われハラスメントという言葉が今年で来て何となく定着した感があるが、要するにうちに決めて他はやめてよねと、うちに来てねという部分で、こういったお願いと言うか、気持ちを伝えるということは通常やられるが、それをちょっと行き過ぎて、他社を辞退しなさいとか他社の選考に行くのを妨害するとか、長期の拘束をすることによって事実上就職活動が出来ないようにするとか、一種の脅しめいたことを言う等の事が予想されたので緊急メッセージでもそうだし、新聞報道等でもオワハラについてないよと言うことが盛んに報道されたということがある。

これに関しては10月の経団連等の調査、文部科学省の調査の中で我々としては報告しないといけないので、先生方でもそういう事例聞いた事があったらご一報頂きたい。今のところ私が聞いている範囲ではそれほどものではなさそうだという風な感触を持っている。おそらくほかの大学のキャリアセンターの方に聞いてもそんな感じかなと思う。毎年ある。拘束等の事はあるので、その範囲くらいかなということで深刻なダメージを受けているケースは今の所聞いてない。

もう1つ学校推薦の問題について、大学間の申し合わせ事項として今年は学校推薦は原則として修了年度の8月1日以降とするという件がある。これについてどう取り扱うかと言うことは全国的に決まったことはない。山口大学として特に決めたこともない。就職担当の教員の集まりの中では各学部学科のご判断でとなっている。学生に不利はないよという事で、学生達がしっかりと教育に専念出来るような状況を作るために8月以前の推薦も事実上のあり得るかなと思っているが、このような記載があるということをご承知頂ければと思う。推薦に関してはいろんな問題が出て来ている。学校において本来推薦すべきかどうか、この時期に出すべきかどうかというものもあるが、もう1つだけ情報提供すると、うちの大学の話ではなく他大学の話だが、推薦状を書いてやるから、そこに決めて就活をやめたらどうかという話を先生が学生にしたと。推薦状を出すということはその会社に行きますということとほぼ同義かと思うので、そういう話を先生が学生にするということは、これは先生が

就活をやめろという風にとらえられかねないという状況があるので、単に企業だけでなく、学校の教員側のハラスメントにならないような配慮と言うのも必要なのかなと言うのが他大学から入ったのでお伝えします。

山口大学就職支援室より先生方へお願いと言うことで最後に3点。このような状況の中で我々としては確実に学生達が就職出来て進路得られるようにと言うことでいろんな活動している。学内の行事、就職支援室の積極的な活用を是非促して頂ければと思う。我々としては学業と並行した就職活動を実現するというので、出来るだけ来てもらえる会社には来てもらって、実験しながら企業とあって、企業と会うのが終わったらまた実験に戻って行く、そういったものが出来るだけ効率的に出来るようなことを計画している。今年も学内業界・企業研究会、11月～2月に約500社来て頂く予定にしている。9月の末くらいから、案内を始める。今年は農学部 day を12月と1月、2回に拡大しての実施と言うことで準備をしている。4年生になってから学内の説明会の開催、あるいは就職相談、書籍の貸し出し、各種セミナーの実施などしているので、積極的に利用するように学生達に呼びかけて頂ければと思う。いろんな情報、何やっているかに関しては、我々は掲示すると共に、電子メールで配信をしている。昨年の11月から全学学生に対して直接配信を始めた。3年生以上、M1、M2も含めて、学生支援センター就職支援 NEWS、毎週月曜日に私が農学部就職担当の先生と農学部と大学院の学生3年生上に直接配信している。それに基本的な情報が入って来るのでご覧頂ければと思う。1、2年生には月1回、圧縮したものを学生支援センターキャリア NEWS という形で直接配信するようにした。電子メールは結構見てないし、だいたい就職活動上手く行ってない人ほど見てないような気がする。先生方からもこういうのが来ているよとか、見たらとか、一言お声かけ頂いて、たくさんの情報を活用できれば思う。

これからの事になるが、進路未定学生、これの重点支援が重要だと思っている。何よりも正確な把握、先生方の方で研究室の学生の状況を把握して頂くと共に、それを支援していく卒業までに決まるようにと言うことで、ハローワーク、来月から週2回吉田キャンパスで相談日を設ける事にしました。エージェントについては民間企業で登録したらその人に合った企業を紹介してくれるというサービスもある。特に技術系の方でこういう分野に行きたいとか、こういう場所、特定の場所で就職したいということがあればエージェントの活用と言うのも一つの手段かと思う。これについては私の方で説明するので学生がいたら就職支援室に行くようにご指示頂ければと思う。

1月から事実上卒業論文が終了して卒業までに就職決めたいとそれはあり得る。結構昨年も2～3月に決まっているのでそういった学生については重点支援に動きたいと思っている。

最後に特別な配慮が必要な学生、なかなかコミュニケーションが上手く行かない等の学生については学生特別支援室と連携して早目の取組を行っていきたいと思っているので、困っているということよりも、今後困るなというような学生さんがいたら早目に我々と繋がって行くようなことを先生方と一緒にやって行きたいと思うので協力頂きたい。

質疑では次のようなやり取りがあった。

Q: 農学部の自分の知っている範囲では、学生の地元志向、出身地への志向、公務員志向が強くなっているように思う。それが同じ学部同窓生同士が競合してしまうことがある。下級生から視野広くしていく必要があると思うが、我々として具体的にどういうことをしたら良いか考えても良く分からないのでアドバイスがあれば教えて頂きたいことと、もう1つインターンシップが踏み絵になったり、成績が重要視されるのはインターンシップの学生の話聞いてもそう思うが、ちょっと変な視点だが、例えば学士力という言葉が中教審で出されて、そこでは専門性よりプレゼン能力とかコミュニケーション能力と言う事の方が重要視されて、そういう事のベースに山大では共通教育のシステムを変えたりとか、インターンシップも長期インターンシップということをいろんなところの予算に入れてきているということで、社会のことも山大の中のこと整合性が取れなくなる気がしていて、自分もそれに

絡んでいたのも、その辺は先生からも資料まとめて山大全体に警鐘鳴らして頂きたいところではあるなど。質問は地元志向について。

A: 地元志向は高まっているどうかは分からないが、確実に高いのは事実。調査はしてほぼ 66. 数%くらいと思うが中四国九州出身者の山大学生の地元が良いですかと言うとだいたい 2/3、どこでも良いというのが 1/3 くらい。従って特に農学部と言う同じ学部の卒業生がある食品会社に競合するということは非常に有り得るような話であって、お互い辛いなという現状はあろうかと思う。一つは結果的に地元が良いと言うのはあるが、それはあり得る話なので、それは良いとしても、何も考えずに、あるいは何も知らずに、というのはあまり良くないことだと思う。我々として今やっているのは、一つは学内業界・企業研究会、これは全国から企業が来るので、5~6 年くらい前は就職活動向けと言うことで 3 年生対象にやっていたが、学年は取っ払っている。なかなか低学年は来ないが低学年の学生もちょっと話聞きに行こうということが気軽に出来るようなそんな体制づくりは撮っている。今年よりそれ強化して 1 年生向けの広報も強化して行く事になるかと思う。従って農学部の 1 年生、2 年生の方も今日は森永製菓が来る、どんな会社かちょっと聞きに行こうでも良いし、地元の会社が来る、それも聞きに行けば良い、その上で自分はどんな可能性があるのかということをやちゃんと確かめられるそういう環境、直接企業と会うということは作って行こうと思う。

もう 1 つ我々力を入れているのは本読むと言うこと。全ての学生についていちいち我々が指導するわけには行かないので、例えば食品業界であればどんな会社があるのかなとか、食品業界で開発した人ってどういう生き方をしているのかなと言うことを本で読み理解することによって、自分の可能性って凄くあるよねと言うことを分かってもらったら良いなと言うことで、就職支援室に本を沢山入れています。今 2800 冊くらいあって貸し出しもしていますので、それを 3 年生はもちろんですけど、1 年生から読むようにと言う形で働きかけている。まだこのくらいしかできてない状況ではあるが、こういうこと推進するために先ほど申し上げた学生支援センターキャリア NEWS と言うのを 1~2 年生向けに 11 月から配信するようにしたので、1~2 年生も一応メールは来ているので、ああいうのに行ってみたいなと思えばいける状況ではあるが、なかなか思わない。就職活動まだまだだよ、みたいな、そんな感じはあろうかと思う。一応、基盤としての広報、あるいは掲示等で知らせるということ。低学年向けの物も作っている。もし、やるとすれば、より分かり易く例えば農学部の 2 年生向けに企画するとか、農学部のこういう医薬に興味のある人にこういう企画をするとか、少しそんな取り組みも発展形としてはあり得るかなと思うので、もし先生方の方でこれ良いよねというのがあれば一緒に出来ると思う。

もう 1 つのインターンシップ等に関しては、実際に踏み絵的になっている面はある。正直に言えばあるが、一方でインターンシップに行かないと就職できないかと言うとそれもないだろうと思う。特に大手の技術系を採用する会社の中でインターンシップ来てもらうとありがたいがそんなに来られない。特に優秀で一生懸命実験とかに頑張っている学生ほどなかなか来られないという面があるので、結構探していると聞いている。優秀な技術系の学生を大学に探しに行っているという面があると聞いている。インターンシップというのは一つの手段なので、行ける人は行って頂ければ良いと思うが、いけない人は無理して行く必要はない。ただ、企業の人 came 時にはちょっと会いに行くとかそのくらいはして頂かないと結局接点持てないというのはあろうかと思うので、インターンシップはあくまで一つの手段であって、これじゃないといけないというものではない。いろんな接触の機会はあるが、出来れば早目に接触しておいて頂くことが、その後の効率的な就職活動に繋がっていくのではないかと思う。

Q: 本と言うのは具体的にどんな？

A: いくつかカテゴリーあるが、面接の達人とかいわゆる就職活動の本はもちろんある。あるいは業界研究、医薬品業界とか、業界本、これも結構ある。それ以外に三つ力を入れている物があって一つは理系本コーナーと言うのがある。技術者の事を書いている本を集めている。ノーベル何とか賞を受

賞した人の本などがある。それから働くことを研究する本というのでこれは小説とかも含めて必ずしも就職活動ではない人の生き方を書いている本、特に稲森和夫のなんとかとか、松下幸之助のなんとかとか比較的有名な方々が本をたくさん書かれているのでそういった本を通じて働くってどういう事かなと考えるということ。もう一つのコーナーは社会人基礎力のコーナーでこれはサラリーマンの方がよく読む例えばスピーチの仕方だとか企画書の書き方であるとかそういった一般向けの本で、決して大学生向けに書かれているわけではないが、企画書の書き方の本を読んで採用面接のプレゼンテーションに臨むとかそういったことも必要かと思う。こういったジャンルの本を入れているので、山口大学の就職支援室は結構そういう意味で特徴があって一種の図書館的な情報センター的な役割も果たしている。

アンケートでは以下のような意見が見られた。(原文まま)

- 学生への就職指導へのヒントがいただけた
- 現状理解が深まった
- 就職活動の現状を知ることが出来た
- 学生にどのようにアドバイスすれば良いか、なんとなくわかった(注意点含め)
- 貴重な情報を得ることができました
- 特に目新しい内容ではなかった

研修内容の希望については以下のような意見が見られた。

- 魅力的な講義の作り方
- モチベーションの低い学生へのやる気の出させ方(研究室でのふるまい等について)
- 全学学生の状況などがわかるもの
- 就活



(9) 山口大・創基 200 周年記念 共育ワークショップ 2015

「みんなで山大の教育（共育）について語ろう！」

日程：平成 27 年 9 月 28 日(月) 13:30～17:30

場所：総合図書館アカデミックフォレスト

講師：曾根健吾（横浜国立大学 大学教育総合センター助手）

参加者：66名

内容

9月28日（月）午後、創基200周年記念・共有ワークショップ2015「みんなで山大の教育（共有）について語ろう！」は、同大学の教員・職員・学生66名を集め、総合図書館・アカデミックフォレストにて開催された。冒頭、岡 正朗 学長より開会挨拶があり、会場一杯に集まった参加者に向けてエールを送り、教職学協働によるシラバス提案への期待を述べられた。また、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授より、本ワークショップは教員・職員・学生による共有の場づくりを目的としていること、さらには、本学の教育理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」に基づいたシラバス提案を狙いとしていることについて趣旨説明があった。

前半では、曾根健吾 横浜国立大学 大学教育総合センター助手より、『大学での学びを変える、学生が変わる』と題して基調講演があり、参加者同士のアイスブレイクを挟みながら、授業に関心を持っていない学生が相当数存在する現状の中で、学ぶことにより関心を持つことで、大学生活そのものが充実し、自らの成長に繋がることを伝えるとともに、学生時代を過ごした東洋大学での学修支援、現在の横浜国立大学での学生発案型授業を紹介しながら、学生と教職員が協働して教育改善を行うことで大学教育を変えられると訴えた。その後、グループワークセッションに移り、林 透 大学教育機構大学教育センター准教授による「シラバス設計の事始め」と題したオリエンテーションを経て、グループワーク『あったらいいな、こんな授業』『みんなでシラバスを作成してみよう！』では、教員・職員・学生協働の10チームがシラバス作成とグラフィック・デザインに挑んだ。

後半のポスターセッションでは、5グループごとの2班に分かれ、班ごとで各グループがシラバス及びグラフィック・デザインの内容を発表し、各班でのベストシラバスを選んだ。その後、各班から選ばれたベストシラバスの2グループが全体発表を行った。今回は、教職学協働チームが一緒になって発表する風景が印象的であり、「山口探検し隊」「コミュニケーションが世界を変える！」「タメグチ〇〇検定」「空き家政策学」など、学生自らが関心テーマを設定するオーダーメイド型、地域をフィールドとした実地型の授業科目が目立ち、共通点を感じられた。最後に、瀨瀬 厚 理事・副学長より閉会挨拶があり、「共有」の言葉が定着したことに触れながら、本ワークショップで試みられた学生発案を取り入れた授業設計・実践への期待が述べられた。

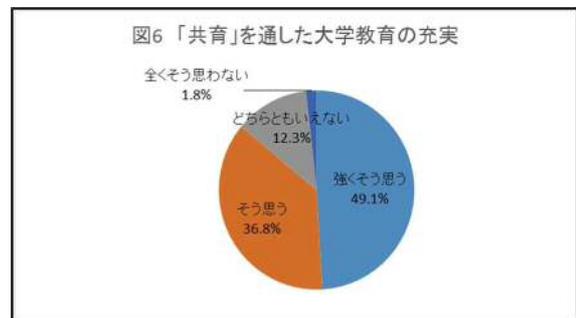
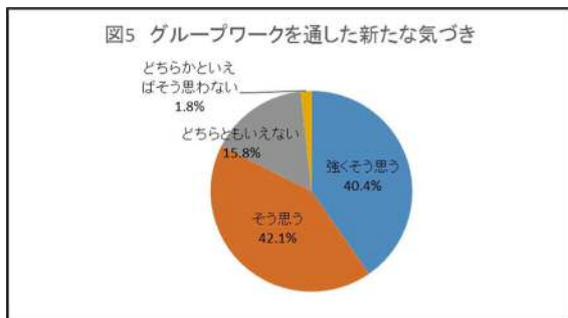
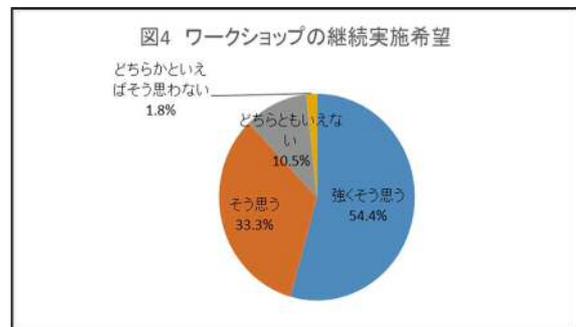
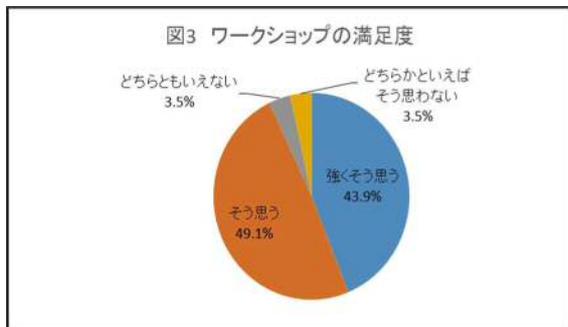
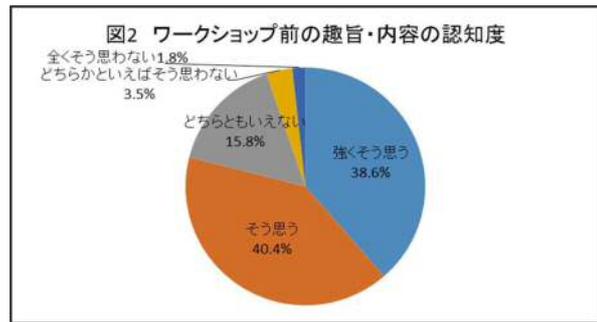
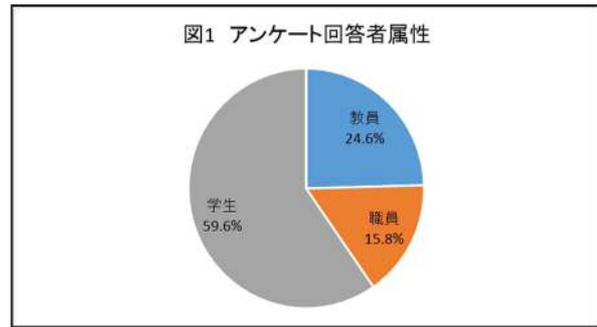


アンケート結果：

ワークショップ参加者によるアンケートについて、57名（回収率 86.4%）から回答を得た（図1）。共育ワークショップ自体が3回目の開催となり、「ワークショップの趣旨や内容についてある程度知った上で参加したか」という設問では、8割近く（昨年度は7割近く）の参加者が趣旨や内容を把握した上で参加する状況となり、認知度が高まった（図2）。また、実際に参加した上での理解度、満足度については、「強くそう思う・そう思う」が9割を超え（図3）、今後も継続していくべきであるという意見が9割近くとなった（図4）。

グループワークそのものに関連して、「グループワークを通して新しい気づきがあったか」という設問では、8割以上の参加者が新しい気づきを感じており（図5）、ワークショップ自体のコンセプトである、「共育を通して大学教育がより良くなると思うか」とい設問でも9割近くの賛同が得られた（図6）。

今回のグループワークは、同一グループでのシラバス作成であったが、ほとんどの設問において、昨年度同様の高い理解度・満足度を得る数値となっており、組織開発（OD）プログラムとしての共育



ワークショップの有効性が改めて窺える結果となった。

まとめ：

山口大学憲章が掲げる「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造を目指して、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。今年度のワークシ

ップでは、「あったらいいな、こんな授業」をテーマに、教員・職員・学生の学習経験や授業イメージを基に対話を行い、グループとしての理想の授業シラバス及びグラフィック・デザインを行うワークに取り組んだ。

大学教育の現場において日常的に接しているシラバスの意義や構造について認識し直しながら、教える立場や学ぶ立場からのアイデア提案を行うことで、「授業とは何か」、「学習者はどうあるべきか」という原点を見つめることができたのではなからうか。学生発案を通した授業設計の充実という新たな視点に気づくワークショップとなった。

この共育ワークショップという場は、山大の組織力の向上、引いては、山大の教育力の向上を図るための組織開発プログラムであるだけでなく、教員・職員・学生個々に気づきを与え、新しいチャレンジ精神を培う人材育成の機能を果たすものであると考えたい。

今回のワークショップでの新たなアイデアや出会いを大切に、今後の山口大の教育課程・学習支援の充実、教職学協働の強化に一層努めていきたい。



(10) 平成 27 年度 新任教員研修会 (第 2 回)

日程：平成 27 年 9 月 29 日(火) 15：45～17：40

場所：医学部霜仁会館 3 階多目的室 (小串キャンパス)

講師：木下 真 (大学教育センター教授) 小川 勤 (大学教育センター教授)

グループワーク・ファシリテータ (朝日センター長、野村厚センター主事、小川教授・木下准教授・林准教授・岡田講師・星野センター主事)

参加者：54 名(アンケート回収 45 名)

内容

大学教育センターの役割分担部分の最初は、木下准教授から、「来年度シラバスの入力について」および「学生授業評価の閲覧と教員授業自己評価の入力について」それぞれ説明があった。DP とカリキュラムマップ、シラバスの関係について説明があった。また、最近教員の授業自己評価の入力率が低くなっている。そのために教員は授業改善の PDCA サイクルを回すためにも必ず授業自己評価に入力するようとの指摘があった。

次に 7 班に分かれてグループ協議が行われた。テーマは、「本学赴任後の教育・研究活動を振り返って」ということで、赴任後の教育活動や研究活動で困っていること、悩んでいることなどを中心に参加者がそれぞれの立場からは話し合いを行った。本年度は学部・学科所属単位でグループを編成することを止

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	17.8%
良かった	28	62.2%
どちらとも言えない	1	2.2%
あまり良くなかった	1	2.2%
良くなかった	0	0.0%
無回答	7	15.6%
合計	45	100.0%



図 3 グループワークの様子

めて、さまざまな学部・学科、研究科の教員が班を編成する形に変えて実施した。教育活動については、山口大学生は比較的にまじめで、授業態度もよいが、もう少し自らが積極的に授業や学習活動に取り組んで欲しいという意見が多かった。共通教育では100名程度の受講生がいる中で、どのように出席管理や双方向授業を実施したらよいか分からないなどの意見があった。さらに、ゼミの学生がすべて発達障害や精神障害などの障害を抱えているため、教育指導に困っている事例なども紹介された。

研究活動では、科研費の採択が難しくなっている現状を考えると、今後の自分の研究活動が十分やっていけるかが不安である。現在の研究室の環境（狭い、汚い、遠いなど）が悪い、山口は東京など都会から離れているために研究レベルが低下するのが心配である、さらに、同僚の先生方の研究意欲が低いのが不満というような研究を巡るさまざまな意見を聞くことができた。

大学教育センター担当部分の研修全体に対する自由記述については、「専門分野が異なる先生方の意見が聞けて良かった」、「他の先生の状況が伺って共有できてよかった」、「何を知っておくべきなのかがよく分かった」、「学部によって環境がかなり違うことが分かりました。何事も悩まず、とりあえず相談してみるということが重要であることが分かった」、「同じ悩みを持つ先生方がいるということが分かってよかった」という研修会の意義を理解している肯定的な意見があった。その一方で、「もう少し内容を説明して欲しかった。」、「グループワークの内容をもう少し工夫して欲しい。」など研修方法や内容の改善を求める意見もあった。

新任教員対象の研修会は4月に引き続いて2回目であった。前半は理事・副学長の講話が中心であったが、後半は大学教育センターからシラバスや授業自己評価の方法などを大学教育センターから説明を行った。また、グループ協議は講話中心の研修の中で唯一、受講者同士が意見交換を行う場であるため、研修の満足度は毎年比較的高いものになっている。本年度は初めて、グループ編成をさまざまな学部・研究科の先生を混在した形で実施したが、研修会全体の満足度（「非常に良かった」＋「良かった」）も90.0%と高い値になっており、当該研修会の必要性は高いと感じている。

(11) FD・SDワークショップ「授業科目シラバスから作成するルーブ

リック—観点別到達目標を活かして—」

日程：平成27年9月30日(水) 13:30～15:30

場所：共通教育棟15番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：18名(アンケート回収18名)

内容

9月30日(水)に、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)FD・SDワークショップ「授業科目シラバスから作成するルーブリック—観点別到達目標を活かして—」を、教員・学生の合同にてアクティブ・ラーニング教室(共通教育棟15番教室)を活用して開催された。アンケート結果によれば、9割以上の参加者が「非常に良かった」「良かった」と回答しており、満足度の高いワークショップとなった。なお、本ワークショップは、文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環として開催されている。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	27.8%
良かった	12	66.7%
どちらとも言えない	1	5.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	18	100.0%

冒頭、朝日 大学教育センター長より開会の挨拶として本ワークショップの趣旨説明があり、ルーブリックの作成と実際のルーブリック活用を通して、よりよくルーブリックの効果を実感できるワークショップ体験であるとの説明があった。

第一部 インTRODakションとして、星野 国際総合科学部 講師 (大学教育センター主事) より、「授業設計を助けるルーブリックの特徴と効果」と題して報告があった。近年の大学教育改革にともない授業の再設計が求められ、より有効な授業設計のツール、または、成績評価のツールとしてルーブリックが挙げられることが述べられた。続けて、山口と世界を事例として、コモンルーブリックとそれを学部、授業に対応させるローカライズについて説明があった。本ケースのコモンルーブリックでは「発見する」「はぐくむ」「かたちにする」「分かちあう」「振り返る」の5つの規準と国際総合科学部のDP (ディプロマ・ポリシー) との擦り合わせについても紹介があり、最後に、ツールとしてのルーブリック活用の範囲について言及があった。

次に、第二部 グループワークとして、林 大学教育センター准教授のファシリテーションのもとルーブリック、ルーブリックを成績評価に活用するまでの手順などについて説明があり、参加者のセルフワークとしてレポート採点のためのルーブリック作成を行った。続いて、作成したルーブリックをレポート採点に活用し、他の参加者との違いや共通点などについて共有が行われ、ルーブリックの効用について参加者が実感している姿を見ることができた。また、本ワークショップに参加した学生は、自身の正課外教育活動を通して得られる能力、育成したい観点などを挙げてルーブリックを作成し、全体に発表を行った。続いて、第三部 リフレクションとして、野村 教育学部 教授 (大学教育センター主事) よりシラバス充実・教員授業自己評価を含めた本ワークショップへのコメントが述べられた。

最後に、朝日 大学教育センター長より閉会の挨拶として、さらなる大学教育改善の一歩としてルーブリックが活用されることの期待感が述べられた。

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
FD・SDワークショップ
授業科目シラバスから作成するルーブリック
～観点別到達目標を活かして～

【趣 旨】
本学では、2013年度から大学教育学会課題研究「学士課程教育における共通教育の質保証」との連携により、初年次教育科目『山口と世界』におけるコモンルーブリック開発及び実践を進めてまいりました。
今回のワークショップでは、授業科目シラバスに明記された観点別到達目標に基づきながら、授業科目の到達目標を提準とした科目ルーブリックの作成を体験していただきます。学生の到達目標の達成度を可視化し、自らの授業設計・成績評価の点検・充実に活かすキッカケづくりを提供します。併せて、シラバス充実や教員授業自己評価入力を働きかける機会としたいと思います。
なお、本ワークショップは、文部科学省・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の一環として開催いたします。

日時
2015年
9月30日(水)
13:30～15:30

場所
森田キャンパス
共通教育棟15階教室

対象
学内の教職員・学生
(教員の方は、担当の授業科目シラバスを所持する必要があります。)

【申込方法】 件名「ルーブリックWS申込」とし、①氏名、②所属、③e-mailを記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp (Eメール宛先変更は、9月28日(月)までに送信願います。)

【問合せ先】
山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室) E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp



ワークショップ及び全体発表の様子

(12) 大学における精神障害の実態と支援

日程：平成 27 年 10 月 14 日(水) 13:00～14:00

場所：人文理学部大会議室

講師：奥屋 茂（保健管理センター所長）

参加者：44 名(アンケート 35 枚回収)

内容

本研修会では、大学生にみられる代表的な精神疾患の症状と原因、必要な支援と配慮について説明があった。我が国では、精神疾患の患者数は増加の一途にあり、今や 4 大疾患（癌・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病）を上回る状況にある。これらの患者には、うつ病などの精神疾患が原因で自殺に至るケースがあり、年間の自殺者数は交通事故死の 6 倍を超えている¹。このような状況をふまえて、国はメンタルヘルスへの取り組みを強化し、平成 25 年からはこれまでの 4 大疾患に精神疾患を加えて、「5 大疾患」とする方針を打ち出している。このような状況下で、大学生についても死因の上位を自殺が占めるため、大学では精神疾患を有する学生の早期発見と治療、修学上の支援と配慮が重要な課題となっている。

大学生にみられる代表的な精神疾患には、統合失調症、気分障害（大うつ病性障害、双極性感情障害）、不安性障害、摂食障害、睡眠障害、発達障害がある。研修会では、これらの疾患と必要とされる支援や配慮について説明が行われた。特に発達障害の学生は、他の精神疾患を併発するケースがあり、学生ごとの状況に応じて様々な支援が必要である。そのため、修学支援においては教員、学生特別支援室（略称 SSR : Student special Support Room）、教務事務等と密な連携が不可欠である。これらの学生の病状悪化は、未治療であるとき、治療を中断したとき、大学生固有のライフイベント（成績不振、就職活動失敗、経済的苦境、対人関係・恋愛等の悩み）によるストレスが重なった場合に生じやすい。このような際に、学生相談所や保健管理センターへ自主的に相談する学生は自分自身の変調に気づけるため対応がしやすいが、そうでない学生の場合は教職員による気づきや懸念が大きな意味を持つので、教職員から学生相談所や保健管理センターへ積極的に相談して頂きたい。また、教職員には、学生との間に信頼関係を築きながら、これらの相談窓口を訪れることを勧め、必要に応じて学生に同伴して窓口に来訪するなどの対応もお願いしたい。これに加えて、その学生の学修に関わる担当教員やゼミ指導教員、学務担当職員、部活動顧問教員、キャリア支援室教職員等とも連携して組織的に支援することも重要である。そのため、教職員はこのような場合に備えて、各種研修等を通じて、学生との関わり方や組織的な支援のあり方を共有しておく必要がある。また、学生への配慮を検討する際は、「合理的配慮に基づく個別的支援」を実現するために、主治医や専門家の意見を踏まえた上で、教育的観点から適切なものとなるように検討しなければならない。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 保健管理センターではカウンセリングや投薬を行うのか。

A1 カウンセリングは実施している。投薬については緊急時のみ短期間行っている。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	22.9%
良かった	25	71.4%
どちらとも言えない	2	5.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

¹ 警察庁の調査によると、平成 24 年度における日本の自殺者数は、約 2 万 7 千人であった。

Q2 大学の周辺にあるクリニックではカウンセリングはしないのか。

A2 カウンセリングをしないクリニックもあると思う。それはクリニックの方針による。

Q3 明らかに処方された薬によって学生の状態が悪化しているケースがある。このような場合は何処に相談に行かせれば良いか。

A3 保健管理センターでは精神科の松原医師が基本的に対応している。医療機関を受診して経過が良くない場合には、まずは保健管理センターに相談してもらっても良いかと思う。また、周辺の高度専門医療機関としては、こころの医療センター、県立総合医療センターや山口日赤などが考えられる。

Q4 被害妄想がある場合はどのように対処すべきか。学生の言うことを否定せずに、受け入れるように聞くのが良いか。

A4 ケースバイケースであり、一概には言えない。まずは医療機関を受診してほしい。

Q5 投薬の期間はどのくらいか。

A5 これについてもケースバイケースである。例えば、統合失調症の場合は長期の服薬が必要になるケースが多い。

Q6 留学生への対応の窓口は何処になるのか。留学生支援室か、学生支援課か、保健管理センターか。また、これらはどのように連携しているのか。

A6 現状ではどのように対応するか体制の整備が確立していない。臨床心理士によるカウンセリングについては、言語の壁の問題があるため難しい現状にある。通訳ができる人がいても、医療現場での経験がないと難しいこともあると思われる。これについては今後の課題としたい。

Q7 どのようにして学生に受診を勧めれば良いか。

A7 緊急時を除いて、学生にいきなり受診を勧めるのは難しいと思われる。従って、学生との間に信頼関係を築いて、それと共に少しずつ受診を勧めていただき、必要に応じて学生に同伴して相談に来て頂くと良いと思う。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「一般論だけではなく、具体的事例、特にうまくいかなかったケースが聞けたらより良かった」、「具体的なケースとその対応（具体例が聞いたかった）」、「対応の実例があると良かった」、「教員がすべき具体的な行動の内容がよくわかった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「学生の指導の参考になるもの。メンタル、意欲など」、「今回のテーマに関して、より具体例などを踏まえながら、対策等について講演して頂けたらと思います」、「発達障害の具体例（具体的ケース）とその対応」、「良い（魅力ある）講義のやり方」、「発達障害学生の対応」、「高校の学習過程について、入試問題を作る際の参考になるような研修」、「高大接続に関する AP、CP、DP の作成について」、「発達障害（今日少しあったが詳しく）。アスペルガーや注意欠如の学生に対して接し方が難しい」、「メンタル面について」、「不登校について」、「学生のケアについて」、「学習障害についての研修」との回答があった。

(13) FD・SDワークショップ「アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2 —アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—」

日程：平成27年10月29日(木) 16:10～18:00

場所：共通教育棟15番教室

(アクティブ・ラーニング教室)

参加者：49名(アンケート回収37名)

内容

平成27年10月29日(木)に、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) & SCSK(株)共同企画FD・SDワークショップ「アクティブ・ラーニングのコツを学び、活用しよう Part2—アクティブ・ラーニング教室及びタブレット機器を中心に—」を、学内外の教職員と学内学生の合同にてアクティブ・ラーニング教室(共通教育棟15番教室)を活用して開催された。本ワークショップは、定員を大幅に超える49名(学内教職員：22名、学生：9名、学外教職員等：18名)の参加者を集めて、林透 大学教育センター准教授の総合司会のもと熱気に溢れるワークショップとなった。

アンケート回答者のすべてが「非常に良かった」「良かった」と回答しており、非常に満足度が高いことがわかるワークショップとなった。

また、「アクティブ・ラーニングに伴う教室環境とICT活用に関するアンケート」では、過半数の意見としてアクティブ・ラーニング教室がほとんど使用されていないことがわかったが、参加者のうち5割がアクティブ・ラーニング教室には教育・学習に効果があると考えており、3割以上がアクティブ・ラーニング教室を更に増やすべきだと考えていることが明らかになった。この結果から参加者のうち8割以上がアクティブ・ラーニング教室に肯定的な見解をもっていることがわかった。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	10	47.6%
どちらとも言えない	6	28.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

設問3 アクティブ・ラーニング教室についてどのようにお考えですか(複数回答)

選択肢	人数	割合(%)
教育・学習に効果がある	25	50.0%
教育・学習に効果があるとは思わない	1	2.0%
アクティブ・ラーニング教室を更に増やすべきである	17	34.0%
教室整備は現状で十分である	4	8.0%
アクティブ・ラーニング教室は必要ない	0	0.0%
無回答	3	6.0%
合計	50	100.0%

冒頭、朝日 孝尚 大学教育センター長より開会の挨拶があり、本ワークショップを機会として、アクティブ・ラーニング教室の利用拡大と ICT を活用したアクティブ・ラーニング促進への期待が述べられた。

第一部では、鷹岡 亮 教育学部 教授より「初等中等教育におけるタブレット端末の活用実践経験から」と題して事例報告が行われた。事例報告では、報告のまとめ（30秒で話すためのまとめ）を参加者が作成するという課題を提示することからはじめられ、最初の段階からアクティブ・ラーニングを意識した報告となった。このまとめ作成は、情報を構造化することにより、ただ聞くのではなくアクティブに聞くことで知識のよりよい定着をねらいとしている。本事例報告では、タブレット機器ならではの特徴としてデータの保存や他者との共有、また、他者間との比較が容易にできることであると述べられた。また、タブレットを活かした授業実践としてのビデオ撮影について、実際に撮影された動画を通じた紹介があり、動画を用いた振り返りや指導・アドバイスについて述べられた。最後に学生参加者より本報告のまとめが発表されアクティブ・ラーニングの実践をみる事ができた。



続いて、岩居 弘樹 大阪大学 全学教育推進機構 教授より、「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニング～外国語科目における実践事例を通して～」と題して事例報告が行われた。冒頭から参加者とのインタラクティブなやり取りがあり、非常にアクティブな学びの場となった。本事例報告で紹介された授業実践のポイントはビデオ撮影であり、タブレット端末を用いた動画を活用したアクティブ・ラーニングであると強調された。岩居 教授が担当される授業（ドイツ語）の流れは、①発音練習、②対話練習、シナリオ作成、③ビデオ撮影、④レビューのサイクルを回すかたちになっており、すべての場面でタブレット端末が活用されている。特に、シナリオを作成してドイツ語会話の実演をビデオ撮影する動画活用については、非常に高い教育効果が確認できており、ビデオ撮影の2ヵ月後でも学生たちは当時の会話をほぼ再現することができることが報告された。事例報告後の質疑応答でも活発な議論がなされ、このドイツ語の授業では、単にドイツ語を修得するだけではなく、Learn how to learn（学び方を学ぶ）ということを授業目標にしていることが述べられた。



第二部では、SCSK(株)河内 崇 氏によるデモンストレーション「タブレット端末を活用したアクティブ・ラーニングを体感しよう！」が行われた。本学が導入している、Bee Dance を用いて、クリッカー機能（集計機能）、描画ツール（直接画面への書き込み）や文書作成など様々な機能の紹介が行わ

れた。授業中における課題の提供・共有、そして提出をスムーズに行うことができ、タブレット端末の活用の幅がより大きくなることが述べられた。

最後に、朝日 大学教育センター長より閉会の挨拶があり、本ワークショップでのアクティブ・ラーニング体験を通して、その教育効果の高さを実感していただいたのではないかと趣旨の話があり、これを踏まえて本学のアクティブ・ラーニング教室及び ICT ツールがさらに活用されるよう推進していく旨述べられた。



(14) 大学における精神障害の実態と支援

日程：平成 27 年 11 月 11 日(水)14：10～14：50

場所：工学部 D11 番教室

講師：奥屋 茂（保健管理センター所長）

参加者：69 名(アンケート 27 枚回収)

内容

本研修会では、大学生にみられる代表的な精神疾患の症状と原因、必要な支援と配慮について説明があった。我が国では、精神疾患の患者数は増加の一途にあり、今や 4 大疾患（癌・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病）を上回る状況にある。メンタルヘルスへの対策が重視されるようになった背景には、うつ病などの精神疾患が原因で自殺に至るケースが増加したことにある。その結果、平成 25 年からはこれまでの 4 大疾患に精神疾患を加えて、「5 大疾患」とする方針を打ち出した。数年前の集計では、我が国では精神疾患を有する人は 300 万人を超えており、これは国民の 40 人に 1 人は何らかの精神疾患を持っていることになる。また、我が国の年間の自殺者数は約 3 万人であり、



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	22.2%
良かった	14	51.9%
どちらとも言えない	5	18.5%
あまり良くなかった	1	3.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.7%
合計	27	100.0%

これは交通事故死の6倍を超えている¹。このような状況下で、大学生についても死因の上位を自殺が占め、精神疾患の早期発見は重要な課題となっている。

大学生にみられる代表的な精神疾患には、統合失調症、気分障害（大うつ病性障害、双極性感情障害）、不安性障害、摂食障害、睡眠障害、発達障害がある。病状の悪化は未治療であるとき、治療を中断したとき、大学生固有のライフイベント（成績不振、就職活動失敗、経済的苦境、対人関係・恋愛等の悩み）によるストレスが重なった場合に生じやすい。罹患した学生は症状が増悪すると休学し、改善すると復学することから、半年程度の休学や留年を経験する者が多い。研修会では、これらの各疾患と必要とされる支援や配慮について説明が行われ、医療機関による適切かつ継続的な治療が必要であり、学生の自己判断で治療を中断しないことが大切であることが示された。修学支援においては、特に病識が乏しい学生の場合は、周囲の教職員による気づきが支援内容を検討する際に大きな意味を持つので、保健管理センターに相談して頂きたい。精神疾患を有する学生であっても、適切な治療が継続できれば修学が可能なケースも多い。医療費の負担については、市役所に相談してもらえれば、障害者総合支援法をもとに自己負担額を軽減することも可能である。支援策の検討においては、診断書も役立つが、精神疾患の場合は確定診断に時間を要することもあるので注意が必要である。診断書には主治医による具体的な所見が附記されていると支援方法を検討する際に有用である。休学期間がある場合の支援においては、新学期からの復学を希望する学生が多い。新学期からの復学に向けての支援準備は、新学期の約1ヶ月前から開始し、主治医や保護者と連絡を取りながら環境調整を行い、無理のない履修計画と支援内容を検討することが大切である。

精神疾患のある学生への支援においては、教員と医師やカウンセラーなどの専門職との協働が欠かせない。保健管理センターや学生相談所に自主的に行く学生は比較的対応がしやすいが、本人に病識のない場合には、周囲の教職員が保健管理センターまたは学生相談所に相談に行くように勧めていただきたい。また、その際には、その学生の学修に関わる担当教員やゼミ指導教員、学務担当職員、部活動顧問教員、キャリア支援室教職員等とも連携して組織的に支援することも重要である。従って教職員は日頃の各種研修等を通じて、学生との関わり方や組織的な支援のあり方を共有しておくことが望ましい。また、学生への配慮を検討する際は、「合理的配慮に基づく個別的支援」を実現するために、主治医や専門家の意見を踏まえた上で、教育的観点から適切なものとなるように検討しなければならない。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 学生が通院している場合、学生が教員に説明していることが事実かどうかを主治医に確かめることは可能か。学生が主治医に尋ねられることを嫌がる場合は、個人情報保護の観点から、主治医に聞くことは難しいか。

A1 例えば自殺が差し迫る等の逼迫した事態を除いて、基本的には本人の承諾無しに主治医から話を聞くのは難しい。このような状況の場合は、保健管理センターにご相談いただければ、医療者としての立場から学生本人の承諾ならびに主治医からの情報が得られる可能性がある。できるだけ焦らずに良い環境を保ちながら、学生に専門家の意見を聞いてみたいということで促していただくしかない。

Q2 教員が何らかの行動を起こさなければならないとき、教員は専門家ではないので対処方法がわからない。また、本人の了解無しに何かを行えば、学生から訴えられる可能性もある。このように考えると、極端に言えば、現状では何もできない状況にある。従って、このような学生に対応するには、専門家の数は限られているのだから、専門家と連携をとってくれる何らかのインターフェイスが必要である。

A2 常磐キャンパスには学生相談所があり、カウンセラーが毎日昼前後から夕方まで常駐している。

¹ 警察庁の調査によると、平成24年度における日本の自殺者数は、約2万7千人であった。

いきなり医療機関への受診を勧めることは難しいと思われるので、教員が学生に同伴して学生相談所に連れて行ってもらいたい。また、メンタル面に不調がある学生は体調にも問題を抱えている場合が多いので、保健管理センターにも相談することを学生に勧めていただきたい。

Q2 本人も保護者も自覚がないという場合、不用意に保護者に伝えると『うちの子を病気扱いするのか』ということになる。

A2 それは、最近、発達障害のケースでよくある。

Q2 そのようなときにカウンセラーに相談しようとする、カウンセラーは1人しかいないので診てもらおうことさえできないことがある。従って、カウンセラーの数を増やす等の抜本的な対策をしてもらわないと、率直に言うと、一番困っているところでは全く解決につながっていない。

A2 カウンセラーが不足していることは、講師も把握している。人員を補充してもらえるように関係者に要望をしている。

Q2 現状は切迫した状況にあり、教員に過大な負担となっている。教員が過労で倒れそうな状況にある。教員側のメンタルについてもぎりぎりの状態にある。カウンセラーの増員が無理であれば、対応してくれる事務員を配置するなど早急に対応していただきたい。今すぐ現実的な解決策が必要な状況であることをご理解いただきたい。

A2 貴重なご意見をいただき感謝している。関係諸部署と早期に協議し、できる範囲での対応を考えていきたい。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「少し時間が足りなかった」、「様々な精神障害に服薬等が効果的であると知った。異変を感じたらなるべく早く専門家に相談すべきと感じた」、「具体的にどう対応するかがわからなかった。学生に声かけをすることで、精神に影響を及ぼす恐れがある場合はどのように対処すべきか?」、「学生の精神障害について、対応の仕方について、もう少し詳しくお話しただけると良いと思います」、「医療費の補助金（障害者総合支援法）があることを知ることができた」、「精神障害の特徴について良くわかりました」、「現場の教職員からどこに報告するのか、どこがその教職員を支援してくれるのかが知りたい。そういう枠組みを作ってほしい」、「病状毎に具体的説明があったのが良かった」、「それぞれの障害について良く理解できた」、「対応策を示してほしい」、「対策を聞いたかった」、「理解しにくかった」、「以前よりも精神的に弱い学生が増えた気がする」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「山口県の産業などについて、できれば具体的に有力企業を紹介するなど」、「具体的な学生の例とその対応を知らせてくれるような内容を含む研修」、「パワハラ、アカハラの研修会」、「個別対応の事例など」、「今回、最後のところまで対応についていくつか示されたが、まだ抽象的な部分があるので、例示された障害を持つ学生に対してどのように接するべきかについて」、「鬱病の症状」、「理工系大学における英語教員の現状（内容、レベル）」、との回答があった。

(15) FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のための

グループディスカッション（第3回）」

主催：大学教育機構

日時：平成27年11月25日（水）16：10～16：50

場所：共通教育21番教室

参加者：2名（アンケート回収2名）



報告

今回のFDワークショップでは、平成27年度前期・教員授業自己評価の未入力教員を対象とした。まず、簡単な学生授業評価・教員授業自己評価の紹介と、自己点検評価ポータル（大学評価室による開設）を通じた入力状況の確認方法、学生授業評価閲覧のポイントなどの説明があった。その後、参加教員が実際に教員授業自己評価の入力を行い、最後に意見交換を行った。その中で、学生授業評価の活用方法として、教員個人の授業改善のためだけでなく、目に見える形で何か全体に役立てることができないかという意見があった。例えば、学生授業評価結果からお手本となるような良い授業を見つけ出し、その授業を他の教員が参観することにより、広く授業改善につなげる試みが考えられるなどの提案があった。現在、教員授業自己評価の入力率が低迷しているが、学生授業評価・教員授業自己評価を学生や教員が目で見える形で活用できるようになることで、その結果として、入力率の向上につながるという意見であった。

アンケート結果は下表のとおりであった。自由記述欄の「希望する研修内容」としては、「大学改革、大学の将来像を考える機会を持てるとよい。山口大学は今後どのようにあるべきか、教員と職員はどのようにあるべきかについて」、(2)「大人数講義の効率的なやり方、対話式の講義方法」、などがあった。

質問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	50.0%
良かった	1	50.0%
どちらともいえない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
合計	2	100.0%

質問：興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

選択肢	人数	割合(%)
ぜひ参加したい	0	0.0%
できるだけ参加したい	2	100.0%
あまり参加したくない	0	0.0%
参加したくない	0	0.0%
合計	2	100.0%

質問：実施時期はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	2	100.0%
良くない	0	0.0%
合計	2	100.0%

質問：実施場所はいかがですか？

選択肢	人数	割合(%)
良い	2	100.0%
良くない	0	0.0%
合計	2	0.0%

(16) 最近の大学生が抱える悩みと対応について

日程：平成27年12月16日(水) 14:30~15:15

場所：人文・理学部大会議室

講師：今井 佳子（学生相談所カウンセラー：臨床心理士）

参加者：40名(アンケート回収20名)

内容

最初に人文学部のFDコーディネータより今回の研修開催の趣旨と講師紹介があった。



今井カウンセラーからは、最初に 2003 年度と 2015 年度の相談者件数の推移を比較しながら、最近、新規相談件数が増加している傾向が示された。相談内容としては以下の 4 つのグループに分かれることが明らかにされた。相談回数が 1 回程度の第 1 グループは、「履修方法」や「単位修得方法」に関する相談。第 2 グループは、2~5 回程度の相談回数で、「対人関係・友人関係・恋愛関係・研究室の人間関係・将来設計」に関する悩み相談。第 3 グループは、6~12 回程度の相談回数で、「自分の性格」に関する悩み相談。第 4 グループは長期の相談期間が必要なケースで自分の「精神的不調」に対する悩みがある。このケースの場合には、保健管理センター・学部教職員等の連携・協力が不可欠である。ただし、相談回数が少ない学生（第 1・2 グループのケース）でも心に深い悩みを抱えている場合もあるために丁寧に対応している。また、長期間の相談対応が必要な学生には在学中の 4 年間または 6 年間の対応だけでなく、卒業後も相談対応しているケースもある。

設問 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	25.0%
良かった	14	70.0%
どちらとも言えない	1	5.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%

2003 年度には精神科や神経科に通院し、薬物療法を受けているような学生が比較的多かったが、2015 年度の相談内容には、多種多様な相談が多くなってきている。特に山口大学だけでなく全国の大学でみられる傾向であるが、「自分の悩みが分からない・悩みが見えない」状態で相談に来る学生が増えている。何を悩んでいるのかを考えないで漠然とした不安を抱えて相談に来る学生が多い。そのため、雑談のような相談を通して、その学生は何のために相談所を必要としているのかを見極めながら相談を行っている。このような学生は、「外に出られない」、「変な人と他人に思われぬか」という漠然とした不安を抱えているケースが多い。また、人文学部の場合には、「コース分け」・「研究室配属」・「教育実習」・「卒論」などのきっかけで、初めてその学生の問題点が明らかになるようなケースが増えてきている。

一方、最近の学生の特徴として「しゃべらない」または「しゃべることができない」場面寡黙の学生も増えている。この原因としては、グループ学習や演習のようなアクティブ・ラーニングの機会が大学で増えてきたため顕在化してきていると考えられる。また、小中学校時の不登校やいじめの経験を持ち、過去のつらさを抱えている学生も増えている。自分のことを発達障害やアダルトチルドレンではないかと自分のことを疑い、相談に来るケースもある。これは何か上手くいかないことがあると、その原因として自分で発達障害やアダルトチルドレンではないかと勝手に考えて相談に来る学生がいる。また、友人がいないということで孤立感を抱えている学生や一人で食事としているところや一人で歩いているところを人に見られたくないという山大生も多い。このように非常に友達や保護者を意識した（気にする）言動が多い。

以上、最近の大学生が抱える悩みや実態について説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 以前は相談所で合宿や心理ゼミなどを実施して、友達作りを図っていたが、最近はそのようなことを実施されているのか。

A1 学生相談所の横に「リビング」を 2 室確保し、サークル的な対応している。そこで、人間関係を作る経験を促すようにしている。

Q2 友達作りに役立つような共通教育の科目はあるのか。また学生からそのような科目はあるのか聴いているか。

A2 理系の学部学科の場合には、学科ごとに授業を受講するケースが多いが、人文学部の場合、学科単位で授業を受けるようなケースが少ないため、一人で授業を受けている場合が多い。そのため、友

達ができないと人文学部の学生はよく言っている。そのため、孤立し、コース分け以降も上手に友達ができない学生が多いように感じている。このため、分かっている、あえて他の人に聞いてみるなどのきっかけづくりをしたらどうかといったアドバイスはしている。

Q3 マイナス思考の学生が多いように感じているが、発想を変えさせるような手立ては何かないか。

A3 できている部分をみればいいのだが、とかくできないことに目が向きがちである。そこで、うまくいかなかったことに対して、このように考え方を換えればうまくいくのでないかということをおアドバイスすることがカウンセリングだと考えています。このようなことは大変難しいことですが、根気よくやっているというのが現状です。

研修会後のアンケートでは、「実績を踏まえた熱意溢れるお話しで感銘を受けた」、「講師の先生の具体的な経験に基づく話に惹きつけられた」、「学生との接し方について考えさせられることが多かった」、「漠然として考えていた学生の動向や気持ちがよくわかった」、「十分リアリティのある話しが聞けてよかった」等の講師の話の内容に対する十分満足する声が多数あった。その一方で、学生相談所のスタンスに対して「学生と保護者との関係改善を中心に対応した方がよい」、「教員と学生の間で学生相談所が入ると、教員と学生の間関係が形成しにくくなる」といった意見もあった。

また、今後希望する研修会については、「精神科医や心療内科医の専門的な話が聞ける研修」、「学生の悩みやそれに対する教員の対応の仕方に関する研修」、「講義系以外の授業の進行方法に関する研修」という回答があった。

(17) 反転授業の導入方法を学ぼう — 学びのパラダイムシフトを誘発する

反転授業の可能性と課題—

日程：平成27年12月16日(水) 15:50～16:30

場所：教育学部 講義棟=D棟 2階 21番教室

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：76名(アンケート回収50名)

内容

反転授業とは一体どういう物で、どういう事例があるか、推進するためにどのような効果と課題があるかについて共通理解を得たいとして研修を開始した。

反転授業は英語では flip teaching、reverse teaching と呼ばれるが、自宅でビデオ等のコンテンツを事前に視聴させて、授業では知識の確認、ディスカッション、問題解決学習等の協同学習を行う。一部の大学では数学、英語、情報の授業で行われており、本学では共通教育「科学技術と英語(知財教育)」等で行われている。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	6.0%
良かった	38	76.0%
どちらとも言えない	8	16.0%
あまり良くなかった	1	2.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	50	100.0%

初等中等教育での導入事例としては、佐賀県武雄市の小・中学校で市内すべての公立小学校で小学生全員にタブレット端末を配り、算数と理科の授業で反転授業を実施している。宿題動画を教育サービス会社に委託して制作。算数は学習塾などを手掛けるワオ・コーポレーション、理科は科学雑誌『Newton』のニュートンプレスに依頼。中学校は良く分からないが「スマイル学習」を実施している。

高校の事例としては、近畿大学附属高等学校で2013年度から新生1,048名がiPadを購入し、学校側には学習管理システム(LMS: Learning Management System)を導入して、英語と数学の授業で反転授業を実施している。

英語の授業では、予習を強化し、授業時間を英語での会話やディスカッションにより多く利用し、これらの能力を向上・定着させるために反転授業を活用している。授業の導入で、語彙の習得や音読活動などを行った後、生徒が自宅で解説ビデオと教材を使い、語彙の習得や音読活動を行う。授業では、語彙の復習とテスト、英文理解の確認を行った上で、生徒が数人のグループを組んで互いに自己紹介を英語で行い、互いにワークシートに書き取るなどの協同学習を行う。

数学の授業では、英語と同様に生徒が自宅で解説ビデオを使い自習を行う。授業では問題演習を行い、個別学習や一斉指導に加え、ジグソー法(各班内で詳しく学んだ事を、各班から1人ずつ集めた新しい班を作り、持ち寄った知識を用いて新しい班で課題に取り組む手法)のような協同学習の手法も取り入れながら、学習内容の定着を図っている。

北海道大学の事例では、全学対象の「情報学Ⅰ」の一部に反転授業を導入。事前にビデオ教材を大学や自宅で視聴し、講義ではその内容をテーマとした発展的な討論を行うとともに、レポートの相互評価や最終レポートの提出を行うという方法で授業を展開。ビデオ教材としては、オープン教材サービス「iTunes U」で東京大学が公開しているハーバード大学マイケル・サンデル教授のビデオ教材「ハーバード白熱教室 in JAPAN」を利用。9割以上の学生がビデオ教材を予め視聴しており、アンケート調査では意欲的に取り組んでおり、TAからも「授業の討論時間を十分に取ることができる」との意見があり、反転授業の導入により授業時間を討論の時間に十分に充てられるという効果が示された。

本学の事例では、知財教育である「科学技術と社会」でMoodleを活用した反転授業を行っている。知財に関するビデオ教材を授業8コマに対して1本あたり10~15分程度の短いビデオ20本を授業開始までに視聴すると共に、課題を出している。授業開始時には確認テストを行い知識の習得状況を確認している。私も見て、非常にシステム的に行われていて素晴らしいと感じた。

流れとしては、学生側は、授業前にビデオを見て事前の課題を実施、講義内ではアクティブラーニングによりグループで課題に取り組み、終わった後は事後の課題を実施し提出。先生側は学習支援として、解答や解説、グループワークのファシリテーター、事後課題の採点等を行い学習状況の把握を行う。

ALポイントで見ると、「科学技術と社会」はALポイント6.48。ALポイントが高ければ良いわけではないが、学生がどれだけアクティブになるかを示した数値。最も高いのは「English Speaking」の7.28だが6.48は比較的高い数値。

反転授業の効果は、インプット型からアウトプット型への学びの転換の促進というのは、先生が教え込む授業から、自らが学び修得して行く、つまり何が出来るようになったかを中心に教育して行く形に変える一つのきっかけになる。他にも、相乗的な学習の動機付けや、学修行動の見得る化、授業外学習時間の増加、時間の有効活動などがよく挙げられる。

受講生の自由記述欄では、「ビデオ教材は自分が分からない所を何度でも見ることが出来る」、「次の授業を受講する時に、ある程度自分の考えを持って臨むことができる」、「1回の授業で学ぶより、ビ



デオ教材で復習する事が出来るので理解度が増した」等の意見が挙がっている。

発展させるために重要なこととして、一つ目は教材をどうするか、この負担をどうするかが非常に大きな問題。大学による OCW (Open Course Ware) の公開や OER (Open Educational Resource) の開発が急速に進んでおり、米国では熱心に行われている。米国における Khan Academy (<https://ja.khanacademy.org/>) の活動が有名。これが十分整備されていないと反転授業は上手く行かない。

二つ目は、ICT 技術の高度な発展と安価な端末の普及と言うことで、家庭や学校にブロードバンド回線が整備されていないと成り立たない。日本では、2013 年度現在、世帯数の 8 割を超える家庭、2012 年度現在、初等中等学校の 78% にブロードバンド回線が整備されている。タブレットに代表される安価な情報端末が普及していることが前提になる。

反転授業の課題として、一つ目の課題は、全学生に対するインターネット接続環境の整備と情報端末の確保。教育の公平性を考えた時に非常に危うい。経済格差が激しくなっており、ネットに繋げることができる家庭ばかりではない。二つ目は、オンライ教材の開発環境の整備、教材自作化の限界がある。教材作成が大変で挫折する場合がある。オープン教材を利用する場合も、先生毎に授業デザインがあるため、共通教材はなかなか使えない。三つ目はインタラクティブな教育方法への対応。相当授業設計をきっちりやって行かないと教育効果が期待できない。反転授業を行った先生に聞くと、反転授業には準備が必要だと言っている。ただし一回準備すると後は楽。四つ目は、コンテンツのメンテナンスの問題。経年劣化の問題があり、常にメンテナンスして行かないといけない。陳腐化し易い情報を減らしたり、シンプルに作ったり、口頭で補足したりする必要が生じる。

導入上の留意点、提案としては、1 点目はビデオ教材がダラダラと時間が長いのはマズイ。5 分くらいのモジュールにしてエッセンスを見せる。2 点目は、議論や実習に対するテーマ設定や教員の実践的指導力の向上の必要性。授業の到達目標を達成するためにどう組み合わせるのか、授業設計が重要。3 点目は宿題動画など教員の主体的選択の必要性。学生に事前に見せるのにどれが効果的か選択する必要がある。4 点目は反転授業を活かすための授業デザインが重要。

本学では熱心にやっている科目があるので、是非見て頂いて、100 人を超える 400 人くらいの授業でもやろうと思えばできる事を証明しているので、あとはやり方の問題と思う。是非検討して頂いて、小中学校の先生を養成されているが、そこにもどんどん入っているので、どう指導して行くか iPad 等の可能性について考えて頂ければと思う。

質疑では次のようなやり取りがあった。

Q: 山大の例があったが、もし本当にやろうと思った時、どんな準備をすれば実施できるか？ 例えば Moodle って何でしょうとか？

A: Moodle は学習の支援システムで、国際総合学部の木村先生は自分で動画取って upload して学生に見せる事を以前からされていた。情報リテラシー演習などでも利用している。反転授業ではないが、情報セキュリティ・モラルで授業の中でビデオを見せて感想を書かせるなど、そういう蓄積があった。

機材もかなり簡単に出来るようになってきている。設定が結構難しいがメディア基盤センターに頼めば出来るかなと思う。授業やる前に、知識理解してほしいというものはホームページに上げておいて、あとは授業で何をやらせたいか。テーマが大切かなと思う。ただ見ただけではまずいので、確認問題なども。事前に準備するのが結構大変なので、そこをどうするか。1 つは組織的にやる。1 回作ってしまうと、経年劣化の問題はあるが、あとはかなり楽に出来ると言われていた。

教材の準備に注力されて講義で何するかどうやってやるかを議論されると上手く行くと思う。1 回パターンが出来ると割にやり易いと言われている。

ビデオ教材自分で作るのが無理な場合は YouTube 上に出ている物を見せる方法もあると思う。小中学校では徐々に増えているそうなので、検索して頂くと、見えそうなものあればチャレンジするのも良いかなと思う。

Q: 今、ビデオ視聴、反転授業あって、授業の時間を確保した中での AL と言うことで、これをやると AL 上手く行くだらうかと分かったが、ビデオ教材なし、反転授業なしでも AL 可能だと思うが AL 焦点に当てて上手くやっているパターンあれば教えて頂きたい。

A: 先程紹介したジグソー法だと、ある商業高校でやった例で、コンビニエンスストアがなぜ発展し続けるのかというテーマがある。最初に班に分けて班ごとに違った統計データ与えて分析させる。分析が終わったら、結果を班の中で共有する。次に班を解体して、新しい班を作る。新しい班には古い班の人を 1 人ずつ入れる。新しい班で先程の結果を発表し、コンビニがなぜ発展し続けるかを新しい班で議論させる。そういう AL、ジグソー法の典型的な形だが、ビデオを使わなくても出来る。

準備としてはどういう統計データを見せるか、子供たちが食いつきそうなテーマを選ぶところが重要。授業デザインとさっきから言っているがそこが重要。

Q: 知識理解の所を家でやらせて、授業では持っている知識で話をしたり、知識教育したりするという事が凄く良く分かったが、僕は ICT とかやっているにも関わらずそういうことをやってない。大量に印刷したものを学生に渡して、滔々と話してしまう。そこをちょっと改めて、渡してやる資料を前の回に渡しておいて、それを読んでいかないと、問題解決出来ないよとして、反転授業を始めてもよいのか？

A: 良いと思います。

Q: 反転授業とても魅力的でおもしろそうだと思いますが、反転と言うと、元々講義時間でやっていたものを空けて、そこで新しいものをやっていくと言う意味では、元々ある授業の中でどういう事をするかと言うことでだから事前にビデオとかを見て行く必要があるという事だと思うが、講義の中でどんなことをしているからビデオを見たりしないといけないのか、どんなことをしているのか分かり、それをなるほどと思えるデータベースとかにアクセス出来れば、もっといろんなものが見えてくると思うが、そういうものはあるか？

A: 実は京都大学がやっている MOOC (Massive Open Online Courses) (※1) というがあるのでそれを参考にされると良いと思う。

関連:

※1 京都大学 /日本で最初に edX のコンソーシアムに参加しました。(2013年5月21日)

http://www.kyoto-u.ac.jp/static/ja/news_data/h/h1/news7/2013/130521_1.htm

短縮 URL: <http://goo.gl/H8DYcc>

アンケートでは以下のような意見が見られた。(原文まま)

- 反転授業の概要や事例がとても参考になりました。ありがとうございました。
- ビデオの例など具体物も見せて頂きたい。
- 反転授業はビデオ教材だけでなく、リーディング課題も併用できると思うがどのように補い合うことが可能だろうか。従来も読んできなさいと言っても呼んでこない学生が多かったが、ビデオにするとサマリー(ポイントがしぼれる)という効果はありそうです。
- ヒントは少し得られたが難しそうな感じ。
- 非常に分かり易く説明をして頂きましてどうもありがとうございました。

- アクティブラーニングの例が示されたこと。
- 具体的なコンテンツを見たかったです。
- 中身のデータベース見てみます。
- オープン教材の実例が見たかったです
- 授業の具体的なビデオを見せて欲しかった
- 前もって資料を渡しておき、予習させておき、授業の時に説明すれば生徒さんが予習しているので、効果が上がると思われた。
- 回数が多い。一般論。
- 分野は異なるが参考にしたい。
- 落ち着いて話してほしいです。「みなさん知っていると思いますが」口癖かもしれませんが、あえてききたくないです。
- タブレットなどを使用する能力に欠けているので最後の質問タイムでの資料利用の仕方などについては参考になりました。
- 授業と宿題の関係が反転するわけですね。おもしろい試みだと思いました。
- 反転授業をするためには、かなりの授業準備を必要とすることがわかった。授業準備のための時間が取れない中、どのようにすれば教材作成に時間を投資しただけの利益が得られるか疑問に感じた。統一テキストを使った教科をグループや外部委託を利用して教材化する事ができなければ難しいのではないかと思います(個人の先生がするには負担が大きそうです)。

研修内容の希望については以下のような意見が見られた。

- 大学授業の作り方や能動的に学生を参加させる方法やポイントについて」
- 「授業公開→協議会」といった FD。実線に則して議論したい。
- AL
- 多人数授業でのアクティブラーニングの方法
- 具体的な授業についての研修で、実際どのようなビデオ教材を見て、どのような知識を獲得して、それに基づいて、どのようなディスカッションが行われたのかが見える授業が見てみたい。
- プレゼン方法。
- アクティブラーニングの具体的事例の共有
- 具体的な授業をみてみたい
- 学生の学習意欲を増す規格の研修
- 具体例が示された内容
- アクティブラーニング
- 授業改善に関する内容
- 授業改善
- 授業改善、ハラスメント
- 反転授業の実例
- ICT を用いた授業実践について
- 国や関係機関の施策動向等を「批判的に」検収できる内容
- 評価の高い人の講義を見たい
- 自分勝手ではありますが、今回のように全体に対する講習などには積極的に参加したいのですが、ここで作業、検討のものは苦手とします。
- 今回のような新しい教育形態について知りたい。
- より具体的な事例の紹介があるとうれしいです
- 共通教育科目ではなく専門性の高い科目

- ICTの先進的な使い方
- アクティブラーニングについて研修したい
- 具体的な教材づくりを含めた内容で
- 実際の授業

(18) 山口大学・大学コンソーシアムやまぐち SD セミナー2015

「大学職員の専門性について考えてみよう！」

日 時：平成27年12月18日（金）13：30～17：15

場 所：大学会館2階会議室

主 催：山口大学、大学コンソーシアムやまぐち

共 催：大学マネジメント研究会

参加者：第一部 129名（うち学外49名）、第二部 90名（うち学外46名）

内 容：

2015年12月18日（金）に、山口大学・大学コンソーシアムやまぐちSDセミナー2015『大学職員の専門性について考えてみよう！』を、県内大学はもとより岩手県立大学や関西大学からの参加を含め総勢130名近くの参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、山口大学・大学コンソーシアムやまぐちの共同主催、大学マネジメント研究会の共催で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、田中和広 山口大学理事・副学長より開会挨拶及び趣旨説明があり、SDセミナーの開催は3年目となるが、例年同様、大勢の参加者が集まり、所属大学を超えた大学職員同士の議論や情報交流に期待が寄せられた。

第一部の基調講演&ショートトークでは、まず、吉武博通 筑波大学ビジネスサイエンス系教授より、「大学職員に期待される専門性とは」と題して講演があった。昨今の中央教育審議会での大学職員の専門性の議論を紹介した後、大学改革を阻む構造的課題を言及しながら、分業と協働のシステムである「組織」と「個人」との関係性を自律的に捉え、大学職員として取り組むべき業務遂行のステップを具体的に提示した。次に、中村早苗 山口県立大学 経営企画部 財務グループ職員より「教育・研究支援に発揮できる大学職員の専門性」、中嶋智久 徳山大学学生支援センター入試室職員より「ダブルアドバイザー制度に発揮できる大学職員の専門性」と題して話題提供があり、若手職員の立場から、職場での経験学習を通じた大学職員としての専門性の具体について言及があった。

第二部のグループワークセッションでは、林透 大学教育センター准教授、河島広幸 大学教育センター助教

(特命)、河崎雅彦 総務部創基 200 周年事業推進課主任のファシリテーションにより、「Let's Challenge ～大学職員の専門性について考えてみよう！～」というテーマでグループワークを行った。分野別分科会（①教務・学生支援・就職支援、②学生募集・広報、③研究支援・外部資金獲得・産学連携、④国際交流・留学（生）支援、⑤大学経営・企画戦略・IR、⑥人事・研修・SD）に分かれ、マインドマップ作成により、分科会テーマに応じた日常的課題の抽出と解決策の提案を行った。後半の全体発表では、「プロフェッショナル～大学職員の流儀～」と称した指定様式に基づきプレゼンが行われ、ステークホルダーとのネットワークづくりを基礎とした学生募集戦略、大学の組織構造や意思決定プロセスを理解した上での教員への研究支援など、積極的かつ重要な提案が行われた。

最後に、吉岡富雄 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学職員が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



第一部 基調講演&ショートトークの様子

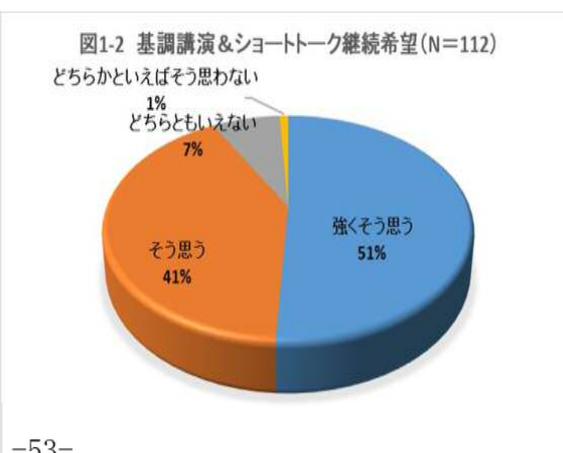
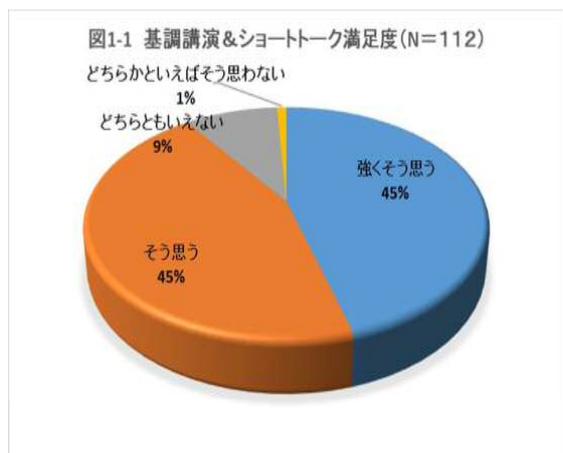


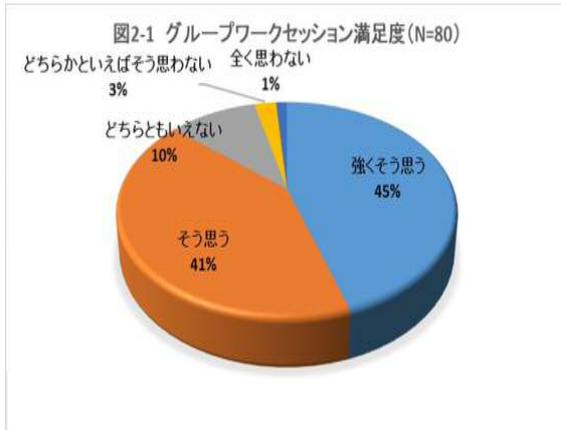
第二部 グループワークセッションの様子

成果及び今後の方向性：

当日の参加者の視線や発言から、大学職員の専門性、というテーマについて真剣に聴き取り、考えようとする前向きな姿勢が強く感じられ、参加者アンケートからは、第一部・基調講演、第二部・グループワークセッションともに、満足度が高く、かつ、継続的な開催を望む回答が多数を占めた（図1-1～2-2 参照）。また、地域ネットワーク（コンソーシアム等）を活用した SD 活動（セミナー、勉強会等）に関する要望を聞いた設問では、「継続的に開催してほしい」「グループワークを通して出てきた課題等をもとに、セミナーや勉強会ができれば良いと思う」など、今後の活動の継続や更なる展開を希望する前向きな意見が寄せられた。当該アンケート結果を踏まえながら、来年度以降の FD・SD 企画の充実を図っていく必要がある。

大学コンソーシアムやまぐち運営委員会の下に「FD・SD 部会」を設置して 2 年目の企画イベントであり、今回は、大学間のネットワークを活かして、山口県立大学と徳山大学の若手職員に登壇いただいた。この企画は、基調講演者の吉武先生からもお褒めの言葉をいただくなど、非常に効果的なものであった。また、文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）の一環として、教学マネジメント強化の観点から、大学職員の専門性を意識付ける有意義な機会となった。





(19) FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のためのグループディスカッション (第4回)」

主催：大学教育機構

日時：平成28年1月13日(水) 16:10～16:40

場所：工学部D33教室

参加者：1名(アンケート回収1名)

報告

今回のFDワークショップでは、主に常盤地区に勤務する教員を対象として、(1)学生授業評価・教員授業自己評価の実施方法、(2)自己点検評価ポータル(大学評価室による)を通じた教員授業自己評価の入力状況の確認方法、(3)学生授業評価閲覧のポイントなどの説明があった。今回は常盤地区に勤務する新任教員1名(助教)のみの参加であったため、新任教員向けの学生授業評価及び教員授業自己評価についての説明となった。

具体的な内容を次に述べる。まず(1)については、山口大学では2005年ごろから学生授業評価及び教員授業自己評価を全学的に導入したこと(部局によって多少導入時期は異なる)、原則として授業の最終回に質問用紙とマークシートを用いて学生授業評価を行うこと、その後「IYOCAN」と名付けられた情報システムを用いてWeb上で教員授業自己評価を入力し授業の振り返りを行うことなどの説明があった。なお、実験・実習の授業は複数の教員で担当することがあり、その場合、主担当教員が教員授業自己評価の入力を行うこと、もしくは、主担当教員から依頼された教員が入力を行うことなどの説明があった。次に(2)については、大学評価室の「自己点検評価ポータル」サイトが稼働しており、そのサイトの「I. 教員活動(入力状況確認)」の項目を通じて教員授業自己評価の入力・未入力の状況(科目数等)を簡単に確認できることの紹介があった(但し試験的な試み)。最後に(3)については、学生授業評価と教員授業自己評価は同様の質問項目が設定されており、教員授業自己評価と学生授業評価との結果を比較することで、教員が自分の授業についての気づきを持つことを期待していること、そして次年度のシラバスへ反映するなどにより授業改善につなげる狙いであることの説明があった。

参加者から今後参加してみたいFD研修会として、授業改善のためのPDCAサイクルに関するものや、新任教員間の情報交換・初めて大学で教育を担当する(特に若手)教員を対象としたFD研修会などの要望があった。

(20) 最近の大学生が抱える悩みと対応について

日程：平成28年1月20日(水) 15:10～15:40

場所：教育学部21番教室

講師：今井 佳子

(学生相談所カウンセラー：臨床心理士)

参加者：72名(アンケート回収14名)

内容

今回の研修会では、山口キャンパスにおける学生相談の内容について説明が行われた。講師は2003年度から現在までの13年間学生相談所のカウンセラーを担当しているが、相談件数や相談内容には大きな変化みられる。大学全入時代を迎えて相談件数は増加し、相談内容は多岐に渡るようになった。特に昨年度からはワーキングアシスタント制度が始まったこともあって、新規相談件数の伸びは顕著である。相談内容は概して次の4つに分けられる。相談回数が1回程度の場合は「履修方法」や「単位修得方法」、2～5回程度では「対人関係・友人関係・恋愛関係・研究室の人間関係・将来設計」、6～12回程度では「自分の性格」、長期にわたる場合は「精神的不調」に関する内容である。これらのうち、「精神的不調」に関する相談の場合は、保健管理センターや学部教職員等の連携・協力が不可欠である。一方、相談回数が少ない学生であっても、心に深い悩みを抱えている場合もあるので、丁寧に対応している。

最近の学生の傾向としては、自分でも何を悩んでいるのかわからずに、漠然とした不安を抱えて相談に来る者が少なくない。これは本学だけでなく、全国の大学で見られる傾向である。これらの学生に対しては、雑談を交えた相談を通じて、学生が何を求めて相談所を必要としているのかを注視している。例えば教育学部の場合には、「教育実習」・「卒論」などで躓きを感じ、これが漠然とした不安を感じるきっかけとなることがある。また、他人との交流が苦手な学生も増えている。これらの学生は、様々な事情で小・中・高等学校時代に他人とコミュニケーションをとる機会を十分に持てなかった者が多く、他人と話すことに対して極端な苦手意識を持っている。その一方で、「話をしたい」との強い願望も併せ持っている。教員はこのような学生に対しては意識的に話しやすい状況を作り、積極的に話しかけるとともに、本人の話を聴いていただきたい。これに加えて、このような学生はグループ学習や演習のようなアクティブ・ラーニングが含まれる授業を非常に苦手とするので、何らかの配慮が必要であることをご理解いただきたい。

相談所を訪れる学生には、複雑な家族関係や小中学校時の不登校やいじめの経験を持ち、辛い過去を抱えている者も少なくない。何かうまくゆかないことがあると、自分が発達障害やアダルトチルドレンではないかと疑い、相談を訪れるケースもある。また、友人が出来ずに孤立感を抱えている学生や、食事などの時にひとりであるところを他人に見られたくないという学生も少なくない。このように、過度に家族や友人を意識した言動が多い学生もいる。教員には、これらの学生の実態を考慮して接し、問題に気づいたら学生相談所へ積極的に相談してもらいたい。

今回の研修会では、他の会議予定との兼ね合いが生じたため、質疑応答は行われなかった。そのため、FD委員と講師より、質問や相談のある場合は講師に直接連絡してほしいとの説明があった。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	7	50.0%
良かった	6	42.9%
どちらとも言えない	1	7.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

研修会後のアンケートでは、「どのような内容でもよいですが、学生に関する（今回のような）ものは興味深いです」、「具体的な事例を用いて説明して下さったのでわかりやすかった」、「このような場でしか聞けない内容なので（良かった）」、「今の学生の現状、心の育ちの課題が伝わり、とてもためになりました」、「具体的な学生像がみえて良かったです」、「本学の実情のよくわかる研修でした。学生指導上でも参考になります」との意見があった。

また、今後希望する研修会については、「2月29日、3月1日開催の国際学術論文促進セミナーの第3回プレゼンワークショップ的なものをFD研修の中心にしてほしい。授業改善に役立つと考えます」、「不調学生への対応」、「アクティブ・ラーニングによる指導法改善について」、「学生特別支援室が行うこと。全国の組織の活動状況」、「今の学生たちが抱えている心の課題について、現場で直接支援をしておられる先生にお話を伺いたいです」、「学生に関すること、今日のような」、「学生指導について、今回と同様のことを定期的に聞きたい」、「3年に1回ぐらいは学生相談関連の研修をぜひ。前回（他大学の学生相談の話）からちょうどよい間隔でした。やはり定期的に聞くことで緊張感をもって学生指導にかかわる重要な機会となりました」との回答があった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	45.2%
良かった	17	54.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	31	100.0%

(21) 山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&IR 室合同企画

FD・SD ワークショップ「教学マネジメント強化のための IR とは—データ活用方策を理解し、実践に活かすために—」

日程：平成28年3月7日(月) 13:30~16:30

場所：総合図書館アカデミックフォレスト

講師：鳥居朋子（立命館大学教育開発推進機構 教授）、川那部隆司（立命館大学教育開発推進機構 准教授）

参加者：41名

報告

2016年3月7日（月）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）&IR 室合同企画 FD・SD ワークショップ『教学マネジメント強化のための IR とは—データ活用方策を理解し、実践に活かすために—』を学内から24名、学外から17名、合計41名を集めて、吉田キャンパス・総合図書館アカデミックフォレストにて開催した。本研修会のアンケートでは、ほとんどの回答者から、「非常に良かった」「良かった」との回答を得ており、満足度の高い研修会となった。



本 FD・SD ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）と山口大学 IR 室との合同企画で、山口大学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、瀨瀬厚 理事・副学長（教育学生担当）より開会挨拶及び趣旨説明があり、近年、特に注目されているインスティテューショナル・リサーチ（IR）の重要性について述べられ、本取組が教学マネジメント強化のための IR を機能させ、より良い学生の学びの創出につながるこ

とへの期待が寄せられた。

第一部の基調講演では、鳥居朋子 立命館大学 教授より、「教育の質保証に向けた教学 IR のチャレンジ」と題して講演があった。まず、山口大学における「リサーチのための問い」を立てることの必要性について述べられ、教育の質保証や学習成果への関心、日本における制度（質保証）および政策状況について説明があった。IR 実践のための 7 つの指針と 5 つのステップ、また、海外での IR の事例を紹介した後、立命館大学での IR 実践について説明された。立命館大学では、「正課・課外の枠を超えた多様な『学びのコミュニティ』の形成」を基本目的の一つとしており、当該目的に合致する IR 実践事例について説明があった。教学 IR の開発として、立命館大学生の学びは多様であるか？というリサーチ・クエスチョンに基づき、学びの実態調査が行われたことが紹介された。

次に、第二部（グループワーク）として、川那部隆司 立命館大学 准教授より、「データを活用するためのリサーチ・クエスチョンの作り方」と題して、ワークショップを行った。まず、点検と評価の違いについて述べられた後、リサーチ・クエスチョン（RQ）とクリニカルクエスチョン（CQ）について説明があった。グループワークでは、①テーマを選ぶ、②クリニカルクエスチョンを考え、共有する、③クリニカルクエスチョンをリサーチ・クエスチョンに作り変える、④必要なデータを考える、⑤仮説を立てる、以上の流れで行われた。グループごとにテーマを選び、そのテーマに沿ったクリニカルクエスチョンとリサーチ・クエスチョンが作られた。例えば、教学系のテーマとして、「学生の授業外学習時間を伸ばす」をテーマ選んだグループでは、RQ：「主体的な学びは、授業外学習時間と関連するか？」、RQ：「学生の経済的状況と授業外学習時間は関連するか？」、RQ：「シラバスなどにおいて示す事前・事後学習の指示の与え方が授業外学習に影響するか？」などのリサーチ・クエスチョンが作られた。最後に、各グループより全体に対して発表を行い、意見の共有を行った。教学系、経営系いずれのテーマにおいても、大学が直面する課題の解決のためのリサーチ・クエスチョンが作られていることが共有された。

まとめ：

本 FD・SD ワークショップでは、IR の基本的な概念を学びつつ、実際の IR を進めるうえで重要な、リサーチ・クエスチョンの作り方について体験型で研修を行うことができた。膨大なデータを処理するための



知識や専門的な統計学、あるいはハードスキルとしての各種統計分析ソフトウェアの操作技術などが注目される IR であるが、IR を通した意思決定、組織を動かす IR を確実に実施するうえでも基本となるリサーチ・クエスチョンが重要であることが体験できる企画となった。本学において、IR マインド、IR カルチャーを醸成するためには、まずは素朴な疑問や予測からクリニカルクエスチョンを導き出すことから始めることが有効であると感じられる内容であった。

今後も積極的に教学マネジメント強化のための IR 研修を推進することで、身近な疑問を教育の質保証や大学改善につながるようリサーチ・クエスチョンとして洗練化することができる人材の育成と、IR 実践の展開が進められることが期待されている。

(22) FDワークショップ「教員授業自己評価の入力と授業改善のための グループディスカッション（第5回）」

日程：平成 28 年 3 月 23 日(水)16：10～17：50

場所：共通教育 21 番教室

講師：野村厚志（大学教育センター主事）

報告

今回は、FD コーディネータ対象のワークショップとし、その内容を(1)学生授業評価・教員授業自己評価の趣旨・実施方法の説明、(2)IYOCAN システムへのログイン・管理者向け画面の操作方法の実習、(3)分析画面の利用例（実施率の経年変化、「学習目標達成」の学生授業評価の結果と教員授業自己評価の結果との比較の経年変化）の紹介と実習とした。参加者は 1 名のみであったため、質疑応答・議論を行いながらの進行となった。その過程において、参加者から次のような提案・要望があった。



学生授業評価は既に 8 割程度は実施されている。教員授業自己評価については、5 割程度（教育学部の場合）であるが、実施率を高めることに力を入れるのであれば、入力時期を早めるなどの工夫が必要である。これまで前期は 9 月、後期は 3 月に教員授業自己評価の入力開始となっているが、授業を振り返る時期としては遅すぎる。授業の印象が残っているもっと早い時期に行うことはできないか。なお、教員授業自己評価の質問 29 番までは学生授業評価の結果がなくても入力できるので、例えば、成績報告と合わせて（あるいは直後に）教員授業自己評価を実施することも可能ではないか。他の FD ワークショップのアンケートの実施結果を振り返ると、アンケート回収をワークショップの直後に行うと回収率（実施率）は高まる。ただ、回答内容の質はしばらく後で回収する方が良い。回収率（実施率）と回答の質のどちらを高めるか、このバランスをとることは難しいが、まずは実施率を高めることを目指し、教員授業自己評価については、成績報告の際に合わせて行うことが良いのではないか。（なお、過去の FD ワークショップにおいても、成績報告の直後に教員授業自己評価を行うことが提案されていた。）

学生授業評価の質問用紙・回答マークシートについて、最大 30 問まで設定可能となっており、あらかじめ各部局で設定されている 10 問程度以降は、教員各自で質問してもよいことになっている。教員が追加の質問用紙を準備するよりも、質問用紙の電子ファイルを IYOCAN のウェブサイトを用意して

おき、質問項目を追加したい教員が各自で電子ファイルを編集・印刷して学生授業評価で配布できるようにしてほしい。これまで、FD コーディネータには、各部署の教員から質問項目が授業の実情に合っていないことや、自由記述欄がないことなどの意見が寄せられてきた。各教員が自分で質問項目をより自由に追加できるようになれば、そういった不満の解消にもつながると考えられる。

以上の提案・要望に対して、講師からは大学教育センターにて検討する旨回答した。また、このFD ワークショップのアンケートの回答において、今後参加してみたいFD 研修会として「意見交換のできるもの」の要望があり、FD コーディネータと大学教育センターとがじっくり話し合う場が必要であることを感じた。

(23) 障害学生に対する修学支援のための研修会

主催：大学教育センターと学生特別支援室との共催

日程：平成28年3月28日(月) 16:00~17:30

場所：共通教育演習室2A

参加者 9名

内容

本研修会は、学内の障害学生支援に関わっている関係部署の担当者等が一堂に会し、障害学生の支援の活動実態を相互に確認し合うとともに、本学の障害学生支援や相互の連携協力のあり方等について、情報交換や意見交換を行うとともに、ケーススタディ等を通じて、有効な支援方法について研修を行うものであり、毎年1回開催している。特に、本年度は、昨年6月に新たに、学生特別支援室（以下、SSR）が開設されたということもあり、本年4月からの障害者差別解消法施行後の動きを考えながら研修会が行われた。

朝日センター長の開会の挨拶の後、学生相談所、保健管理センター、就職支援室、学生支援課、教育支援課、SSR からそれぞれ、本年度の支援の状況と課題について報告があった。学生相談所からは、何を相談したらよいか学生自らの自覚があまりないままに相談に来る学生が増えている実態が報告された。ネット等で調べて自分が障害を持っているのではないかと疑い、カウンセラーに相談に来るそうだ。保健管理センターからは、精神障害の学生が増えてきていること、修学支援に関してはSSR等と連携しながら対応していること。外部の医療機関とも連携を図りながら対応していることが報告された。就職支援室からは、発達障害が疑われる学生が、エントリーシートの記載内容や就活での面接試験で相手企業とさまざまなトラブルを起こしている実態が報告された。就職支援室だけではこれらのことに対応することが難しいのでSSRと今後もっと連携して対応していきたいということであった。学生支援課や教育支援課共通教育係からは、SSRが設置されてから、自分たちが障害学生に対して行っていた修学・生活支援業務等がかなり軽減されるようになったという報告があった。今後は、SSRの活動予算の充実や学部地区における支援体制の充実をどのようにするのか課題であるという報告があった。最後にSSRの岡田専任講師から、これまでのSSRの活動状況と今後の課題が報告された。相談件数はCSRの頃よりかなり増加してきている。特に、学部の先生方からの相談対応が増加しているそうだ。また、新入生や保護者、さらに出身高校の先生方からSSRのホームページを見て直接相談していくケースも増えているそうだ。

その後、協議に移り、次期学生支援センター長の横山教授や朝日大学教育センター長から、所属学部で起こっている障害学生およびグレーゾーン学生を巡るトラブルやその対応について話があった。以前は障害者支援組織が学内になかったために、学部や個人がかなり苦勞して支援を行っていたことや、障害学生の支援ニーズは多様であるため、パターン化した対処療法的な支援では学部教員として

は対応が難しい等の発言があった。そのため、SSR や学生相談所、保健管理センターがさらに連携しながら障害学生支援を行っていく必要があることが参加者間で共有された。

なお、この研修会に先立って、「平成 27 年度アクセシビリティリーダー認定書授与式」と「SSR スタッフ活動報告会」が開催された。平成 27 年度のアクセシビリティリーダー（AL）2 級合格者は 20 名で、内訳は教員 4 名、職員 4 名、学生 12 名であった。

また、「SSR スタッフ活動報告会」では、学生スタッフの活動報告、アクセシビリティリーダーキャンプ（ALC）参加報告とともに、学内のバリアフリー調査の中間報告があった。報告内容は非常に参考になるものであり、今後の施設改修の際に参考にして欲しい。

3. 教育改善研修会

(1) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日時：平成 27 年 10 月 21 日(水) [吉田地区] 13:00~13:50

場所：経済学部A棟 2F 第一大会議室

講師：林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）

参加者：56 名(アンケート回収 17 名)

内容

冒頭、FD コーディネータより、本研修会の趣旨について、平成 26 年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマ I（アクティブ・ラーニング）の主要課題である AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマ II（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を

通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、約 6 割の参加者から「非常に良かった」「良かった」との回答があり、8 割近い参加者が「今後も参加したい」と回答する概ね満足度の高い研修会となった。

次に、林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の全体概要について、テーマ I（アクティブ・ラーニング）、テーマ II（学修成果の可視化）それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP 事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）について紹介があった。

次に、テーマ I（アクティブ・ラーニング）の取組報告として。まずは本学におけるアクティブ・ラーニングの定義について確認がされ、AL に関する意識として、関心はあるものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。AL ポイント認定制度では、AL の可視化や現在設計中のベストティーチャー表彰制度を通して、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況として AL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）の AL ポイントが紹介された。AL ポイント認定制度では、自己評価によって AL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性（AL 科目や実験・実習など）が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、AL ポイントの分析では、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度が増加するという相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。AL ポイント認定制度は AL を推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、AL を推進する FD も展開していることが説明された。また、実施済みの FD 取組として、大人数授業と理系基礎科目の AL に関する FD、10 月実施予定の ICT 活用の FD を展開することが述べられた。AL を授業に導入する

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.9%
良かった	9	52.9%
どちらとも言えない	5	29.4%
あまり良くなかった	1	5.9%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	5.9%
合計	17	100.0%

第一歩として、ペア及びグループワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらにALを進める方策としてクリッカー、ICT機器（タブレット）、AL教室を活用するALがあることが説明された。

次にテーマⅡ（学修成果可視化）について説明があり、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定学的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による4象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。

具体的には、学修到達度調査としてPROG（Progress Report on Generic Skills）テストが実施されていることが述べられ、PROGでは、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを踏まえたエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系としてのアセスメント・ポリシーについて述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育（あるいは学部教育）では国際総合科学部で進められているCoBCusを活用していく方向性について説明があった。

講演後の質疑応答の後、朝日 大学教育センター長より、直近の話題として、3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）の見直しが全国的な動きになることが予想される旨述べられた。

質疑応答では以下の通り【コメント】及び【質疑応答】があった。

【コメント】

学生が社会人になる前の様々な準備として、例えばインターンシップや留学、ボランティアなどがあるが、そうした経験（学び）と講義の接点が大切であると感じている。授業だけでは限界があるので、正課と正課外による教育の相乗効果を期待したい。

【質疑応答】

- Q. クリッカーの貸出について。先進的に活用している事例ではクリッカーと学生を紐づけて出席管理などしているが、貸出だとそれが難しいのではないかと思う。コストがかかることだとは思いますが、学生とクリッカーの紐付けに関してはどのように考えているか。
- A. 現状として学生とクリッカーを紐付けている他大学の事例は確認している。今すぐ、学生一人ひとりにクリッカーを持たせることは難しいが、教育学部の事例では、クリッカーのIDと授業科目の受講生を紐付けて運用している事例があり、紐付け自体は不可能ではない。
- Q. クリッカーの代わりにオンライン教育のシステムを活用すると、スマートフォンを通してクリッカー機能を使うことができる。また、オンライン教育やICTツール活用を進めたいと考えているが、技術支援が不足していて実施の難しさを感じている。
- A. 長期的な視野に立って、そうした専門技術を持った人材を充実させていくことは検討したい。



(2) 農学部・農学研究科・医学系研究科（農学系）

日程：平成 27 年 10 月 21 日（水）〔吉田地区〕 14:30～15:30

場所：総合研究棟 3F

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：30 名（アンケート回収 15 名）

内容：

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要について、アクティブ・ラーニング（以下、AL）および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目（共通教育）で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に間接評価・直接評価、横軸に心理測定的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG（Progress Report on Generic Skills）テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCuS についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 PROG テストは今後どのように実施してゆくのか。データを提供してもらえるのか。

A1 現在、学部 1 年生と 3 年生で実施している。今後、1 年時にテストを受けた学生が 3 年時に再度テストを受ければ、経年変化を観察できる。これらのデータは、各学部提供する予定である。

Q2 PROG テストは主に正課外学習を対象としているのか。

A2 正課と正課外の両方を対象としている。

Q3 AL ポイントについて、実験・実習は最大 14 ポイントのうち 6.99 ポイントしかないが、これは低すぎるのではないのか。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	20.0%
良かった	7	46.7%
どちらとも言えない	4	26.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

A3 講義系の科目の平均ポイントは 4.25 であるから、これと比較すると実験・実習のポイントが極端に低いとは思わない。経験的に AL ポイントが 10 ポイントを超える授業は希であることから考えても、実験・実習のポイントは妥当ではないか。実験・実習について授業によって AL ポイントに大きなばらつきがあるが、これは今回初めて入力を行ったため、教員によって AL の解釈に違いがあるためだと考えている。今後はどのような活動を AL ポイントに含めるかについて教員間で共通認識を深めながら、更に検討を進めてゆきたい。

Q4 AL ポイントの数値には意味があるのか疑問に思う。例えば 3 ポイントと 4 ポイントでは、その差にどの程度意味の違いがあるのかわからない。また、数値が 2 倍になれば実際の AL の割合も 2 倍になるのか。

A4 今後データを蓄積しながら、AL ポイントがある程度の目安になるように検討したい。

Q5 AL ポイントがシラバスに表示されているが、これが原因で非常に閲覧しにくくなっている。多くの学生からシラバスが見にくいとの苦情を聞いている。改善して頂きたい。

A5 問題を認識している。現在、修学支援システムの改修を進めているので、改善してゆきたい。また、学生に対しても AL ポイントについて説明をして理解を求めてゆきたい。

Q6 頑張る学生と頑張らない学生は意欲に極端な差があり、中には全くやる気がない学生がいる。ひとつの問題は、現状では学生にはどこまでがんばってどういう達成度を上げたらトータルで合格するのかという基準がわからない。従って、例えば AL の一環としてグループワークで調査をさせると、「調査に行く」と言って遊んでいる学生がいる。他のグループと比較すると、このような学生はわかる。本来であれば、学生本人がこれではあまりにも恥ずかしいと思って頑張ることを期待するが、現実には全く関知しない学生がいる。このような学生を何とかしなければならないが、これについては方策があるのか。

A6 グループでの活動が多いとフリーライダーが出てくるので、ルーブリックの仕組みも使いながら、グループでの評価に加えて個人についてもグループにどう貢献したかを書かせるようにしている。これによって大体状況がわかるので、その結果を学生にフィードバックしている。

Q6 それはすでに実施した。しかし、グループ全体で口裏を合わせるので効果はなかった。したがって、グループ全体の評価を下げるしかなかった。そうすると、そのグループで頑張った学生が足を引っ張られて悪い評価になってしまう。この経験から、やはり評価は個人に対して行うべきものであると考える。よく頑張る学生はそのままにしても伸びる。そこで、まず何割ぐらいの学生をどのようにして伸ばしてゆくかについての目標が必要である。それぞれの学部で具体的に目標を決めるべきではないか。

A6 我々が依拠している教育理念に育成しなければいけない力を定めているので、これに根拠を持たせようとしている。各学部にはディプロマポリシーを定めてもらい、全学でも目標は必要だと思うが、何割かということになると難しい。

Q6 大学としての質保証ということが言われているのだから、その質に達していなければ卒業させないようにして質を保証することが強く求められている。学生に対してはこのような方針であることを具体的に説明し、文書で明示するのはもちろんのこと、どのような方法で学生を教育してゆくかを検討すべきではないか。

A6 そういう意味で汎用的能力については PROG テスト等で目標を見せるということと、CoBCuS でどのように結果を判断しサポートしてゆくかを考えている。

Q7 シラバスに AL ポイントを掲載することは、学生にとって何のメリットがあるのか。かえって、

楽をしたい学生はALポイントが小さな授業は単位取得が容易と考えて選択するのではないか。

A7 実際にそのような結果もある。ただ、ALポイントが上がれば理解度や満足度が上がるという結果もあるので、学生にもALが役立つという説明を継続的にしてゆきたいと考えている。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「カタカナ用語が多く理解できない点が多かった（リテラシー、コンピテンシー、ルーブリックなど）」、「わかりにくい用語が使われていた」、「評価についての話は初めて聞くような内容で勉強になりました」、「アクティブ・ラーニングについて認識が深まった」、「カタカナ用語が多く、わかりにくい部分があった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「ALの事例紹介」、「学内外の具体的な例を紹介頂きたい」、「ALの効果の実証」、「学生のモチベーションについて」との回答があった。

(3) 人文学部、人文科学研究科、東アジア研究科（人文系）

日時：平成27年11月18日(水) [吉田地区]14:30～15:30

場所：人文・理学部大会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：43名(アンケート回収29名)

内容：

教育改善FD研修会では、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の概要について、アクティブ・ラーニング(以下、AL)および学修成果の可視化を中心に説明および意見交換が行われた。

YU-AP事業は、既存の教育の内部質保証システムに加えてティーチングからラーニングへの転換(教育のパラダイムシフト)のための「学びの好循環(LearningのPDCAサイクル)」の構築を目指して行われている。LearningのPDCAではALや学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

また、昨年度実施した全学アンケートの結果から、本学の教員はALへの関心は高いものの、実践する教員はまだ少ないという現状が報告された。そこで、各授業におけるALの割合を数値化して可視化するALポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設け、AL実践の動機付けを進めていきたいとの方針が示された。ALポイント認定制度においては、毎回の授業ごとにALポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では共通教育を中心にALポイントを導入しているが、今後は専門教育にも広めていきたいという方向性が示された。データ分析の結果、ALポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FDも実施してゆく予定である。

次に学習成果の評価の構図および可視化について説明があった。一般的な教育評価方法についての説明の後、学修到達度調査として本学で導入されているPROG(Progress Report on Generic Skills)



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	10.3%
良かった	13	44.8%
どちらとも言えない	10	34.5%
あまり良くなかった	2	6.9%
良くなかった	1	3.4%
無回答	0	0.0%
合計	29	100.0%

テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCus についても説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 PBL とアクティブ・ラーニングの違いや関係性がよく分からないので説明して欲しい。

A1 PBL はアクティブ・ラーニングの一つの方法と考えていただきたい。ただし、アクティブ・ラーニングの定義は、京都大学の溝上教授の定義等があるが、まだ確定的なものはない。

Q2 人文学部は、リテラシーは高いが、コンピテンシーが低いという説明があったが、なぜか解説して欲しい。また、PROG テストは基本的に自己評価で実施されているのか。

A2 人文学部と場合、文献研究などを通して読解力などのリテラシー能力がかなり育成できていると思うが、対人力、統率力のようなコンピテンシー能力の育成については、人文学部の教育内容がセルフワークを基本としているものが多いため、低いのではないかと思う。また、PROG テストは対人力などに優れたハイパフォーマンス（コンピテンシー能力が高い）な 30 代の社会人の行動特性の分析から得たデータを基に問題が作成されている。試験方法自体は自己評価である。

Q3 アクティブ・ラーニングや AL ポイントなどは単なるエビデンスに過ぎないと考えている。学生はもともと自ら成長する芽を潜在的に持っている。教員がアクティブであれば、学生はそれに触発されて熱心に学修に取り組むのではないか。つまり、大学教員は学生を意欲的に学修に取り組ませる「触媒」としての役割を果たせばよいのであって、あえてアクティブ・ラーニングでなく講義型の授業でも、学生は十分アクティブになると考えているが、それに対して、どう思うか。その文脈からいえば、シラバスにあえてアクティブラーニングポイントを入れる必要はないのではないか。

A3 先生の言っていることは理解できます。先生の熱意がその授業で伝われば一番いいと思います。それで学生たちが学びたく（アクティブに）なればと思います。アクティブ・ラーニングはそれぞれの授業の形式に沿って導入していただければよいと考えています。また、シラバスに AL ポイント入れるのはそれぞれの授業コマごとにどのような AL 活動が行われているかを見るためであり、AL ポイントが高いからといって、その授業が必ずしも優れた授業であるということにはならないと考えています。

研修会後のアンケートでは、「シラバスに AL ポイントが記載した箇所が入ったために、毎回の授業内容が一覧できずにかえって見づらくなっている。ぜひ、改善して欲しい」、「分かりやすい授業を目指しているのに、講師の話や資料にカタカナ用語が多く理解できない点が多かった（コンピテンシー、リテラシー、ルーブリックなど）」、「AL は「学生の主体性を促す」というより、「学生の主体性を促していることを外部にアピールしている」という意味合いが強いのではないか。以前からそういう疑念を抱いていたが、今回の研修会の講師の話聞いても、その疑念は晴れなかった」、「講師の話で学生の学びが多様化していると言っているが、画一的な観点から学修成果を可視化しようとしていることが気になった」、「AL は欧米から導入された新しい教育方法だと講師が説明されていたが、明治末期から大正期にかけての新教育運動（木下竹次ら）を踏まえて講師は話をすべきである。きちんと歴史研究をしてから話しをすべきかと思う」など、AL に対して否定的な意見が寄せられた。一方で、「アクティブ・ラーニングについてそれなりに理解できた。」という回答もあった。また、今後希望する研修会については、「AL の事例紹介」、「学内外の AL の具体的な例を紹介頂きたい」という回答があった。

(4) 技術経営研究科

日時：平成 27 年 12 月 1 日(火)14:30～15:20

場所：技術経営研究科会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：10 名(アンケート回収 10 名)

内容：

冒頭、FD コーディネータより、本研修会の趣旨について、平成 26 年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマ I（アクティブ・ラーニング）の主要課題である AL

（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマ II（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、8 割以上の参加者が、「非常に良かった」「良かった」、今後の研修会に「できるだけ参加したい」と答えており、満足度の高い研修会となった。

次に、林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の全体概要について、テーマ I（アクティブ・ラーニング）、テーマ II（学修成果の可視化）それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP 事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）について紹介があった。

次に、テーマ I（アクティブ・ラーニング）の取組報告として。まずは本学におけるアクティブ・ラーニングの定義について確認がされ、AL に関する意識として、関心はあるものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。AL ポイント認定制度では、AL の可視化や現在設計中のベストティーチャー表彰制度を通して、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況として AL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）の AL ポイントが紹介された。AL ポイント認定制度では、自己評価によって AL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性（AL 科目や実験・実習など）が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、AL ポイントの分析では、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度が増加するという相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。AL ポイント認定制度は AL を推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、AL を推進する FD も展開していることが説明された。また、実施済みの FD 取組として、大人数授業と理系基礎科目の AL に関する FD、10 月実施予定の ICT 活用の FD を展開することが述べられた。AL を授業に導入する第一歩として、ペア及びグループワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらに AL を進める方策としてクリッカー、ICT 機器（タブレット）、AL 教室を活用する AL があることが説明された。

次にテーマ II（学修成果可視化）について説明があり、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム



(定性的測定)の横軸による4象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。具体的には、学修到達度調査として PROG (Progress Report on Generic Skills) テストが実施されていることが述べられ、PROG では、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを踏まえたエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系としてのアセスメント・ポリシーについて述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育(あるいは学部教育)では国際総合科学部で進められている CoBCuS を活用していく方向性について説明があった。

質疑応答では以下の通り【コメント】及び【質疑応答】があった。

【質疑応答】

Q. DP について文科省のガイドラインが出てきてから、DP、CP、AP (3P) を作り直すという話があり、検討を進めようと考えているが、ガイドラインが出てから作り直しをするようになるのか。

A. 3P のなかでも DP が重要になっている。高大接続審議まとめでは DP に盛り込む要点が出ているので、ガイドラインについてもこれを踏襲したものが予想される。基本的には大学ごと、研究科ごとで決める事項なので、事前に準備するのは問題ないと考えられる。

Q. AL ポイントや 3P の見直しや CoBCuS などを整備するとなると、運用をしながら調整を重ねて、いくつかの変更を経て進めていくことが想定され、相当の時間がかかることが予想されるがどの程度の作業スピードが求められるのか。

A. まず、AL ポイントについては、授業で行われているアクティブ・ラーニングを可視化している仕組みなので今後大きな変更が生じることはない。3P の見直し、策定の作業については、3P の見直し、策定をし、DP を定めた後に CoBCuS を導入していく方向性が考えられる。

Q. クリッカーが導入されているが使用状況についてはどのようになっているか。

A. 吉田キャンパスでの貸出となっているが、国際総合科学部、農学部、教育学部、または日本語教育などで活用されており、活用方法も学生とクリッカーの ID を紐づけるなどして工夫がなされており活用が進んでいる。

Q. 電子黒板はすでに導入されているか。

A. 電子黒板についてもすでに共通教育棟 26 番教室、15 番教室導入されており、今後の活用が期待されている。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	10.0%
良かった	7	70.0%
どちらとも言えない	2	20.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

【コメント】

MOT では、ほとんどの科目がアクティブ・ラーニング科目になっているかと認識しているが、個人の工夫で行っており、組織レベルでの推進はこれからになっている。今後は、組織レベルの推進を考えるうえでもALポイント認定制度は重要だと思う。

ミニツッパーパーなどの振り返りを繰り返しながら学生の変化を確認しながら授業を進めていくと教育効果は高いと思う。

(5) 医学部医学科・医学系研究科

日時：平成27年12月1日(火) 17:00～17:50

場所：医学部総合研究棟8階 多目的室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：9名(アンケート回収 8名)

内容：

本研修会では、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の概要とともに、アクティブ・ラーニング(以下、AL)および学修成果の可視化について説明および意見交換が行われた。

YU-AP事業の説明では、既存の教育の内部質保証システムに加えてティーチングからラーニングへの転換(教育のパラダイムシフト)のための「学びの好循環(LearningのPDCAサイクル)」の構築を目指して行われていることが明らかにされた。また、LearningのPDCAではALや学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

昨年度実施した全学アンケートの結果から、本学の教員はALへの関心は高いものの、実践する教員はまだ少ないという現状が報告された。そこで、各授業におけるALの割合を数値化して可視化するALポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設け、AL実践の動機付けを進めていきたいという趣旨の説明が行われた。ALポイント認定制度においては、毎回の授業ごとにALポイントを設定してもらい、シラバスに掲載している。現時点では共通教育を中心にALポイントを導入しているが、今後は専門教育にも広めていきたい。データ分析の結果、ALポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる弱い相関傾向がみられることが明らかにされた。

次に学習成果の評価の構図および可視化について説明があった。一般的な教育評価方法についての説明の後、学修到達度調査として本学で導入されているPROG(Progress Report on Generic Skills)テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入されたCobCusについても説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。



設問 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	25.0%
良かった	5	62.5%
どちらとも言えない	1	12.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%

Q1 共通教育の「社会と医療」はグループ学習をおこなっているが、グループによってALポイントが異なり、ばらつきがあると思うが、この点については、どのように考えているのか。

A1 統一シラバスや統一教材を実施している情報セキュリティ・モラルなどは同じALポイントになっている。しかし、同じ科目名といっても、それぞれの授業担当者の専門分野によりカッコ付きの開講科目名（副題）が付いているため、科目間で多少違いがあってもやむを得ないと考えている。ただし、基礎セミナーではかなり科目集団間のばらつきが多いことは認識している。

Q2 授業外学習時間というのは、学生の予習・復習を意味しているのか。また、医学部の授業の特性として1コマ完結の授業が多いので、なかなかこのような授業外学習時間は伸びていかないのが現状である。

A2 一話完結のオムニバス授業でも一つの授業である限りは、担当者間で話し合っ、FDなどを通してこの問題を考えてもらいたい。

Q3 ALポイントの計算方法を説明して欲しい。よく理解できていないので。

A3（計算方法を説明した後に）演習や講義各回の最高値が14ポイントになる。平均値は4程度で、5~6であれば比較的アクティブな授業であるといえる。

Q4 ポートフォリオについて、学生の実績データ（成績・時間外学習データ等）の収集や教員の学生のリフレクションへの介入の仕方など多くの問題を抱えていると思うが、これに対して、どのように考えているのか？

A4 eポートフォリオの全学ベースでの導入を考えている。成績だけでなく、フルセットすなわち成績が見えるだけでなく、正課外学習活動の実績データも入れるように考えている。しかし、デジタルデータの場合には紙媒体と異なり難しい面があることは認識している。そのため、導入できる学部からeポートフォリオは導入していこうと考えている。

質問者のコメント：医学部の場合、臨床実習が中心で患者さんの個人情報などの問題があるためにセキュリティがきつく、なかなかeポートフォリオを導入しづらい事情がある。

Q5 IRセンターの問題であるが、卒業生と紐付けをしていかないと最終的な教育効果を測れないと考えている。卒業生を追跡していくことで大学教育の質改善のためのPDCAサイクルを回すことができると考えているが、現実的には個人情報の壁などで非常に難しい。この点、どのように対応しようとしているのか？そこまで考えないで、入試とか入口のみをとりあえず考えているのか。

A5 卒業生の状況を把握することは重要であると考えているが、とりあえずは、入口である入試から出口である就職までを抑えていこうと考えている。

質問者のコメント：卒業生の追跡調査などを行う際には、医学部の100名足らずの卒業生を追跡するだけでも相当のマンパワー（データ解析をする人材やデータを収集する人材等）が必要である。

研修会後のアンケートでは、「アクティブ・ラーニングということは耳慣れない言葉であったが、医学部ではすでにログブック（臨床実習）などを活用したポートフォリオなどが行われているなどの実績があることに気付かされた」、「全学的にアクティブ・ラーニングを導入していこうとしていることが分かった」という意見がある一方で、「基礎的な用語（ルーブリック、リテラシーなど）の意味がわからなかった」というもう少し分かりやすく説明して欲しいという意見もあった。

また、今後希望する研修会については、「インストラクション・デザイン関係の研修」、「教育方法などあまり専門的すぎない研修」、「さまざまな課題を抱えた学生への対応方法に関する研修」という回答があった。さらに「PROGテストの詳細を知りたい」という要望もあった。

(6) 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

日時：平成 27 年 12 月 16 日(水) 13:00～14:00

場所：人文学部 小講義室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：36 名(アンケート回収 27 名)

内容：

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要について、アクティブ・ラーニング（以下、AL）および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目（共通教育）で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に間接評価・直接評価、横軸に心理測定的パラダイム（定量的測定）・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG（Progress Report on Generic Skills）テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCuS についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 教育評価の方法についてだが、項目が多数あって大変だと思う。これは、授業担当の教員がこれだけきめ細かくみることを想定しているのか。

A1 PROG テストでは、テストを通してコンピテンシーを測定し、その結果を整理して提供する。授業担当教員がテストの実施や結果の整理をする必要はない。

Q2 シラバス上に AL ポイントが表示されることによって、非常に閲覧しにくくなった。授業計画だけを閲覧できるようにしてほしい。

A2 他の学部からも同様の指摘があった。閲覧しやすくなるように検討する。

Q3 AL には関心はあるが、結局何を指すのかを各教員が納得しないと意味はない。今回の研修会



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	3.7%
良かった	9	33.3%
どちらとも言えない	9	33.3%
あまり良くなかった	5	18.5%
良くなかった	2	7.4%
無回答	1	3.7%
合計	27	100.0%

では、我々が何を指すのかについて信頼に値する具体的な情報がないため、これはローカルセオリーもしくはローカルイデオロギーではないかと疑問を持つ教員が多いはずである。今後の研修会では、理学部の教員が対象にしている学問は世界共通であるから、教育で優れた業績を上げている大学（例えばミシガン大学やプリンストン大学）における具体的な取り組みの事例を紹介してほしい。そうでなければ、研修の効果はないと考える。

また、講師はさまざまな評価をする側だと思うが、その評価方法が適切であるかについて評価が必要である。この過程を抜きにして、研究対象にされるのは心外である。

次に、このような研修会において、カタカナやローマ字の用語を頻繁に用いると、聞いている側の深い理解にはつながらない。わかりやすい説明に努めて頂きたい。

最後に、ループリックについてであるが、我々がこれと同等のことを実際に行っている例としては、推薦入試の面接評価である。しかしながら、教員によってその評価には大きな差が生じる。ループリック導入の利点は評価者が異なってもそれを揃えることができることにあるが、実際には大きな差が生じるケースがあり、その有効性には疑問を感じている。

A3 ループリックは完全な評価方法ではなく、評価者による差異がある等の問題点がある。専門家によると、100%評価が一致する完全なループリックは作れないと言われている。従って、ループリックを作成するだけでは単なる建前論になる可能性もあるので、評価を繰り返しながら、モデレーションが必要である。また、これまでの研修会では国内の事例のみしか取り上げていないが、クリッカーを用いたワークショップは非常に盛り上がり、これを通してクリッカーを試用する教員もいる。学内ではあるが、異なる分野で努力されている先生方にも着目してもらいたい。

Q3 研修会では、こういう大学ではこういう取り組みをやっている等の具体的な情報が聞きたい。また、今は取り組みがグローバルに評価される時代であることを意識してもらいたい。

A3 スタンドに立った形で、進めてゆかなくてはならないと考えている。そういう意味で役立つことができればと考えている。

Q3 もっとハイレベルな情報をいただければと思う。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については、「アクティブ・ラーニングに求められていることは一言では言えないと思う。その目的は『知識・技能』をとり入れる際に『思考・判断』をすることを意識させよということであろう。それをどのような形で教育するかはさまざまなやり方があるろう」、「今日の話聞いて講義がうまくなったり、学生の理解力が向上することに結びつかない。図が見にくい。タイムオーバー」、「具体性がないお話でした。AL に関しての具体的な話をききたかった」、「カタカナ用語を使用しないで説明してほしい。意味がはっきりわからない用語が多数あった」、「具体例が不明」、「もう少し具体例があれば参考にしやすかった」、「理系学部の実態を知らなすぎる」、「無意味だった」、「時間がもったいない」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「他の学部（理系学部）の先生方で、学生アンケートで評価の高い授業の見学とその後の解説」、「具体的な例を交えた内容」、「メンタルケアが必要な学生への対応法」、「具体性のあるもの（実際に行われていること）」、「現場的なもの」、「教育改善FDであれば、一般論より理学部に適した事例をききたい」、「アクティブ・ラーニング、反転授業、ループリック」、「具体例が豊富な内容、一般論でなくて個別の例」との回答があった。

(7) 工学部・理工学研究科（工学系）・医学系研究科（工学系）

日程：平成 28 年 1 月 6 日(水) 14：10～14：50

場所：工学部 D11 講義室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：69 名(アンケート回収 19 名)

内容：

冒頭、FD コーディネータより、本研修会の趣旨について、平成 26 年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマ I（アクティブ・ラーニング）の主要課題である AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマ II（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果

測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、回答者の過半数から、「非常に良かった」「良かった」、今後の研修会に「できるだけ参加したい」という結果を得ることができた。

次に、林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の全体概要について、テーマ I（アクティブ・ラーニング）、テーマ II（学修成果の可視化）それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP 事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）について紹介があった。

次に、テーマ I（アクティブ・ラーニング）の取組に関して、アクティブ・ラーニングの定義について確認がされた。続いて、新しい共通教育の開始に伴う平成 26 年度 10 月～11 月に実施されたアンケートによれば、AL に関する意識について過半数の教員は高い関心を持っているものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。AL ポイント認定制度では、AL の可視化や現在設計中のベストティーチャー表彰制度を通して、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況として AL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）の AL ポイントが紹介された。AL ポイント認定制度では、自己評価によって AL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性（AL 科目や実験・実習など）が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、AL ポイントの分析では、AL

設問 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.3%
良かった	9	47.4%
どちらとも言えない	6	31.6%
あまり良くなかった	2	10.5%
良くなかった	1	5.3%
無回答	0	0.0%
合計	19	100.0%



ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度が増加するという相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。AL ポイント認定制度は AL を推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、AL を推進する FD も展開していることが説明された。また、実施済みの FD 取組として、大人数授業と理系基礎科目の AL に関する FD、ICT 活用の FD が展開されていることが述べられた。また、AL を授業に導入する第一歩として、ペア及びグループでのワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらに AL を進める方策としてクリッカー、ICT（タブレット端末等）、AL 教室を活用する AL があることが説明された。

次にテーマⅡ（学修成果可視化）について説明があり、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定的パラダイム（定量的測定）・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による 4 象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。具体的には、学修到達度調査として PROG（Progress Report on Generic Skills）テストが実施されていることが述べられ、PROG では、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、アクティブ・ラーニング実践を進めるうえで重要なパフォーマンス評価としてのルーブリック活用について説明があった。また、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを活用したエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系（アセスメントポリシー）について述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育では国際総合科学部で進められている CoBCuS を活用していく方向性について説明があった。

質疑応答では以下の通り【質疑応答】があった。

【質疑応答】

Q. PROG テストについて、その結果を閲覧する方法についてお聞きしたい。

A. PROG テストの結果については、AP 委員会で報告されている。個別に結果の開示希望がある場合にも対応は可能で、学部単位で結果についてのフィードバックの要請がある場合にも対応は可能。個々の学生にはレーダーチャート（ポートフォリオ）で示すよう準備を進めている。

Q. アクティブ・ラーニング等の研修会の資料について別に提供があるかお聞きしたい。また、事例などの提供があれば教えていただきたい。

A. 研修会等の資料については希望があれば提供可能。今後は、AL ベストティーチャー制度を運用することで、アクティブ・ラーニングの授業コンテンツなどを共有するシステムを構築する方針である。

Q. 「山口と世界」のルーブリックが開発されたが活用の結果についてお聞きしたい。

A. 「山口と世界」のルーブリックについては、担当者についてはルーブリック活用にあたり、指針を示している。また、活用事例に関しては『大学教育』（紀要）に掲載されており、情報提供の希望があれば提供可能。

(8) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程：平成 28 年 1 月 13 日(水) 13:00～13:50

場所：農学部本館 2 階大会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：22 名(アンケート回収 20 名)

内容

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル)」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目 (共通教育) で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に間接評価・直接評価、横軸に心理測定的パラダイム (定量的測定)・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム (定性的測定) をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG (Progress Report on Generic Skills) テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCuS についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 今までの座学で一方通行のところに AL を取り入れることは良いことだと思う。ただ、獣医の講義は、古くから座学による講義とその科目に対する実習が対になって行われてきた。従って、座学にも AL を取り入れよと言われるのは違うと思う。実習が対になっているわけであるから、獣医は既に AL の割合も相当高いと思われる。このシステムに獣医の教育をどのようにフィットさせるのか。

A1 現在の授業実践を大幅に変えてほしいとは考えていない。科目の特性に応じた授業で良いと思う。ただし、既に実践されていると思うが、授業の中で AL や振り返りの場を設けると学生の理解が深まると思うので取り入れることを推奨する。

Q2 後半の部分に関する質問であるが、さまざまな評価の手法を示されて、現在は基本的に共通教育関連 (キャリアの形成も含めて) で実施されていると理解した。これは将来的に、例えば獣医の場合だと Day One スキル、Day One コンピテンシーといわれる評価があつて、卒業時に獣医として持



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	10.0%
良かった	13	65.0%
どちらとも言えない	4	20.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	5.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%

つべき能力が示されている。今、それに向けて学部として検討しているが、現在やっていることをこれらの評価に対応させてゆくことは可能か。

A2 学習到達度調査 (PROG テスト) については3年生についても実施している。学部からの要望があれば、これらのデータを学部を提供するので活用してほしい。また、今後説明をするが、CoBCuSについてもデータを提供する。支援をさせてもらえればと考えている。

Q3 学習環境整備について、iPadを使用した支援システムとは具体的にどのようなものか。

A3 教員が問題を作成しておき、授業中に課題として学生に提示してその場で答えさせる、教員や学生の書き込み内容や習熟度等をその場で掲示するなどの機能を有する授業支援システムである。また、クリッカーにも対応している。なお、学生の書き込みに関しては、匿名化して掲示することもできる。関心がある教員は試用も可能である。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については、「今回お話のあった iPad の教育コンテンツに興味を持ちました」、「e-Learning などの具体的な方法論」、「共通教育の内容や目指すことなどを説明していただければと思います」、「PROG テストやクリッカーの使用など興味のあるトピックを提供していただけたが、それぞれについてもう少し詳しい話をききたかった」、「わかりにくい」、「FDが多すぎると思います」、との回答があった。また、今後希望する研修会については、「評価の手法。ICT システム」、「実際に行われている授業の事例を学べる場があると良いかと思います」、「教育ツールに関して」、「支援機器のワークショップ」、「iPad を使ったシステム」との回答があった。

(9) 医学部保健学科・医学系研究科

日程：平成 28 年 2 月 15 日(月) 13:00~13:50

場所：保健学科第 2 研究棟 HD1-1

講師：林 透 (大学教育センター准教授)

参加者：34 名(アンケート回収 30 名)

内容：

冒頭、FD コーディネータより、本研修会の趣旨について、平成 26 年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマ I (アクティブ・ラーニング) の主要課題である AL (アクティブ・ラーニング) ポイント認定制度の概要、及びテーマ II (学修成果の可視化) の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、ほとんどの回答者から、「非常に良かった」「良かった」、今後の研修会に「是非参加したい」「できるだけ参加したい」という結果を得ることができた。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	16.7%
良かった	24	80.0%
どちらとも言えない	1	3.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	30	100.0%

次に、林 透 大学教育センター准教授 (IR 室長) より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の全体概要について、テーマ I (アクティブ・ラーニング)、テーマ II (学修成果の可視化) それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP 事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル) について紹介があった。



次に、テーマ I (アクティブ・ラーニング) の取組に関して、アクティブ・ラーニングの定義について確認がされた。続いて、新しい共通教育の開始に伴う平成 26 年度 10 月～11 月に実施されたアンケートによれば、AL に関する意識について過半数の教員は高い関心を持っているものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。AL ポイント認定制度では、AL の可視化や教育研究評議会です承されたバストティーチャー表彰制度を通して、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況として AL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目 (共通教育科目) の AL ポイントが紹介された。AL ポイント認定制度では、自己評価によって AL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性 (AL 科目や実験・実習など) が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、AL ポイントの分析では、AL ポイントが高ければ、到達目標達成度、授業理解度、授業満足度が増加するという弱い相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。AL ポイント認定制度は AL を推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、AL を推進する FD も展開していることが説明された。また、実施済みの FD 取組として、大人数授業と理系基礎科目の AL に関する FD、ICT 活用の FD が展開されていることが述べられた。また、AL を授業に導入する第一歩として、AL 型授業プロセスの 1 コマ (例) について解説があり、ペア及びグループでのワークや振り返り、予習・復習課題 (宿題) など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらに AL を進める方策としてクリッカー、ICT (タブレット端末等)、AL 教室を活用する AL があることが説明された。

次にテーマ II (学修成果可視化) について説明があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) では、汎用的能力 (ジェネリックスキル) の測定を実施していることについて説明があった。加えて、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定的パラダイム (定量的測定)・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム (定性的測定) の横軸による 4 象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。具体的には、学修到達度調査として PROG (Progress Report on Generic Skills) テストが実施されていることが述べられ、PROG では、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、アクティブ・ラーニング実践を進めるうえで重要なパフォーマンス評価としてのルーブリック活用について説明があった。また、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを活用したエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系 (アセスメントポリシー) について述べられ、正課外での学び

を含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育では国際総合科学部が進められている CoBCuS を活用していく方向性について説明があった。

質疑応答では以下の通り【質疑応答】があった。

【質疑応答】

- Q. 保健学科においてアクティブ・ラーニングを実施するにあたり反転授業が適切だと考えているが、具体的に反転授業（例えば『科学技術と社会』）について詳細を知りたい。
- A. WEB を利用した予習教材や映像資料が活用されている。毎回の授業ではミニテストなどの活用を通して、予習が十分に行われているかが確認されている。また、最終のテストでは、予習・復習を十分に行われているかを分析することを通して反転授業の効果を上げている。
- Q. 考える時間を与えることもアクティブ・ラーニングだと考えているが、10分程度でもそうしたアクティビティはALポイントになるか教えていただきたい。
- A. ペアワークを採用したかたちの「考える時間」や振り返りを活用したアクティブ・ラーニングを実施することができる。また、短い時間でも学生に考えさせる時間を確保すること（ペアワーク等を活用すること）で、ALポイントも高まり、ALも推進されると考えられる。
- Q. PROG テストの詳細について説明していただきたい。
- A. まず、PROG の結果については委員会に報告をしている。実際のテストの形式は、リテラシーでは四択から選択する方法で測定し、また、コンピテンシーでは、とある場面（シチュエーション）のなかでどのような行動特性を持っているかを回答することで測定している。コンピテンシーは、大項目、中項目、小項目に分かれており、社会で求められる力（社会人基礎力）を細かく見ることができる。PROG のデータを活用することで、人材育成目標に合わせたコンピテンシー育成のための教育改善を検討することができる。
- Q. 保健学科のコンピテンシー（対人基礎力）について、1年生では看護専攻と検査専攻を実施しており、3年生では検査専攻での実施となっているが、是非、学部全体として1年生、3年生に実施していただきたい。
- A. 両専攻については来年度からの実施を計画しており、結果の報告も予定している。

(10) 国際総合科学部

日程：平成28年2月17日（水）14:50～15:50

場所：共通教育28番教室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：23名（アンケート回収 12名）

内容：

本研修会では、山口大学・大学教育再生加速プログラム（以下：YU-AP）の概要とねらい、その二つの柱であるテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）およびテーマⅡ（学習成果の可視化）について、大学教育センターの林准教授より説明があり、その後意見交換が行われた。

YU-APでは、「学びの好循環（LearningのPDCAサイクル）」を可能にするためには、アクティブ・ラーニングの推進および学修成果の可視化が不可欠であるとする。

テーマⅠの取り組みとしては、可能な限り多くの授業におけるアクティブ・ラーニングの導入を促すべく、シラバス上で各教科のアクティブ・ラーニングの実施率を提示するALポイント制度が設けられた。さらにはアクティブ・ラーニングの積極的な実践事例を評価するALベスト・ティーチャー表彰制度を準備しつつある。加えて、アクティブ・ラーニングの実践に適した教室等の環境整備を進め、またアクティブ・ラーニングの事例に触れるためのFD・SD研修会を開催してきたといった報告があった。

テーマⅡの取り組みとして、まず「①学修到達度調査・学修行動調査」について、学修成果の評価の構図が示された上で、PROGテストを中心に説明があった。つづいてパフォーマンス評価のツールであり、国際総合科学部が主担当の「山口と世界」でも導入されている「②ルーブリックの活用」について触れられた。また「③学生のリフレクション」を支援するツールとして、eポートフォリオやYU CoB CuSなどの実装を含む「自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL）」の導入について解説された。最後に「④教員によるアドバイジング」について、IRデータ等を用いた「学修・キャリア診断体制」の方向性が示された。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
w	人数	割合(%)
非常に良かった	1	8.3%
良かった	6	50.0%
どちらとも言えない	5	41.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	12	100.0%

意見交換・質疑応答

国際総合科学部は、DPに即したコンピテンシーを基盤とするカリキュラムが当初から構成されており、そのDPの求めるコンピテンシスの習熟度を可視化するYU CoB CuS、学生のリフレクションと促すポートフォリオ、アクティブ・ラーニングを中心とするカリキュラムおよび個別の授業設計、ルーブリックを用いた評価などもすでに導入している。そのため、それらの効果が今後PROGテスト等の結果にどのように表れるかに関心が集まった。また、アクティブ・ラーニングをめぐるのは、具体的な授業実践上の問題が議論された。

個別の質疑応答は以下の通りである。

Q：アクティブ・ラーニングの授業が多いと、宿題の量が学生の許容量を超える場合も出てくる。とりわけグループ・ワークの宿題が同時期に複数の科目で求められているケースでは、時間割上空き時間が少ないこともあり、メンバーが集まる時間がとれず十分な準備ができない問題が生じている。

A アクティブ・ラーニングを増やせばカリキュラムの見直し・調整が必要になる。

Q アクティブ・ラーニングを用いたモデル授業等をウェブ上に公開し閲覧可能にしたらいいいのではないか。

A 今後、ALベストティーチャーの表彰などと関連づけて公開の仕組みを作っていく。

Q グラフを見る限り、ALポイントと授業満足度の間に相関関係が認められないのではないか。ALポイントには本当に効果があるのか？

A ALポイントと授業満足度の間には弱い正の相関がある。今後は、フォーカス・グループ・インタビューなどを用いた評価法を検討する。

Q PROテストで提示されているコンピテンシーを見ると、性格や個性にあたるような能力も含まれている。実際授業では（性格ゆえに）無反応な学生もいる。教育においてその人の性格まで評価してしまうことは適切なのだろうか？

A 決めつけではなく指標と考えてほしい。

Q グループ・ワークでの発達障害者の評価はどうするのか

A（ダブル・スタンダードは設けるべきでないが）得意部分を評価してあげるなどで対応する。また相談室との連携も重要である。

・その他の意見としては、以下のようなものがあった。

複数学部生混成の「山口と世界」においては、（パソコン、プランニング、フィールドワーク、プレゼンテーションなどの訓練をすでに受けている）国際総合科学部の学生が他学部の学生から頼られてしまい、負担が不公平になる傾向が認められる。この点については、リーダーシップには、できる人がすべてを抱え込むのではなく、仕事を配分する工夫も含まれるということを学生に指導する必要があるという意見が出された。

また、そもそもアクティブでないラーニングはありえるのか？純粋な講義科目であっても、その場あるいは課外でのアクティビティを引き出しうるのではないかという根本的な問題を指摘する意見もあった。

事後アンケート

参加者 23 名中 12 名から回答があった。「非常によかった」と「よかった」を合わせると 58.3 パーセント、残りは「どちらとも言えない」であり、概ね好意的な反応であった。今後の研修会については、「事例がたくさん欲しい」「評価の具体的方法」など実践的なテーマ・内容を要望するものがあった。

(11) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日程：平成 28 年 2 月 17 日（水）16:00~16:30

場所：教育学部 21 番教室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：71 名（アンケート回収 29 名）

内容：

まず講師より、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要とねらい、具体的な「アクティブ・ラーニング」（AL）の取り組みについて次のような説明があった。

山口大学の取り組みは、「テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）」と「テーマⅡ（学修成果の可視化）」の複合型である。山口大学ではこれまで授業者側の



「Teaching の PDCA サイクル」をサポートする取り組みを主に進めてきたが、さらに学生側の「Learning の PDCA サイクル」をサポートする取り組みを進めている。具体的には、ルーブリックやeポートフォリオなどいくつかの取り組みを通じて「学びの好循環」が生まれることを期待している。ここではYU-APで取り組んでいるALに焦点を絞る。

山口大学において平成26年度実施の「新しい共通教育アンケート調査」の結果を参照すると、ALへ関心を示している教員は約半数いるものの、ALを実践している教員は1/4程度であることが明らかとなった。そこで、ALに関するマニュアルの作成・配布、ALのための教室・施設整備やタブレット端末・クリッカーなどの機器整備、ALを取り入れた授業紹介のFD・SDワークショップの企画・実施、ALポイントの導入による授業内学習行動の可視化、ALベストティーチャー表彰制度の制定などを通じてALの実践を促していきたい。ALを取り入れた授業を行うには、学生を中心として、学生の自主性を尊重するなど、これまでの大学教員の考え方を変えていく必要がある。

上記の説明に対して以下のような質疑応答があった。

Q1 授業シラバスにALポイントを与えると、授業の評価がALポイントの数値の比較となってしまう。それでよいか？

A1 確かに人間は数値で示されると、その大小に着目してしまう傾向がある。どれだけALを導入しているか、その目安と考えてほしい。

Q2 外国語(英語)の授業においてペアワークを取り入れている。プレゼンテーション資料で示されたALの形態の一つとして「フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)」とある。外国語のペアワークは「フィールドワーク(演習)」となりそうだが、違和感がある。「グループワーク」としてよいか。

A2 ALポイントのマニュアルには記載しているが、グループワークはペアワークを含んでいる。また、外国語で議論などを行う場合は、「ディスカッション・ディベート」にも入るかもしれない。なお、複数の形態に当てはまれば、当てはまるものすべてにALポイントを設定することも可能である。

Q3 クリッカーを借りて使ってみたところ、Windows 10に対応していないようであった。ソフトウェアのバージョンアップを検討してほしい。

A3 バージョンアップの方向で業者に対応を依頼する。

Q4 授業シラバスの入力の際にALポイントを登録するが、その入力方法がより簡便なものにならないか検討してほしい。

A4 既に、修学支援システムの改修を行い、ALポイントの登録画面をわかりやすいよう改善している。

アンケート結果

回収されたアンケートの集計結果は下表のとおりであった。本研修会についての感想・要望などの自由記述については、質疑応答で出されたものの他に、ALの実践例を紹介するFD研修会を希望する回答が複数あった。また、今回のFD研修会では時間の制約により省略されたが、学修成果の可視化に関する研修会を希望する回答もあった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

非常に良かった	2人	6.9%
良かった	17人	58.6%
どちらとも言えない	8人	27.6%
あまり良くなかった	1人	3.4%
良くなかった	0人	0.0%
無回答	1人	3.4%
合計	29人	100.0%

設問3 興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

是非参加したい	3人	10.3%
できるだけ参加したい	25人	86.2%
あまり参加したくない	1人	3.4%
参加したくない	0人	0.0%
無回答	0人	0.0%
合計	29人	100.0%

設問6(1) 実施時期

良い	24人	82.8%
良くない	4人	13.8%
無回答	1人	3.4%
合計	29人	100.0%

設問6(3) 実施場所

良い	27人	93.1%
良くない	0人	0.0%
無回答	2人	6.9%
合計	29人	100.0%

第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別部会

(1) 情報処理部会（部会長：大学教育センター 小川 勤）

本年度後半から、ワーキングチームを作って、ビデオ教材の更新とともに、統一教材の内、プレゼン教材や補助教材の改訂作業を行った。27年度末あるいは28年度当初に（情報セキュリティ・モラル授業開始前に）、情報セキュリティ・モラルの授業担当者を対象に、統一教材や教材ビデオの改訂された部分を説明するための教員研修を実施する予定である。

(2) 英語部会（部会長：教育学部 藤本 幸伸）

英語部会は、平成26年8月大学教育機構に、平成28年度英語カリキュラム改善案を提出した。その後、この英語部会によるカリキュラム改善案を承け、山口大学の英語教育を検討するWGが設置されることになった。そのWGが「英語教育の在り方に関するWG」である。平成27年度の英語部会では、平成28年度の新カリキュラムに向け様々な見直しを行うはずであったが、教学審議会のもとに設置された「英語教育の在り方に関するWG」からの依頼を承け、平成29年度英語カリキュラム案の作成に傾注することになった。

(3) 物理学部会（部会長：理工学研究科（理学） 野崎 浩二）

① 授業外学習時間の確保に向けた取り組み

特別な取り組みを実施していない。

毎年、物理学については他の共通教育科目と比較し、学生の授業外学習時間が長い。この理由については把握していないが、他の授業科目の参考になると思われるので、来年度、理由を調査したい。

② 適正な成績評価

特別な取り組みは実施していない。

成績分布をみると、一部のクラスで不合格者が0のものがある。教員の何らかの取り組みによって不合格者0を達成している可能性もあり、その場合は他の教員の授業の参考になると思われるので、調査したい。

③ 試験監督体制

特別な取り組みは考えていない。

「大学教育センターでは、不正行為対策として監督補助者の増員や試験時の席指定等を検討しております。部会の各先生方のご相談やご意見もお寄せいただければ幸いです。」

について

・ 疑わしい答案があった時、座席の前後左右の答案と比較することができて便利である。また、挙動不審者が誰であるかも座席表でただちにわかる。

という意見があった。一方で

・ 工学部内では、不正行為対策として、定数以上の受験者の場合には必ず監督補助者をつけることや隣の席を空けて着席させることで対応をしている。共通教育でも同様な対応を教員に呼びかけることでよい。

という意見もあった。

(4) 化学部会 (部会長：理工学研究科 (工学) 笠谷 和男)

この2年間化学実験では、保護メガネの着用の徹底と、化学系学科は白衣着用を指導してきた。今年度は、化学実験のTA・SAにも保護メガネの着用の徹底を指導した。化学実験のテキスト改訂を長年非常勤講師が実質中心になってやってきたが、今後常勤教員がテキスト改訂責任者として担当することになった。

(5) 地球科学部会 (部会長：理工学研究科 (理学) 川村 喜一郎)

分科会メンバーの多くが理学部に属しているので、部会としての独自FDは行わず、理学部での地球科学関連講義のピアレビューへの参加を勧めた。本年は、地球圏システム科学科専門科目、野外実習の講義を対象に、12月にピアレビューおよび、同日夕方授業研究会を実施した(10名参加)。

(6) 日本語部会 (部会長：国際総合科学部 山本 冴里)

9月10日(木)14:00~17:00に、下記FD研修会を実施した。

参加者：5名 場所：共通教育棟演習室3D

(日本語教員：林伸一・中溝朋子・永井涼子・仁平千香子・山本冴里)

内容：

- 1) 永井教員より日本語中級後半—聴解・会話クラスの実践について発表、議論
- 2) 仁平教員より日本語初級—漢字クラスの実践について発表、議論

なお、大学教育センターから連絡のあった3点については、以下の通りである。

① 授業外学習時間の確保に向けた取り組み (単位制度の実質化)

日本語授業の単位を必要としない大学院生を除き、授業外学習時間は比較的確保できているものとする。

② 適正な成績評価

クラス横断的な評価基準のすりあわせは、現在あまり行なわれていないが、国際総合科学部への留学生受け入れを機に——したがってクラス数増加とともに——担当教員がより密接な連絡をとりつつ評価体制を作っていく移行期にあると考える。

③ 共通教育における試験監督体制

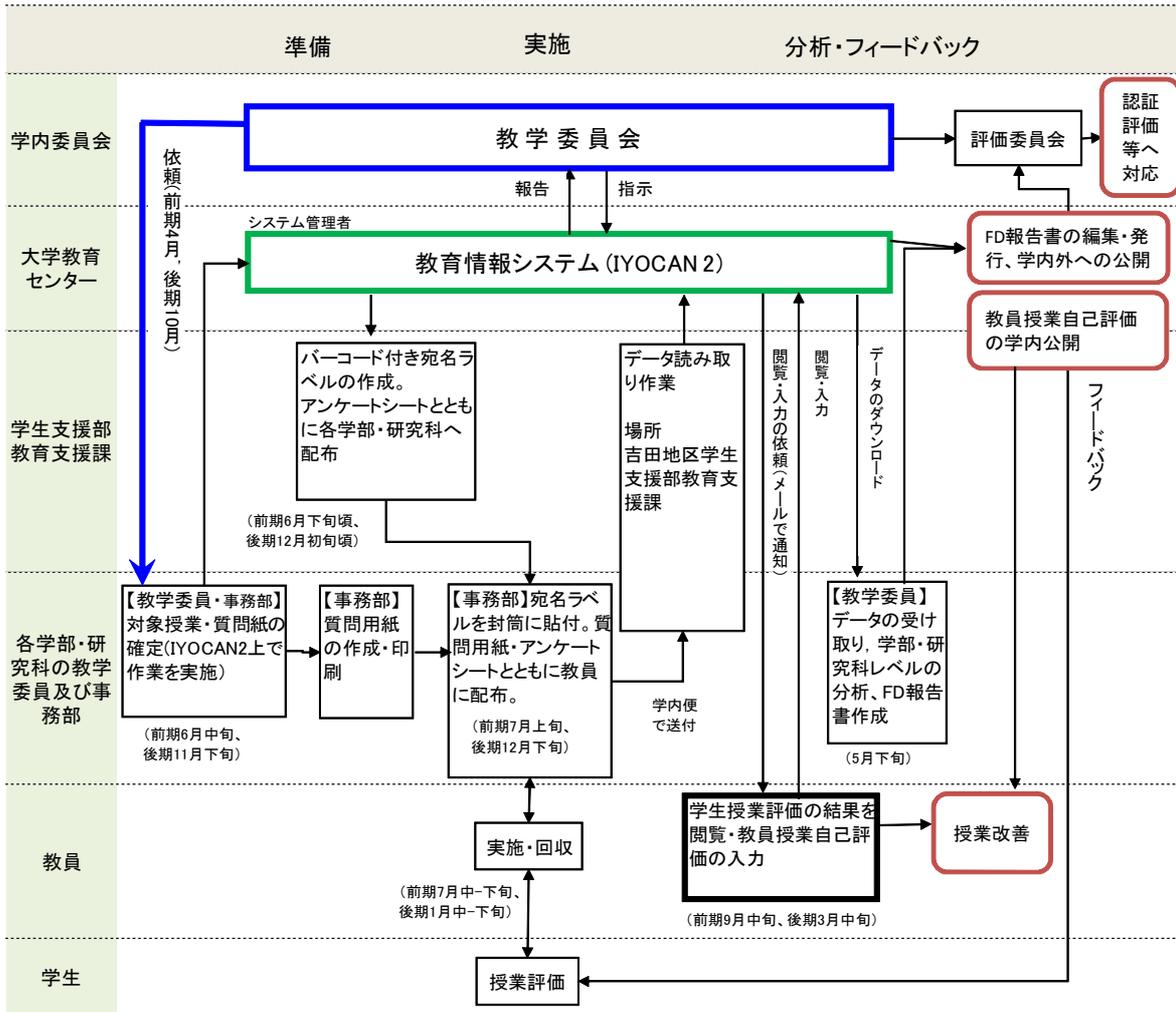
日本語教育は、基本的には20人以下のクラスで実施されているため、試験監督体制に問題はないと考える。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of Your Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

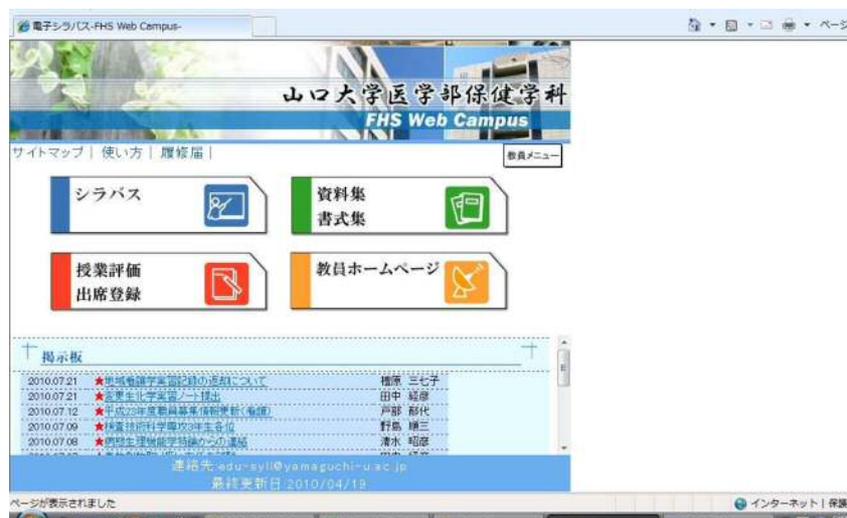
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

● 医学部保健学科 授業支援システム



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

（３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

（４）実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会 (平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

(5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot displays the IYOCAN2 web interface. The browser title is '山口大学授業評価システム IYOCAN2'. The page shows a list of course evaluations with the following details:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければならなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**
「新聞を読む習慣」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急速代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

At the bottom of the page, a message reads: 'ページが表示されました' (Page displayed).

第2節 授業評価の結果について(全学)

(1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2015年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2016年10月24日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2010年度以降の経年変化)として掲載した。

2015年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は117,651人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは医学部医学科(95.0%)、続いて高かったのは共同獣医学部(90.4%)、理学部(89.3%)であった。多くの学部・研究科が昨年度より減少する結果となり、2016年度以降の改善充実が求められる。

(2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、農学部(獣医系)(100.0%)、農学研究科(100.0%)であった。大半の学部・研究科が昨年度より上昇する結果となった。

2015年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2016年10月24日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	学生授業評価(2012年度)	学生授業評価(2013年度)	学生授業評価(2014年度)	学生授業評価(2015年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	91.5%	91.9%	90.9%	91.0%	86.6%	全て	
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	81.0%	87.9%	89.3%	90.1%	82.8%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く	
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	87.0%	87.3%	82.1%	84.7%	81.0%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護実習等を除く	
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	82.2%	86.4%	83.3%	81.6%	81.4%	卒業論文演習、演習I・IIを除く	
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	97.6%	96.6%	93.2%	95.5%	89.3%	特別研究、集中講義、一部の実習等を除く	
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	85.7%	89.7%	85.2%	88.3%	88.5%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターシップを除く	
	農学部(生物系)							96.5%	98.7%	95.9%	93.0%	94.7%	89.2%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	農学部(獣医系)	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%		78.9%	86.8%	87.2%	88.6%	88.9%	75.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	共同獣医学部									100.0%	92.0%	42.9%	90.4%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	国際総合科学部												76.2%	
	独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	97.5%	98.8%	98.8%	97.7%	95.0%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	91.5%	97.5%	86.5%	72.3%	授業評価の必要なものに限定	

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価力率(2007年度)	教員授業自己評価力率(2008年度)	教員授業自己評価力率(2009年度)	教員授業自己評価力率(2010年度)	教員授業自己評価力率(2011年度)	教員授業自己評価力率(2012年度)	教員授業自己評価力率(2013年度)	教員授業自己評価力率(2014年度)	教員授業自己評価力率(2015年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	40.1%	47.1%	32.6%	39.9%	41.8%	全て	
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	56.1%	51.1%	39.1%	44.7%	45.7%	学生授業評価と同じ	
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	48.7%	54.5%	44.4%	50.1%	46.6%	学生授業評価と同じ	
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	32.4%	26.8%	19.3%	38.2%	62.0%	学生授業評価と同じ	
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	72.4%	62.9%	42.7%	49.4%	58.3%	学生授業評価と同じ	
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	38.6%	25.2%	23.9%	35.2%	31.4%	学生授業評価と同じ	
				71.1%	79.1%	80.8%	54.7%	73.3%	92.6%	学生授業評価と同じ	
	50.6%	66.2%	54.8%		52.6%	78.9%	69.2%	37.1%	44.4%	100.0%	学生授業評価と同じ
						100.0%	60.0%	47.1%	98.3%	学生授業評価と同じ	
									88.7%	学生授業評価と同じ	
	独自	-	-	83.3%	100.0%	81.6%	100.0%	92.0%	100.0%	100.0%	全て
独自	-	-	-	-	40.0%	76.0%	97.5%	62.9%	51.1%	-	

<大学院>学生授業評価

データベース	学生授業評価(2005年度)	学生授業評価(2006年度)	学生授業評価(2007年度)	学生授業評価(2008年度)	学生授業評価(2009年度)	学生授業評価(2010年度)	学生授業評価(2011年度)	学生授業評価(2012年度)	学生授業評価(2013年度)	学生授業評価(2014年度)	学生授業評価(2015年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	69.2%	81.6%	81.6%	79.5%	79.0%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	74.2%	69.6%	58.3%	全て	
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	52.4%	65.2%	54.7%	54.7%	51.8%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	71.5%	69.6%	64.7%	76.7%	66.3%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.6%	47.4%	32.9%	42.9%	30.0%	24.2%	演習、セミナーを除く
独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	60.0%	53.3%	50.0%	54.5%	21.4%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施せず。
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	36.4%	37.5%	32.0%	54.6%	66.7%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価力率(2007年度)	教員授業自己評価力率(2008年度)	教員授業自己評価力率(2009年度)	教員授業自己評価力率(2010年度)	教員授業自己評価力率(2011年度)	教員授業自己評価力率(2012年度)	教員授業自己評価力率(2013年度)	教員授業自己評価力率(2014年度)	教員授業自己評価力率(2015年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.5%	39.7%	35.1%	29.1%	39.8%	44.9%	全て(ただし、2011年度より学生授業評価と同じ)
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	53.1%	40.0%	77.4%	69.6%	66.7%	〃
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	33.6%	30.3%	28.4%	22.1%	81.6%	〃
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	48.3%	52.7%	41.2%	47.3%	53.6%	〃
	36.5%	58.1%	49.2%	48.1%	38.5%	35.4%	19.5%	35.0%	45.6%	〃
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	46.1%	41.1%	42.9%	33.3%	43.1%	〃
	48.8%	70.8%	42.2%	48.7%	57.9%	95.5%	47.1%	65.0%	100.0%	〃

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている。

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(医学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	27,295			2,544	8,899			52	38,790
共通教育(2012)	28,685			2,004	9,047				39,736
共通教育(2013)	44,296			2,263	6,883				53,442
共通教育(2014)	43,813			2,140	6,557				52,510
共通教育(2015)	42,894			2,207	6,109				51,210
人文(2011)	4,287	679	1,104						6,070
人文(2012)	5,084	727	1,293						7,104
人文(2013)	5,105	603	1,136				906		7,750
人文(2014)	5,316	634	1,434				255		7,639
人文(2015)	5,183	556	1,205				613		7,557
教育学部(2011)	8,064		791	675			2,788	86	12,404
教育学部(2012)	7,303		774	653			2,962	560	12,252
教育学部(2013)	7,313		759	623			2,872	113	11,680
教育学部(2014)	7,925		778	642			3,032		12,377
教育学部(2015)	6,895		851	584			3,009		11,339
経済(2011)	8,328								8,328
経済(2012)	8,530								8,530
経済(2013)	8,791								8,791
経済(2014)	8,894								8,894
経済(2015)	9,147								9,147
理(2011)	4,700		289	467					5,456
理(2012)	4,656		321	488				234	5,699
理(2013)	4,797		275	453				476	6,001
理(2014)	5,042		469	490					6,001
理(2015)	4,710		392	495					5,597
工(2011)	14,558		1,673	2,167					18,398
工(2012)	14,477		1,793	2,073					18,343
工(2013)	14,706		1,639	2,096				7	18,448
工(2014)	14,161		1,576	2,105				121	17,963
工(2015)	15,052		1,714	2,084					18,850
農(2011)	4,006			1,016					5,022
農(2012)	3,769			767					4,536
農(2013)	3,617			933					4,550
農(2014)	3,646			993					4,639
農(2015)	3,197			510					3,707
共同獣医(2012)	62								62
共同獣医(2013)	479			140					619
共同獣医(2014)	476			115					591
共同獣医(2015)	1,629			483					2,112
国際総合(2015)	4,298								4,298
大学院・理工(2011)	2,859		184	3					3,046
大学院・理工(2012)	2,859								2,859
大学院・理工(2013)	2,672								2,672
大学院・理工(2014)	2,737								2,737
大学院・理工(2015)	2,605								2,605
大学院・技術経営(2011)								329	329
大学院・技術経営(2012)								333	333
大学院・技術経営(2013)								325	325
大学院・技術経営(2014)								269	269
大学院・技術経営(2015)								312	312
大学院・医学系(2011)	199		123					18	340
大学院・医学系(2012)								332	332
大学院・医学系(2013)								311	311
大学院・医学系(2014)	175		97					54	326
大学院・医学系(2015)	300		74						374
大学院・教育学(2011)	132		78	1			146		357
大学院・教育学(2012)	167		83	3			155		408
大学院・教育学(2013)	220		105	2			152		479
大学院・教育学(2014)	117		86	1			126		330
大学院・教育学(2015)	218		78	13			138		447
大学院・経済学(2011)								123	123
大学院・経済学(2012)								122	122
大学院・経済学(2013)								164	164
大学院・経済学(2014)								166	166
大学院・経済学(2015)								96	96
合計(2011)	75,530	727	4,264	5,988	9,047	0	3,117	1,581	100,254
合計(2012)	91,579	603	3,914	6,370	6,883	0	3,930	1,396	114,679
合計(2013)	92,305	634	4,440	6,511	6,557	0	3,413	610	114,470
合計(2014)	92,302	634	4,440	6,486	6,557	0	3,413	610	114,442
合計(2015)	96,128	556	4,314	6,376	6,109	0	3,760	408	117,651

(3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、2015年度の平均値データは2014年度の平均値と比べると、共通教育において減少傾向にあるが、学部段階では大半の学部で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びている傾向にある。特に、理学部及び工学部で比較的高い数値を示している。なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうとでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

(3) 共通質問項目3 「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に比べ、上昇している。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

(4) 共通質問項目4 「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目5 「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

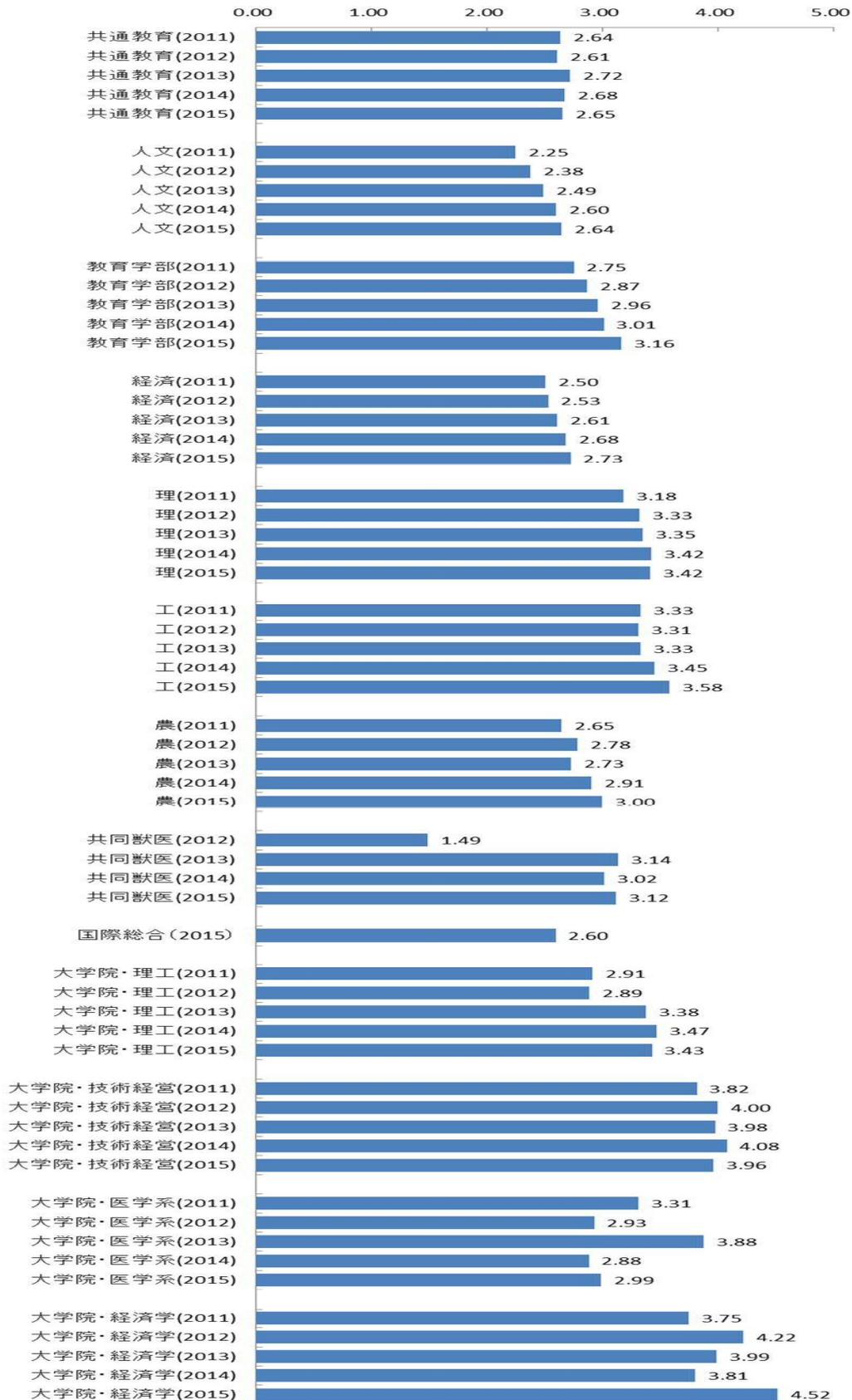
- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満） | |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5前後の高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	2.45			3.38	3.01			1.46	2.64
共通教育(2012)	2.44			2.97	3.06				2.61
共通教育(2013)	2.47			3.67	4.02				2.72
共通教育(2014)	2.54			3.70	3.23				2.68
共通教育(2015)	2.52			3.72	3.20				2.65
人文(2011)	1.92	2.86	3.16						2.25
人文(2012)	2.12	3.09	3.02						2.38
人文(2013)	2.14	3.20	3.26				2.99		2.49
人文(2014)	2.32	3.22	3.27				3.15		2.60
人文(2015)	2.27	3.25	3.17				4.23		2.64
教育学部(2011)	2.57		3.15	3.44			3.02	2.34	2.75
教育学部(2012)	2.70		3.35	3.63			3.06	2.53	2.87
教育学部(2013)	2.76		3.33	3.66			3.20	3.48	2.96
教育学部(2014)	2.88		3.39	3.55			3.14		3.01
教育学部(2015)	3.04		3.39	3.67			3.27		3.16
経済(2011)	2.50								2.50
経済(2012)	2.53								2.53
経済(2013)	2.61								2.61
経済(2014)	2.68								2.68
経済(2015)	2.73								2.73
理(2011)	3.09		3.53	3.88					3.18
理(2012)	3.22		3.67	4.09				3.42	3.33
理(2013)	3.26		3.91	4.04				3.29	3.35
理(2014)	3.33		3.65	4.18					3.42
理(2015)	3.31		3.72	4.22					3.42
工(2011)	3.20		3.57	4.67					3.33
工(2012)	3.17		3.61	4.67					3.31
工(2013)	3.22		3.56	4.67				4.67	3.33
工(2014)	3.34		3.64	4.11				3.27	3.45
工(2015)	3.47		3.67	4.30					3.58
農(2011)	2.54			3.07					2.65
農(2012)	2.70			3.20					2.78
農(2013)	2.70			2.82					2.73
農(2014)	2.92			2.87					2.91
農(2015)	2.97			3.20					3.00
共同獣医(2012)	1.49								1.49
共同獣医(2013)	3.10			3.27					3.14
共同獣医(2014)	3.06			2.84					3.02
共同獣医(2015)	3.13			3.07					3.12
国際総合(2015)	2.60								2.60
大学院・理工(2011)	2.84		3.98	4.00					2.91
大学院・理工(2012)	2.89								2.89
大学院・理工(2013)	3.38								3.38
大学院・理工(2014)	3.47								3.47
大学院・理工(2015)	3.43								3.43
大学院・技術経営(2011)								3.82	3.82
大学院・技術経営(2012)								4.00	4.00
大学院・技術経営(2013)								3.98	3.98
大学院・技術経営(2014)								4.08	4.08
大学院・技術経営(2015)								3.96	3.96
大学院・医学系(2011)	3.37		3.16					3.78	3.31
大学院・医学系(2012)								2.93	2.93
大学院・医学系(2013)								3.88	3.88
大学院・医学系(2014)	2.26		3.39					3.98	2.88
大学院・医学系(2015)	2.91		3.32						2.99
大学院・経済学(2011)								3.75	3.75
大学院・経済学(2012)								4.22	4.22
大学院・経済学(2013)								3.99	3.99
大学院・経済学(2014)								3.81	3.81
大学院・経済学(2015)								4.52	4.52

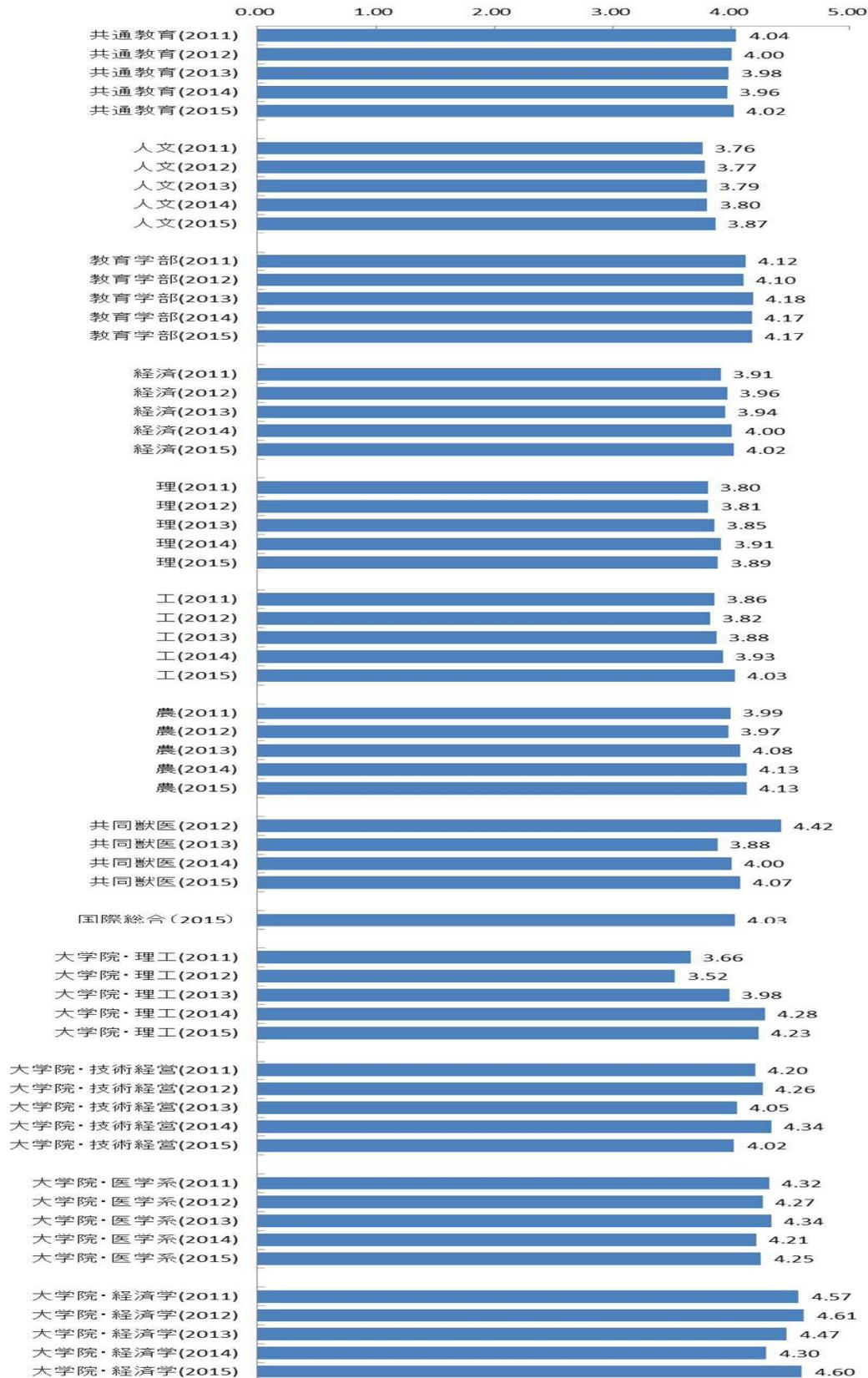
授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学農学部専門	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	3.98			4.52	4.10			3.37	4.04
共通教育(2012)	3.97			4.40	4.02				4.00
共通教育(2013)	3.98			3.89	4.03				3.98
共通教育(2014)	3.93			4.32	4.08				3.96
共通教育(2015)	4.00			4.37	4.07				4.02
人文(2011)	3.66	3.89	4.07						3.76
人文(2012)	3.70	3.96	3.97						3.77
人文(2013)	3.72	3.89	4.02				3.84		3.79
人文(2014)	3.73	3.90	3.97				3.93		3.80
人文(2015)	3.76	4.01	4.00				4.35		3.87
教育学部(2011)	4.07		4.29	4.31			4.17	4.29	4.12
教育学部(2012)	4.06		4.12	4.28			4.15	4.27	4.10
教育学部(2013)	4.15		4.22	4.37			4.19	4.32	4.18
教育学部(2014)	4.15		4.20	4.33			4.19		4.17
教育学部(2015)	4.16		4.20	4.42			4.15		4.17
経済(2011)	3.91								3.91
経済(2012)	3.96								3.96
経済(2013)	3.94								3.94
経済(2014)	4.00								4.00
経済(2015)	4.02								4.02
理(2011)	3.78		3.91	3.98					3.80
理(2012)	3.76		3.96	4.05				3.93	3.81
理(2013)	3.82		4.10	4.17				3.73	3.85
理(2014)	3.88		4.00	4.19					3.91
理(2015)	3.84		4.02	4.20					3.89
工(2011)	3.83		3.91	3.99					3.86
工(2012)	3.78		3.92	4.00					3.82
工(2013)	3.85		3.93	4.03				3.86	3.88
工(2014)	3.90		3.97	4.07				4.17	3.93
工(2015)	4.01		4.00	4.17					4.03
農(2011)	3.95			4.17					3.99
農(2012)	3.99			3.90					3.97
農(2013)	4.08			4.07					4.08
農(2014)	4.21			3.85					4.13
農(2015)	4.16			3.95					4.13
共同獣医(2012)	4.42								4.42
共同獣医(2013)	3.81			4.12					3.88
共同獣医(2014)	3.94			4.28					4.00
共同獣医(2015)	4.03			4.22					4.07
国際総合(2015)	4.03								4.03
大学院・理工(2011)	3.66		3.63	4.33					3.66
大学院・理工(2012)	3.52								3.52
大学院・理工(2013)	3.98								3.98
大学院・理工(2014)	4.28								4.28
大学院・理工(2015)	4.23								4.23
大学院・技術経営(2011)								4.20	4.20
大学院・技術経営(2012)								4.26	4.26
大学院・技術経営(2013)								4.05	4.05
大学院・技術経営(2014)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2015)								4.02	4.02
大学院・医学系(2011)	4.31		4.36					4.17	4.32
大学院・医学系(2012)								4.27	4.27
大学院・医学系(2013)								4.34	4.34
大学院・医学系(2014)	4.11		4.27					4.41	4.21
大学院・医学系(2015)	4.22		4.39						4.25
大学院・経済学(2011)								4.57	4.57
大学院・経済学(2012)								4.61	4.61
大学院・経済学(2013)								4.47	4.47
大学院・経済学(2014)								4.30	4.30
大学院・経済学(2015)								4.60	4.60

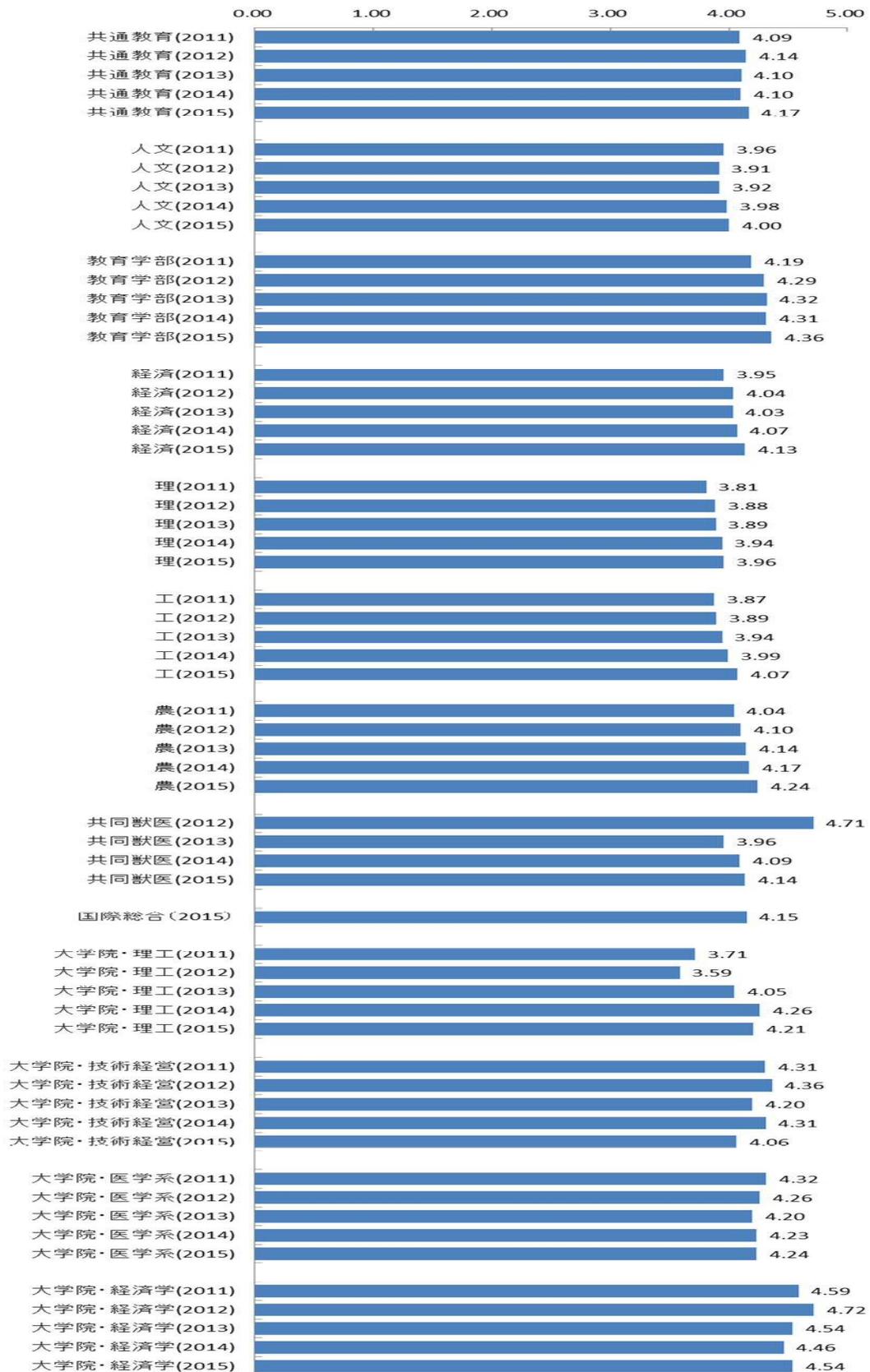
学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	4.03			4.36	4.23			3.25	4.09
共通教育(2012)	4.08			4.56	4.24				4.14
共通教育(2013)	4.07			4.47	4.20				4.10
共通教育(2014)	4.05			4.49	4.27				4.10
共通教育(2015)	4.13			4.49	4.28				4.17
人文(2011)	3.85	4.81	3.85						3.96
人文(2012)	3.84	4.08	4.11						3.91
人文(2013)	3.89	4.05	4.17				3.71		3.92
人文(2014)	3.91	4.09	4.12				4.36		3.98
人文(2015)	3.93	4.16	4.18				4.10		4.00
教育学部(2011)	4.14		4.36	4.40			4.22	4.39	4.19
教育学部(2012)	4.25		4.39	4.41			4.30	4.54	4.29
教育学部(2013)	4.30		4.42	4.54			4.29	4.37	4.32
教育学部(2014)	4.30		4.38	4.48			4.31		4.31
教育学部(2015)	4.35		4.40	4.52			4.33		4.36
経済(2011)	3.95								3.95
経済(2012)	4.04								4.04
経済(2013)	4.03								4.03
経済(2014)	4.07								4.07
経済(2015)	4.13								4.13
理(2011)	3.76		4.08	4.08					3.81
理(2012)	3.84		4.02	4.16				4.05	3.88
理(2013)	3.85		4.15	4.24				3.82	3.89
理(2014)	3.90		4.05	4.25					3.94
理(2015)	3.90		4.16	4.32					3.96
工(2011)	3.85		3.93	4.01					3.87
工(2012)	3.86		3.99	4.06					3.89
工(2013)	3.92		4.00	4.08				4.14	3.94
工(2014)	3.97		4.04	4.10				4.21	3.99
工(2015)	4.06		4.04	4.19					4.07
農(2011)	3.99			4.24					4.04
農(2012)	4.08			4.19					4.10
農(2013)	4.14			4.16					4.14
農(2014)	4.24			3.90					4.17
農(2015)	4.28			4.00					4.24
共同獣医(2012)	4.71								4.71
共同獣医(2013)	3.87			4.25					3.96
共同獣医(2014)	4.00			4.45					4.09
共同獣医(2015)	4.08			4.32					4.14
国際総合(2015)	4.15								4.15
大学院・理工(2011)	3.72		3.64	4.67					3.71
大学院・理工(2012)	3.59								3.59
大学院・理工(2013)	4.05								4.05
大学院・理工(2014)	4.26								4.26
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・技術経営(2011)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2012)								4.36	4.36
大学院・技術経営(2013)								4.20	4.20
大学院・技術経営(2014)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2015)								4.06	4.06
大学院・医学系(2011)	4.30		4.35					4.22	4.32
大学院・医学系(2012)								4.26	4.26
大学院・医学系(2013)								4.20	4.20
大学院・医学系(2014)	4.16		4.27					4.37	4.23
大学院・医学系(2015)	4.17		4.51						4.24
大学院・経済学(2011)								4.59	4.59
大学院・経済学(2012)								4.72	4.72
大学院・経済学(2013)								4.54	4.54
大学院・経済学(2014)								4.46	4.46
大学院・経済学(2015)								4.54	4.54

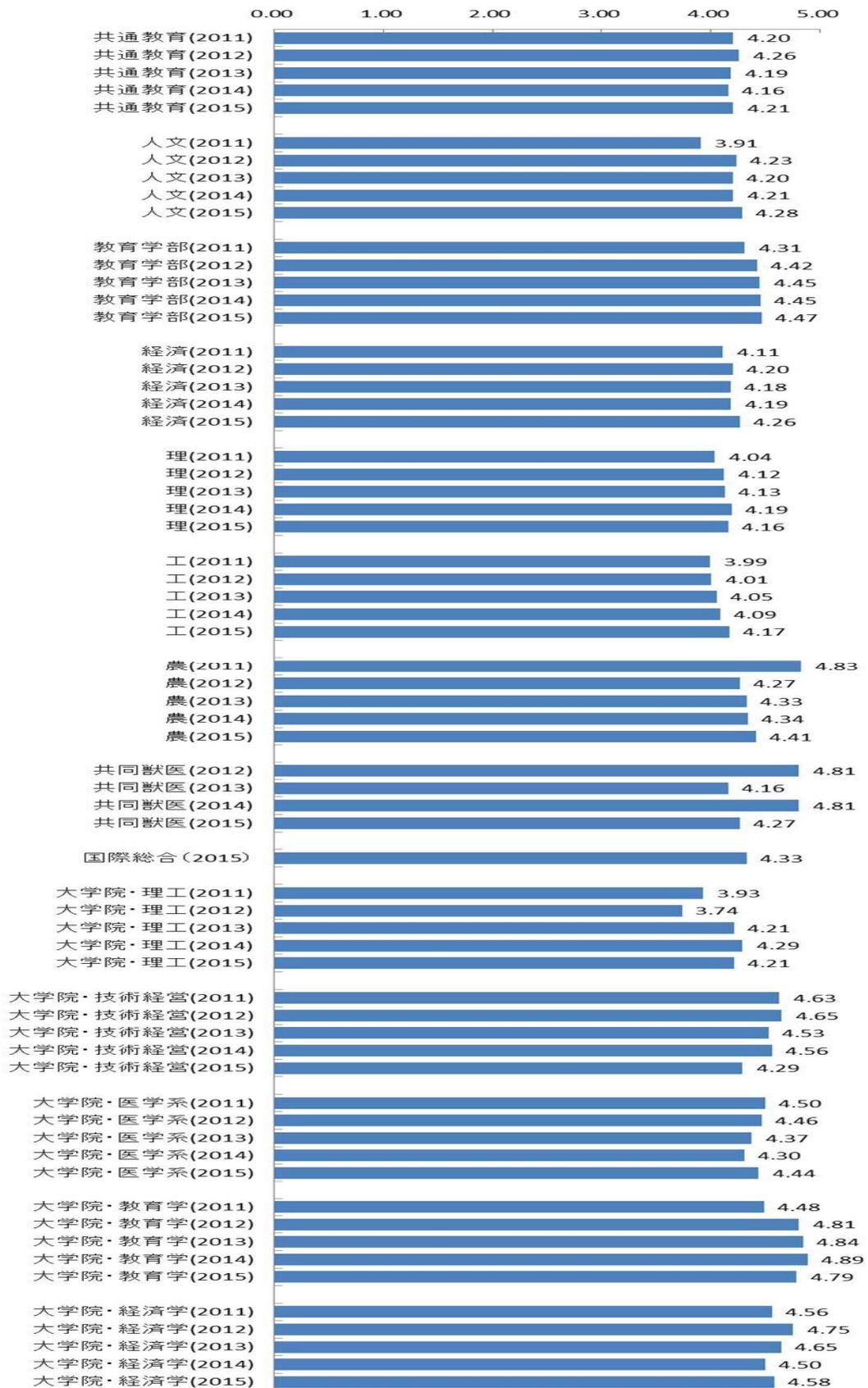
理解(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足									
	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	4.14			4.42	4.34			3.40	4.20
共通教育(2012)	4.20			4.64	4.36				4.26
共通教育(2013)	4.15			4.57	4.27				4.19
共通教育(2014)	4.12			4.56	4.34				4.16
共通教育(2015)	4.17			4.54	4.33				4.21
人文(2011)	4.03	4.32	3.20						3.91
人文(2012)	4.21	3.90	4.49						4.23
人文(2013)	4.25	4.52	4.56				3.24		4.20
人文(2014)	4.28	4.49	4.48				0.36		4.21
人文(2015)	4.26	4.58	4.46				3.84		4.28
教育学部(2011)	4.27		4.47	4.43			4.35	4.60	4.31
教育学部(2012)	4.37		4.55	4.54			4.44	4.70	4.42
教育学部(2013)	4.43		4.60	4.65			4.42	4.60	4.45
教育学部(2014)	4.43		4.58	4.63			4.45		4.45
教育学部(2015)	4.46		4.57	4.62			4.43		4.47
経済(2011)	4.11								4.11
経済(2012)	4.20								4.20
経済(2013)	4.18								4.18
経済(2014)	4.19								4.19
経済(2015)	4.26								4.26
理(2011)	4.02		4.17	4.16					4.04
理(2012)	4.09		4.18	4.36				4.21	4.12
理(2013)	4.11		4.24	4.44				3.95	4.13
理(2014)	4.17		4.23	4.41					4.19
理(2015)	4.11		4.26	4.48					4.16
工(2011)	3.97		4.06	4.13					3.99
工(2012)	3.98		4.11	4.14					4.01
工(2013)	4.04		4.09	4.15				4.57	4.05
工(2014)	4.06		4.15	4.20				4.47	4.09
工(2015)	4.16		4.11	4.26					4.17
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.25			4.33					4.27
農(2013)	4.32			4.36					4.33
農(2014)	4.41			4.08					4.34
農(2015)	4.45			4.21					4.41
共同獣医(2012)	4.81								4.81
共同獣医(2013)	4.06			4.50					4.16
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.22			4.42					4.27
国際総合(2015)	4.33								4.33
大学院・理工(2011)	3.94		3.85	5.00					3.93
大学院・理工(2012)	3.74								3.74
大学院・理工(2013)	4.21								4.21
大学院・理工(2014)	4.29								4.29
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・技術経営(2011)								4.63	4.63
大学院・技術経営(2012)								4.65	4.65
大学院・技術経営(2013)								4.53	4.53
大学院・技術経営(2014)								4.56	4.56
大学院・技術経営(2015)								4.29	4.29
大学院・医学系(2011)	4.52		4.43					4.72	4.50
大学院・医学系(2012)								4.46	4.46
大学院・医学系(2013)								4.37	4.37
大学院・医学系(2014)	4.49		3.86					4.51	4.30
大学院・医学系(2015)	4.39		4.62						4.44
大学院・教育学(2011)	4.55		4.37	5.00			4.48		4.48
大学院・教育学(2012)	4.76		4.93	5.00			4.79		4.81
大学院・教育学(2013)	4.79		4.92	5.00			4.87		4.84
大学院・教育学(2014)	4.91		4.81	4.00			4.92		4.89
大学院・教育学(2015)	4.75		4.82	4.77			4.84		4.79
大学院・経済学(2011)								4.56	4.56
大学院・経済学(2012)								4.75	4.75
大学院・経済学(2013)								4.65	4.65
大学院・経済学(2014)								4.50	4.50
大学院・経済学(2015)								4.58	4.58

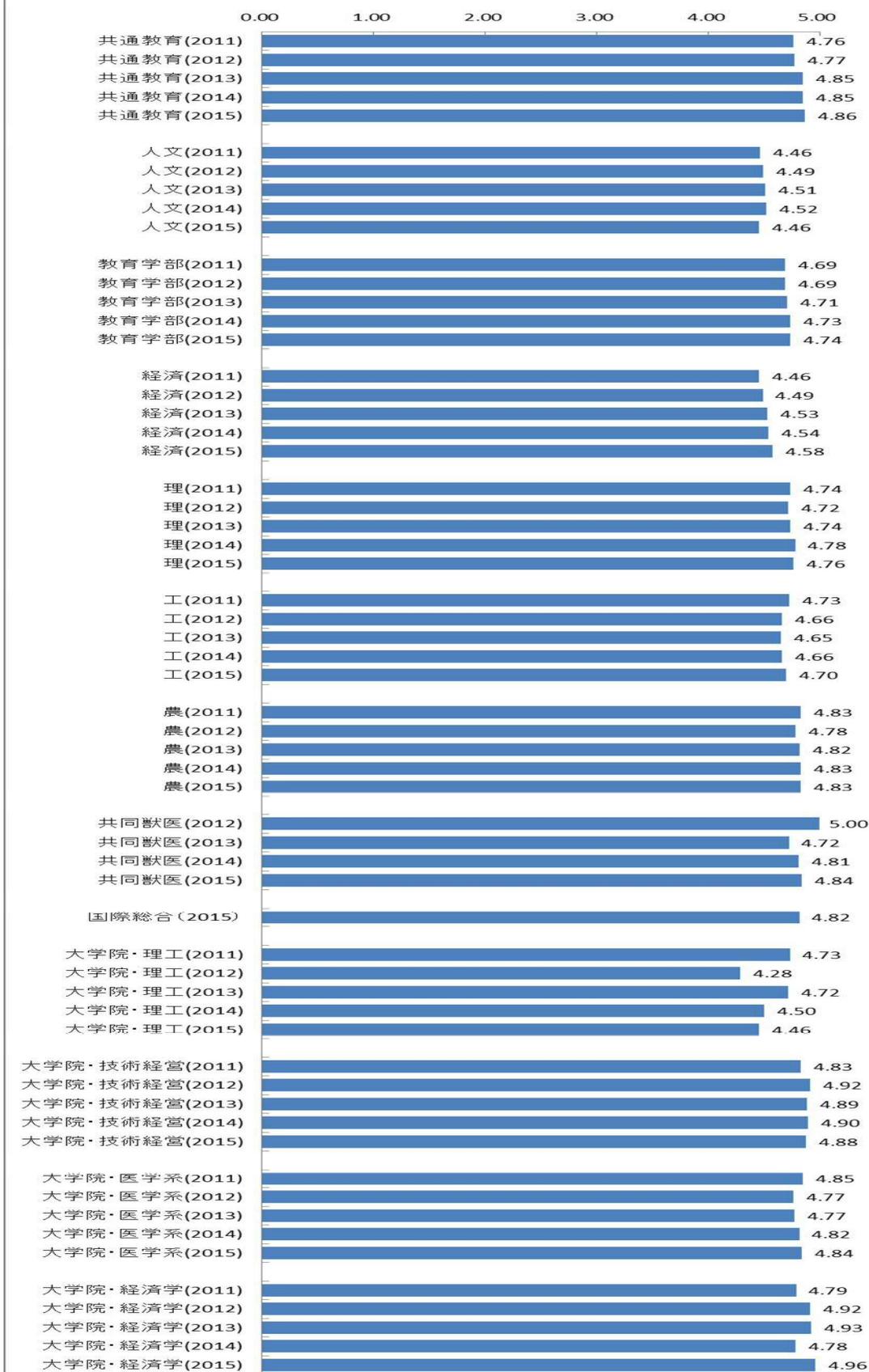
満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2011)	4.76			4.83	4.77			4.94	4.76
共通教育(2012)	4.77			4.81	4.78				4.77
共通教育(2013)	4.85			4.85	4.81				4.85
共通教育(2014)	4.86			4.88	4.78				4.85
共通教育(2015)	4.87			4.87	4.80				4.86
人文(2011)	4.50	4.43	4.34						4.46
人文(2012)	4.50	4.53	4.43						4.49
人文(2013)	4.49	4.51	4.41				4.79		4.51
人文(2014)	4.52	4.55	4.50				4.64		4.52
人文(2015)	4.59	4.55	4.56				3.09		4.46
教育学部(2011)	4.68		4.69	4.77			4.72	4.67	4.69
教育学部(2012)	4.67		4.61	4.82			4.70	4.78	4.69
教育学部(2013)	4.71		4.61	4.83			4.70	4.79	4.71
教育学部(2014)	4.73		4.63	4.78			4.76		4.73
教育学部(2015)	4.73		4.69	4.83			4.74		4.74
経済(2011)	4.46								4.46
経済(2012)	4.49								4.49
経済(2013)	4.53								4.53
経済(2014)	4.54								4.54
経済(2015)	4.58								4.58
理(2011)	4.71		4.86	4.92					4.74
理(2012)	4.69		4.87	4.91				4.71	4.72
理(2013)	4.72		4.80	4.91				4.70	4.74
理(2014)	4.75		4.86	4.95					4.78
理(2015)	4.75		4.82	4.90					4.76
工(2011)	4.71		4.76	4.84					4.73
工(2012)	4.65		4.67	4.79					4.66
工(2013)	4.63		4.67	4.79				4.57	4.65
工(2014)	4.64		4.65	4.78				4.51	4.66
工(2015)	4.69		4.73	4.80					4.70
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.74			4.97					4.78
農(2013)	4.78			4.98					4.82
農(2014)	4.80			4.93					4.83
農(2015)	4.82			4.94					4.83
共同獣医(2012)	5.00								5.00
共同獣医(2013)	4.65			4.96					4.72
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.82			4.92					4.84
国際総合(2015)	4.82								4.82
大学院・理工(2011)	4.72		4.84	4.67					4.73
大学院・理工(2012)	4.28								4.28
大学院・理工(2013)	4.72								4.72
大学院・理工(2014)	4.50								4.50
大学院・理工(2015)	4.46								4.46
大学院・技術経営(2011)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2012)								4.92	4.92
大学院・技術経営(2013)								4.89	4.89
大学院・技術経営(2014)								4.90	4.90
大学院・技術経営(2015)								4.88	4.88
大学院・医学系(2011)	4.84		4.85					4.95	4.85
大学院・医学系(2012)								4.77	4.77
大学院・医学系(2013)								4.77	4.77
大学院・医学系(2014)	4.85		4.71					4.91	4.82
大学院・医学系(2015)	4.82		4.92						4.84
大学院・経済学(2011)								4.79	4.79
大学院・経済学(2012)								4.92	4.92
大学院・経済学(2013)								4.93	4.93
大学院・経済学(2014)								4.78	4.78
大学院・経済学(2015)								4.96	4.96

出席(全体平均) 一経年変化一



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2015年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は86.6%、教員授業自己評価実施率は41.8%であった。学生授業評価実施率が5年ぶりに90%を下回り、改善充実が求められる。なお、回答数は合計51,210人であり、内訳は講義42,894人、実験・実習2,207人、語学6,109人であった。2013年度より、共通教育が大幅なカリキュラム改正が行われたため、新しい共通教育の科目系列・分野に応じて評価結果を再整理している。このため、2013年度を基点に新たな経年変化を見ていくこととしている。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

（1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「教養コア」「一般教養（人文教養）」「一般教養（社会教養）」「一般教養（自然教養）」「一般教養（学際的教養）」「専門基礎」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高いのは「理系基礎」が3.33、次に高かったのは、アクティブ・ラーニング科目である「基礎セミナー」が3.13、「山口と世界」が3.10である。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての分野で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。ほぼすべての分野で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてとQ6の板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについてはQ4と同様の計算方法

で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるが、平均値の計算には含めていない。ほぼすべての分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。

Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては、すべての分野で平均が 4.0 前後であり、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
教養コア	基礎セミナー(2013)	講義	4.88	3.04	4.46	4.39	4.33	4.35	4.34	4.15	4.35	4.45
教養コア	基礎セミナー(2014)	講義	4.86	3.17	4.36	4.29	4.20	4.25	4.30	4.06	4.30	4.35
教養コア	基礎セミナー(2015)	講義	4.90	3.13	4.44	4.41	4.35	4.29	4.37	4.15	4.37	4.46
教養コア	情報処理(2013)	講義	4.94	2.49	4.15	4.19	4.13	4.41	4.14	4.02	4.15	4.20
教養コア	情報処理(2014)	講義	4.92	2.57	4.12	4.13	4.11	4.36	4.13	3.96	4.11	4.14
教養コア	情報処理(2015)	講義	4.93	2.51	4.14	4.17	4.16	4.38	4.14	4.00	4.20	4.19
教養コア	運動健康科学(2013)	講義	4.87	2.38	4.38	4.37	4.35	4.25	4.21	4.03	4.15	4.22
教養コア	運動健康科学(2014)	講義	4.87	2.34	4.40	4.35	4.34	4.23	4.20	3.96	4.15	4.23
教養コア	運動健康科学(2015)	講義	4.87	2.47	4.44	4.45	4.42	4.29	4.21	4.03	4.28	4.31
教養コア	山口と世界(2013)	講義	4.91	3.05	4.43	4.32	4.22	4.24	4.34	4.24	4.35	4.36
教養コア	山口と世界(2014)	講義	4.91	3.06	4.40	4.28	4.22	4.29	4.33	4.19	4.37	4.32
教養コア	山口と世界(2015)	講義	4.90	3.10	4.45	4.33	4.24	4.43	4.41	4.28	4.45	4.37
教養コア	キャリア教育(2013)	講義	4.91	2.27	4.20	4.13	4.21	4.33	4.11	4.01	4.16	4.09
教養コア	キャリア教育(2014)	講義	4.91	2.49	4.22	4.16	4.17	4.35	4.07	4.00	4.18	4.11
教養コア	キャリア教育(2015)	講義	4.91	2.69	4.28	4.24	4.24	4.30	4.15	4.07	4.22	4.13
一般教養(人文教養)	哲学(2013)	講義	4.82	2.04	4.20	4.20	4.06	4.02	4.04	3.87	3.88	4.11
一般教養(人文教養)	哲学(2014)	講義	4.78	2.08	4.16	4.11	4.02	3.92	3.99	3.74	3.73	3.97
一般教養(人文教養)	哲学(2015)	講義	4.79	2.04	4.27	4.21	3.90	3.96	4.03	3.85	3.87	4.07
一般教養(人文教養)	歴史学(2013)	講義	4.87	1.96	3.94	4.12	4.14	4.04	3.88	3.77	3.77	3.86
一般教養(人文教養)	歴史学(2014)	講義	4.81	2.13	3.97	4.09	4.19	4.08	3.93	3.74	3.77	3.85
一般教養(人文教養)	歴史学(2015)	講義	4.85	2.12	3.95	4.10	4.19	4.20	3.94	3.77	3.77	3.88
一般教養(人文教養)	社会学(2013)	講義	4.90	2.61	4.06	4.19	4.04	4.16	3.98	3.92	3.97	4.06
一般教養(人文教養)	社会学(2014)	講義	4.90	2.53	3.99	4.10	4.06	4.16	3.97	3.82	3.92	3.98
一般教養(人文教養)	社会学(2015)	講義	4.91	2.33	4.09	4.19	4.12	4.21	3.99	3.87	4.01	4.01
一般教養(社会教養)	経済と法(2013)	講義	4.87	2.29	4.19	4.28	4.23	4.19	4.12	3.92	4.04	4.15
一般教養(社会教養)	経済と法(2014)	講義	4.88	2.28	4.12	4.19	4.16	4.13	4.09	3.84	3.95	4.05
一般教養(社会教養)	経済と法(2015)	講義	4.87	2.25	4.28	4.37	4.40	4.28	4.18	3.96	4.13	4.24
一般教養(自然教養)	自然科学(2013)	講義	4.88	2.21	4.03	4.02	4.11	4.11	3.83	3.84	3.87	3.93
一般教養(自然教養)	自然科学(2014)	講義	4.86	2.17	3.84	3.92	4.07	4.10	3.80	3.75	3.78	3.82
一般教養(自然教養)	自然科学(2014)	講義	4.88	2.10	3.82	3.91	4.03	4.10	3.76	3.77	3.80	3.81
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2013)	講義	4.89	2.23	4.42	4.43	4.31	4.38	4.25	4.08	4.24	4.37
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2014)	講義	4.86	2.30	4.45	4.45	4.33	4.43	4.31	4.06	4.25	4.38
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2015)	講義	4.87	2.38	4.44	4.40	4.29	4.40	4.29	4.08	4.28	4.36
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2013)	講義	4.87	2.22	4.27	4.27	4.19	4.17	4.13	3.96	4.12	4.18
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2014)	講義	4.85	2.36	4.33	4.30	4.21	4.31	4.13	3.99	4.16	4.23
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2015)	講義	4.88	2.35	4.27	4.29	4.16	4.27	4.12	4.01	4.18	4.19
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2013)	講義	4.88	2.00	4.23	4.26	4.29	4.39	4.00	4.01	4.17	4.24
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2014)	講義	4.88	2.07	4.21	4.24	4.22	4.36	4.01	4.02	4.17	4.23
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2015)	講義	4.87	2.03	4.30	4.32	4.25	4.44	4.05	4.03	4.23	4.30
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2013)	講義	4.90	2.72	4.09	4.11	4.11	4.30	4.31	3.89	3.93	3.99
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2014)	講義	4.91	3.07	4.25	4.30	4.35	4.40	4.35	4.01	4.12	4.13
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2015)	講義	4.90	2.96	4.32	4.38	4.40	4.48	4.44	4.06	4.18	4.20
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2013)	講義	4.91	2.58	4.06	4.06	4.13	4.28	3.86	3.87	3.94	3.98
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2014)	講義	4.88	2.75	3.88	4.01	4.08	4.24	3.83	3.86	3.98	3.91
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2015)	講義	4.86	2.87	4.17	4.18	4.18	4.30	3.96	4.00	4.13	4.07
一般教養(学際的教養)	食と生命(2013)	講義	4.86	2.47	4.35	4.33	4.27	4.40	4.04	4.06	4.23	4.28
一般教養(学際的教養)	食と生命(2014)	講義	4.84	2.51	4.32	4.31	4.23	4.38	3.98	3.98	4.17	4.22
一般教養(学際的教養)	食と生命(2015)	講義	4.83	2.35	4.41	4.43	4.27	4.47	4.04	4.07	4.30	4.31
専門基礎	理系基礎(2013)	講義	4.85	3.25	3.65	3.84	3.81	3.62	3.90	3.81	3.75	3.81
専門基礎	理系基礎(2014)	講義	4.82	3.40	3.68	3.84	3.80	3.66	3.89	3.74	3.76	3.80
専門基礎	理系基礎(2015)	講義	4.86	3.33	3.87	4.00	3.86	3.79	4.03	3.92	3.96	3.97

Q8のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を5,4,3,2,1とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で3.5を上回っており良好である。

Q9のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で3.5を上回っており良好であった。

最後にQ10のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのは基礎セミナー(4.46)であり、次に高かったのは山口と世界(4.37)、人間の発達と育成(4.36)と続く状況であった。

(2) 語学教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「日本語」の2つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。Q1の出席はすべて4.5前後を維持しており良好である。Q2の授業外学習は英語分野が日本語分野より高い数値となっている。Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2013)	語学	4.76	3.51	4.43	4.38	3.96	4.32	4.39	4.14	4.27	4.35
英語	英語(2014)	語学	4.82	3.35	4.41	4.31	4.22	4.25	4.29	4.02	4.23	4.26
英語	英語(2015)	語学	4.77	3.49	4.49	4.49	4.22	4.39	4.48	4.21	4.35	4.43
専門基礎	日本語(2013)	語学	4.42	3.28	4.70	4.69	4.57	4.75	4.70	4.51	4.61	4.64
専門基礎	日本語(2014)	語学	4.49	3.45	4.73	4.74	4.69	4.80	4.64	4.64	4.70	4.72
専門基礎	日本語(2015)	語学	4.40	3.24	4.76	4.78	4.69	4.82	4.59	4.52	4.71	4.73

(3) 外国語科目 (TOEIC 準備) の結果について

以下は外国語科目 (TOEIC 準備) の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。以下のような結果となっており、Q2の授業外学習が昨年度に比べ減少している。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2013)	語学(TOEIC準備)	4.96	3.25	4.30	4.10	4.30	4.01	3.99	3.74	4.05	4.03
英語	英語(2014)	語学(TOEIC準備)	4.93	3.26	4.28	4.06	4.43	3.99	4.00	3.72	4.08	4.01
英語	英語(2015)	語学(TOEIC準備)	4.95	3.02	4.27	4.19	4.38	3.78	3.72	3.70	4.08	4.02

(4) 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは、「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については4.49と非常に高い。Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
専門基礎	理系基礎(実験)(2013)	演習・実験実習	4.94	4.50	4.40	4.44	4.51	4.48	4.49	4.57	4.47	4.40	4.51
専門基礎	理系基礎(実験)(2014)	演習・実験実習	4.96	4.47	4.38	4.43	4.50	4.51	4.45	4.56	4.29	4.41	4.51
専門基礎	理系基礎(実験)(2015)	演習・実験実習	4.94	4.49	4.37	4.39	4.50	4.46	4.46	4.55	4.33	4.42	4.47

附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

系列	分野	授業科目
教養コア	基礎セミナー	基礎セミナー
	情報処理	情報リテラシー演習
		情報セキュリティ・モラル
	運動健康科学	運動健康科学
	山口と世界	山口と世界
	キャリア教育	知の広場
キャリア教育		
英語	英語	TOEIC準備
		Basic English
		English Speaking
		TOEIC認定400
		英語リーディング
		英語ライティング
		英語特別演習
		Comprehensive English
		TOEIC認定500 (TOEFL450)
		TOEIC認定600 (TOEFL500)
海外英語研修		
一般教養 (人文教養)	哲学	哲学
	歴史学	歴史学
	社会学	社会学
一般教養 (社会教養)	経済と法	経済と法1
		経済と法2
		経済と法3
一般教養 (自然教養)	自然科学	自然科学1
		自然科学2
一般教養 (学際的教養)	人間の発達と育成	人間の発達と育成1
		人間の発達と育成2
	文化の継承と創造	文化の継承と創造1
		文化の継承と創造2
	社会と医療	社会と医療
	科学技術と社会	科学技術と社会
	環境と人間	環境と人間
食と生命	食と生命	

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

系列	分野	授業科目	
専門基礎	理系基礎	数学Ⅰ	
		数学Ⅱ	
		物理学Ⅰ	
		物理学Ⅱ	
		化学Ⅰ	
		化学Ⅱ	
		生物学Ⅰ	
		生物学Ⅱ	
		地球科学Ⅰ	
		地球科学Ⅱ	
		物理学実験A	
		物理学実験B	
		化学実験A	
		化学実験B	
		生物学実験	
		地球科学実験	
		学部専門基礎	ドイツ語入門1
			ドイツ語入門2
	フランス語入門1		
	フランス語入門2		
	中国語入門1		
	中国語入門2		
	中国語初級1A		
	中国語初級1B		
	中国語初級2A		
	中国語初級2B		
	学部専門基礎	ハングル入門1	
		ハングル入門2	
ハングル初級1A			
ハングル初級1B			
ハングル初級2A			
ハングル初級2B			

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

系列	分野	授業科目
	学部専門基礎	医学のための統計学
		数学概論
		統計学
		医学のための物理学入門
		医学英語 1 a
		医学英語 1 b
		医学英語 2
		医療英語
		基礎医療英会話
		医療心理学
		医療環境論 1
		医療環境論 2
		体育・スポーツ実習
		日本語
	日本語ⅠB	
	日本語ⅡA	
	日本語ⅡB	
	日本語ⅢA	
	日本語ⅢB	
	日本語ⅣA	
	日本語ⅣB	
	日本語ⅤA	
	日本語ⅤB	
教職基礎	教職基礎	日本国憲法
		スポーツ運動実習

<参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（4種類）

共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~ 30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
6	<p>配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11～30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>

10	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12~ 30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 授業公開（ピアレビュー）

（1）ピアレビューウイーク

1) 概要

平成27年度の授業公開は、実施形態としては昨年度のを踏襲しつつ、その企画趣旨については若干の変更を加えた。因みに、昨年度の企画趣旨は、「分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として、通常の授業を互いに広く参観しあう」というものであった。これは、平成28年度開始予定の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資するべく、人文学部新コースカリキュラム等策定委員会と連携して企画されたものであったが、当初予定されていた新コース体制が、教職課程との連携に比重を置いたものへと練り直された結果、既存の教員組織に大幅な入れ替えが生じる必要が無くなったため、あえて「分野内・分野間で教育に対する共通理解を深める」という趣旨を前面に掲げる必要性も低減したというわけである。そのため、本年度の企画趣旨としては、「通常の授業を互いに広く参観しあうこと」というものになった。なお、実施形態については、昨年度同様2週間をピアレビューウイークとし、時期は、学期末で変則的になりがちな7月を避け、通常の授業内容が行われている6月に変更した。

- 1：ピアレビューウイーク期間中、人文学部所属教員(東アジア研究科所属2名を含む)は、原則として1つ以上の授業を2週にわたって公開する。ただし、学生への教育上の配慮から、1週目と2週目で授業科目を変えること、1週間のみを公開すること、時間指定(例えば10:20-10:50の30分間)をすることを認める。
- 2：ピアレビューウイーク期間中、人文学部所属教員は、授業を1つ以上参観する。
- 3：授業を参観した教員は、事後、「ピアレビュー参加シート(【図表1】)に示す書式で事前に授業担当者に配布する)」に必要事項を記入し、人文学部学務係に提出する。
- 4：人文学部FD部員は提出されたピアレビュー参加シートにより、授業参観者の所属コースや氏名等をチェックしたのち、コース毎にとりまとめてコース委員にシートを渡す。
- 5：コース委員は、ピアレビュー参加シートの記述内容により、必要に応じてコース会議等で意見交換の機会を設けたあと、シートを授業担当者に返却する。

公開の対象とした授業は【図表2】のとおりである。ピアレビューウイーク期間中、37名による38科目(昨年度は55科目)の57コマ(昨年度は90コマ)を公開した。いずれの数値も昨年度より減少した。

2) ピアレビュー結果

ピアレビュー参加結果は【図表3】のとおりである。授業に参加した教員数は延べ33名で、昨年度(41名)より減少した。

また1人で複数の授業を参観した教員が5名いる一方で、全体の約40%を占める18名の教員がいずれの公開授業も参観しないという結果に終わった。因みに、昨年度は全体の約30%を占める13名の教員が参観しておらず、ピアレビューに参加する教員と参加しない教員に二分されている傾向は続

いている。授業公開や教育改善に対して教員間に大きな意識差が存することをどう改善していくか、ピアレビューウイークの実施形態や企画趣旨のレベルから見直しをする必要がある。

次に、コース別の結果は【図表 4】に示すとおりである。昨年度に比べて、歴史学コース、社会学コース、欧米言語文学コースの参加者が減少した。

また今年度、他コースの授業を参観した者は延べ人数で 7 名であった。昨年度は 22 名という数字であったことを踏まえると、やはり、ここにも消極的な傾向を指摘せざるを得ない。今後、どうしたらピアレビューが魅力的な活動として受け入れられるか、検討していく必要があるだろう。

【図表 1】ピアレビュー参加シート

ピアレビュー参加シート	
	提出先：人文学部学務係
提出者氏名 []
見学した授業科目名 []
授業見学の日時 [平成 27 年 6 月	日 () 時限]
授業担当者 [先 生]
見学授業に対する感想・意見	

【図表 2】平成 27 年度人文学部ピアレビューウィーク開講授業一覧

	1・2 限	3・4 限	5・6 限	7・8 限	9・10 限
6/15(月)			[日中]日本語学 I	[歴]古文書・古記録Ⅲ [社]社会調査データ解析法	[哲]中国思想史講読
6/16(火)	[哲]宗教学講読	[欧米]現代英米語概説 I	[歴]東洋史特殊講義	[社]コミュニティ論	[歴]古文書・古記録 I [歴]西洋史講読 [社]社会心理学演習 [日中]日本文学講読
6/17(水)	[歴]考古学演習 (基礎)	[社]現代社会論 [無]情報資源組織演習			
6/18(木)		[哲]哲学概論Ⅱ [哲]西洋倫理学講読 [歴]考古学特殊講義 [欧米]ヨーロッパ文学入門 [欧米]言語類型論特殊講義	[日中]日本語史 [欧米]フランス語初級 1B	[歴]古文書・古記録Ⅱ [日中]日本文学講読	
6/19(金)		[歴]日本史料講読 [歴]西洋史概論Ⅲ [日中]日本文学史Ⅲ [欧米]英語学講読 [欧米]ヨーロッパ言語概説	[社]社会心理学概論 I	[日中]中国語学演習	[哲]美学・美術史演 習(3・4年)
6/22(月)				[哲]美学・美術史演習 [歴]古文書・古記録Ⅲ [社]社会調査データ解析法	
6/23(火)	[哲]宗教学講読 [日中]日本文学特 殊講義	[欧米]現代英米語概説 I	[社]比較社会文化論 I	[社]コミュニティ論	[歴]西洋史講読
6/24(水)	[歴]考古学演習 (基礎)				
6/25(木)		[哲]哲学概論Ⅱ [哲]西洋倫理学講読 [歴]考古学特殊講義 [欧米]ヨーロッパ文学入門 [欧米]言語類型論特殊講義	[哲]日本思想史演習(3・4 年) [哲]日本思想史演習(3・4 年) [日中]日本語史	[歴]古文書・古記録Ⅱ [日中]日本文学講読 [欧米]英文学史 I	
6/26(金)		[歴]日本史料講読 [日中]日本文学史Ⅲ [欧米]英語学講読	[社]社会心理学概論 I		

注：授業科目名冒頭の略号は、当該授業科目が、平成 28 年度以降の新体制において属する見込みの新コースを示す。
すなわち、[哲]＝哲学コース [歴]＝歴史学コース [社]＝社会学コース [欧米]＝欧米言語文学コース [日中]＝
日本・中国言語文学コースの 5 コースである。なお [無] は無所属の教員をあらわす。

【図表 3】平成 27 年度人文学部ピアレビューウィーク参加結果

参観者	参観者所属コース	参観した授業科目名	参観日	時限	授業者所属コース
1	哲学	英語学講読	6/19	3・4	欧米言語文学
2	哲学	美学・美術史演習	6/19	9・10	哲学
3	哲学	美学・美術史演習	6/19	9・10	哲学
		西洋史倫理学講読	6/25	3・4	哲学
4	哲学	中国思想史講読	6/15	9・10	哲学
5	哲学	美学・美術史演習	6/22	7・8	哲学
6	哲学	美学・美術史演習	6/19	9・10	哲学
		美学・美術史演習	6/22	7・8	哲学
		日本思想史演習	6/25	5・6	哲学
		日本思想史演習	6/25	5・6	哲学
7	歴史学	哲学概論Ⅱ	6/18	3・4	哲学
8	歴史学	古文書・古記録Ⅰ	6/23	9・10	歴史学
9	歴史学	古文書・古記録Ⅲ	6/22	7・8	歴史学
10	歴史学	日本文学史Ⅲ	6/26	3・4	日本・中国言語文学
11	歴史学	考古学特殊講義	6/25	3・4	歴史学
12	社会学	社会心理学演習	6/16	9・10	社会学
13	社会学	コミュニティ論	6/23	7・8	社会学
14	社会学	現代社会論	6/17	3・4	社会学
15	日本・中国言語文学	東洋史特殊講義	6/16	7・8	歴史学
16	日本・中国言語文学	日本文学講読	6/16	9・10	日本・中国言語文学
17	日本・中国言語文学	日本語史	6/18	5・6	日本・中国言語文学
18	日本・中国言語文学	日本文学史Ⅲ	6/26	3・4	日本・中国言語文学
19	日本・中国言語文学	日本文学講読	6/25	7・8	日本・中国言語文学
		日本文学史Ⅲ	6/26	3・4	日本・中国言語文学
20	欧米言語文学	哲学概論Ⅱ	6/18	3・4	哲学
		英文学史Ⅰ	6/25	7・8	欧米言語文学
21	欧米言語文学	日本文学特殊講義	6/23	1・2	日本・中国言語文学
22	欧米言語文学	哲学概論Ⅱ	6/18	3・4	哲学
		英文学史Ⅰ	6/25	7・8	欧米言語文学
23	欧米言語文学	英語学講読	6/26	3・4	欧米言語文学
24	欧米言語文学	言語類型論特殊講義	6/18	3・4	欧米言語文学
25	欧米言語文学	英文学史Ⅰ	6/25	7・8	欧米言語文学
26	無所属	比較社会文化論	6/23	56	社会学

【図表 4】平成 27 年度人文学部ピアレビューウイーク参加結果 コース別内訳

参観者所属コース	授業参観者延べ人数	授業参観者実人数	昨年度参観者実人数
哲学	10名	6名 (75%)	6名 (75%)
歴史学	5名	5名 (50%)	7名 (70%)
社会学	3名	3名 (60%)	4名 (67%)
日本・中国言語文学	6名	5名 (50%)	5名 (50%)
欧米言語文学	8名	6名 (60%)	10名 (90%)
無所属	1名	1名 (100%)	1名 (100%)

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

1. 大学教育機構との共催による研修会

(1) 教育改善 F D 研修会

1. 研修名： 「大学教育再生加速プログラム (YU-AP) に関わる AL ポイント認定制度と学修成果測定の概要の紹介」
2. 日 時： 平成 27 年 11 月 18 日(水)14:30~15:30
3. 場 所： 人文・理学部大会議室 (吉田キャンパス 人文・理学部管理棟 4 階)
4. 講 師： 林 徹(大学教育センター)
5. 参加者： 43 名(アンケート回収 29 枚回収)
6. 内 容：

教育改善 F D 研修会では、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明および意見交換が行われた。

YU-AP 事業は、既存の教育の内部質保証システムに加えてティーチングからラーニングへの転換 (教育のパラダイムシフト) のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を目指して行われている。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

また、昨年度実施した全学アンケートの結果から、本学の教員は AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ないという現状が報告された。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設け、AL 実践の動機付けを進めていきたいとの方針が示された。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では共通教育を中心に AL ポイント



表 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	10.3%
良かった	13	44.8%
どちらとも言えない	10	34.5%
あまり良くなかった	2	6.9%
良くなかった	1	3.4%
無回答	0	0.0%
合計	29	100.0%

を導入しているが、今後は専門教育にも広めていきたいという方向性が示された。データ分析の結果、ALポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FDも実施してゆく予定である。

次に学習成果の評価の構図および可視化について説明があった。一般的な教育評価方法についての説明の後、学修到達度調査として本学で導入されているPROG (Progress Report on Generic Skills) テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入されたCoBCusについても説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1. PBLとアクティブ・ラーニングの違いや関係性がよく分からないので説明して欲しい。

A1. PBLはアクティブ・ラーニングの一つの方法と考えていただきたい。ただし、アクティブ・ラーニングの定義は、京都大学の溝上教授の定義等があるが、まだ確定的なものはない。

Q2. 人文学部は、リテラシーは高いが、コンピテンシーが低いという説明があったが、なぜか解説して欲しい。また、PROGテストは基本的に自己評価で実施されているのか。

A2. 人文学部と場合、文献研究などを通して読解力などのリテラシー能力がかなり育成できていると思うが、対人力、統率力のようなコンピテンシー能力の育成については、人文学部の教育内容がセルフワークを基本としているものが多いため、低いのではないかと思う。また、PROGテストは対人力などに優れたハイパフォーマンス（コンピテンシー能力が高い）な30代の社会人の行動特性の分析から得たデータを基に問題が作成されている。試験方法自体は自己評価である。

Q3. アクティブ・ラーニングやALポイントなどは単なるエビデンスに過ぎないと考えている。学生はもともと自ら成長する芽を潜在的に持っている。教員がアクティブであれば、学生はそれに触発されて熱心に学修に取り組むのではないか。つまり、大学教員は学生を意欲的に学修に取り組ませる「触媒」としての役割を果たせばよいのであって、あえてアクティブ・ラーニングでなく講義型の授業でも、学生は十分アクティブになると考えているが、それに対して、どう思うか。その文脈からいえば、シラバスにあえてALポイントを入れる必要はないのではないか。

A3. 先生の言っていることは理解できます。先生の熱意がその授業で伝われば一番いいと思います。それで学生たちが学びたくなればよく、アクティブ・ラーニングはそれぞれの授業の形式に沿って導入していただければよいと考えています。また、シラバスにALポイントを入れるのはそれぞれの授業コマ毎にどのようなAL活動が行われているかを見るためであり、ALポイントが高いからといって、短絡的にその授業が優れた授業であるとは考えていません。

研修会後のアンケートでは、「シラバスにALポイントが記載した箇所が入ったために、毎回の授業内容が一覧できずにかえって見づらくなっている。ぜひ、改善して欲しい」、「分かりやすい授業を目指しているのに、講師の話や資料にカタカナ用語が多く理解できない点が多かった（コンピテンシー、リテラシー、ルーブリックなど）」、「ALは“学生の主体性を促す、”というより、“学生の主体性を促していることを外部にアピールしている、”という意味合いが強いのではないか。以前からそういう疑念を抱いていたが、今回の研修会の話聞いても、その疑念は晴れなかった」、「講師の話で学生の学びが多様化していると言っているが、画一的な観点から学修成果を可視化しようとしていることが気になった」、「ALは欧米から導入された新しい教育方法だと講師が説明されていたが、明治末期から大正期にかけての新教育運動（木下竹次ら）を踏まえて講師は話をすべきである。きちんと歴史研究をしてから話しをすべきかと思う」など、ALに対して否定的な意見が寄せられた。一方で、「アクティブ・ラーニングについてそれなりに理解できた。」という回答もあった。また、今後希望する研修会については、「ALの事例紹介」、「学内外のALの具体的な例を紹介頂きたい」という回答があった。

(2) 講師派遣型FD研修会

1. 研修名： 「最近の大学生が抱える悩みと対応について」
2. 日 時： 平成 27 年 12 月 16 日(水) 14:30～15:15
3. 場 所： 人文・理学部大会議室 (吉田キャンパス 人文・理学部管理棟 4 階)
4. 講 師： 今井 佳子 (学生相談所カウンセラー：臨床心理士)
5. 参加者： 40 名(アンケート回収 20 枚回収)
6. 内 容：

最初に人文学部の FD コーディネータより今回の研修開催の趣旨と講師紹介があった。

今井カウンセラーからは、最初に 2003 年度と 2015 年度の相談者件数の推移を比較しながら、最近、新規相談件数が増加している傾向が示された。相談内容としては以下の 4 つのグループに分かれることが明らかにされた。相談回数が 1 回程度の第 1 グループは、「履修方法」や「単位修得方法」に関する相談。第 2 グループは、2～5 回程度の相談回数で、「対人関係・友人関係・恋愛関係・研究室の人間関係・将来設計」に関する悩み相談。第 3 グループは、6～12 回程度の相談回数で、「自分の性格」に関する悩み相談。第 4 グループは長期の相談期間が必要なケースで自分の「精神的不調」に対する悩みがある。このケースの場合には、保健管理センター・学部教職員等の連携・協力が不可欠である。ただし、相談回数が少ない学生 (第 1・2 グループのケース) でも心に深い悩みを抱えている場合もあるために丁寧に対応している。また、長期間の相談対応が必要な学生には在学中の 4 年間または 6 年間の対応だけでなく、卒業後も相談対応しているケースもある。



設問 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	25.0%
良かった	14	70.0%
どちらとも言えない	1	5.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%

2003 年度には精神科や神経科に通院し、薬物療法を受けているような学生が比較的多かったが、2015 年度の相談内容には、多種多様な相談が多くなってきている。特に山口大学だけでなく全国の大学でみられる傾向であるが、「自分の悩みが分からない・悩みが見えない」状態で相談に来る学生が増えている。何を悩んでいるのかを考えないで漠然とした不安を抱えて相談に来る学生が多い。そのため、雑談のような相談を通して、その学生は何のために相談所を必要としているのかを見極めながら相談を行っている。このような学生は、「外に出られない」、「変な人と他人に思われぬか」という漠然とした不安を抱えているケースが多い。また、人文学部の場合には、「コース分け」・「研究室配属」・「教育実習」・「卒論」などのきっかけで、初めてその学生の問題点が明らかになるようなケースが増えてきている。

一方、最近の学生の特徴として「しゃべらない」または「しゃべることができない」場面寡黙の学生も増えている。この原因としては、グループ学習や演習のようなアクティブ・ラーニングの機会が大学で増えてきたため顕在化してきていると考えられる。また、小中学校時の不登校やいじめの経験を持ち、過去のつらさを抱えている学生も増えている。自分のことを発達障害やアダルトチルドレンではないかと自分のことを疑い、相談に来るケースもある。これは何か上手くいかないことがあると、その原因として自分で発達障害やアダルトチルドレンではないかと勝手に考えて相談に来る学生がいる。また、友人がいないということで孤立感を抱えている学生や一人で食事としているところや一人

で歩いているところを人に見られたくないという山大学生も多い。このように非常に友達や保護者を意識した（気にする）言動が多い。

以上、最近の大学生が抱える悩みや実態について説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1. 以前は相談所で合宿や心理ゼミなどを実施して、友達作りを図っていたが、最近はそのようなことを実施されているのか。

A1. 学生相談所の横に「リビング」を2室確保し、サークル的な対応している。そこで、人間関係を作る経験を促すようにしている。

Q2. 友達作りに役立つような共通教育の科目はあるのか。また学生からそのような科目はあるのか聴いているか。

A2. 理系の学部学科の場合には、学科ごとに授業を受講するケースが多いが、人文学部の場合、学科単位で授業を受けるようなケースが少ないため、一人で授業を受けていることが多い。そのため、友達ができないと人文学部の学生はよく言っている。そのため、孤立し、コース分け以降も上手に友達ができない学生が多いように感じている。このため、分かっている、あえて他の人に聞いてみるなどのきっかけづくりをしたかどうかといったアドバイスはしている。

Q3. マイナス思考の学生が多いように感じているが、発想を変えさせるような手立ては何かないか。

A3. できている部分をみればいいのだが、とかくできないことに目が向きがちである。そこで、うまくいかなかったことに対して、このように考え方を換えればうまくいくのでないかということをお勧めすることがカウンセリングだと考えています。このようなことは大変難しいことですが、根気よくやっているというのが現状です。

研修会後のアンケートでは、「実績を踏まえた熱意溢れるお話しで感銘を受けた」、「講師の先生の具体的な経験に基づく話に惹きつけられた」、「学生との接し方について考えさせられることが多かった」、「漠然として考えていた学生の動向や気持ちがよくわかった」、「十分リアリティのある話しが聞けてよかった」等の講師の話の内容に対する十分満足する声が多数あった。その一方で、学生相談所のスタンスに対して「学生と保護者との関係改善を中心に対応した方がよい」、「教員と学生の間に学生相談所が入ると、教員と学生の人間関係が形成しにくくなる」といった意見もあった。

また、今後希望する研修会については、「精神科医や心療内科医の専門的な話が聞ける研修」、「学生の悩みやそれに対する教員の対応の仕方に関する研修」、「講義系以外の授業の進行方法に関する研修」という回答があった。

2. 人文学部FD部会主催による研修会

1. 研修名： 「入門講義に関するFD研修会」
2. 日時： 平成28年3月19日(土) 15:00~15:45
3. 場所： 人文・理学部大会議室（吉田キャンパス 人文・理学部管理棟4階）
4. 報告者： 村上 龍（人文学部 「哲学」担当マネージャー）
田中 晋作（人文学部 「歴史学」担当マネージャー）
坪郷 英彦（人文学部 「社会学」担当マネージャー）
エムデ・フランツ（人文学部 「文学」担当マネージャー）
和田 学（人文学部 「言語学」担当マネージャー）
5. 参加者： 40名(アンケート回収20枚回収)

6. 内 容：

これまで人文学部 FD 部会では、平成 25 年度より新たに導入された入門講義を対象として独自の授業アンケートを実施してきた。昨年度(平成 26 年度)のアンケートを分析した FD 報告書には、「(記述式アンケートの) 中には厳しい意見もあり、分野間の難易度や成績評価に関して今後検討する必要があると思われる。否定的な意見こそが学部の財産であり、それを汲み上げる姿勢が FD の本来の姿であろう」との提言があり、それに応えるべく、「入門講義に関する FD 研修会」を開催するに至った。

昨年度までは、入門講義についてのアンケートを学部が独自に作成し、後期に開設される初習外国語の授業時に行っていた。但し、このアンケートは、成績評価やコース振り分け結果が出た段階で実施されるものであったため、多少、バイアスのかかったものとなっている懸念もあった。その反省を踏まえ、今年度は通常の学生授業評価を利用するかたちでアンケートを集計することにした。すなわち、入門講義の最終授業日に実施する授業評価アンケートの自由記述欄を FD 部会が収集し、検討材料としたのである(具体的な内容については、第 3 節「2. 学生授業アンケート(オムニバス授業)」の項を参照)。また、研修会へ向けての事前準備として、各入門講義マネージャーにアンケートを依頼した。アンケートの質問内容は、①受講者数、失格者数、未受験者数について、②評価方法について、③再履修者が多人数になってしまった場合の対策について、④授業をマネジメントするうえで、何らかの共通テーマを設定しているか、⑤学生の自由記述アンケートを読んだ感想、⑥入門講義の在り方について、という 6 項目となる。

研修会当日は、まず、各入門講義マネージャーを対象としたアンケートの結果の報告を各質問項目毎に行った。各マネージャーからは、補足説明をしてもらった。次いで、フロア参加者から感想を募り、各マネージャーを交えて意見交換を行った。フロア参加者からは、入門講義という授業の位置づけについての再確認があり、本来は“教養のため”であるべき授業が、いつの間にか“コース選択のため”の授業、“コース教員の顔見せ”の授業となってしまうのではないかという懸念が示された。また、入門講義として設定している 5 分野が共通教育科目と専門科目とに分かれていることや、科目としての 5 分野と学部改組によって再編成された 5 コースとの間に一部不対応が生じていることなど、今後の検討課題も示された。

研修会後のアンケートでは、「入口を終わった感じ」、「他分野の状況を知ることができて有意義だった」、「成績の出し方の参考にできた」、「授業開設の目的は何かという根本的問題が炙り出されたのは良かった」、「新コース体制では 5 つに絞られるので、今回の研修会のように学部全体で情報共有やコース間調整がやり易くなっていくのでは、という期待が持てた」などの意見があった。また、今後実施する人文学部独自の FD 研修会に求める内容として、「各教員間がざっくばらんに意見を交わせる場の提供」、「学部としての方向性を説明したり、議論できたりするもの」、「基礎セミナーや必読名著など、新コース・カリキュラム開始後の初年度教育について」、「新コース・カリキュラム開始後のリテラシー科目や PBL 授業について」などの提案があった。

第 3 節 教育改善に関する活動

1. 基礎セミナー部会の開催

日時：平成 26 年 2 月 8 日(月) 10:30~12:00

場所：人文・理学部管理棟 4 階 第 1 小会議室

出席者：石田・森野(FD)、池園(教務委員)、脇條・藤川・谷部・真木・アラム・フィリップス(平成 28 年度基礎セミナー担当者)

1) 経緯と趣旨

1 年次前期の全人文学部生を対象として開講する基礎セミナーは、4 年間の学士課程教育の端緒として学生にとってはきわめて重要な授業でありながら、専門とは異なる内容の授業を展開しなければならないことから、教員にとっては少なからぬ負担となってきた。また、当該授業は、当初、日本語論述力の養成を主たる目標として開設されたものであったが、平成 19 年度以降、情報処理担当教員も授業担当に加わった結果、情報処理技術の基礎修得を授業内容に含めることも行われるようになった。さらに近年では、留学案内やキャリア教育、ポートフォリオの記入といったメニューも基礎セミナー内で実施することが求められるようになり、授業の目標・内容が拡散の傾向を強めている。担当者間でおおよそのすり合わせをはかる程度の統一は試みられてきたものの、授業内容・評価基準ともに授業担当者の裁量に委ねられているのが実情であり、授業アンケートにおいて授業内容・評価基準の不統一に対する学生の不満の声は大きかった。加えて、平成 28 年度からは新コース体制が施行されることとなり、その周知徹底の機会として 1 年次前期の開講科目である基礎セミナーを活用できないかという声も出始めた。こういった現状に鑑み、今年度は基礎セミナーの実施形態や運用方針の見直しに取り組むこととなった。その結果、平成 28 年度からは、第 1 クォーターで学生の間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第 2 クォーターで各コースにおける履修のあり方などに関する合同のガイダンスを行うことになった。人文学部に入学してきた学生が大学という場に適応し、大学での学びについて各自の認識を深め、大学における学びのさまざまな方法を身につけることを目的とした授業として、基礎セミナーが再定義されることとなったのである。このような経緯で新装となった基礎セミナーに対し、FD 部会では、その授業概要・授業目標・授業計画のすり合わせ、及び合同授業の企画立案を行った。

2) 授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせ

従来の授業概要・一般目標・到達目標を下敷きとしつつ、改定作業を行った。

【図表 5】 人文学部基礎セミナー 授業概要・一般目標・到達目標

授業概要	人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生生活に馴染み、大学を勉学の場として活用していけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。
一般目標	(1) 自らの大学生生活の目的について、明確な意識をもつことができる。 (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。 (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。 (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。
到達目標	知識・理解の観点：自らの人生の展望をもち、そのなかでの大学生生活の位置づけを理解している。 思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。 関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。 態度の観点：大学生生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。 技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

上記目標に沿って、28年度基礎セミナー担当者にシラバス作成について、統一を図るようお願いした。

3) 合同授業

(1) 留学案内 第8回の授業として実施予定。「人文学部生のための留学案内」(国際交流部会と連携)

(2) ポートフォリオとキャリア教育 第9回の授業として実施予定。「人文学部生のためのキャリア教育」(学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携)

(3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10~14回の授業として実施予定。「学際的視野を持つために(各コースの紹介と履修モデル)」(各コースに委託)

(4) 総括 第15回目の授業として実施予定。「ポートフォリオの返却・レポート課題アンケートの回収・授業アンケートの実施」(FD部会)

2. 学生授業アンケート(オムニバス授業)

1) 経緯と趣旨

25年度よりスタートした新しい共通教育、及び平成28年度開始予定の人文学部の学科・コース改編に関係して、人文学部では1年生を対象に分野(哲学・歴史学・社会学・文学・言語学)の入門講義が始まった。人文社会学科・言語文化学科合同の約200人の大規模授業で、クォーター制の、毎回授業担当教員が変わるオムニバス形式の授業である。これまでFD部会では、この新しい試みの授業に関して、適性に授業が行われているか、どのような問題点があるかについて把握するべく、アンケートを実施してきた。

26年度に実施したアンケートでは、自由記述欄にいくつかの厳しい意見が散見された。そういった状況を踏まえ、人文学部FD部会では「入門講義に関するFD研修会」を開催し、自らを省みる機会を設けた(第2節「2. 人文学部FD部会主催による研修会」の項を参照)。

27年度も入門講義に関する授業アンケートを実施し、特に自由記述欄に注目することにした。以下に掲げるのは、その自由記述欄に書かれていた意見である。これらは、「入門講義に関する研修会」に先立って学部全教員に開示し、検討材料とした。なお、アンケートを回収できたのは哲学・社会学・文学の3分野であった。

【H27「哲学」アンケート：自由記述欄】

《肯定的意見》

- ・哲学に興味を持てた。
- ・いろいろと小難しい講義内容もあったが、全体的に興味深く、楽しかった。
- ・このような学問と出会えて本当に幸せだ。もっともっと哲学をしていきたい。
- ・自分の知らない分野だからこそ、新たに知ることができたことも多くあって面白かった。
- ・とても interesting な授業だった。
- ・楽しい。
- ・とても楽しかった。
- ・哲学の先生は変わった人ばかりだなと思った。
- ・難しい単語や理屈が多く、理解しきれなかったところもあったが、様々な価値観や分野の話が聞けて面白かった。
- ・自分は言語文化学科に所属しているが、哲学に関してもっと学んでいきたいと考えている。
- ・哲学思想コースに進むつもりではなかったが、日本思想に触れて興味がわいた。

- ・哲学に大変惹かれたが、言語文化学科なので諦める。
- ・仏や神の先生と、牛や豚の先生の授業は面白かった。先生は書かない自由を選択肢として示したが、私は書く自由を選択することにする。
- ・特に夫婦と恋人との違いを考える授業は考えさせられることが多々あった。
- ・普段の生活では考えないようなことを考えることができて良かった。
- ・豚の話が印象に残った。
- ・自ら歩く。

《否定的意見》

- ・主に人文社会科学のコース選択に関わる内容だったので、言語文化学科の私は、直接どうこうという話ではなかった。
- ・授業を聞いてもあんまり理解できなかったように思う。
- ・よく分からなかった。
- ・もっと面白い題材を！
- ・週替わりで様々な先生が授業を行うのが新鮮だった。でも、内容の濃淡は、やはり差があった。
- ・先生によってはマイクパフォーマンスが悪く、声が聴き取れなかった。
- ・話し声が小さい先生たちをどうにかしてほしい。
- ・入門講義のテキストが見にくかった。
- ・講義室が大変暑い。

【H27「社会学」アンケート：自由記述欄】

《肯定的意見》

- ・社会学の概要が分かり、ためになった。
- ・様々な専門分野について知ることができて良かった。
- ・社会学のネタは日々の生活の中に転がっているのだと思った。
- ・社会学について興味がわいた。
- ・授業毎に様々なトピックを取り上げ、本当に面白い授業だった。
- ・楽しかった。
- ・やや、ためになった。
- ・社会学は現代の社会を考えるだけかと思っていたが、民俗学のように地域の伝承や祭りを学ぶこともあると知り、とても興味がわいた。
- ・社会学は少し難しいところもあったが、興味深い分野だと思った。これから更に学んでいきたい。
- ・直接、コース選択には関係なかったが、身近に起こっている問題を考えるヒントにはなったかと思う。
- ・授業は明瞭で分かりやすく、いろいろ考えさせられて、面白かったと思う。
- ・社会犯罪学の話にとっても興味がわいた。

《否定的意見》

- ・オムニバスは良くない。
- ・クラスを二つに分けたほうが良いと思う。
- ・自由度の高い学問だけあって、専攻するには余程の意志が必要だろう。
- ・事実を淡々と述べていく講義は理解しづらい。
- ・先生が早口で何を言っているのか分からない授業があった。
- ・もう少しはっきり話してほしいと感じた。
- ・たまに声が聴き取りにくかったので、もう少し大きな声で話してほしい。

- ・もっとはきはきはつきり大きな声で話してほしい。
- ・ぼそぼそつぶやかかれても聞こえないし、話も入ってこないの、マイクを使うにしろ、前に向かって言葉を発するべきではないか。
- ・もう少しゆっくり、大きく話してもらいたい。また、スクリーンに映している資料や配布資料も、もっと大きくしてほしい。
- ・せっかくのパワーポイントも、字が小さくて何が書いてあるのかわからなかった。
- ・スクリーンやレジュメの文字が小さすぎて潰れ、読み取れないことが多くあった。善処してほしい。
- ・プリントの字が小さくて読めないところがあった。
- ・犯罪や災害についての授業は特に関心が高まった。写真や具体例を挙げて欲しい授業もあった。

【H27「文学」アンケート：自由記述欄】

《肯定的意見》

- ・たくさんの文学に触れることができ、とてもいい経験できた。
- ・様々な文学作品に触れることができてたのしかったです。
- ・今まで自分の選ぶ文学ばかり勉強していたのでこの文学で学びより多くの種類の文学に触れたと思うことができました。
- ・映像を見たり、音楽を聴いたりする授業が新鮮でした。今まで難しい印象が強かった文学ですが、様々な文学に触れることができ、実際に本を読んでみようと思う気持ちになりました。
- ・映像、音楽、写真が有効に使用され、おもしろかった。
- ・文学作品がもとになった映画を、もっと観たいです。
- ・さわりの内容ではありましたが、各コースで行われていることを知ることで良かったです。
- ・専門部門を知るよい機会になりました。
- ・言語文化学科なので、どのコースに進むか少し見当がついてきました。
- ・違う学科のコース授業も体験できてよかったです。
- ・自分の将来の進路選択と異なる分野ですが、非常に興味深く感じました。
- ・毎回この講義が楽しみでした。もともと自分の進みたいコースはあったけれどこの講義を受けてどのコースも思っていた以上に面白そうでとても迷っています。興味が広がって、良かったです。
- ・今までの自分より視野が広がったように感じました。これからも、様々な文学を読んでいきたいと考えています。
- ・言語の壁こそあれど、やることはそう変わらないんだと感じました。しかし、時代や国が違っていると、文化や社会的背景を頭に入れて読まないといけないのは少し面倒な気がします。
- ・普段親しみ慣れていない作品や分野にも触れられて良かったと思います。また事前に知っていた作品でもより多くのことが知れたことがうれしかったです。
- ・日本だけでなく他の国の文学についても知ることができて良かった。面白い講義だった。
- ・全部英語で話す授業は、良かったと思う。歌や、映像といった、親しみやすい資料があるものも、良かったと思う。
- ・先生の読むロミオとジュリエットがすごく素敵でした。流れるような英語で聞き入ってしまいました。ぜひ映画のロミオとジュリエットを観たいです。

《否定的意見》

- ・人文社会学科に取っては、辛い授業でした。
- ・もっと私達学生にも分かるものを入口とした方が、学生が講義をきくと思う。
- ・文学なんて1コマやっただけじゃ分からないのでオムニバスで開講すべきではないと思う。
- ・文学についてあまり知識がなかったため、授業についていけない時が多々あった。ある程度知識がある分野からつなげて文学を学びたかった。

- ・様々な視点から文学を学べてとても楽しく実のある時間を過ごすことができました。しかし、日本古典文学の講義がなかったため、受講を楽しみにしていたため残念でした。
- ・もう少し、講義で扱う文学作品の動画や写真などがほしいです。
- ・成績の評価方法が気になります。

3. オムニバス授業テキスト作成

1) 趣旨と経緯

前述した2のオムニバス授業は、毎回授業担当者が変わるオムニバス形式で行われ、受講者が約200人の大規模授業である。出席確認には出席システムを使うとしても、プリントの配布だけで多くの時間が費やされ、肝心の授業時間が少なくなることが一つの課題である。27年度に続き、学部拡大教授会で承認され、28年度も各教員が授業で配布する資料を入学時にまとめて冊子体にして配布する方式を採用した。全教員に義務化するようなものではなく、趣旨を説明し、主に28年度授業担当の教員に授業資料の提出を求めた。趣旨は以下の通りである。

1. 200人対象のオムニバス授業の授業資料をFD部会で取りまとめてコピー製本することで、授業担当教員のコピー及び配布の手間を省く。
2. 冊子体にすることで、人文学部にどのような授業（あるいは研究）をする教員がいるのか、一年生に全体を把握させるのに役立つ。
3. 教員自身も他分野の教員の授業資料を見ることができるので、一定のピアレビュー的効果が期待できる。

今年度は26年度に比べて若干提出者が増加し、26名（26年度22名）であった。以下図表(6)は表紙と目次である。前述のとおり一定の効果を果たしていると思われるが、引き続き継続するかどうかは、次年度のFD部会に引き継ぐ。

(図表6)

<p style="text-align: center;">山口大学人文学部</p> <p style="text-align: center;">入門講義</p> <p style="text-align: center;">哲学・歴史学・社会学・文学・言語学テキスト</p> <p style="text-align: center;">(平成28年度入学者用)</p> <table border="1" style="margin: 10px auto; width: 50%;"> <tr> <td>学 年</td> <td>学 期</td> <td>冊 数</td> <td>単 位</td> </tr> <tr> <td>1 年 生</td> <td>1 年 次</td> <td>1 冊</td> <td>1 単 位</td> </tr> <tr> <td>2 年 生</td> <td>1 年 次</td> <td>1 冊</td> <td>1 単 位</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">山口大学人文学部</p>		学 年	学 期	冊 数	単 位	1 年 生	1 年 次	1 冊	1 単 位	2 年 生	1 年 次	1 冊	1 単 位	<p style="text-align: center;">目次</p> <p>哲学</p> <p>奥村 隆弘 哲学 7</p> <p>奥田 直人 読書学 9</p> <p>折本 麻子 西田思想史(日本古代史) ―神・仏・菩薩にかかわる意識をめぐり― 15</p> <p>岡崎 博 近世日本思想の諸相 ―徳と愛のめぐり― 149-1</p> <p>講 座 シカゴ《ゲルマニク》 ―ドイツから読む― 22</p> <p>村上 誠 読書への招待 ―新書刊行を機に― 24</p> <p>シムラト・マユミ 演義学とは 25</p> <p>歴史学</p> <p>井田 祐一 近世学・歴史学の視座から 26</p> <p>井手 貴作 『徳川参内』を読む ―新編の史料と徳川参内が書かれた― 26</p> <p>沼田 浩太 歴史から考える 45</p>	<p>馬 塚</p> <p>日本人と関係のないもの好き 48</p> <p>藤本 正 浩 中世の政治的行動をめぐって 50</p> <p>社会学</p> <p>梶田 尚展 現代の社会、政治、経済をめぐって ―社会学の視座から― 55</p> <p>西崎 正行 青年層への政治的関与の中心 ―社会の政治への関与― 59</p> <p>藤本 貴子 日本の歴史と文化 64</p> <p>滝澤 隆 健康社会学への招待 67</p> <p>谷澤 典之 社会学の発展と変化 ―1970年代の社会学― 70</p> <p>岡崎 博 社会学の発展と変化 72</p> <p>文学</p> <p>尾崎 正徳 文学の発展と変化 ―『浮城物語』の視座― 87</p> <p>尾崎 正徳 現代文学研究の進展 89</p>
学 年	学 期	冊 数	単 位												
1 年 生	1 年 次	1 冊	1 単 位												
2 年 生	1 年 次	1 冊	1 単 位												

言語学	
上級(新二)	
英語の進歩について	95
下級(本科)	
英語学	101
英 漢 対 訳	
言語の多様性と基盤化	103
John Phillips	
アメリカ文化実証の確立	106
史料 第一	
日英辞典の加筆	118
資料 美術	
日英辞典	122

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 平成27年度の状況

1) 学生授業評価

平成27年度の学生授業評価は、26年度の353科目実施率89.6%から323科目実施率82.8%となり、減少した。アンケートを実施した全授業における評価の平均値を26年度と比較した(【図表7】)。

【図表7】平成27年度学生授業評価 全体平均

授業外学習時間、満足度の各項目については下降、学習目標の達成、理解度、出席率の項目については上昇傾向にある。また、理解度、満足度、出席率はいずれも4ポイントを超えており、高い水準を維持していると言ってよい。授業外学習時間が依然として低く、人文学部の学生特有の受動的学習態度が窺われる。何らかの具体的な方策を立てる必要がある。

項目	26年度	27年度
授業外学習時間	2.68	2.59
学習目標の達成	3.82	3.84
理解度	3.98	4.00
満足度	4.34	4.33
出席率	4.48	4.54

2) 教員授業自己評価

教員授業自己評価の実施率は26年度の39.9%から34.7%に減少した。引き続き教員への周知徹底が今後の課題である。アンケートを実施した全授業における評価の平均値を26年度と比較した(【図表8】)。

【図表 8】平成 26 年度教員授業自己評価 全体平均

	26 年度	27 年度
学習目標の達成	4.19	4.32
理解度	4.17	4.15
満足度	3.94	3.95

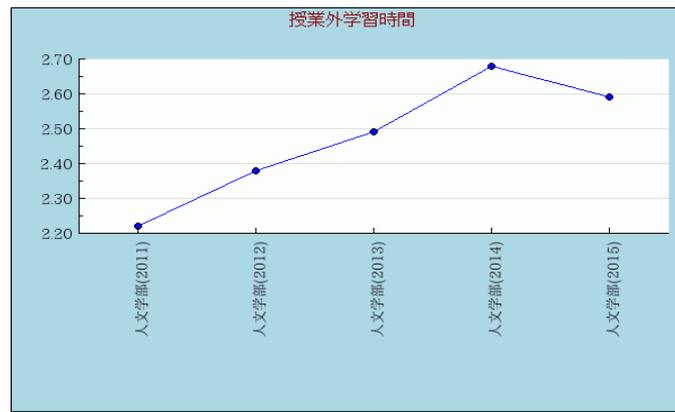
【図表 7】と【図表 8】を比較すると、学習目標の達成、理解度について、学生の感想より教員の自己評価が高く、逆に満足度は低くなる傾向にあり、これは 26 年度と同じである。このあたりの誤差をどの程度少なくできるかが今後の課題である。

(2) 経年変化

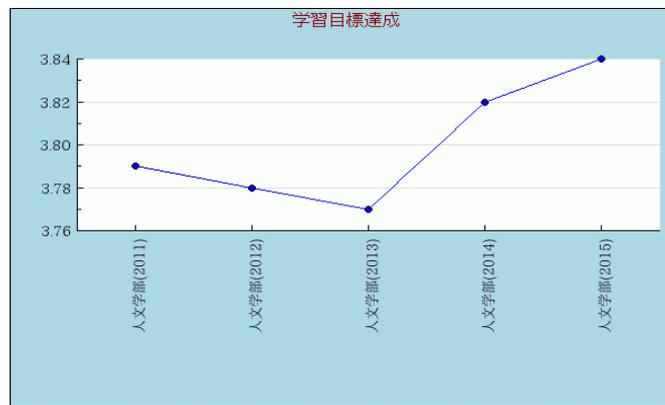
1) 学生授業評価

授業外学習時間、学習目標の達成、理解度、満足度、出席率について、平成 23 年度 (2011) から 27 年度 (2015) にかかる 5 年間の経年変化を【図表 9】から【図表 13】に示す。

【図表 9】授業外学習時間 経年変化



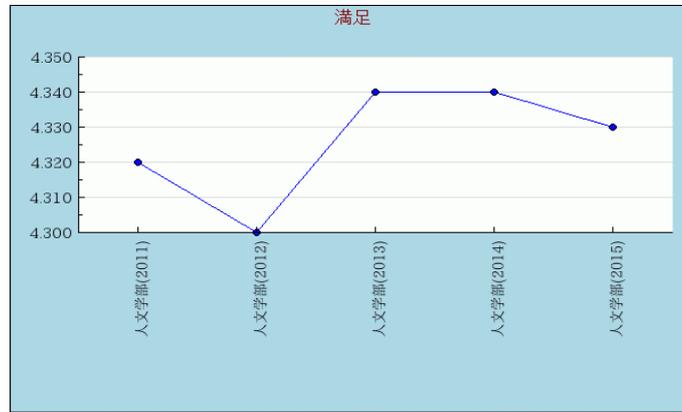
【図表 10】学習目標の達成 経年変化



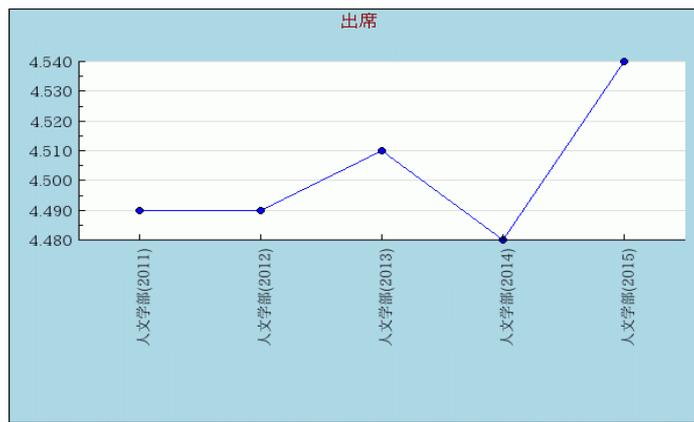
【図表 11】理解度 経年変化



【図表 12】満足度 経年変化



【図表 13】出席率 経年変化



学習目標の達成、理解度、出席率の各項目は、おおむね上昇傾向にある。なかでも、出席率については急激に上昇している。授業外学習時間、満足度については下降しているように見えるが、数値を見る限り誤差の範囲内の推移にとどまるとと思われる。

2) 教員授業自己評価

学習目標の達成・理解度・満足度について、平成 23 年度（2011）から 27 年度（2015）にかかる経年変化を【図表 14】から【図表 16】に示す。

【図表 14】 学習目標の達成 経年変化



【図表 15】 理解度 経年変化



【図表 16】 満足度 経年変化



学生同様、数値を見る限り誤差の範囲にとどまる。いずれも、ほぼ横這い傾向にあると言える。

(3) 今後の課題

授業外学習時間の向上が今後の課題である。27年度より、山口大学では各授業でアクティブ・ラーニングの数値化が開始されたが、人文学部では来る28年度から新コースカリキュラムが実施され、その一環としてPBL授業も導入される。そのような授業の導入により、学生の受動的学習スタイルも大きく変化することが予測される。それに応じて、教員自らも、従来の授業スタイルから、新しいスタイルへの移行が求められる。

教員授業自己評価の入力率向上については、このままの方式では飛躍的に改善されるとは考えにくい。一斉メールでの通知や教務委員による会議時の周知徹底だけでは、入力率の飛躍的な向上は難しい。また、経年変化の結果を見れば、ここ数年有意差が見られてもいない。昨年度も指摘したが、現在の学習目標の達成・理解度・満足度・出席率という項目では、時間を割いて入力してもフィードバックされる部分が少ない。教員一人一人にとってもっと有用な調査、つまり教育改善にすぐさま反映できる項目であれば、自ずと入力率も向上するのではないであろうか。

第5節 FD実施経費報告書

平成27年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
人文学部	オムニバス授業テキスト作成	印刷費	90	1年生対象のオムニバス授業(哲学、歴史学、社会学、文学、言語学)のテキストを作成することで、教員間、分野間の相互理解を深め、授業内容および成績評価の適正化を促す。
計			90	

第6節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第4節(3)を参照のこと。

(2) 授業外学習時間の確保(単位制度の実質化)

第4節(3)でも言及したが、人文学部では平成28年度からの新コース体制に向けた準備が着々と進められているところである。その中でリテラシー教育の充実が大きな目玉ともなっている。その中にPBL授業がある。今やアクティブ・ラーニングの導入は、大学全体の流れとして学部教育にも浸透しつつあるが、その具体的な方法は、人文学部の各学問分野により、たとえば社会学、考古学、言語学と文学、哲学では自ずと変わってくるであろう。それぞれの分野に合ったアクティブ・ラーニングの研究開発が求められる。

(3) 適正な成績評価

基礎セミナーやオムニバス授業は、学部全体で統一した授業であり、難易度や成績評価に関して、ある種の適正さが求められる。基礎セミナーでは授業内容の統一や合同授業の開催により、かなり改

善された。一方、25年度から始まったオムニバス授業に関しては、学生アンケートの結果を踏まえた研修会を開催し、分野の壁を越えて意見を交換する機会を設けることができた。なお、28年度から始まる新コース・カリキュラムには、リテラシー科目群の中に「必読名著」という必修授業があり、やはりこの授業に関しても、それが必修としてカリキュラムに組み込まれている以上、ある程度の適正な成績評価が求められることになるであろう。その成績評価の適正化へ向けて、人文学部FD部会が主導的な役割を担う必要があると思われる。

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

教育学部では、FD活動の一つとして授業公開を実施してきた。平成26年度には、参観者数が少ないことや運営方針の課題を解消する試みとして、授業公開を教員自らが科目担当者に授業参観の交渉を行い、相互に授業を参観し合う方式に変更された。平成27年度も基本的にこの方式で「授業公開・授業参観」を行った。これに先立ち、第3回FD研修会を行った。「授業公開・授業参観」の実施要項は下記の通りである。

目的：

教員が互いの授業参観を通して、具体的な授業の進め方や指導技術について学び、授業改善に関する情報や意見を交換することによって、よりよい授業づくりを推進する。

要項：

- 1、全教員は自分自身のよりよい授業づくりを推進することを目的として、授業参観を1回以上行う。
- 2、期間中、学部内の全授業は原則的に公開とする。
- 3、授業参観の際は、事前に科目担当者に了解を得る。
- 4、授業参観後には科目担当者と意見交換を行い、学んだ点等を「授業参観カード」に記入し、参観日より概ね1週間以内に随時、教員メールボックス脇に設置した箱へ提出するか、FD担当者宛に電子メールで送信する。

実施期間：平成27年11月30日（月）から平成27年12月18日（金）

回収締切：平成28年1月8日（金）

留意点：

この授業公開・授業参観は、科目担当者の授業を評価することが目的ではありません。授業の参観に際しては、学生の学びに対する建設的な気づきやアイデアに注目し、科目担当者の授業の進め方や指導法・知識に対する批判や評価しようとする姿勢にならないでください。参観時には学生の様子もよく見るようにしましょう。

授業参観カードを提出した教員は11名である。12月という繁忙期の実施であったことが、参加者が少なかった要因かもしれない。来年度以降、実施期間を再検討することによりこれらの影響は改善できると思われる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成27年度教育学部FD研修会は、拡大会議の行われる日に会議の後（または途中で）7回開催された。会議の出席者がほぼそのままFD研修会に参加したので、参加率は高かった。

第1回FD研修会

日程 平成27年9月16日（水）拡大会議終了後
場所 教育学部21番教室
内容 「授業の見方、指導のポイント」
講師 前原 隆志（教育学部）

教育実習の査定に向けて、授業の見方のポイントについて解説が行われた。さらに、教育実習の手引きへの追加事項となった板書型指導案について説明があった。

後日、使用した説明プレゼン（パワーポイント）ファイルが配信された。

第2回FD研修会

日程 平成27年10月21日（水）拡大会議終了後
場所 教育学部21番教室
内容 「教員養成に関する施策の動向―その背景と方向性の概要―」
講師 和泉 研二（教育学部）

第3回FD研修会

日程 平成27年11月18日（水）拡大会議終了後
場所 教育学部21番教室
内容 「授業公開・授業参観―大学における授業参観について―」
1, 社会科教育教室 楮原 京子 先生 平成26年度FD担当
2, 情報教育教室 北本 卓也 先生
3, 数学教育教室 飯寄 信保 先生
4, 英語教育教室 高橋 俊章 先生
5, 英語教育教室 猫田 和明 先生
6, 保健体育教室 曾根 涼子 先生
7, 幼児教育教室 中島 寿子 先生
8, 小学校総合教室 岡村 吉永 先生

12月に授業公開・授業参観が実施されるのに先立ち、昨年度の授業参観実施の様子を8名の先生が説明された。

第4回FD研修会

「反転授業の導入方法を学ぼう

ー学びのパラダイムシフトを誘発する反転

授業の可能性と課題ー」

日程 平成27年12月16日(水)

15:50~16:30

場所 教育学部 講義棟=D棟 2階 21番教室

講師 小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者 76名(アンケート回収 50名)

内容

反転授業とは一体どういう物で、どういう事例があるか、推進するためにどのような効果と課題があるかについて共通理解を得たいとして研修を開始した。

反転授業は英語では **flip teaching**、**reverse teaching** と呼ばれるが、自宅でビデオ等のコンテンツを事前に視聴させて、授業では知識の確認、ディスカッション、問題解決学習等の協同学習を行う。一部の大学では数学、英語、情報の授業で行われており、本学では共通教育「科学技術と英語(知財教育)」等で行われている。

初等中等教育での導入事例としては、佐賀県武雄市の小・中学校で市内すべての公立小学校で小学生全員にタブレット端末を配り、算数と理科の授業で反転授業を実施している。宿題動画を教育サービス会社に委託して制作。算数は学習塾などを手掛けるワオ・コーポレーション、理科は科学雑誌『Newton』のニュートンプレスに依頼。中学校は良く分からないが「スマイル学習」を実施している。

高校の事例としては、近畿大学付属高等学校で2013年度から新入生1,048名がiPadを購入し、学校側には学習管理システム(LMS: Learning Management System)を導入して、英語と数学の授業で反転授業を実施している。

英語の授業では、予習を強化し、授業時間を英語での会話やディスカッションにより多く利用し、これらの能力を向上・定着させるために反転授業を活用している。授業の導入で、語彙の習得や音読活動などを行った後、生徒が自宅で解説ビデオと教材を使い、語彙の習得や音読活動を行う。授業では、語彙の復習とテスト、英文理解の確認を行った上で、生徒が数人のグループを組んで互いに自己紹介を英語で行い、互いにワークシートに書き取るなどの協同学習を行う。

数学の授業では、英語と同様に生徒が自宅で解説ビデオを使い自習を行う。授業では問題演習を行い、個別学習や一斉指導に加え、ジグソー法(各班内で詳しく学んだ事を、各班から1人ずつ集めた新しい班を作り、持ち寄った知識を用いて新しい班で課題に取り組む手法)のような協同学習の手法も取り入れながら、学習内容の定着を図っている。

北海道大学の事例では、全学対象の「情報学I」の一部に反転授業を導入。事前にビデオ教材を大学や自宅で視聴し、講義ではその内容をテーマとした発展的な討論を行うとともに、レポートの相互評価や最終レポートの提出を行うという方法で授業を展開。ビデオ教材としては、オープン教材サービス「iTunes U」で東京大学が公開しているハーバード大学マイケル・サンデル教授のビデオ教材「ハーバード白熱教室 in JAPAN」を利用。9割以上の学生がビデオ教材を予め視聴しており、アンケート調査では意欲的に取り組んでおり、TAからも「授業の討論時間を十分に取ることができる」との意見があり、反転授業の導入により授業時間を討論の時間に十分に充てられるという効果が示された。

本学の事例では、知財教育である「科学技術と社会」でMoodleを活用した反転授業を行っている。



知財に関するビデオ教材を授業8コマに対して1本あたり10～15分程度の短いビデオ20本を授業開始までに視聴すると共に、課題を出している。授業開始時には確認テストを行い知識の習得状況を確認している。私も見て、非常にシステム的に行われていて素晴らしいと感じた。

流れとしては、学生側は、授業前にビデオを見て事前の課題を実施、講義内ではアクティブラーニングによりグループで課題に取り組み、終わった後は事後の課題を実施し提出。先生側は学習支援として、解答や解説、グループワークのファシリテーター、事後課題の採点等を行い学習状況の把握を行う。

ALポイントで見ると、「科学技術と社会」はALポイント6.48。ALポイントが高ければ良いわけではないが、学生がどれだけアクティブになるかを示した数値。最も高いのは「English Speaking」の7.28だが6.48は比較的高い数値。

反転授業の効果は、インプット型からアウトプット型への学びの転換の促進というのは、先生が教え込む授業から、自らが学び修得して行く、つまり何が出来るようになったかを中心に教育して行く形に変える一つのきっかけになる。他にも、相乗的な学習の動機付けや、学修行動の見得る化、授業外学習時間の増加、時間の有効活動などがよく挙げられる。

受講生の自由記述欄では、「ビデオ教材は自分が分からない所を何度でも見ることが出来る」、「次の授業を受講する時に、ある程度自分の考えを持って臨むことができる」、「1回の授業で学ぶより、ビデオ教材で復習する事が出来るので理解度が増した」等の意見が挙がっている。

発展させるために重要なこととして、一つ目は教材をどうするか、この負担をどうするかが非常に大きな問題。大学によるOCW (Open Course Ware) の公開やOER (Open Educational Resource) の開発が急速に進んでおり、米国では熱心に行われている。米国におけるKhan Academy (<https://ja.khanacademy.org/>) の活動が有名。これが十分整備されていないと反転授業は上手く行かない。

二つ目は、ICT技術の高度な発展と安価な端末の普及と言うことで、家庭や学校にブロードバンド回線が整備されていないと成り立たない。日本では、2013年度現在、世帯数の8割を超える家庭、2012年度現在、初等中等学校の78%にブロードバンド回線が整備されている。タブレットに代表される安価な情報端末が普及していることが前提になる。

反転授業の課題として、一つ目の課題は、全学生に対するインターネット接続環境の整備と情報端末の確保。教育の公平性を考えた時に非常に危うい。経済格差が激しくなっており、ネットに繋げることができる家庭ばかりではない。二つ目は、オンライ教材の開発環境の整備、教材自作化の限界がある。教材作成が大変で挫折する場合がある。オープン教材を利用する場合も、先生毎に授業デザインがあるため、共通教材はなかなか使えない。三つ目はインタラクティブな教育方法への対応。相当授業設計をきっちとやっ行って行かないと教育効果が期待できない。反転授業を行った先生に聞くと、反転授業には準備が必要だと言っている。ただし一回準備すると後は楽。四つ目は、コンテンツのメンテナンスの問題。経年劣化の問題があり、常にメンテナンスして行かないといけない。陳腐化し易い情報を減らしたり、シンプルに作ったり、口頭で補足したりする必要が生じる。

導入上の留意点、提案としては、1点目はビデオ教材がダラダラと時間が長いのはマズイ。5分くらいのモジュールにしてエッセンスを見せる。2点目は、議論や実習に対するテーマ設定や教員の実践的指導力の向上の必要性。授業の到達目標を達成するためにどう組み合わせるのか、授業設計が重要。3点目は宿題動画など教員の主体的選択の必要性。学生に事前に見せるのにどれが効果的か選択する必要がある。4点目は反転授業を活かすための授業デザインが重要。

本学では熱心にやっている科目があるので、是非見て頂いて、100人を超える400人くらいの授業でもやろうと思えばできる事を証明しているので、あとはやり方の問題と思う。是非検討して頂いて、小中学校の先生を養成されているが、そこにもどんどん入っているので、どう指導して行くかiPad等の可能性について考えて頂ければと思う。

質疑では次のようなやり取りがあった。

Q: 山大の例が有ったが、もし本当にやろうと思った時、どんな準備をすれば実施できるか？ 例えば Moodle って何でしょうとか？

A: Moodle は学習の支援システムで、国際総合学部の木村先生は自分で動画取って upload して学生に見せる事を以前からされていた。情報リテラシー演習などでも利用している。反転授業ではないが、情報セキュリティ・モラルで授業の中でビデオを見せて感想を書かせるなど、そういう蓄積があった。機材もかなり簡単に出来るようになっている。設定が結構難しいがメディア基盤センターに頼めば出来るかなと思う。授業やる前に、知識理解してほしいというものはホームページに上げておいて、あとは授業で何をやらせたいか。テーマが大切かなと思う。ただ見ただけではまずいので、確認問題なども。事前に準備するのが結構大変なので、そこをどうするか。1 つは組織的にやる。1 回作ってしまうと、経年劣化の問題はあるが、あとはかなり楽に出来ると言われていた。教材の準備に注力されて講義で何するかどうやってやるかを議論されると上手く行くと思う。1 回パターンが出来ると割にやり易いと言われている。ビデオ教材自分で作るのが無理な場合は YouTube 上に出ている物を見せる方法もあると思う。小中学校では徐々に増えているそうなので、検索して頂くと、使えそうなものあればチャレンジするのも良いかなと思う。

Q: 今、ビデオ視聴、反転授業あって、授業の時間を確保した中での AL と言うことで、これをやると AL 上手く行くだろうなと分かったが、ビデオ教材なし、反転授業なしでも AL 可能だと思うが AL 焦点に当てて上手くやっているパターンあれば教えて頂きたい。

A: 先程紹介したジグソー法だと、ある商業高校でやった例で、コンビニエンスストアがなぜ発展し続けるのかというテーマがある。最初に班に分けて班ごとに違った統計データ与えて分析させる。分析が終わったら、結果を班の中で共有する。次に班を解体して、新しい班を作る。新しい班には古い班の人を 1 人ずつ入れる。新しい班で先程の結果を発表し、コンビニがなぜ発展し続けるかを新しい班で議論させる。そういう AL、ジグソー法の典型的な形だが、ビデオを使わなくても出来る。準備としてはどういう統計データを見せるか、子供たちが食いつきそうなテーマを選ぶところが重要。授業デザインとさっきから言っているがそこが重要。

Q: 知識理解の所を家でやらせて、授業では持っている知識で話をしたり、知識教育したりするという事が凄く良く分かったが、僕は ICT とかやっているにも関わらずそういうことをやってない。大量に印刷したものを学生に渡して、滔々と話してしまう。そこをちょっと改めて、渡してやる資料を前の回に渡しておいて、それを読んでいかないと、問題解決出来ないよとして、反転授業を始めてもよいのか？

A: 良いと思います。

Q: 反転授業とても魅力的でおもしろそうだと思い聞いていたが、反転と言うと、元々講義時間でやっていたものを空けて、そこで新しいものをやっていくと言う意味では、元々ある授業の中でどういう事をするかと言うことでだから事前にビデオとかを見て行く必要があるという事だと思うが、講義の中でどんなことをしているからビデオを見たりしないといけないのか、どんなことをしているのか分かり、それをなるほどと思えるデータベースとかにアクセス出来れば、もっといろんなものが見えてくると思うが、そういうものはあるか？

A: 実は京都大学がやっている MOOC (Massive Open Online Courses) (※1) と言うのがあるのでそれを参考にされると良いと思う。



アンケートでは以下のような意見が見られた。(原文まま)

- 反転授業の概要や事例がとても参考になりました。ありがとうございました。
 - ビデオの例など具体物も見せて頂きたい。
 - 反転授業はビデオ教材だけでなく、リーディング課題も併用できると思うがどのように補い合うことが可能だろうか。従来も読めなさいと言っても呼んでこない学生が多かったが、ビデオにするとサマリー(ポイントがしぼれる)という効果はありそうです。
 - ヒントは少し得られたが難しそうな感じ。
 - 非常に分かり易く説明をして頂きましてどうもありがとうございました。
 - アクティブラーニングの例が示されたこと。
 - 具体的なコンテンツを見たかったです。
 - 中身のデータベース見てみます。
 - オープン教材の実例が見たかったです
 - 授業の具体的なビデオを見せて欲しかった
 - 前もって資料を渡しておき、予習させておき、授業の時に説明すれば生徒さんが予習しているので、効果が上がると思われた。
 - 回数が多い。一般論。
 - 分野は異なるが参考にしたい。
 - 落ち着いて話してほしいです。「みなさん知っていると思いますが」口癖かもしれませんが、あえてききたくないです。
 - タブレットなどを使用する能力に欠けているので最後の質問タイムでの資料利用の仕方などについては参考になりました。
 - 授業と宿題の関係が反転するわけですね。おもしろい試みだと思いました。
 - 反転授業をするためには、かなりの授業準備を必要とすることがわかった。授業準備のための時間が取れない中、どのようにすれば教材作成に時間を投資しただけの利益が得られるか疑問に感じた。統一テキストを使った教科をグループや外部委託を利用して教材化する事ができなければ難しいのではないかと思います(個人の先生がするには負担が大きそうです)。
- 研修内容の希望については以下のような意見が見られた。
- 大学授業の作り方や能動的に学生を参加させる方法やポイントについて」
 - 「授業公開→協議会」といった FD。実線に則して議論したい。
 - AL
 - 多人数授業でのアクティブラーニングの方法
 - 具体的な授業についての研修で、実際どのようなビデオ教材を見て、どのような知識を獲得して、それに基づいて、どのようなディスカッションが行われたのかが見える授業が見てみたい。
 - プレゼン方法。
 - アクティブラーニングの具体的事例の共有
 - 具体的な授業をみてみたい

- 学生の学習意欲を増す規格の研修
- 具体例が示された内容
- アクティブラーニング
- 授業改善に関する内容
- 授業改善
- 授業改善、ハラスメント
- 反転授業の実例
- ICT を用いた授業実践について
- 国や関係機関の施策動向等を「批判的に」検収できる内容
- 評価の高い人の講義を見たい
- 自分勝手ではありますが、今回のように全体に対する講習などには積極的に参加したいのですが、ここで作業、検討のものは苦手とします。
- 今回のような新しい教育形態について知りたい。
- より具体的な事例の紹介があるとうれしいです
- 共通教育科目ではなく専門性の高い科目
- ICT の先進的な使い方
- アクティブラーニングについて研修したい
- 具体的な教材づくりを含めた内容で
- 実際の授業

第5回 FD 研修会

「最近の大学生が抱える悩みと対応について」

日程 平成 28 年 1 月 20 日(水)15:10～15:40

場所 教育学部 21 番教室
(吉田キャンパス)

講師 今井 佳子 (学生相談所カウンセラー：
臨床心理士)

参加者 72 名(アンケート 14 枚回収)

内容

今回の研修会では、山口キャンパスにおける学生相談の内容について説明が行われた。講師は2003年度から現在までの13年間学生相談所のカウンセラーを担当しているが、相談件数や相談内容には大きな変化みられる。大学全入時代を迎えて相談件数は増加し、相談内容は多岐に渡るようになった。特に昨年度からはワーキングアシスタント制度が始まったこともあって、新規相談件数の伸びは顕著である。相談内容は概して次の4つに分けられる。相談回数が1回程度の場合は「履修方法」や「単位修得方法」、2~5回程度では「対人関係・友人関係・恋愛関係・研究室の人間関係・将来設計」、6~12回程度では「自分の性格」、長期にわたる場合は「精神的不調」に関する内容である。これらのうち、「精神的不調」に関する相談の場合は、保健管理センターや学部教職員等の連携・協力が不可欠である。一方、相談回数が少ない学生であっても、心に深い悩みを抱えている場合もあるので、丁寧に対応している。

最近の学生の傾向としては、自分でも何を悩んでいるのかがわからずに、漠然とした不安を抱えて



相談に来る者が少なくない。これは本学だけでなく、全国の大学でみられる傾向である。これらの学生に対しては、雑談を交えた相談を通じて、学生が何を求めて相談所を必要としているのかを注視している。例えば教育学部の場合には、「教育実習」・「卒論」などで躓きを感じ、これが漠然とした不安を感じるきっかけとなることがある。また、他人との交流が苦手な学生も増えている。これらの学生は、様々な事情で小・中・高等学校時代に他人とコミュニケーションをとる機会を十分に持てなかった者が多く、他人と話すことに対して極端な苦手意識を持っている。その一方で、「話をしたい」との強い願望も併せ持っている。教員はこのような学生に対しては意識的に話しやすい状況を作り、積極的に話しかけるとともに、本人の話を聴いていただきたい。これに加えて、このような学生はグループ学習や演習のようなアクティブ・ラーニングが含まれる授業を非常に苦手とするので、何らかの配慮が必要であることをご理解いただきたい。

相談所を訪れる学生には、複雑な家族関係や小中学校時の不登校やいじめの経験を持ち、辛い過去を抱えている者も少なくない。何かうまくゆかないことがあると、自分が発達障害やアダルトチルドレンではないかと疑い、相談を訪れるケースもある。また、友人が出来ずに孤立感を抱えている学生や、食事などの時にひとりであるところを他人に見られたくないという学生も少なくない。このように、過度に家族や友人を意識した言動が多い学生もいる。教員には、これらの学生の実態を考慮して接し、問題に気づいたら学生相談所へ積極的に相談してもらいたい。

今回の研修会では、他の会議予定との兼ね合いが生じたため、質疑応答は行われなかった。そのため、FD委員と講師より、質問や相談のある場合は講師に直接連絡してほしいとの説明があった。

研修会後のアンケートでは、「どのような内容でもよいですが、学生に関する（今回のような）ものは興味深いです」、「具体的な事例を用いて説明して下さったのでわかりやすかった」、「このような場でしか聞けない内容なので（良かった）」、「今の学生の現状、心の育ちの課題が伝わり、とてもためになりました」、「具体的な学生像がみえて良かったです」、「本学の実情のよくわかる研修でした。学生指導上でも参考になります」との意見があった。

また、今後希望する研修会については、「2月29日、3月1日開催の国際学術論文促進セミナーの第3回プレゼンワークショップ的なものをFD研修の中心にしてほしい。授業改善に役立つと考えます」、「不調学生への対応」、「アクティブ・ラーニングによる指導法改善について」、「学生特別支援室が行うこと。全国の組織の活動状況」、「今の学生たちが抱えている心の課題について、現場で直接支援をしておられる先生にお話を伺いたいです」、「学生に関すること、今日のような」、「学生指導について、今回と同様のことを定期的に聞きたい」、「3年に1回ぐらいは学生相談関連の研修をぜひ。前回（他大学の学生相談の話）からちょうどよい間隔でした。やはり定期的に聞くことで緊張感をもって学生指導にかかわる重要な機会となりました」との回答があった。

第6回FD研修会

平成27年度 教育改善FD研修会（教育学部）

日程 平成28年2月17日（水）16:00～16:30

場所 教育学部21番教室（吉田キャンパス）

講師 林 透（大学教育センター）

参加者 71名（アンケート29枚回収）

内容

まず講師より、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の概要とねらい、具体的な「アクティブ・ラーニング」（AL）の取り組みについて次のような説明があった。

山口大学の取り組みは、「テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）」と「テーマⅡ（学修成果の可視化）」の複合型である。山口大学ではこれまで授業者側の「Teaching の PDCA サイクル」をサポートする取り組みを主に進めてきたが、さらに学生側の「Learning の PDCA サイクル」をサポートする取り組みを進めている。具体的には、ルーブリックやeポートフォリオなどいくつかの取り組みを通じて「学びの好循環」が生まれることを期待している。ここでは YU-AP で取り組んでいる AL に焦点を絞る。

山口大学において平成 26 年度実施の「新しい共通教育アンケート調査」の結果を参照すると、AL へ関心を示している教員は約半数いるものの、AL を実践している教員は 1/4 程度であることが明らかとなった。そこで、AL に関するマニュアルの作成・配布、AL のための教室・施設整備やタブレット端末・クリッカーなどの機器整備、AL を取り入れた授業紹介の FD・SD ワークショップの企画・実施、AL ポイントの導入による授業内学習行動の可視化、AL ベストティーチャー表彰制度の制定、などを通じて AL の実践を促していきたい。AL を取り入れた授業を行うには、学生を中心として、学生の自主性を尊重するなど、これまでの大学教員の考え方を変えていく必要がある。

上記の説明に対して以下のような質疑応答があった。

Q1 授業シラバスに AL ポイントを与えたとすると、授業の評価が AL ポイントの数値の比較となってしまう。それでよいのか？

A1 確かに人間は数値で示されると、その大小に着目してしまう傾向がある。どれだけ AL を導入しているか、その目安と考えてほしい。

Q2 外国語（英語）の授業においてペアワークを取り入れている。プレゼンテーション資料で示された AL の形態の一つとして「フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）」とある。外国語のペアワークは「フィールドワーク（演習）」となりそうだが、違和感がある。「グループワーク」としてよいのか。

A2 AL ポイントのマニュアルには記載しているが、グループワークはペアワークを含んでいる。また、外国語で議論などを行う場合は、「ディスカッション・ディベート」にも入るかもしれない。なお、複数の形態に当てはまれば、当てはまるものすべてに AL ポイントを設定することも可能である。

Q3 クリッカーを借りて使ってみたところ、Windows 10 に対応していないようであった。ソフトウェアのバージョンアップを検討してほしい。

A3 バージョンアップの方向で業者に対応を依頼する。

Q4 授業シラバスの入力の際に AL ポイントを登録するが、その入力方法がより簡便なものにならないか検討してほしい。

A4 既に、修学支援システムの改修を行い、AL ポイントの登録画面をわかりやすいよう改善している。

アンケート結果

回収されたアンケートの集計結果は下表のとおりであった。本研修会についての感想・要望などの自由記述については、質疑応答で出されたものの他に、AL の実践例を紹介する FD 研修会を希望する回答が複数あった。また、今回の FD 研修会では時間の制約により省略されたが、学修成果の可視化に関する研修会を希望する回答もあった。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

非常に良かった	2人	6.9%
良かった	17人	58.6%
どちらとも言えない	8人	27.6%
あまり良くなかった	1人	3.4%
良くなかった	0人	0.0%
無回答	1人	3.4%
合計	29人	100.0%

設問3 興味ある内容の研修会があれば、今後も参加したいとお考えですか？

是非参加したい	3人	10.3%
できるだけ参加したい	25人	86.2%
あまり参加したくない	1人	3.4%
参加したくない	0人	0.0%
無回答	0人	0.0%
合計	29人	100.0%

設問6(1) 実施時期

良い	24人	82.8%
良くない	4人	13.8%
無回答	1人	3.4%
合計	29人	100.0%

設問6(3) 実施場所

良い	27人	93.1%
良くない	0人	0.0%
無回答	2人	6.9%
合計	29人	100.0%

第7回 FD 研修会

日程 平成28年3月16日(水) 拡大会議終了後
場所 教育学部21番教室
内容 「教育情報システム(IYOCAN)における教員授業自己評価の入力と授業改善」
講師 野村 厚志(大教センター主事)

後日、説明に使用したプレゼンファイルが配信された。

第3節 教育改善に関する活動

特記事項なし。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成28年4月にIYOCAN2システムで確認した平成27年度前期の学生授業評価、教員授業自己評価の実施率は、学生授業評価が85.6%、教員授業自己評価が44.4%であった。教員授業評価の実施率が低い点を改善する試みとして第7回FD研修会を行い、組織として教員の意識を高める機会とした。なお、システムを利用すれば、授業科目ごとの教員授業自己評価の入力実施状況が確認できるので、学部としてこの情報をどのように利用するのかが検討課題である。

第5節 FD実施経費報告書

平成27年度教育学部FD活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

全般的に、教育学部における「授業公開・授業参観」への参加度は低い。実施にあたっては、その方法・時期などの十分な検討によって、参加者を増やしていけるようにすることが次年度の課題である。

授業評価実施については昨年度からの大きな改善はみられなかった。学生授業評価が実施されているにも関わらず、教員の授業評価の入力実施率は50%前後のままである。共通のアンケート項目の結果を他の授業との比較に利用するといった考え方のままでは、各授業担当者の授業改善にはつながっていかないのが現状のように思われる。

学生による授業評価のアンケートについて、現状に対する意見を集約してみることも次年度の課題である。アンケートの設問は、基本10項目以降の担当者による設問アンケートが有効に活用されるようになれば、教育学部の様々な授業科目に適したアンケートが授業担当者により作成できるようになると思われる。さらに、自由記述によるアンケート欄の活用など、アンケート結果に対してどのような見方をすれば良いのかが理解しやすいものにしていくことで、各授業担当者の授業改善へと繋げて行く必要がある。

第6章 経済学部のFD活動

第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい教員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりよい具体的な改善案がでてこなかった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

「科研申請勉強会」（計2回：平成26年10月7日、9日）

当学部若手研究者により科研費を中心とした外部資金獲得のための研修会を開催した。運営費交付金削減に伴う研究費の枯渇問題は重大であり、学部資金を獲得し、研究成果をアピールするためにはなにをなすべきか12名の若手研究者によりそれぞれ2時間ほどの議論がなされた。

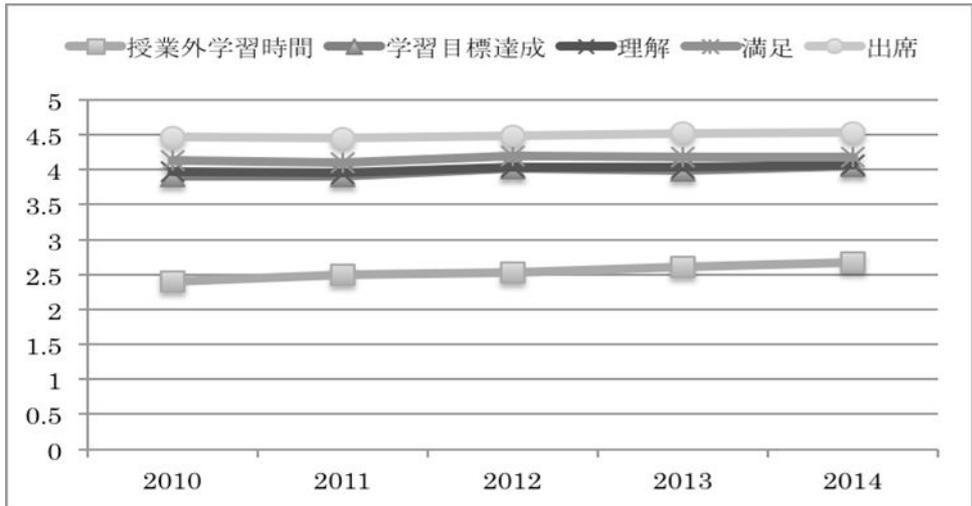
第3節 教育改善に関する活動

- ・ 学科再編に伴うディプロマ・ポリシーの見直し
- ・ カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーの見直しに着手
- ・ YU Cob-Cus の実施に伴うカリキュラムマップの作成

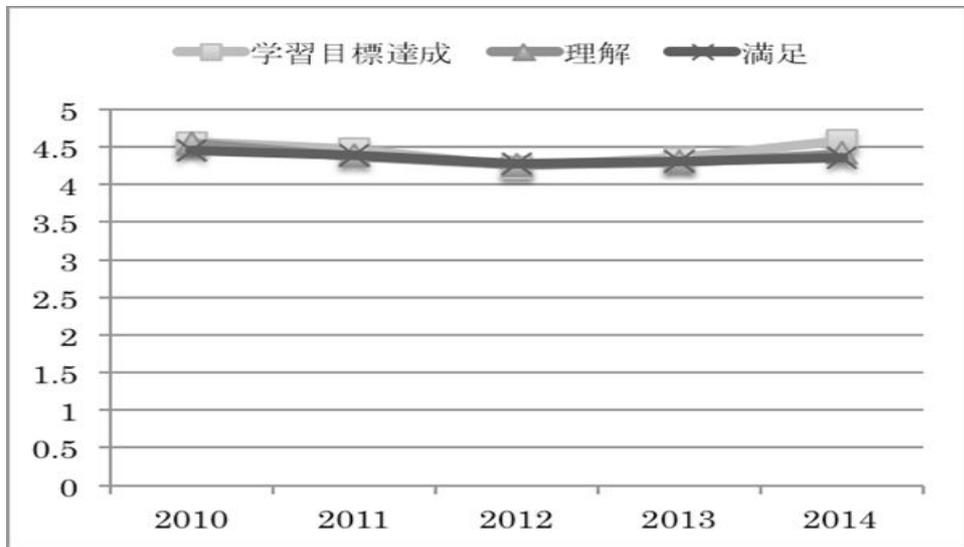
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価および教員授業自己評価の経年変化を調べてみたところ、以下のような特徴がみられる。

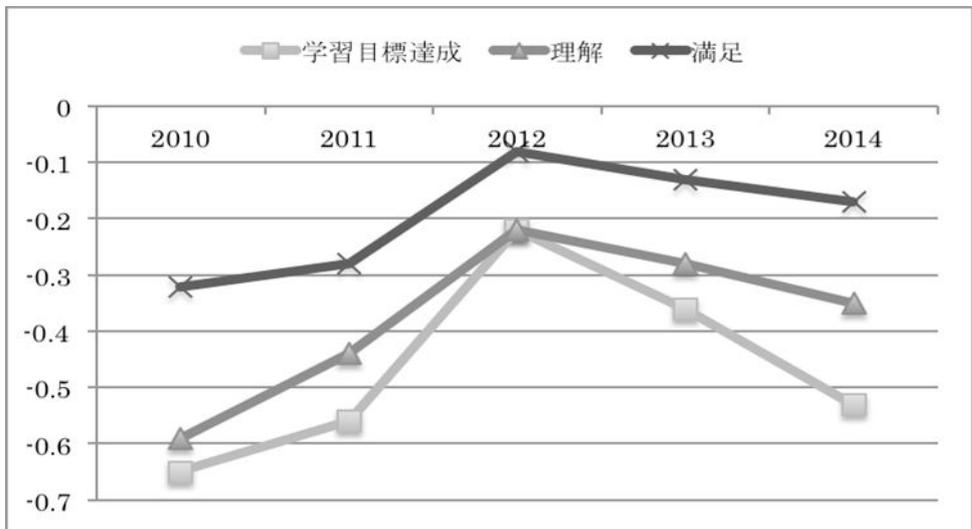
1. 学生による授業評価は、目標達成、理解、満足、ともに4.0以上の評価があり、質の高い授業を受けているという評価そのものに大きな変化はみられない。
2. ただし、授業外学習時間の確保という点については、他学部とも比較して満足できない状況にある。一方、その分だけ学生としてのプライベートの時間をアルバイトや部活動などに向けられる余裕ある環境だともいえる。
3. 教員による自己評価でも、目標達成、理解、満足ともに4.0以上を安定的にマークしており、学生、教員が共に質の高い授業の需要と供給ができていと推定される。
4. ただし、学生評価と教員自己評価を比較してみた場合、明らかに教員による自己評価が高くなっており、そのギャップは一旦縮小傾向にあったが、2013年度以降、そのギャップが拡大する傾向にある。教員側が自己満足に陥ることなくこのギャップを埋める手立てを考えていかなければならないだろう。その他の要因として、入試の多様化など学生の質の変化があるかもしれない。



グラフ 1:学生授業評価



グラフ 2:教員自己評価



グラフ 3:評価ギャップ (学生授業評価-教員自己評価)

第5節 FD実施経費報告書

経済学研究科において記述

第6節 来年度の課題

- ・ 教員授業自己評価の入力率向上を目指す。
- ・ 学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・ 基盤科目のさらなる整備と情報共有化
- ・ 学生評価アンケートの項目等見直し
- ・ 外部研究費獲得のための工夫
- ・ 公開授業（ピア・レビュー）のあり方について引き続き議論する

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 数理科学科のピア・レビュー

（1）実施科目「数理科学基礎セミナー」

1) 概要

①日時：平成27年6月16日（火）3・4時限

②対象学生：数理科学科2年生（約55名）

③授業概要：本授業では、90分間の試験と、試験問題に関するプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っている。プレゼンテーションでは学生が少人数（10～12名）のセミナー形式で前回の授業で受けたテストの内容についてプレゼンテーションを行い、それに対し担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていくという形式で授業が進められる。各グループの担当教員は学生のプレゼンテーションに対し、理解の浅い点や曖昧な点を指摘し、学生の数学に対する理解を深めると共に、プレゼンテーションの方法についても指導を行う。

④授業担当教員：菊政 勲、廣澤 史彦、倉富 要輔、南出 真、大関 一秀

レビュアー：増本 誠、中内 伸光、木内 功、宮澤 康行、幡谷 泰史

2) レビュー結果

何れのグループでもレビューシートの評価欄には「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。出題する問題の難易度や量についての意見が多く出されていることから、今後の改善点としたい。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

- ・取り組みについて学生との気軽なコミュニケーションを図ることによって、学生もお客さんではなく自然と主体的に参加する雰囲気を醸成していた。
- ・時間内に発表を済ませることができなかった問題について、自学自習時に迷わないように解答の概説を配布していた。時間配分を予め考慮した上で周到に準備がなされていた。
- ・少数の正しい知識を丁寧に読み込み、それを武器として一步一步を確実に進ませるという姿勢が印象的であった。
- ・各学生ときめ細かくコミュニケーションを図ることで、理解が不確かな個所を見極め、必要な知識を的確に指導していた。それは、シラバスにある「理解できない部分を理解できるまで考え抜く」という経験を積ませるということだと思う。
- ・担当教員は、黒板に書かれた学生の答案を、とても丁寧に添削していた。受講生にとって、数学的に良い文章を学ぶ絶好の機会になったはずである。
- ・発表時には板書しながら説明する指導が徹底されていた。
- ・低学年では難易度が高い発表方法なので、学生への指導としては十分に高く評価できる。
- ・学生の板書答案について、誤り等を正すことはもちろんであるが、答案の優れた点を評価し、言及していた。このことは学生の学習意欲を高める効果を生んでいると思われる。是非とも見習いたい点である。
- ・問題の解答や学生の板書答案についての解説は至極適切に行われており、学生の理解を助ける、あるいは理解を促す工夫がなされていた。特筆すべきは、適宜、問題の背景や応用について学生の興味や関心を掻き立てるような話を交え、セミナーを進めていたことである。学習内容が今後どのような分野で生かされるのかを知ることが、学生にとっては非常に有意義かつ有益なことであり、有効な指導法であると思う。
- ・学生の解答に対して適切な誘導や助言がなされ、効果的な指導がなされていた。説明が丁寧なので学生の理解度や学力差にも十分に配慮されていた。

(改善点)

- ・プリントの問題が多すぎて、時間内にすべて取り扱うことが出来なかった。問題量も適切に管理すべきである。
- ・プリントの内容が多少難しかったように思う。典型的な問題もあったが、時間内で行うにはもう少し分量を調整した方がよい気がした。
- ・問題数が多く、時間がないうえ予習を十分に行っていない学生にとっては、理解を助けるものとはならない可能性がある。そのためには、問題数を絞り、解説に時間が取れるような配慮が必要と思います。
- ・大変難しい問題を採用されていましたが、標準的な問題を行った方が効果的な場合もあると考えられます。
- ・プリントの最後の問題は、「微分積分学 II」の最後に取り扱う項目であり、受講生にとっては未習事項である。学科のカリキュラムをよく把握した上で問題を選択する必要があるだろう。

- ・若干、発表者と担当教員の2人のやり取りになりがち傾向があったので、今後は発表者が学生全員に説明する意識を喚起するよう指導していくとさらに充実するのではないかと感じた。
- ・今回は出席学生が全員発表するには至らなかった。問題の難易度や設問の状況から致し方ないことは十分理解できるが、自分の意見や考えを皆の前で表現できる数少ない機会なので、できるだけ全員が発表できるよう考えてあげるとよいと思う。

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「物理学実験Ⅲ」(後期)

1) 概要

- ①日時、場所：平成27年1月18日(月) 12:50-15:00、25日(月) 12:50-15:00 15番講義室
- ②対象学生：物理学コース3年生必修科目
- ③授業概要：物理学実験Ⅲの結果発表会を実施した。授業担当者外の1名の教員がピアレビューし、物理学実験Ⅲの教育成果について確認した。参加者からは学生の発表の仕方指導や考察指導についてのコメントがあった。

(2) 実施科目「プログラミング演習Ⅰ」(後期)

1) 概要

- 日時、場所：平成28年1月25日(月) 16:10-17:40 理学部2号館計算機実習室
- 対象学生：物理情報科学科1年生必修科目
- 授業担当者：浦上直人、野崎隆之、Fauré Adrien
- レビュー方法：授業に参加して頂き、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘して頂く。
- 授業概要：この授業では、学生はC言語のプログラムを作成し、担当教員に提出することを課している。プログラムを作成する前に、担当者から課題作成における注意点等が説明され、その指示に従って、学生はプログラムを作成する。授業中、学生は問題点等を担当教員やTAに質問することで、理解が不十分な点を解決したり、問題点の把握を行ったりしている。

2) レビュー結果

従来、この授業は昨年まで2つクラスに分け開講していたが、計算機室の改修により使用できる計算機の台数が増えたため、今年度からは1クラスで実施している。人数が増えたためか、教員の説明を聞かずに、プログラムの作成等を勝手に開始している学生が見受けられた。また、説明が学生全体に行きわたっていないように感じられたという意見が寄せられた。

この点に関しては、1クラスで開講したことで学生の人数が増えたことが主な原因であると考えられる。来年以降は、学生の注意を意識的に教員に向けるような試みが少し必要である。また逆に、主な注意事項は授業で使用している moodle のページに掲載し、全体への説明は最小限に留め、学生の注意が散漫にならないような工夫も必要だと考えている。

3. 生物・化学科のピア・レビュー

3. 1. 生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「生物学演習 III」

1) 概要

①日時：平成28年1月14日（木）3・4時限 理学部3号館セミナー室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生（12名）

③授業の概要：生物学演習 III は学生全員に発表を課すため、生物コースの3年生を3つのクラスに分けて、クラス毎に個別の教員が担当し、きめ細かい指導ができる授業体制をとっている。本ピア・レビューの対象となった上野が担当するクラスでは、初回で英語論文の検索の仕方を詳しく説明する。その上で分野をある程度指示して、個別に検索させ、各学生が興味を持った論文を発表させている。その際、学生の選んだ論文の内容を指導教官が確認し、DATA数が不十分な場合、単なるDATAの羅列のみの場合、など発表対象として不適切な場合は再度論文を探させている。発表形式や配布するレジメ、

PowerPointの作成に関する注意点は初回～3回目の講義の間に説明している。発表は約20分～30分で紹介させ、質疑応答をさせる。発表のための準備や理解が足りないと判断した場合は、その場で教員が指摘し、後日、全体もしくは部分的な再発表を行わせている。これにより、個々の学生が論文を理解する上で必要になる疑問点の持ち方、他者に説明するのに必要となる生物学の背景も含めた学習などを促す。

1月14日の演習では、1名の学生がツメガエルの胚発生過程における微小管の制御タンパクの機能に関する原著論文を紹介した。また、以前の発表において理解（説明）不足の点を指摘した学生2名の再発表をおこなってもらった。

④授業担当教員：上野 秀一

レビュアー：村上 柳太郎、岩楯 好昭（生物・化学科 生物科学分野）

⑤レビューの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く

2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘を頂いた。

レビュアー1

担当者1名が原著論文を事前に読み、その内容をプロジェクタで全員の前で説明するという演習を行っている。

単に図を順番に説明するのではなく、聞いている者が理解しやすいように、投影されるプレゼンに日本語を加えるなど工夫をするよう、指導がなされている。こうした学習により、英文論文の理解にとどまらず、研究室に配属され卒業研究に取り組み始めた後、スムーズに研究室セミナー等に参加できるようになるだろう。

研究の討論において、学生の発言がなかなか見られないのは、全ての会議での課題である。本演習では、質疑応答を促す指導がなされ他の授業や演習の良い見本となる。

また、発表もその日済んでしまえばおしまいではなく、問題点を後日改めて修正するように促されており、大変良い学習となる。後日になって聞いている他の学生が忘れてしまうのをふせげればなお良いだろう。

レビュアー2

- ・授業を行う部屋の机の配置が円卓（コの字）に近く、出席学生が互いに対面しているためか、全員が授業に集中しており、演習授業に効果的だと感じた。
- ・発表者のスライドの字が小さすぎたり、スライド配置の問題を、教員がその場で指摘して具体的な改善法を教えており、学生にとって実用的で有益と思われた。
- ・学生の発表する内容が高度で、専門用語を説明なしにスライドで用いていたが、このような場合は教員がその場で補足説明をするか、発表途中での質問をするなどしたほうが、学生に対する教育的効果があると思われる。
- ・発表者のプレゼンが終わった後での質疑応答の時間がやや長すぎ、出席学生の集中力が低下しているように見受けられた。時間配分を短くするか、大事な疑問は発表途中で質問するなどの工夫が有効と思われる。

このレビューによるコメントを参考にして、演習の改善に取り組みたい。

特に指摘にもあったように、再発表の内容や専門用語を発表者以外の学生が理解するのを手助けするため、内容（問題点）を明確化し、適宜質問や補足をするよう心がけたい。また、質疑応答の時間や内容も短く明確になるよう事前指導する必要がある。

但し、来年度より生物学演習IIIは全教員が担当する形式に移行するため、授業形式が変更するのに併せて、個別の問題点には柔軟に対応したい。

3. 2. 化学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目：量子化学及び演習Ⅱ

1) 概要

①日時、場所：平成27年7月27日（月）9・10時限、理学部2号館 第1計算機実習室

②対象学生：生物・化学科 化学コース3年生（29名）

③授業概要：「量子化学及び演習Ⅰ」を基礎とし、分子に対するシュレーディンガーの波動方程式の適用例を紹介する。水素分子イオンに対して分子軌道法を適用し、エネルギーと波動関数を求める過程を示す。原子価結合法と分子軌道法の二つの方法で水素分子の解を求める。2原子分子や多原子分子の分子軌道の取扱いを紹介する。多原子分子について、結合の極性、電子密度、結合次数等を説明する。パイ電子系の分子に対してヒュッケル近似を適用し、さらに高度な近似計算法である半経験的分子軌道法と非経験的分子軌道法についても触れる。分子軌道計算プログラム Gaussian 03W を用いて実際に分子軌道やエネルギーを求める方法を説明する。

到達目標：水素分子イオンと水素分子に対してシュレーディンガーの波動方程式を適用し、原子価結合法と分子軌道法により解を得る。二原子分子や多原子分子の結合について理解する。ヒュッケル近似でパイ電子系の波動関数とエネルギーを求める。分子軌道計算プログラムを用いて二原子分子の平衡構造や軌道エネルギーを求め、分子軌道を可視化する。

当日の授業内容：*ab initio*分子軌道計算およびヒュッケル近似による共役系分子の分子軌道計算の発表

④担当教員：谷 誠治

レビュー：石黒勝也

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

2) レビュー結果

1. 授業内容に対する意見

- ・レベルの高い研究用プログラムの利用や自分の出した結果をまとめて人前でプレゼンを行ったことは、たいへんよい経験となったと思う。

2. 授業の進め方

- ・ *Ab initio* 分子軌道計算の 2 原子分子と 3 原子分子、あるいはエクセルのソルバーを用いたヒュッケル分子軌道計算から、計算するテーマを自分で選んで行った結果ということで、深い理解度と努力の跡がみられる立派な発表が何件もあり、特に、学生個々の意欲の格差がよくわかる発表会であった。

3. 改善を要する点

- ・ 計算を行うことが作業だけとなっており、計算結果の意味を理解できていない学生も何人かいた。
- ・ 学生の分子軌道計算に対する習熟度にばらつきがあるので、個別の対応をとる必要がある。

(2) 実施科目：有機化学 I

1) 概要

①日時・場所：平成 28 年 1 月 22 日（金）9・10 時限、理学部第 14 講義室

②対象学生：生物・化学科 1 年生（必修科目，82 名）

③授業概要：生物・化学科 1 年生の専門・必修科目である「有機化学 I」は、授業にノート PC を持ち込み、学生各自がホームページから資料を閲覧しながら受講する形式となっており、毎回の授業最後の演習では、情報分野の「レポート支援システム」を用いてノート PC から解答と質問・要望等を送信するようにしている。また、例年、期末試験前の最後の授業では、講義に引き続き、総まとめとしての演習を行っている。しかしながら、化学、特に分子を扱う有機化学では、分子の構造を書かせるような課題が必要であるが、「レポート支援システム」ではテキストでの解答しか送信できない。今回、山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) により導入された、iPad で双方向授業・協働学習を実現するソフトウェア「BeeDance」がグラフィックスも取り扱えることを知り、化学構造式のようなグラフィックスを解答させる演習を授業で行えることを期待して、iPad とこのソフトウェアを用いたグループワーク型演習を試行した。

「BeeDance」について：今回、共通教育係より 10 台の iPad を借用し、また、理学部 FD 経費より 3 名の TA をつけてもらって準備と当日の対応を行ったが、初めて使用したこのソフトウェアは、理系の専門の授業、特に有機化学の演習に用いるには多くの問題があることがわかった。

- iPad 上で学生が見て解答する画面は、授業に登録された学生しか見ることができないため、教員が確認するためには、新たにアカウントを取り、受講生として別に登録しなければならず、非常に手間と時間がかかった。せめて、Moodle のように、教員のアカウントでも学生のロールで見られる機能が必要と思われる。
- この授業は受講者数が多く、また、この日時は共通教育棟のアクティブ・ラーニング教室が使用できないため、通常の授業と同じ講義室で行わなければならなかったが、iPad の同時接続数が 10 台程度に制限されるため、8～9 名を 1 グループとするグループワーク型演習とし、iPad から解答する学生以外はノート PC による「レポート支援システム」を併用して演習を行うこととした。しかしながら、教員が iPad 上で「BeeDance」の操作と PC 用の操作を同時に行うことは困難さがあり、HP を見ながら PC で演習を解く学生に対して適切な指示ができず、混乱を招くこととなった。
- 教員の iPad の画面を、問題を解く学生用にプロジェクタに投影するには、専用アプリがインストールされた別の PC を接続し、予め IP 登録などの煩雑な準備をする必要がある。今回、手間をかけてその準備を行ってもらったが、その画面は解像度が悪く細かい部分が見えないため、結局、教員の iPad を直接接続することとした。このため、教員が操作する様子も全て表示され、学生に見られても支障のない操作に限られることとなった。
- 「BeeDance」のテキストモードでの課題は、テキストとグラフィックスの両方を入れられる

仕様となっているが、グラフィックスのファイルを転送すると自動的に問題ウィンドウの大きさにリサイズされてしまい、これに問題文をテキストで追加するとサイズオーバーとなってしまふ。結果的に、テキストかグラフィックスかのどちらか一方でしか出題できず、今回は問題文も埋め込んだグラフィックスを作成して対応した。また、テキストモードで解答を入力するために iPad 上でキーボードを表示させると問題が見えなくなるため、教員がスクリーン上に問題を表示し続ける必要がある。

- 「BeeDance」のグラフィックモードでの課題は、問題もグラフィックスで出題しなければならないならず、問題文だけのグラフィックファイルを作成して転送しても、ウィンドウの中央にその文章が置かれてしまい、解答を書き込めなくなってしまう。今回は、一番上と一番下に問題文を配置したグラフィックスを作成して対応した。「BeeDance」のグラフィックスはフリーハンドの線に限られ、色や太さは変えられるが、化学構造式に必要な二重線や三重線、破線、くさび形の線などは用いることができない。今回の演習では、通常はくさび形結合で立体構造を示す問題があったが、こうした線が書けないため、線の色を変えて結合の向きを示すように指示して対応した。また、グラフィックモードには Undo がなく、学生は一カ所でも間違えると全てを消去して書き直さなければならないため、なかなか解答が完了しなかった。
- 学生の解答を一覧で表示させるには、登録された全員を学籍番号順に表示する画面しか用意されていないため、今回のように受講者数が多く 8～9 名に一人しか iPad を持たないような場合には何画面もページを送る必要があり、また、こうした全体表示では細かいところまでは判読できない。また、「保存」すると画面表示がクリアされてしまう仕様のため、解答が出そろったところで確定することができない。

当日の演習について：当日は、前半の講義の後、グループ分けし iPad を配布して演習を開始しようとしたところ、原因は不明であるが、iPad が全く接続できないという事態となった。しばらくして全 iPad が接続できたが、混乱した状況で演習が始まり、上記のような様々な問題により効率よく演習を進めることができなかつた。iPad を用いた新しい試みということで、他学科からもレビューアーとしてご出席いただいたが、レビュー結果にもあるように、予定していた半分も演習問題をこなすことができず、今回の試みは失敗と言わざるを得ない。同時に行った学生授業評価の自由記述欄でも、「この演習は意味がない」「iPad は使わないほうがよい」といった否定的な意見ばかりであった。準備不足による反省点もたくさんあるが、個人的な印象としては「BeeDance」自身が理数系の高等教育に向いていないように思われる。このソフトの特徴は、小学生でもすぐに使えるような簡易性にあるが、今後、もう少し高度な機能や、様々な使い方に対応できるような柔軟性が付け加わらなければ、少なくとも有機化学の授業・演習に用いるメリットはないと感じた。

④授業担当教員：石黒勝也

レビューアー：綱島 亮・鈴木康孝・幡谷泰史

2) レビュー結果

レビューアーの先生方からは以下のような意見が寄せられた。

- 講義は十分準備されていたように見受けられた。
- 講義は和気藹々とした雰囲気が進められており、リラックスして学ぶことができる環境にあると思う。
- 学生が考えられる時間がもうけられており、考えさせる授業になっていると思う。
- 講義からグループワークに移行した時点で、学生の受講態度が一変した。題材の選び方も適切であるように見受けられる。
- 数が多かったと思います。
- 授業の到達目標 1 つ 1 つが 1 日分の講義で学ぶくらいの内容になっているように思うので、到達目標の半分が消化不良をおこさずに学べる限界のようにも思える。
- 実施内容に対して、授業を受けている人数が多いので、1 人ひとりの学生が発表する機会が少

なくなってしまうのがもったいないように思う。

- PC を使うことができるので、3次元的な構造の動画（分子を回転しながら描写するムービー）などがあるのもっと効果的と思いました。
- 異分野のレビュー担当者にとって、刺激の多い授業でした。経験を持ち帰り参考にさせていただきます。貴重な経験を有難うございました。

4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目：「野外実習」

1) 概要

①日時：平成27年12月2日（水） 12:50～14:20

②対象学生：地球圏システム科学科3年生（地域環境科学コース3年生必修：4単位）

③授業の概要

「野外実習」は通年の集中の授業であり、春および夏に1週間ずつ泊りがけの野外調査を行い、地質調査の方法、地層や岩石の観察法、データの解析法、地質図の作成、調査成果の発表、論文の書き方等について基本的な能力を養う。本年度の実習地は山口県長門市油谷湾周辺であり、1班（5-6名）ごとに割り当てられた調査範囲を踏査し、共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。各班による中間発表（7月）および最終発表（12月）が設けられており、本ピア・レビューは最終発表会を対象として行われた。

④授業担当教員：脇田浩二，坂口有人

レビュアー：金折，今岡，澤井，阿部，大和田，志村，川村，永瀧，大橋

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビュアーによるコメント（授業観察カード記載），授業研究会の開催

2) レビュー結果

① 発表技術に関して（声の大きさ，話の速度，プレゼンテーション一般）

パワーポイントの使用の仕方については進歩してきているとの評価があり，授業効果が表れている。一方で，特徴のわからない写真，統一性のない構成，概要説明の欠如，声や文字が小さいなどの指摘もあり，「人に伝える」というプレゼンテーションの本質については今後さらなる教育が必要であるとの指摘があった。

② 発表会の運営・構成に関して（会場設定に関する準備等）

昨年より広い会場で行ったことに関して，好意的な意見がある一方，後ろでは声が聞き取り難かったという意見もあった。また，プレゼン用のスクリーンが2面利用できたことも理解の助けになった一方，2面あるうちの見づらい（暗い）方で発表が行われていたことに関する指摘もあった。発表時間の超過と会場の予約に関する問題点もあった。総合すると，概して良好ではあったが，細部に関しては指導すべき改善点がある。

③ 野外実習の目標に対する達成度や理解度に関して

本授業は安全性の観点などから，野外調査や室内作業は班ごとに行うが，一方で学生一人一人が主体的・自主的に行動を行うことが極めて重要である。昨年度まではこの点が大きな課題であったが，本年度はチェックシートを用いた個別達成度評価を一人一人に対して行っており，調査に関しては大きな効果が認められた。一方で，発表や論文作成に関してはどうしても作業が分担されるため，理解度に差が生じている。また，班ごとにも理解度に差があり，今後の改善点として指摘がなされた。さらに，自らの記載と考察に基づくことなく，先行研究に合わせるように物事を考えている点があること

について改善の必要があるとの指摘があった。既往研究の引用の仕方についても問題点が散見されたため、本授業もしくは関連授業を通して適切な指導をする必要がある。

④ 発表した学生のまとめ方や聴講していた学生の参加度に関して（学生の質問など）

主体的に発表を行っていた学生（班長など）はよく準備しているという印象を受けたが、質問を受けた際、班員の内1～2名が考えているだけのように感じられた。学生の参加度に関しては、上級生からの質問はあった一方、同級や下級生からの質問が少ないことを指摘する意見や、質問する側と回答する側の両方を経験させるように工夫した方が良いとの意見があった。学生の自主性に任せるだけでなく、積極的に議論を盛り上げるための呼び水役をあらかじめ指名しておく必要もあるのではないかと意見も挙がった。

⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

地層区分・ルート間対比や層厚を求めるために必要なルート柱状図がほとんど作成されていなかった点に関しては、それまでの授業の経験が生かされていない、もしくは低年次の授業で必修とすべきとの指摘があった。また、学生が自由に顕微鏡写真撮影を行えるよう、学習環境を整備すべきとの意見が挙がった。大きなトラブルもなく無事に調査が終了したことについては、ここ数年重点的に行っている安全教育の成果と思われる。

⑥ 学生の授業アンケートについて

項目「自分自身が考えるこの授業の学習達成度」に関しては、9割の学生が70%以上と答え、高い理解度がうかがえた。また、「この実習の内容に興味をもてましたか」という項目に関しても、9割の学生が「もてた」、「非常にもてた」と答え、「もてなかった」は0人であった。自由回答も概ね好意的な回答が多く、専門知識のさらなる深化を望む声が多い。細かな点では、班内外の不公平感（役割分担の発生や露出状況の差）の是正を望む声があり、今後の工夫が必要である。

3) 授業研究会

日時：2015年12月15日（火） 10:20～11:20

出席：金折，今岡，澤井，脇田，阿部，大和田，坂口，川村，永寫，大橋

研究会概要：

学生アンケートとレビュアーによるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。レビュー結果にも一部あるように、改善点について多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 大学教育センター・理学部共催FD研修会

（1）理学部教育改善FD研修会

主催 大学教育センター・理学部共催

日程 平成27年12月16日(水)
[吉田地区] 13:00～14:00

場所 人文学部 小講義室
(吉田キャンパス)

講師 林 透
(大学教育センター)



参加者 36名(アンケート 27 枚回収)

内容

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル)」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目 (共通教育) で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に間接評価・直接評価、横軸に心理測定的パラダイム (定量的測定)・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム (定性的測定) をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG (Progress Report on Generic Skills) テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCuS についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 教育評価の方法についてだが、項目が多数あって大変だと思う。これは、授業担当の教員がこれだけきめ細かくみることを想定しているのか。

A1 PROG テストでは、テストを通してコンピテンシーを測定し、その結果を整理して提供する。授業担当教員がテストの実施や結果の整理をする必要はない。

Q2 シラバス上に AL ポイントが表示されることによって、非常に閲覧しにくくなった。授業計画だけを閲覧できるようにしてほしい。

A2 他の学部からも同様の指摘があった。閲覧しやすくなるように検討する。

Q3 AL には関心はあるが、結局何を指すのかを各教員が納得しないと意味はない。今回の研修会では、我々が何を指すのかについて信頼に値する具体的な情報がないため、これはローカルセオリーもしくはローカルイデオロギーではないかと疑問を持つ教員が多いはずである。今後の研修会では、理学部の教員が対象にしている学問は世界共通であるから、教育で優れた業績を上げている大学 (例えばミシガン大学やプリンストン大学) における具体的な取り組みの事例を紹介してほしい。そうでなければ、研修の効果はないと考える。

また、講師はさまざまな評価をする側だと思うが、その評価方法が適切であるかについて評価が必要である。この過程を抜きにして、研究対象にされるのは心外である。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	3.7%
良かった	9	33.3%
どちらとも言えない	9	33.3%
あまり良くなかった	5	18.5%
良くなかった	2	7.4%
無回答	1	3.7%
合計	27	100.0%

次に、このような研修会において、カタカナやローマ字の用語を頻繁に用いると、聞いている側の深い理解にはつながらない。わかりやすい説明に努めて頂きたい。

最後に、ループリックについてであるが、我々がこれと同等のことを実際に行っている例としては、推薦入試の面接評価である。しかしながら、教員によってその評価には大きな差が生じる。ループリック導入の利点は評価者が異なってもそれを揃えることができることにあるが、実際には大きな差が生じるケースがあり、その有効性には疑問を感じている。

A3 ループリックは完全な評価方法ではなく、評価者による差異がある等の問題点がある。専門家によると、100%評価が一致する完全なループリックは作れないと言われている。従って、ループリックを作成するだけでは単なる建前論になる可能性もあるので、評価を繰り返しながら、モデレーションが必要である。また、これまでの研修会では国内の事例のみしか取り上げていないが、クリッカーを用いたワークショップは非常に盛り上がり、これを通してクリッカーを試用する教員もいる。学内ではあるが、異なる分野で努力されている先生方にも着目してもらいたい。

Q3 研修会では、こういう大学ではこういう取り組みをやっている等の具体的な情報が聞きたい。また、今は取り組みがグローバルに評価される時代であることを意識してもらいたい。

A3 スタンドに立った形で、進めてゆかなくてはならないと考えている。そういう意味で役立つことができればと考えている。

Q3 もっとハイレベルな情報をいただければと思う。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については、「アクティブ・ラーニングに求められていることは一言では言えないと思う。その目的は『知識・技能』をとり入れる際に『思考・判断』をすることを意識させよということであろう。それをどのような形で教育するかはさまざまなやり方があるだろう」、「今日の話聞いて講義がうまくなったり、学生の理解力が向上することに結びつかない。図が見にくい。タイムオーバー」、「具体性がないお話でした。AL に関しての具体的な話をききたかった」、「カタカナ用語を使用しないで説明してほしい。意味がはっきりわからない用語が多数あった」、「具体例が不明」、「もう少し具体例があれば参考にしやすかった」、「理系学部の実態を知らなすぎる」、「無意味だった」、「時間がもったいない」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「他の学部（理系学部）の先生方で、学生アンケートで評価の高い授業の見学とその後の解説」、「具体的な例を交えた内容」、「メンタルケアが必要な学生への対応法」、「具体性のあるもの（実際に行われていること）」、「現場的なもの」、「教育改善 FD であれば、一般論より理学部に適した事例をききたい」、「アクティブ・ラーニング、反転授業、ループリック」、「具体例が豊富な内容、一般論でなくて個別の例」との回答があった。

（２）講師派遣型アラカルト FD 研修会

「大学における精神障害の実態と支援」

主催 大学教育センター・理学部共催

日程 平成 27 年 10 月 14 日(水)

[吉田地区] 13:00~14:00

場所 人文理学部大会議室

(吉田キャンパス)

講師 奥屋 茂

(保健管理センター所長)

参加者 44 名(アンケート 35 枚回収)



内容

本研修会では、大学生にみられる代表的な精神疾患の症状と原因、必要な支援と配慮について説明があった。我が国では、精神疾患の患者数は増加の一途にあり、今や4大疾患（癌・脳卒中・急性心筋梗塞・糖尿病）を上回る状況にある。これらの患者には、うつ病などの精神疾患が原因で自殺に至るケースがあり、年間の自殺者数は交通事故死の6倍を超えている¹。このような状況をふまえて、国はメンタルヘルスへの取り組みを強化し、平成25年からはこれまでの4大疾患に精神疾患を加えて、「5大疾患」とする方針を打ち出している。このような状況下で、大学生についても死因の上位を自殺が占めるため、大学では精神疾患を有する学生の早期発見と治療、修学上の支援と配慮が重要な課題となっている。

大学生にみられる代表的な精神疾患には、統合失調症、気分障害（大うつ病性障害、双極性感情障害）、不安性障害、摂食障害、睡眠障害、発達障害がある。研修会では、これらの疾患と必要とされる支援や配慮について説明が行われた。特に発達障害の学生は、他の精神疾患を併発するケースがあり、学生ごとの状況に応じて様々な支援が必要である。そのため、修学支援においては教員、学生特別支援室（略称SSR：Student special Support Room）、教務事務等と密な連携が不可欠である。これらの学生の病状悪化は、未治療であるとき、治療を中断したとき、大学生固有のライフイベント（成績不振、就職活動失敗、経済的苦境、対人関係・恋愛等の悩み）によるストレスが重なった場合に生じやすい。このような際に、学生相談所や保健管理センターへ自主的に相談する学生は自分自身の変調に気づけるため対応がしやすいが、そうでない学生の場合は教職員による気づきや懸念が大きな意味を持つので、教職員から学生相談所や保健管理センターへ積極的に相談して頂きたい。また、教職員には、学生との間に信頼関係を築きながら、これらの相談窓口を訪れることを勧め、必要に応じて学生に同伴して窓口に来訪するなどの対応もお願いしたい。これに加えて、その学生の学修に関わる担当教員やゼミ指導教員、学務担当職員、部活動顧問教員、キャリア支援室教職員等とも連携して組織的に支援することも重要である。そのため、教職員はこのような場合に備えて、各種研修等を通じて、学生との関わり方や組織的な支援のあり方を共有しておく必要がある。また、学生への配慮を検討する際は、「合理的配慮に基づく個別的支援」を実現するために、主治医や専門家の意見を踏まえた上で、教育的観点から適切なものとなるように検討しなければならない。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

¹ 警察庁の調査によると、平成24年度における日本の自殺者数は、約2万7千人であった。

Q1 保健管理センターではカウンセリングや投薬を行うのか。

A1 カウンセリングは実施している。投薬については緊急時のみ短期間行っている。

Q2 大学の周辺にあるクリニックではカウンセリングはしないのか。

A2 カウンセリングをしないクリニックもあると思う。それはクリニックの方針による。

Q3 明らかに処方された薬によって学生の状態が悪化しているケースがある。このような場合は何処に相談に行かせれば良いか。

A3 保健管理センターでは精神科の松原医師が基本的に対応している。医療機関を受診して経過が良くない場合には、まずは保健管理センターに相談してもらっても良いかと思う。また、周辺の高度専

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	22.9%
良かった	25	71.4%
どちらとも言えない	2	5.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

門医療機関としては、こころの医療センター、県立総合医療センターや山口日赤などが考えられる。

Q4 被害妄想がある場合はどのように対処すべきか。学生の言うことを否定せずに、受け入れるように聞くのが良いか。

A4 ケースバイケースであり、一概には言えない。まずは医療機関を受診してほしい。

Q5 投薬の期間はどのくらいか。

A5 これについてもケースバイケースである。例えば、統合失調症の場合は長期の服薬が必要になるケースが多い。

Q6 留学生への対応の窓口は何処になるのか。留学生支援室か、学生支援課か、保健管理センターか。また、これらはどのように連携しているのか。

A6 現状ではどのように対応するか体制の整備が確立していない。臨床心理士によるカウンセリングについては、言語の壁の問題があるため難しい現状にある。通訳ができる人がいても、医療現場での経験がないと難しいこともあると思われる。これについては今後の課題としたい。

Q7 どのようにして学生に受診を勧めれば良いか。

A7 緊急時を除いて、学生にいきなり受診を勧めるのは難しいと思われる。従って、学生との間に信頼関係を築いて、それと共に少しずつ受診を勧めていただき、必要に応じて学生に同伴して相談に来て頂くと良いと思う。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「一般論だけではなく、具体的事例、特にうまくいかなかったケースが聞けたらより良かった」、「具体的なケースとその対応（具体例が聞きたかった）」、「対応の実例があると良かった」、「教員がすべき具体的な行動の内容がよくわかった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「学生の指導の参考になるもの。メンタル、意欲など」、「今回のテーマに関して、より具体例などを踏まえながら、対策等について講演して頂けたらと思います」、「発達障害の具体例（具体的ケース）とその対応」、「良い（魅力ある）講義のやり方」、「発達障害学生の対応」、「高校の学習過程について、入試問題を作る際の参考になるような研修」、「高大接続に関する AP、CP、DP の作成について」、「発達障害（今日少しあったが詳しく）。アスペルガーや注意欠如の学生に対して接し方が難しい」、「メンタル面について」、「不登校について」、「学生のケアについて」、「学習障害についての研修」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

1. 「サイエンス実習」、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」における学士力育成の取り組み

理学部では平成 20 年度から、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成のため、数理科学科以外では「サイエンス実習 I、II」（各 1 単位）を、数理科学科では「数理科学企画研究」（2 単位）と「数理科学トピック」（2 単位）を実施している。さらに、理工学研究科（理系専攻）では「サイエンス特別実習 I、II」（各 1 単位）を実施している。

履修学生は、科学理解増進活動事業（例えば、山口大学理学部サイエンスワールド）に向け、自ら

が企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、一般市民に対して科学を分かり易く伝えることを目標に、プレゼンテーションを行う。それらを通して上記の能力を身に付けさせることが「サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ」、「数理科学企画研究」および「数理科学トピック」の目的である。毎年、20名から30名の学部生、大学院生が履修しており、教員からは明らかな教育効果が見られると評価されている。ここでは、その取り組みの一例として、「サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ」について報告する。

理学部 生物・化学科生物学コースの実習例

2015年10月18日に実施された「理学部サイエンスワールド2015」には、生物学コースから
「葉っぱの模様を見てみよう」
「どうぶつの眼のふしぎ」

の2つのテーマで出展した。

前者は、出店型のブース企画、後者はツアー形式での体験型の企画とそれぞれ異なる実習を行った。「葉っぱの模様を見てみよう」では、様々な植物の葉を題材として、その模様（葉脈）の違いを『葉拓』をすることで分かりやすく理解してもらい、さらにその役割について来場者の方々に一緒に考えてもらった。葉拓は魚拓と同様に、葉の裏に絵の具を塗り、それを紙に押し付けることで作成してもらった。来場者の方には、科学に対する興味を普段の生活でも思い出してもらおう契機として、この葉拓を家庭に持ち帰ってもらった。また、葉脈は大きく網状脈と平行脈があり、その形状によって葉っぱの成長の仕方が異なることや、外見からは分からない維管束の形や根の形が異なることを理解してもらうように、ポスター等を用いて学生が説明した。当日は時間帯によって大きく来場者数が変わったため、一度に対応出来る人数を増やすために、内容を修正し、説明と実演の担当を臨機応変に振り分けながら対応していた。このことは、学生が主体となって考えながら問題を解決する技能の向上に効果的だった。

「どうぶつの眼のふしぎ」は複数の企画を少人数で次々と体験してもらおうツアー形式の企画の一部であり、プロジェクターに映された映像を、専用の眼鏡を通して見てもらうことで、立体視の仕組みなどを理解してもらう企画となった。簡単な工作で眼鏡も作ってもらうことで、単なる受け身の企画にならないよう工夫をしていた。また、前年度のツアー企画で得られた知識を活かし、クイズ形式での進行も取り入れることで、低学年の参加者にも飽きさせない工夫を凝らしていた。また、カラスの眼で認識できる波長域（色）が人間とは異なることなども紹介し、どのようなゴミ袋の色であれば中身がわかりにくいかなども説明し、実生活での科学の興味を喚起するような工夫も見られた。

出展にあたって、学生担当の教員のアドバイスも受けながら、複数の学生たちが自分たちで立案した企画を発表し、デモンストレーションに際して安全性やわかりやすさもふまえて、実施が可能な企画かどうかを学生同士で話し合い、企画内容の検討を行った。

「サイエンス実習Ⅰ・Ⅱ」の履修学生には各企画で責任者を決め、自主的に集まって企画の構想を練りあげ、主に家族連れの来場者に対してどのような形であれば、わかりやすく伝えることができるか、企画内容を理解し体験してもらうためにはどのような資料や材料を用意すれば効果的か、など工夫をして準備を行った。実際の「サイエンスワールド2015」では、前年度までの実績もあるが、1300名を超える多くの来場者が、その年齢層も小学生以下の子供たちから大人まで訪れ、大変に盛況の中終了した。参加した履修学生二とっても非常に有意義な体験だったと考えられる。



2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。平成23年度には、学長裁量経費を申請し、低年次教育改革を実施した。それ以降、平成27年度も引き続き、改革のための取り組みを行った。以下に、理学部全体および各学科におけるそれぞれの取り組みの一部を報告する。

(1) eラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

1) 理学部におけるeラーニング導入・利用支援体制

理学部では理学教育企画センターが中心となり、平成21年度から教員がeラーニングを専門教育の授業に積極的に導入・活用する支援の取り組みを行ってきた。今年度も理学部長裁量経費を申請し、eラーニング導入・活用を促進するため、大学院生を中心とした教材入力補助体制を整えた。

2) 数理科学科におけるeラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目でeラーニングを活用した。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生（約55名）

活用方法：この授業では授業外学習時間の増加を狙ってeラーニングの活用を行っている。高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形式である。成績の10パーセントをeラーニングのテストの成績で評価しており、ほぼ全て受講生がeラーニングを活用した。多くの受講生は意欲的に取り組んでいて、自学自習をする上で有効であったと考えられる。その一方で、約10パーセントの受講生はeラーニングによる学習に手が付かなかったとの報告も受けており、今後の改善点として挙げられる。

また、行列は、数学の基礎知識として欠くことのできない単元であるにもかかわらず、高校までの教育過程において削除された。この事態に対応して早急に行列の知識と計算技術に慣れさせるために、数理科学入門セミナーでは行列の演算に関する入門的演習をeラーニングで導入した。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生（約55名）

活用方法：この授業に於いても、数理科学入門セミナーと同様に、授業外学習時間の増加を狙ってeラーニングの活用を行っている。内容は1次年次の復習及び、2年次の専門科目で履修をしている微分積分学や線型代数学の問題を2週間に1回解答させるというものである。成績の10パーセントをeラーニングのテストの成績で評価しており、ほぼ全ての受講生がeラーニングを活用した。eラーニングを積極的に活用し、満点を取るまで何度も解答している学生がいるなど、アクティブ・ラーニングとしての効果が期待出来ると考えられる。その一方で、殆ど手を付けていない学生も僅かにいるなど、受講者の意識に偏りが見られる。学生の授業外学習時間増加に一定の成果が挙げられていると考えられるが、意識の低い受講生への対応が今後の課題として挙げられる。

2) 物理・情報科学科におけるeラーニングの活用事例

物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目でe-learningシステムを活用している。

- 「物理と情報のための基礎数学I」
- 「物理と情報のための基礎数学II」

- 「物理と情報のための応用数学 II」
- 「ロジカルシンキング II」
- 「計算モデル論 II」
- 「計算モデル論演習 II」
- 「数値解析」
- 「情報リテラシー演習」
- 「プログラミング演習 I」
- 「バイオインフォマティクス」
- 「確率論と情報理論」(新規追加)

今年度は、上記の科目で宿題や自習のための小テスト配信、講義資料配布、出席管理、レポートの相互採点等を行うために必要な教材の改訂およびコンテンツの追加を行った。「物理と情報のための基礎数学 I、II」では講義時間の時間不足を補うため、e-learning システム上にビデオ講義 25 本を用意し、これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とする取り組みを継続した。授業で理解できなかった内容を e-learning を通して理解している学生も多いことがアンケート結果で分かっている。そのため、今後も継続的にコンテンツの追加・開発を行う予定である。

3) 生物・化学科学科における e-ラーニングの積極活用事例

生物・化学科では、1 年生の必修科目と理学部共通科目において e-ラーニングを活用している。化学の授業における e-ラーニングでは、Moodle システムの化学構造式描画用 JAVA アプレットを使用しているが、例年、Windows のバージョンの違いによるトラブルや JAVA のアップデートに伴う不具合が起きる。27 年度は特に Windows 10 への移行と推奨ノート PC 以外の市販の PC で予め JAVA がインストールされていない機種があることなどによりトラブルが多発し、メディア基盤センターに相談しても解決できない機種もあり、JAVA を使う問題だけは大学の PC で解答するなどの方法で対処せざるを得なかった。結果的に、受験件数も減少ぎみとなり、全く e-ラーニングに手をつけなくなった学生も何名か現れた。生物・化学科では、来年度から新入生へのノート PC の推奨がなくなるため、現在の Moodle を用いた e-ラーニングについては見直しの必要性が生じると思われる。

①授業科目名：化学概論

対象学生：生物・化学科 1 年生（必修科目）、物理情報科学科及び地球圏システム科学科 2 年生（理学部共通科目）

授業担当教員：山崎鈴子・石黒勝也

e-ラーニング：4 回（各 10～20 題）

	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度
受講者数	121	150	123	132
受験件数				
演習 1	186	324	268	234
演習 2	177	320	293	212
演習 3	149	250	249	200
演習 4	127	252	199	142

②授業科目名：有機化学 I

対象学生：生物・化学科 1 年生（必修科目）

授業担当教員：石黒勝也

e-ラーニング：6 回（各 10～15 題）

	24年度	25年度	26年度	27年度
受講者数	85	89	81	82
受験件数				
第1・2章演習	137	226	184	204
命名法演習(1)	157	261	161	179
第3章演習	117	263	151	163
命名法演習(2)	106	192	137	132
第4章演習	106	232	163	147
第5章演習	104	174	136	117

(2) 学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成23年度に4つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成24年度には、1年生、2年生の5つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後、学力別クラス編成の改編を行い、平成27年度では、「物理と情報のための基礎数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」、および「力学Ⅰ」において、学生の学力に応じた授業を行っている。ただし、何れの授業においても、学力別クラスに関係なく期末試験は同じ問題を使用し、単位修得の基準も統一している。

○「物理と情報のための基礎数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」

これらの授業科目では、物理学と情報科学の両方において、基礎となる内容を学習することを目的にしているため、将来、物理学コースおよび情報科学コースのどちらに進む学生に対しても同じ内容の学習をさせる必要がある。したがって、講義は1クラスで行い、演習は学力別クラスを導入した。入門クラスでは、基礎的な演習を多くこなすことで理解を深め、発展クラスでは難易度の高い問題を多くすることで応用力を身につけられるようにしている。

入門クラス	講義	演習
発展クラス		演習

○「力学Ⅰ」

この授業科目については、将来、物理学を本格的に学習する学生と情報科学コースに進む学生でその到達度は異なってもよい。したがって、講義、演習ともに学力別クラス編成で実施し、入門クラスでは基礎的な内容を重視し、発展クラスではより専門性の高い内容を学習することを目的にしている。ただし、期末試験は同一問題を使用し、単位取得の基準も同じである。

入門クラス	講義	演習
発展クラス	講義	演習

学カクラスを設けることで、学力に応じた説明をしやすくなる点で教員にとって講義をしやすくなっている。過去の基礎数学における学生アンケートでは、「クラス分けをすることは良いと思いますか」との問いに対して受講生の約8割が5段階で4以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えており、多くの学生もクラス分けに賛成している。クラス分け編成導入後、単位取得率は上がり、留年者数も減少傾向にあるため、今年度も従来通りの方法で学力別クラス編成を行っている。

(3) その他の取り組み

学生参加型授業の更なる実現をめざした物理・情報科学科の新しい取り組み

物理・情報科学科では、平成24年に授業科目「ロジカルシンキングⅠ、Ⅱ」を新設した。ロジカルシンキングⅠでは論理的養うための基礎的な学習を行い、ロジカルシンキングⅡでは演習を多く取り入れている。ロジカルシンキングⅡの演習では、学生を10名程度の少人数グループに分けることで、学生同士で議論がしやすい環境を作り、より実践的な学習を行っている。

地球圏システム科学科の教育改善に関する活動

地球圏システム科学科は、「地域環境科学コース」「環境物質科学コース」の2コースからなり、教育改善ワーキンググループにおいて定期的に両コースの教育の質の点検、改善を行っている。さらに「地域環境科学コース」は、日本技術者教育認定機構(JABEE)による審査を受け、技術者教育にふさわしいプログラムに認定されている。この認定を継続するため、学科内のJABEE対策ワーキンググループにおいて学習・教育目標、学習・教育の量、教育手段、教育環境、学習・教育目標達成度、教育改善などの共通基準と「地球・資源およびその関連分野」の分野別要件について常に厳しい点検を行っている。今年度はJABEE認定更新年度であったため継続審査に向けた準備を行い、審査の結果、再認定された。認定期間は2015年4月1日から6年間である。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2015年度に理学部で開設している専門科目269科目のうち、学生授業対象科目は177科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは167科目で実施率は94.4%であった。

下図は2015年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。図1から図5までは、学生の授業評価項目である。図1は学生の授業外学習時間で、学部全体として数値は安定していることが分かる。図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移である。昨年度より下降した学科・コースもあるが、学部全体としては、昨年度とほぼ同じ数値となり全体的には安定している。図3は学生の授業理解度についての年度推移である。2学科・コースで昨年度より下降したが、全体としては上昇傾向にある。図4は学生の授業満足度に関する年度推移である。学部全体では数値は安定している。図5は学生の授業出席の自己評価である。前年度より下降した学科・コースもあるが、全体として数値は高い。

一方、図6から図8までは教員側から見た授業自己評価である。図6は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移である。1学科・コースで下降したものの、残り全ての学科・コースで上昇し、全体的に数値が高いことが分かる。図7は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移である。学部全体では昨年度より数値は微増し、授業方法等の工夫がうかがえる。図8は教員側から見た学生の授業満足度を示す。大幅に数値が下降している学科・コースもあるが、残りの学科は微増もしくは、ほぼ横ばいである。

全体としては、昨年度と同じく学生による自己評価には一定の安定した年度推移の傾向が見られるが、教員側から見た評価は年度毎に増減幅が大きい傾向がある。教員側の自己評価について、今後各学科・コースで評価基準に関し検討する機会を設けたい。

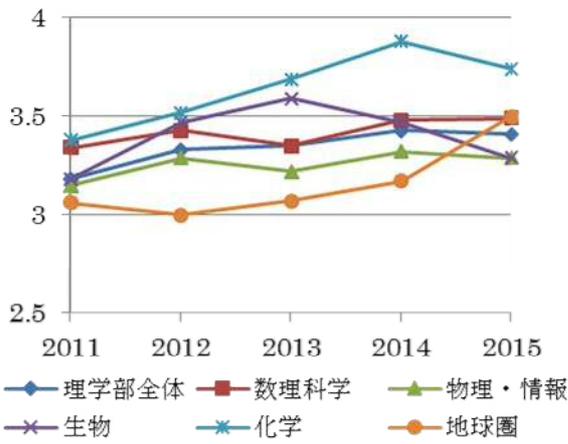


図1 学生の授業外学習時間

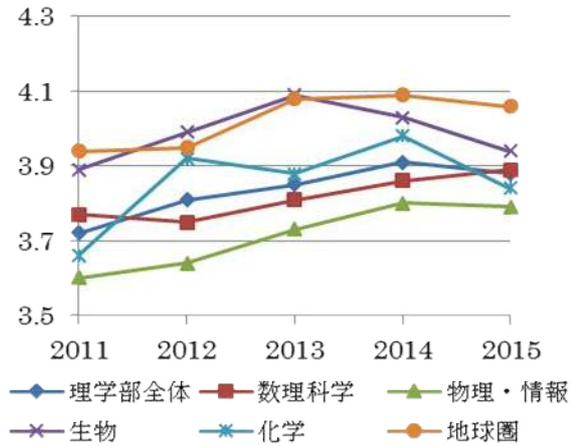


図2 学生の授業目標達成の自己評価



図3 学生の授業理解度の自己評価

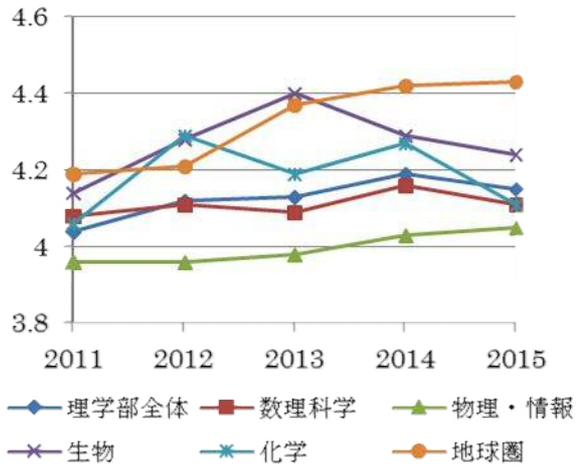


図4 学生の授業満足度の自己評価

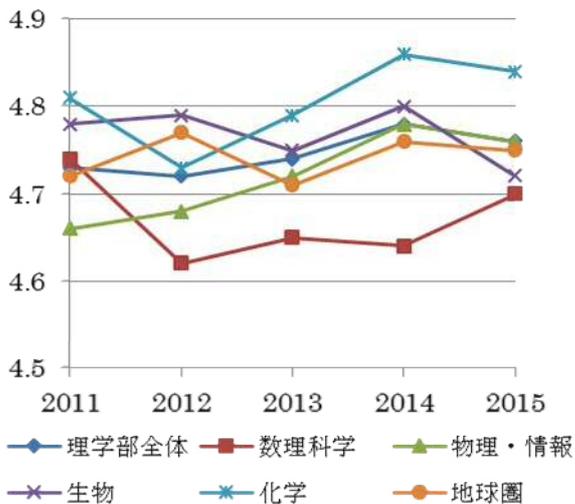


図5 学生の授業出席の自己評価

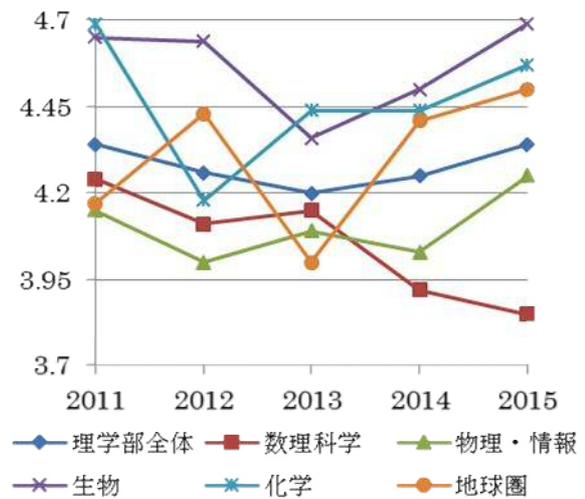


図6 教員側から見た学生の授業目標達成

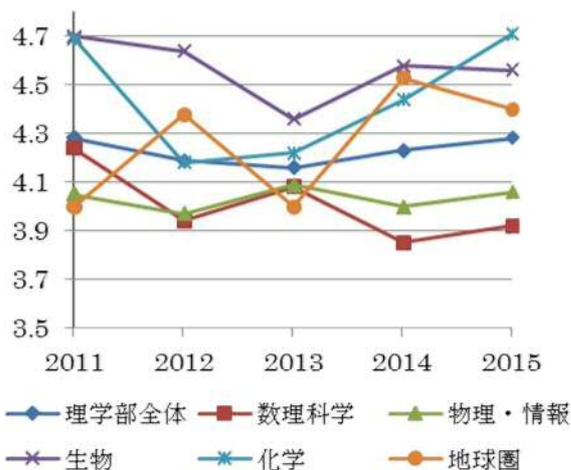


図7 教員側から見た学生の授業理解度

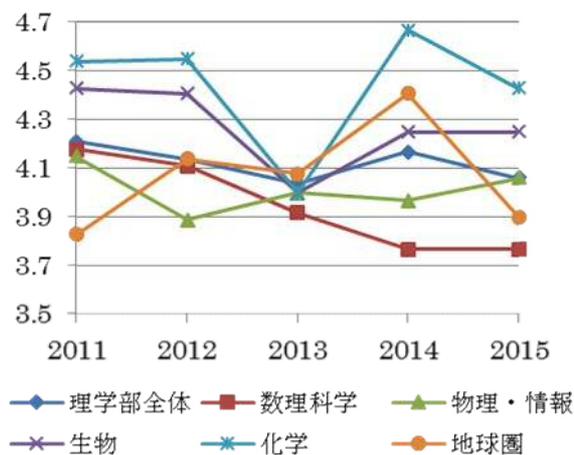


図8 教員側から見た学生の授業満足度

第5節 FD実施経費報告書

平成27年度 各学部・研究科FD実施経費報告票

部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
理学部	e-learningの作成	謝金	146	e-learning教材の開発を行い、コンテンツを充実させて学習効果を高める。
計			146	

第6節 来年度の課題

2015年度より、従来の「理学教育企画センター」は新たに「総合企画室」に統合され、組織的な教育改善対策が行われた。学生の自己学習習慣の向上を狙い、数理科学科、物理・情報科学科、生物・化学科では低年次の授業にeラーニングの活用を従来通り継続し、今年度も教材開発を行った。

学生授業評価の経年変化は、前年度より数値が下降した学科・コースも散見されたが、概して軌道に乗っているものと思われる。一方で、教員授業自己評価の経年変化は、年度毎に数値が増減し、安定していない。評価基準に関する教員へのFDが必要と思われる。

第8章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 保健学科

(1) 授業公開（ピアレビュー）

日 時：平成27年10月8日（木） 16時10分～17時40分

場 所：総合研究棟S2

講 師：野垣宏教授（地域・老年看護学）

学生・授業科目 看護学専攻3年・老年看護学

参加者：医学部保健学科及び医学系研究科（保健学系）の教職員

21名（アンケート回収20枚）

<授業内容（認知症疾患）>

- 1) アルツハイマー病型認知症
- 2) 脳血管性認知症
- 3) レビー小体型認知症
- 4) ピック病（前頭側頭葉変性症の代表型）
- 5) 特発性正常圧水頭症 まとめ 主な認知症疾患の特徴

<アンケート結果>

3. 授業について

①授業全体の感想・評価

大変有意義だった ⇒ 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 無回答⇒ 全く有意義でなかった
(結果：5点：11、4点：8、無回答：1)

②この授業は、学生にとって「老年看護学」の理解を深めるのに役立つと思いますか？
大いにそう思う ⇒ 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 無回答⇒ 全くそう思わない
(結果：5点：14、4点：4、無回答：2)

③この授業は、カリキュラムに合っていると思いますか？

大いに合っている ⇒ 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 無回答⇒ 全く合っていない
(結果：5点：14、4点：5、無回答：1)

④学生に対する教員の授業方法は適切だと思いますか？

大変適切だと思う ⇒ 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 無回答⇒ 全く不適切だと思う
(結果：5点：12、4点：6、1点：1、無回答：1)

4. 本講義を聞いて、参考になった点がありましたらお書きください。

- ・ 動向がわかった。スライドに作り方がきれいで参考になりました。
- ・ 画像がたくさんあってわかりやすかった
- ・ 動画など視覚的にわかりやすい教示を用いておられて、また事例もあってわかりやすかった
- ・ 進行スピードが適切で、聞き取りやすく、理解が深まった
- ・ 実習の時、患者さんにこういう方がおられたら、などと学生も実習と結びつけて考えやすく、

印象に残りやすいと思った

- ・講義の流れをはじめに話しておられ、全体の流れが頭に入りやすく整理しながら聞くことができた
- ・視覚教材を多く用いている。学生にとってわかりやすく興味をひかれる内容
- ・疾患特有の症状が良く理解できた

5. 本講義を聞いて改善した方が良いと思われる点がありましたらお書きください。
・画像説明時に声が小さくなり、聞き取りにくい部分があった
6. 本講義を聞いて、今後の講義で取り組んでみたいと思われる点がありましたらお書きください。
・実習と講義内容をリンクして行いたいと思います
・実習での先生の経験を交えて、イメージしやすいように説明されていた点
・スライドの示し方
・動画や事例を用いる
・最後にまとめる
7. 今後もピアレビューがあった方が良いと思いますか？ 当てはまる数字を○で囲んで下さい。
1. あったほうが良い 2. どちらとも言えない 3. 必要ない 無回答
(結果：1：14、2：4、3：1、4：1)
8. ピアレビューを行う場合の開催時期は、いつが良いですか？
前期 後期 無回答 (7月 4/9月ごろ)
(結果 1 14 2 1 1)
9. 今後、ピアレビューを行う場合、どの先生の講義を聴講してみたいですか？
田中伸明先生、守田先生、徳田先生、山根先生

要約

- ・全体としてこの授業の内容、方法ともに学生にとって有意義であるという評価が大部分であった。
- ・学生の興味を引く視聴覚教材の使用（特に動画を使用、美しくわかりやすいスライドの使用等）、説明のわかりやすさ、実習との関連や事例を用いた説明等において参考になったという意見が多かった

課題

- ・授業の参考になる点と自分の授業に生かしたい点等について話し合っ共有する場がない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 医学科

医学科主導FD研修会

(1) テーマ(分野) CBT、試験問題作成

- 1) テーマ：CBT 試験問題の作問及びブラッシュアップ
- 2) 開催日時：平成27年4月24日
- 3) 実施時間/回数：合計3.00時間 3.00時間/1回

- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：34人
- 8) 講演1：CBT 作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：3.00時間
- 11) 主な内容：CBT 作問に関する説明

(2) テーマ (分野) 医学教育

- 1) テーマ：医学部医学科教育主任説明会
- 2) 開催日時：平成27年4月28日
- 3) 実施時間/回数：合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：18人
- 8) 講演1：医学科教育主任の業務について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.00時間
- 11) 主な内容：平成27年度における医学科教育主任の業務の説明

(3) テーマ (分野) CBT、試験問題作成

- 1) テーマ：CBT 試験問題の作問
- 2) 開催日時：平成28年3月28日
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 2.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：37人
- 8) 講演1：CBT 作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：2.00時間
- 11) 主な内容：CBT 作問に関する説明

(4) (分野) 医学教育

- 1) テーマ：医学科 シラバス更新説明会
- 2) 開催日時：平成27年12月11日
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 2.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター

- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 教員 12 人
- 8) 講演 1：シラバスの更新について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 2.00 時間
- 11) 主な内容： 医学部シラバス(e-YUME)の更新について

(5) (分野) 医学教育

- 1) テーマ： 医学科 プレ臨床実習チュートリアル説明会
- 2) 開催日時： 平成 27 年 12 月 14 日～15 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 2.00 時間 1.00 時間/2 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 教員 22 人
- 8) 講演 1：プレ臨床実習チュートリアルについて
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 2.00 時間
- 11) 主な内容： プレ臨床実習チュートリアルの実施について

2. 保健学科

保健学科主導 FD 研修会

(1) 外国雑誌投稿のためのワークショップ

日 時：平成 27 年 9 月 24 日 (月) 9:00～16:00

場 所：保健学科第 2 研究棟 HD1-1

講 師：Teresa Stone

参加者：医学部保健学科及び医学系研究科（保健学系）の教職員
19 名（アンケート回収 14 枚）

<プログラム内容>

目的:研究者のための外国雑誌投稿についての教育講座

内容:

- ・英語の抄録の書き方
- ・国際雑誌出版傾向の概観
- ・日本人の著者によくある間違いと論文作成のヒント
- ・査読者のコメントへの答え方

戦略

- ・英語の抄録を書くための概要を提供する
- ・英語で書きはじめるための戦略を提供する
- ・採択されるための内部情報について議論する
- ・自分の論文を編集するためのチェックリストを作成する
- ・これまでに書いた（または書きかけの）英語論文の添削を行う

時間

9.00-9.30 導入と概要 質疑応答	1. 英文雑誌 Nursing and Health Sciences を含む国際雑誌のトレンドについての
9.30-10.30 質疑応答	2. 抄録の作成
10.30-10.45 10.45 - 12.00	休憩
12.00-13.00	3. 国際雑誌投稿用の論文作成ヒント 昼食
13.00-14.30	4. 日本人著者によくある間違いと論文作成ヒント: ・パーソン・ファースト・ランゲッジ ・接続詞 ・段落の分け方
質疑応答	
14.30-14.45	休憩
14.45-16.00	5. 採択されなかった論文から学べることと出版倫理 6. 査読者への返事
質疑応答	

終了

<アンケート結果>

1. ワークショップに参加した感想はいかがでしたか? 当てはまる数字1つを選んで、丸を付けてください。

- (1) 非常に良かった 10
- (2) 良かった 4
- (3) どちらとも言えない 0
- (4) あまり良くなかった 0
- (5) 良くなかった 0

2. 感想に関して、具体的に何かありましたら、お書き下さい。

- ・とてもわかりやすかった
- ・英語の論文を書く時に使用してはいけない表現や具体的な書き方が分かって良かった
- ・英語の勉強になった。英語で論文を書いたことはないがわかりやすかった
- ・ありがとうございました

3. 興味ある内容のワークショップがあれば、今後も参加したいとお考えですか? 当てはまる数字1つを選んで、丸を付けてください。

- (1) 是非参加したい 11
- (2) できるだけ参加したい 3
- (3) あまり参加したくない 0
- (4) 参加したくない 0

4. 3で「(1)是非参加したい」「(2)できるだけ参加したい」とお答えになった方にお聞きします。どのような内容のワークショップがあれば、参加したいと思われませんか。ご希望のワークショップ内容をお書きください。

- ・今回のようなワークショップ
- ・同様で、もっと具体的内容に踏み込んだもの
- ・クリティークやレビューの方法について

5. 3で「(3)あまり参加したくない」「(4)参加したくない」とお答えになった方にお聞きします。参加したくない理由はどのようなものですか?できるだけ詳しくお聞かせください。
なし

6. 実施時期、実施時間、実施場所はいかがでしたか?当てはまる数字1つを選んで、丸を付けてください。

●実施時期

- (1) 良い 14
(2) 良くない 0

●実施時間

- (1) 良い 14
(2) 良くない 0

●実施場所

- (1) 良い 14
(2) 良くない 0

要約:

- ・このワークショップは、目的、内容、スケジュールが明確に示され、非常に分かりやすい内容であったとの意見が多かった。
- ・国際雑誌投稿用の論文作成の良い例、悪い例が示され、とても参考になる内容で活発な質問がなされた
- ・アンケート結果も非常によかったと答える人が多く、時期、時間、場所ともに良いと答えた人がほとんどであった。

今後の課題

- ・「興味ある内容のワークショップがあれば、今後も参加したいとお考えですか」という質問に、多くの人が是非参加したい(11/14)と答えており、今後このようなワークをどのように充実させていくかが課題である。

大学教育機構との共催FD研修会

(1) 医学科

1. 開催学部: 医学部(医学科及び医学系研究科(医学系))
2. 日時: 平成27年12月1日(火)
17:00~17:50
3. 場所: 医学部 総合研究棟8F 多目的室
4. 講師: 林 透(大学教育センター 准教授)
5. 参加者: 9名(アンケート回収 8名)
6. 内容:

本研修会では、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)の概要とともに、アクティブ・ラーニング(以下、AL)および学修成果の可視化について説明および意見交換が行われた。

YU-AP事業の説明では、既存の教育の内部質保証シ



システムに加えてティーチングからラーニングへの転換（教育のパラダイムシフト）のための「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」の構築を目指して行われていることが明らかにされた。また、Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

昨年度実施した全学アンケートの結果から、本学の教員は AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ないという現状が報告された。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設け、AL 実践の動機付けを進めていきたいという趣旨の説明が行われた。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載している。現時点では共通教育を中心に AL ポイントを導入しているが、今後は専門教育にも広めていきたい。データ分析の結果、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる弱い相関傾向がみられることが明らかにされた。

次に学習成果の評価の構図および可視化について説明があった。一般的な教育評価方法についての説明の後、学修到達度調査として本学で導入されている PROG（Progress Report on Generic Skills）テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CobCus についても説明があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 共通教育の「社会と医療」はグループ学習をおこなっているが、グループによって AL ポイントが異なり、ばらつきがあると思うが、この点については、どのように考えているのか。

A1 統一シラバスや統一教材を実施している情報セキュリティ・モラルなどは同じ AL ポイントになっている。しかし、同じ科目名といっても、それぞれの授業担当者の専門分野によりカッコ付きの開講科目名（副題）が付いているため、科目間で多少違いがあってもやむを得ないと考えている。ただし、基礎セミナーではかなり科目集団間のばらつきが多いことは認識している。

Q2 授業外学習時間というのは、学生の予習・復習を意味しているのか。また、医学部の授業の特性として 1 コマ完結の授業が多いので、なかなかこのような授業外学習時間は伸びていかないのが現状である。

A2 一話完結のオムニバス授業でも一つの授業である限りは、担当者間で話し合っ、FD などを通してこの問題を考えてもらいたい。

Q3 AL ポイントの計算方法を説明して欲しい。よく理解できていないので。

A3 （計算方法を説明した後に）演習や講義各回の最高値が 14 ポイントになる。平均値は 4 程度で、5~6 であれば比較的アクティブな授業であるといえる。

Q4 ポートフォリオについて、学生の実績データ（成績・時間外学習データ等）の収集や教員の学生のリフレクションへの介入の仕方など多くの問題を抱えていると思うが、これに対して、どのように考えているのか？

A4 e ポートフォリオの全学ベースでの導入を考えている。成績だけでなく、フルセットすなわち成績が見えるだけでなく、正課外学習活動の実績データも入れるように考えている。しかし、デジタルデータの場合には紙媒体と異なり難しい面があることは認識している。そのため、導入できる学部から e ポートフォリオは導入していこうと考えている。

質問者のコメント：医学部の場合、臨床実習が中心で患者さんの個人情報などの問題があるためにセキュリティがきつく、なかなか e ポートフォリオを導入しづらい事情がある。

Q5 IR センターの問題であるが、卒業生と紐付けをしていかないと最終的な教育効果を測れないと考

えている。卒業生を追跡していくことで大学教育の質改善のための PDCA サイクルを回すことができると考えているが、現実的には個人情報の壁などで非常に難しい。この点、どのように対応しようとしているのか？そこまで考えないで、入試とか入口のみをとりあえず考えているのか。

A5 卒業生の状況を把握することは重要であると考えているが、とりあえずは、入口である入試から出口である就職までを抑えていこうと考えている。

質問者のコメント：卒業生の追跡調査などを行う際には、医学部の 100 名足らずの卒業生を追跡するだけでも相当のマンパワー（データ解析をする人材やデータを収集する人材等）が必要である。

研修会後のアンケートでは、「アクティブ・ラーニングということは耳慣れない言葉であったが、医学部ではすでにログブック（臨床実習）などを活用したポートフォリオなどが行われているなどの実績があることに気付かされた」、「全学的にアクティブ・ラーニングを導入していこうとしていることが分かった」という意見がある一方で、「基礎的な用語（ループリック、リテラシーなど）の意味がわからなかった」というもう少し分かりやすく説明して欲しいという意見もあった。

また、今後希望する研修会については、「インストラクション・デザイン関係の研修」、「教育方法などあまり専門的すぎない研修」、「さまざまな課題を抱えた学生への対応方法に関する研修」という回答があった。さらに「PROG テストの詳細を知りたい」という要望もあった。

(2) 保健学科

派遣型アラカルト FD 研修会

「発達障害学生は何を悩み、どのようなサポートを求めているのか」

(医学部保健学科 FD 研修会)

日程 平成 27 年 9 月 1 日(火)

[小串地区] 13:00~14:00

場所 医学部保健学科第 2 研究棟 HD1-1
(小串キャンパス)

講師 木谷 秀勝
(教育学部附属教育実践総合センター 教授)

参加者 34 名(アンケート 31 枚回収)



内容

今回の研修会では、発達障害のうち自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）の学生はどのようなことが苦手で何を悩んでいるか、学生自身はどのように自分をとらえているのか、これらの学生に対してどのようなサポートが求められているのかについて事例をもとに説明がなされた。

講師が担当する面接では、面接対象者の年齢の幅は広く、生後 12 ヶ月から 57 歳である。現在の研究においては ASD を有する乳児は生後 8 ヶ月から 10 ヶ月で健常な乳児と発達が異なることが知られており、ASD の支援はなるべく早期の段階からの予防的な対応が効果的であることがわかっている。幼稚園や小学校から継続的に支援してきた学生と、高校から大学にかけて不適応を起こして事例化した学生たちを比較すると、明らかに幼少期から支援を受けた人の方が適応できることがわかっている。これは、支援開始が遅かった場合、それまでに周りから叱られ続けてきたために『何をやっても自分はだめだ』という気持ちが強く、達成感を感

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	22	71.0%
良かった	8	25.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	3.2%
合計	31	100.0%

じることができないことが一因にある。大学においても、それ以前の早期に対応したケースと、入学後に周囲が気づいて支援を開始するケースでは大きく適応が異なる。また、支援の成否にかかわらず、早期からの支援を継続することによって、困ったときに『大人はきちんと話を聞いてくれる存在である』という安心感を得ることができる。これによって、何か困った事態が生じたときにパニックに陥らずに、周囲に相談ができるようになる。従って、支援を通じて自分を理解してくれる大人と出会う機会を得ることも重要である。

講師の研究室では、ASD の学生を集めて合宿を行っている。この合宿では、これまで継続してきた支援の最終ゴールとして全員が告知を受けていること、自分についての理解を深めるとともに自分の特性を他者にアピールできるようになることを目標としている。具体的には、パワーポイントを用いて自己 PR（自分史の紹介等）とモットーを書かせるようにしている¹。過程では「自分は何が得意なのか」についての気づきを重視し、苦手とすることに対して「がんばれ」と言うのではなく、どのようなツールを用いれば克服できるのかを検討することを重視している²。食を共にするこの合宿

を通じて、ASD の人たちの心の世界が、行動のレベルから見える表面的な姿と如何に大きく乖離しているかを実感している。

Student special Support Room（以下、SSR）への相談には、これまで診断を受けたことのない学生が来訪するケースがある。これらの多くは入学時からのケアではなく、入学後に周囲が気づく場合である。例年、前期の講義が半分近く終わった 5 月の連休明けまでの間に、その時点で授業に出席していないという状況から教員が気づくケースがよくみられる。これは、発達障害学生は心身に生じた小さな異常に気づきにくく、状態が悪化して鬱や引きこもりになった段階で周囲が気づくケースが多いためと考えられる。従って、教職員や事務職員には学生の健康面にも注意をしていただきたい。

発達障害学生が困っている点には、次の 4 つがある。1 点目は、困っていることを上手く伝える方法がわからないことにある。そのため、相談する際に、非常に遠回しな話し方をしたり、表現がたどたどしい場合がある。また、鬱的な傾向がある場合は、何年も前の事をフラッシュバックするように思い出し、最近の事のように話す等の時系列的な混乱が伴う場合も少なくない。従って、話を聞く際はそれがいつ生じたかを確認・整理しながら聞く、口頭や文章による表現が苦手であれば直前一週間で困ったことを 2 つだけ箇条書きにさせるなどの工夫が効果的である。2 点目は、相手に伝わったという実感を感じ取れないことにある。そのため、同じ話を何度も繰り返すことがある。このような場合には、話が伝わったときに出すサインをあらかじめ決めておいて、話がわかったときにはサインで示すと効果的である。3 点目には、自分の話を伝えるタイミングがつかめないことがある。例えば、ASD の学生はその場の雰囲気を読めないため、教員が多忙な時に来訪することがある。この場合には、曜日と時間を明確に決め、日程をパターン化すると効果的である。4 点目は、様々な感覚が鈍いことにある。例えば、冬に半袖シャツを着る、話すときに相手に接近しすぎて大声でしゃべる、時間感覚が鈍いため遅刻するなど様々なパターンがある。これについては個々に応じて検討が必要であるため SSR にご相談頂きたい。

ASD の学生が抱えるこのような困難の背景には、困ったときの対処方法の獲得が難しい、達成感を感じることができない、同時処理が難しい、自分の得意さを活かす機会がみつけれないことがあげられる。これらの背景にもご理解を頂き、ASD の学生に接していただきたい。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1

大学生になって発達障害と診断された場合、保護者はどのような反応を示すか。

A1

保護者の反応は、大きく 2 つに分かれる。ひとつは、「ああ、やっぱり」と納得する場合である。これは、大人しいアスペルガータイプの子供を持つ保護者に多い。もうひとつは大学に対して非常に攻

撃的になる場合がある。これらの保護者は先回りをして事が起こらないように対処してきたケースが多く、本人は勉強面よりも生活が苦手な傾向がある。安易に受診を勧めるとトラブルに発展するケースもある。従って、教員個人で対応せずに SSR に相談していただきたい。

Q2

発達障害が疑われる学生に対して、どのように受診を促せば良いか。また、このような学生が休学した場合、その期間中の過ごし方はどのように指導すれば良いか。

A2

共通教育の講義で心理学を担当しているが、その中で発達障害についても取り上げるようにしている。そこでは、発達障害によるリスクとそれ以上に発達障害の可能性について話をしている。そうすると、「同級生にいる」、「うちの兄弟もそうだ」、「自分もそうかも知れない」というように、学生が自分で気づく事が多い。従って、講義の中で発達障害に関して説明をすることによって、「もしかして自分も」ということを伝えてゆくことと、そういった場合にどのようなケアがあればそのような人たちが伸びるのかということを積極的に説明するようにしている。そうすれば、学生自身で問題に気づくことがある。保健学科の専門教育の中で発達障害について取り上げる機会があると効果的ではないかと考える。

休学中は、「何もすることがない」という学生が多い。この場合、リフレッシュのために余暇を楽しむための過ごし方について話をすることもある。また、復学後には講義や実験に出席するには体力が必要不可欠であるが、休学中に昼夜逆転等の不規則な生活によって体力が減退する学生がみられる。そのため休学中に体力が減退しないように、生活リズムを整え、体力を維持するように運動を取り入れるように指導をしている。

本研修会後のアンケートでは、「青年期からの関わりよりも、乳児期からの支援が望ましいことがわかった」、「サポートが必要なこと、サポートがあれば適応できることはわかった。どこまでサポートすべきなのか悩むことがある」、「具体的な話で非常に良かった」、「面白かった。ためになった」、「具体的に事例を挙げて説明されたので、とても理解しやすかったです」、「学位を取るサポートとしては、発達障害者にも考慮して接する必要があると思いますが、医療の専門職として育てて、実践の場に出してもいいものかは疑問に思います」、「個別の支援内容についても聞かせて頂きたかった。引き続き同じテーマで続けてほしい」、「具体的な事例が聞けた。ポジティブに対応したいと思った」、「看護の立場でもやはり専門家に相談して適切に対応すべきだと思います」との回答があった。

また、今後希望する研修会については、「学生と関わりについて」、「具体的なサポート内容について。医療系での就職先でのサポート体制や具体的な内容」、「木谷先生の研究内容をもと、さらに詳しく聞きたいです」、「今回のようなテーマ。科研で検証されたお話はエビデンスありで有意義でした」との回答があった。

¹ ASD の学生は口頭による発言が困難であるが、パワーポイントやスライドを用いるとうまくまとめることができる。

² ツールの例としては、ノイズキャンセリングヘッドフォンなど。

³ 学生特別支援室ホームページ

<http://ssr.ssc.oue.yamaguchi-u.ac.jp/>

(2)保健学科

1. 開催学部：医学部（保健学科及び医学系研究科（保健学系））
2. 日時：平成28年2月15日(月) 13:00～13:50
3. 場所：医学部 保健学科第2研究棟 HD1-1
4. 講師：林 透(大学教育センター 准教授)
5. 参加者：34名(アンケート回収30名)
6. 内容：

冒頭、FDコーディネータより、本研修会の趣旨について、平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の主要課題であるAL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、ほとんどの回答者から、「非常に良かった」「良かった」、今後の研修会に「是非参加したい」「できるだけ参加したい」という結果を得ることができた。



次に、林 透 大学教育センター准教授（IR室長）より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の全体概要について、テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）、テーマⅡ（学修成果の可視化）それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環（LearningのPDCAサイクル）」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム（TeachingのPDCAサイクル）について紹介があった。

次に、テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の取組に関して、アクティブ・ラーニングの定義について確認がされた。続いて、新しい共通教育の開始に伴う平成26年度10月～11月に実施されたアンケートによれば、ALに関する意識について過半数の教員は高い関心を持っているものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。ALポイント認定制度では、ALの可視化や教育研究評議会です承されたベストティーチャー表彰制度を通して、AL実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。

続いて、ALポイント認定制度の運用状況としてALポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）のALポイントが紹介された。ALポイント認定制度では、自己評価によってALポイントをシラバス明示するものであるが、ALを前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性（AL科目や実験・実習など）が反映されていることが見られ、ALポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、ALポイントの分析では、ALポイントが高ければ、到達目標達成度、授業理解度、授業満足度が増加するという弱い相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。ALポイント認定制度はALを推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、ALを推進するFDも展開していることが説明された。また、実施済みのFD取組として、大人数授業と理系基礎科目のALに関するFD、ICT活用のFDが展開されていることが述べられた。また、ALを授業に導入する第一

歩として、AL 型授業プロセスの 1 コマ（例）について解説があり、ペア及びグループでのワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらに AL を進める方策としてクリッカー、ICT（タブレット端末等）、AL 教室を活用する AL があることが説明された。

次にテーマⅡ（学修成果可視化）について説明があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、汎用的能力（ジェネリックスキル）の測定を実施していることについて説明があった。加えて、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定学的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による 4 象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。具体的には、学修到達度調査として PROG（Progress Report on Generic Skills）テストが実施されていることが述べられ、PROG では、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、アクティブ・ラーニング実践を進めるうえで重要なパフォーマンス評価としてのルーブリック活用について説明があった。また、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを活用したエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系（アセスメントポリシー）について述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育では国際総合科学部で進められている CoBCuS を活用していく方向性について説明があった。

質疑応答では以下の通り【質疑応答】があった。

【質疑応答】

Q. 保健学科においてアクティブ・ラーニングを実施するにあたり反転授業が適切だと考えているが、具体的に反転授業（例えば『科学技術と社会』）について詳細を知りたい。

A. WEB を利用した予習教材や映像資料が活用されている。毎回の授業ではミニテストなどの活用を通して、予習が十分に行われているかが確認されている。また、最終のテストでは、予習・復習を十分に行われているかを分析することを通して反転授業の効果を上げている。

Q. 考える時間を与えることもアクティブ・ラーニングだと考えているが、10 分程度でもそうしたアクティビティは AL ポイントになるか教えていただきたい。

A. ペアワークを採用したかたちの「考える時間」や振り返りを活用したアクティブ・ラーニングを実施することができる。また、短い時間でも学生に考えさせる時間を確保すること（ペアワーク等を活用すること）で、AL ポイントも高まり、AL も推進されると考えられる。

Q. PROG テストの詳細について説明していただきたい。

A. まず、PROG の結果については委員会に報告をしている。実際のテストの形式は、リテラシーでは四択から選択する方法で測定し、また、コンピテンシーでは、とある場面（シチュエーション）のなかでどのような行動特性を持っているかを回答することで測定している。コンピテンシーは、大項目、中項目、小項目に分かれており、社会で求められる力（社会人基礎力）を細かく見ることができる。PROG のデータを活用することで、人材育成目標に合わせたコンピテンシー育成のための教育改善を検討することができる。

Q. 保健学科のコンピテンシー（対人基礎力）について、1年生では看護専攻と検査専攻を実施しており、3年生では検査専攻での実施となっているが、是非、学部全体として1年生、3年生に実施していただきたい。

A. 両専攻については来年度からの実施を計画しており、結果の報告も予定している。

第3節 教育改善に関する活動

1. 医学科

（1）ログブックの振り返り評価

24年度から、臨床実習の手引き、さらには臨床実習ログブックを、毎年作成し配布するようになり4年が経過した。これは、臨床実習が始まる4,5年生、および6年生を対象としたものである。山口大学の医学部医学科4~5年生は、一年間、大学病院の全診療科を1-2週間ずつ、一班5人のグループでローテーションする形式での臨床実習を行う。さらに6年生は、合計12週間、大学病院外の施設も含め、自由選択で研修を行うカリキュラムとなっている。ローテーション先での実習内容は、それぞれの診療科に任されており、多くの診療科では実習すべき内容やそれについての到達目標も、明確に定められてはいなかった。臨床系教員は、日々の忙しい臨床業務の中で教育を行う必要があり、さらに実習の場は、外来や病棟だけではなく、手術室や検査室等を含め多岐にわたる。実習で経験すべき内容も多岐にわたるものの、実際に経験することができたかどうか不明であった。このように、臨床実習の内容に関しては、学生と教員双方の熱意による部分が大きいことは否定できない上に、どのような内容を経験したのか、統一された記録様式等はなかった。作成された臨床実習の手引きでは、その診療科で経験、学習可能な内容を明らかにし、その上で実習の目標を明確にした。この手引きを作成する過程で、診療科内では年度毎の教員間の意思統一を図っていただいた。さらに学生は、ログブックに各診療科での日々の実習で経験した内容を毎日記録する。さらに、一週間の終わりには、本人の感想、振り返りを記入し、その上で指導教員がフィードバックとしてのコメントを記入することにした。いわゆる、ポートフォリオ形式のログブックを活用することで、学生と教員のコミュニケーションに役立つのみならず、それぞれが経験した内容を振り返り、成長の過程を自身が確認するようになっている。これらが実際にどのように学生教員に活用されているかを年度末の3月に、昨年度に引き続き調査した。対象は、臨床実習学生と全診療科臨床実習担当教員に実施した。調査の結果から、学生、教員ともにログブックが臨床実習の場に浸透しているとは言いがたい現状だった。しかしながら、本来のログブックの目的である「復習や振り返りに役立った」が学生からの自由記述回答で最も多かった。また、学生からの改善策として「診療科毎のログブックの扱いに対する温度差が大きく、全体での統一した活用法を決めて欲しい」との回答が最も多く、今後の改善が必要であると思われた。

（2）教育主任制度の新規開始

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗りつつあると思われる。

(3) 学外での地域医療実習の継続(3年目)

医学教育モデル・コア・カリキュラムに示されているように、これからの卒前医学教育は、幅広い臨床現場での、診療参加型の臨床実習が求められる。大学病院の高度先進医療とは異なる医療の教育を行うことが必要であり、大学病院外の地域の施設での臨床実習の充実が課題となってくる。このため、将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきており、医学科6年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心とした診療参加型地域医療臨床実習を、昨年度より導入した。山口大学医学部附属病院での全診療科をローテーションして行う実習(臨床実習1)が終了した6年生120名を対象に、必修臨床実習の一部として、平成28年4月に一週間行った。実習対象施設は、各診療科から大学近辺の同門診療所や病院を中心に推薦してもらい、臨床研修指定病院となっている施設については、本実習の趣旨と異なるために除外した。一施設あたりの学生は1~2名程度とした。実習内容としては、外来見学、診察、採血、処置、褥瘡・緩和ケア、予防接種、症例カンファレンス発表、訪問診療同行、巡回診療、あるいは、一次・二次救急体験等の、大学病院や臨床研修指定病院での実習経験が困難と考えられる内容を期待し、学生、および指導医を対象に、別々に説明会を開催した。学生の評価は、当学部が導入している臨床実習ログブックへの記入による形成的評価と、各施設の指導医からの総括評価で行った。

(4) 成績不振者への個別指導の拡充を継続

卒業後に国家試験を受験し、その合格率が全国共通の教育成果の評価尺度としてある。これに加えて臨床実習が開始される前の時点で、共用試験CBT、およびOSCEが施行され、知識、技能、および態度に関する全国レベルの評価を受けることになっている。これらを勘案した結果、在学中の早い時期から成績不振者へ介入の行うべきであるとの方針に達し、2年生の段階からの個別指導を開始した。また、現行で行われている5年生からの個別指導も対象者を更に拡充して、6年生の成績不振者にまで広げて引き続き行っている。

(5) カリキュラムの国際認証に向けての準備の加速

今年度からのカリキュラムに反映させ、カリキュラムマップもだいぶ固まってきた。今後はOBEのためのカリキュラム改訂を予定している。また臨床実習も現行の52週から約67週へ増やすカリキュラム改訂も今年度より実施可能な体制が整った。またeYUMEの中にも、電子ポートフォリオ等の内容も新たに設置し、次年度より1~4年生を対象にした電子ポートフォリオ実施の準備が整った。

2.保健学科

(1) 社会の変化に対応できる人材等の育成、国家試験の高い合格率の維持

保健学科では日々の教育活動の中で、教員相互がより良い学生教育についての議論を行いつつ、教育改善に努めている。また、高年次においては、附属病院や様々な施設の協力のもとに臨地実習や病棟実習を行っており、学科全体として今後の社会の変化に対応でき、チームの一員として活躍できる人材の育成を目指している。

また、本学科では国家試験の高い合格率も重要なゴールのひとつであり、これまでも模擬試験の計画等も含めて学年毎の厳密な指導を行ってきた。27年度は、看護師が100%、助産師が100%、臨床検査技師が97.3%、保健師が94.6%であった。今後も学生の自主性を尊重しながら指導を継続

していくことが重要であると考えられる。

(2) 国際交流の促進

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通じた国際交流や交換留学を行っており、より国際的な人材育成のための努力を行ってきた。27年度は、タイのチェンマイ大学でAPAHLが開催され、本学の学生も多数参加した。参加にあたっては、学生に対する英会話能力やプレゼンテーション技能の向上を促す取り組みを行った。27年度からニューイングランド大学が新たにAPAHLに参加し、交流を行った。

(3) 成績不振の学生や学習に何らかの困難を持つ学生への支援

成績不振の学生や学習に何らかの困難を持つ学生に対しては、教員による個別指導と教員間の連携をはかってきた。27年度のFD研修会では、発達障害のうち自閉スペクトラム症を取り上げ、これらの学生の困難さや彼らに対するサポートの在り方について専門家に話をしていただき、有意義な議論ができた。

(4) 研究倫理についての学生への教育

保健学科では、27年度より「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に基づき、研究の倫理審査を行うようになった。卒業研究を行う学生全員が、年度初めに開催される研究の倫理に関するガイダンスに参加し、研究の倫理面への認識を深めている。従来、看護の卒業研究の倫理委員会への提出は研究者の判断によるものであったが、次年度から全員に義務付けられるようになった。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価については、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、保健学科は、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、教員自己評価及び学生による授業評価を引き続き行っている。またその結果については、教員へ直接フィードバックし、次年度以降の参考にしてもらっている。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
医学部(医学科)	プレ臨床実習チュートリアル説明会		0	授業(臨床実習チュートリアル)の実施をスムーズに行うことが出来た。
	CBT試験問題作成、ブラッシュアップ講習会	USBメモリ	30	CBT問題の作成及びブラッシュアップ作業を効率よく運用することができた。
	シラバス更新講習会		0	シラバス入力をスムーズに行うことが出来た。
	教育主任説明会		0	教育主任としての業務についての共通認識を持つことが出来た。
医学部(保健学科)	保健学科のピアレビュー		0	同僚教官の講義を聴講することは、参加者の今後の講義への参考となる点があり、有意義であった。
	外国語雑誌投稿のためのワークショップ		0	国際雑誌投稿用の論文作成の良い例、悪い例が示され、とても参考になった。
計			30	

第6節 来年度の課題

1. 医学科

(1) カリキュラムの国際認証に向けての準備の更なる加速

卒前の医学教育の中では、米国 ECFMG(Educational Commission for Foreign Medical Graduates)が2010年9月に出した通達に端を発した教育カリキュラムの国際認証が、大きな話題となっている。これは、国際認証を受けた医科大学部出身者に、ECFMGの受験資格を限定するとなっている。米国での臨床医学の修練を受けるためには、この試験を受験することが必要であるが、これをきっかけに単にECFMGの受験資格というより、グローバル化に対応した医学教育が求められてきている。日本国内の現状は、この評価機関そのものが立ち上げられたばかりであり、国際基準に基づく認証評価制度が確立されようとしているところである。一部の先進的な大学では、すでに米国の認証機関の評価を受けている。この中で日本の医学部に共通した問題となっているのは、臨床実習(時間数、内容)が欧米に比べて後塵を拝していることである。山口大学も例外ではなく、このことを含め、PDCAサイクルに基づいた、医学教育改善のシステムの構築が求められおり、それを外部から評価されることになる。患者安全の視点からも、医学教育の質の担保は、近年の大きな流れの一つであり、本学でも、これに対する準備を組織的に進めていく必要がある。現在は、臨床実習の期間の拡充は本年度対象学生から拡充できる体制が構築された。また授業時間の変更等も行い90分授業から45分授業への変更を行った。今後はOBEのためのカリキュラム改訂を予定している。また、国際認証対応委員会WGを医学科内に立ちあげ、議論を進める予定である。

(2) 教育主任制度の更なる充実

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。来年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指していく予定である。

(3) 学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきた。そこで、医学科6年生を対象に、山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心にした診療参加型地域医療臨床実習を、2年前より導入した。次年度は、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図りたい。

(4) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

今年の医師国家試験では個別指導を受けた受験者11名中、合格者は10名(91%)であった。成績不振者はそれまでの個別試験で成績不良であった学生が選抜されており、この合格率は個別指導の効果があつたと判断してよいと思われる。個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論を加速させた。また個別指導対象学生のアウトカム調査も行い、それなりの効果があつたことを確認できた。今後の課題として、低学年時の個別指導体制の構築と、医学科全体の対応としての担任制についても審議していく予定である。

(5) 学生携帯用臨床実習ログブックの充実

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの改訂を行った。学生と指導教員の双方にログブックの有用性を理解してもらい、積極的な活用を今後も働きかける予定である。

2.保健学科

保健学科では、医療の変化や国際化に対応でき、医療チームの一員として活躍できるとともに地域医療の向上に貢献できる人材の育成を教育目標としており、この視点から現在の教育を更に充実させる予定である。

国家試験については、今後とも高い合格率を維持するとともに、キャリア教育等の充実により進路への意識を高め、学生がスムーズに社会人として医療人として活躍していく環境を整えていきたい。加えて、大学院への進学者の増加についても取り組んでいきたい。

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通し、より国際的な人材育成のための努力を行っていきたい。APAHL への参加にあたっては、学生に対する英会話能力等の向上を促す取り組みを充実させる必要がある。27年度から新たにAPAHLに参加したニューイングランド大学との交流を進めることはもちろん、他の様々な大学とも、国際交流委員会を中心に全教員で、国際交流を深めていく予定である。

成績不振の学生や学習に何らかの困難を持つ学生に対しては、教員による指導の更なる充実と教員間の更なる連携を図っていく予定である。特に、学習に何らかの困難を持つ学生については、教員の理解を深める必要がある。27年度のFD研修会では、自閉スペクトラム症を取り上げたが、他の様々な学業および学生生活上の様々な困難を持つ学生に対する教育の在り方等について教員間で認識を共有するための機会が必要である。

第9章 工学部のFD活動

第1節 授業公開

工学部では毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も学部の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に実施した。参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配布され、授業改善に役立っている。

今年度の学科別参観者数と参観率を以下の表に示す。全体的な参観率は15%であった。昨年度は10%、一昨年度は20%であった。昨年度と比較して若干の参観率の向上が見られたが、低参観率であることは否めない。工学部では各教員が年に最低1回は授業参観することを目標として、参観を呼びかけているが目標の達成には至っていない。この件については今後の改善が必要であるが、後述の学生授業評価から判断すると、ほとんどの授業は好評価されており、これまでの授業改善の取り組みの結果と言える。

平成27年度 学科別参観者数および参観率

							※教員数は、27年12月1日付	
	教員数合計	27年度前期参観者	27年度後期参観者	参観者合計	参観者(実人員)	未参観者数(実人員)	参観率	
機 械	24	2	0	2	2	22	0.08	
社会建設	23	2	0	2	2	21	0.09	
応用化学	25	0	1	1	1	24	0.04	
電気電子	26	2	2	4	3	23	0.12	
知能情報	24	6	2	8	8	16	0.33	
感性デザイン	16	1	1	2	2	14	0.13	
循環環境	18	1	1	2	1	17	0.06	
工学基礎教育	11	2	4	6	6	5	0.55	
計	167	16	11	27	25	142	0.15	

・参観者は重複があるため(1人が両方を参観、又は同期に2回参観)、参観者合計と参観者(実人員)は必ずしも一致しない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 教育改善FD研修会

以下の要領で教育改善FD研修会を実施した。

開催学部：工学部、理工学研究科（工学系）及び医学系研究科（工学系）の教職員
日時：平成28年1月6日（水）14：10～14：50
場所：工学部D11講義室
講師：林透 大学教育センター准教授（IR室長）
参加者：69名（アンケート回収19枚）

内容

冒頭、FDコーディネータより、本研修会の趣旨について、平成26年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の主要課題であるAL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマⅡ（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。

林透准教授より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。続いてテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）の取組報告として、まずは本学におけるアクティブ・ラーニングの定義について確認がされ、新しい共通教育の開始に伴う平成26年度10月～11月に実施されたアンケートによれば、ALに関する意識として、過半数の教員は高い関心を持っているものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。ALポイント認定制度では、ALの可視化や現在設計中のベストティーチャー表彰制度を通して、AL実践への動機付けをさらに進めていく方向性が述べられた。続いて、ALポイント認定制度の運用状況としてALポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）のALポイントが紹介された。

次に、テーマⅡ（学修成果可視化）について説明があり、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定学的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による4象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系（アセスメントポリシー）について述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育では国際総合科学部で進められているCoBCuSを活用していく方向性について説明があった。

質疑

Q. PROGテストについて、その結果を閲覧する方法についてお聞きしたい。

A. PROGテストの結果については、AP委員会で報告されている。個別に結果の開示希望がある場合にも対応は可能で、学部単位で結果についてのフィードバックの要請がある場合にも対応は可能。個々の学生にはレーダーチャート（ポートフォリオ）で示すよう準備を進めている。

Q. アクティブ・ラーニング等の研修会の資料について別に提供があるかお聞きしたい。また、事例などの提供があれば教えていただきたい。

A. 研修会等の資料については希望があれば提供可能。今後は、ALベストティーチャー制度を運用することで、アクティブ・ラーニングの授業コンテンツなどを共有するシステムを構築する方針である。

Q. 「山口と世界」のルーブリックが開発されたが活用の結果についてお聞きしたい。

A. 「山口と世界」のルーブリックについては、担当者についてはルーブリック活用にあたり、指針を示している。また、活用事例に関しては『大学教育』（紀要）に掲載されており、情報提供の希望があれば提供可能。

2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会

学部・学科等の FD 活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する「講師派遣型アラカルト FD 研修会」を以下の要領で実施した。

開催学部：工学部，理工学研究科（工学系）及び医学系研究科（工学系）の教職員
日 時：平成 27 年 11 月 11 日（水）14：10～14：50
場 所：工学部 D11 講義室
講 師：奥屋 茂（保健管理センター所長）
参加者：69 名（アンケート回収 27 枚）

内容

本研修会では，大学生にみられる代表的な精神疾患の症状と原因，必要な支援と配慮について説明があった。大学生にみられる代表的な精神疾患には，統合失調症，気分障害（大うつ病性障害，双極性感情障害），不安性障害，摂食障害，睡眠障害，発達障害がある。病状の悪化は未治療であるとき，治療を中断したとき，大学生固有のライフイベント（成績不振，就職活動失敗，経済的苦境，対人関係・恋愛等の悩み）によるストレスが重なった場合に生じやすい。罹患した学生は症状が増悪すると休学し，改善すると復学することから，半年程度の休学や留年を経験する者が多い。研修会では，これらの各疾患と必要とされる支援や配慮について説明が行われ，医療機関による適切かつ継続的な治療が必要であり，学生の自己判断で治療を中断しないことが大切であることが示された。

修学支援においては，特に病識が乏しい学生の場合は，周囲の教職員による気づきが支援内容を検討する際に大きな意味を持つので，保健管理センターに相談して頂きたい旨が報告された。

精神疾患のある学生への支援においては，教員と医師やカウンセラーなどの専門職との協働が欠かせない。保健管理センターや学生相談所に自主的に行く学生は比較的対応がしやすいが，本人に病識のない場合には，周囲の教職員が保健管理センターまたは学生相談所に相談に行くように勧めて頂くことを述べられた。学生への配慮を検討する際は，「合理的配慮に基づく個別的支援」を実現するために，主治医や専門家の意見を踏まえた上で，教育的観点から適切なものとなるように検討しなければならないことを述べられた。

説明後の質疑応答では，以下の質問と回答があった。

Q1 学生が通院している場合，学生が教員に説明していることが事実かどうかを主治医に確かめることは可能か。学生が主治医に尋ねられることを嫌がる場合は，個人情報保護の観点から，主治医に聞くことは難しいか。

A1 例えば自殺が差し迫る等の逼迫した事態を除いて，基本的には本人の承諾無しに主治医から話を聞くのは難しい。このような状況の場合は，保健管理センターにご相談いただければ，医療者としての立場から学生本人の承諾ならびに主治医からの情報が得られる可能性がある。できるだけ焦らずに良い環境を保ちながら，学生に専門家の意見を聞いてみたいということで促していただくしかない。

Q2 教員が何らかの行動を起こさなければならないとき，教員は専門家ではないので対処方法がわからない。また，本人の了解無しに何かを行えば，学生から訴えられる可能性もある。このように考えると，極端に言えば，現状では何もできない状況にある。従って，このような学生に対応するには，専門家の数は限られているのだから，専門家と連携をとってくれる何らかのインターフェイスが必要である。

A2 常磐キャンパスには学生相談所があり、カウンセラーが毎日昼前後から夕方まで常駐している。いきなり医療機関への受診を勧めることは難しいと思われるので、教員が学生に同伴して学生相談所に連れて行ってほしい。また、メンタル面に不調がある学生は体調にも問題を抱えている場合が多いので、保健管理センターにも相談することを学生に勧めていただきたい。

Q2 本人も保護者も自覚がないという場合、不用意に保護者に伝えると『うちの子を病気扱いするのか』ということになる。

A2 それは、最近、発達障害のケースでよくある。

Q2 そのようなときにカウンセラーに相談しようとする、カウンセラーは1人しかいないので診てもらおうことさえできないことがある。従って、カウンセラーの数を増やす等の抜本的な対策をしてもらわないと、率直に言うと、一番困っているところでは全く解決につながっていない。

A2 カウンセラーが不足していることは、講師も把握している。人員を補充してもらえるように関係者に要望をしている。

Q2 現状は切迫した状況にあり、教員に過大な負担となっている。教員が過労で倒れそうな状況にある。教員側のメンタルについてもぎりぎりの状態にある。カウンセラーの増員が無理であれば、対応してくれる事務員を配置するなど早急に対応していただきたい。今すぐ現実的な解決策が必要な状況であることをご理解いただきたい。

A2 貴重なご意見をいただき感謝している。関係諸部署と早期に協議し、できる範囲での対応を考えていきたい。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「少し時間が足りなかった」、「様々な精神障害に服薬等が効果的であると知った。異変を感じたらなるべく早く専門家に相談すべきと感じた」、「具体的にどう対応するかがわからなかった。学生に声かけをすることで、精神に影響を及ぼす恐れがある場合はどのように対処すべきか?」、「学生の精神障害について、対応の仕方について、もう少し詳しくお話しいただけると良いと思います」、「医療費の補助金（障害者総合支援法）があることを知ることができた」、「精神障害の特徴について良くわかりました」、「現場の教職員からどこに報告するのか、どこがその教職員を支援してくれるのかが知りたい。そういう枠組みを作ってほしい」、「病状毎に具体的説明があったのが良かった」、「それぞれの障害について良く理解できた」、「対応策を示してほしい」、「対策を聞いたかった」、「理解しにくかった」、「以前よりも精神的に弱い学生が増えた気がする」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

(1) 工学部サロン

平成18年度（2006年度）から、吉田キャンパスの研究1号館の1階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では工学部1年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部教員のOB、大学院生が待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっていく。

(2) 工学部教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析してあたらしい企画を提案し、教育実践活動を

文章としてとりまとめ、学内外に公表するための工学部付属のセンターである。また、「山口大学工学教育」の発刊も行っており、これまで第9巻まで発行されている。

(3) 「山口大学工学教育」の発刊

(2)で触れた「山口大学工学教育」は、工学教育に関する論文、調査報告、学外シンポジウムなどの参加報告、各学科における教育改善の事例報告などが掲載されており、工学部における教育改善に役立っている。

(4) グローバル技術者養成センター

平成25年度(2013年度)に常盤台キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科グローバル化教育プログラム開発が実施されている。教員のFD研修として海外研修プログラム開発や専門科目のバイリンガル化が進められると同時にグローバル教育プログラム実施のための英語テクニカルコミュニケーション教材やアクティブラーニング教材などの開発が進められている。また、教員に対するSD研修プログラム開発とその実施が行われており、教職員のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取り組みが協力で進められている。

(5) ステップアップノートの配布

平成23年度(2011年度)から全学科の1年生に対して「ステップアップノート」の配布を始めている。また平成24年度(2012年度)に「ポートフォリオ」として利用することが工学部学生委員会で承認された。今年度においても1年生にステップアップノートが配布された。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。平成19年度に「学生授業評価実施要綱」を制定し、これに従って優秀授業を選考している。学生授業評価の質問項目の中で、

項目2：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

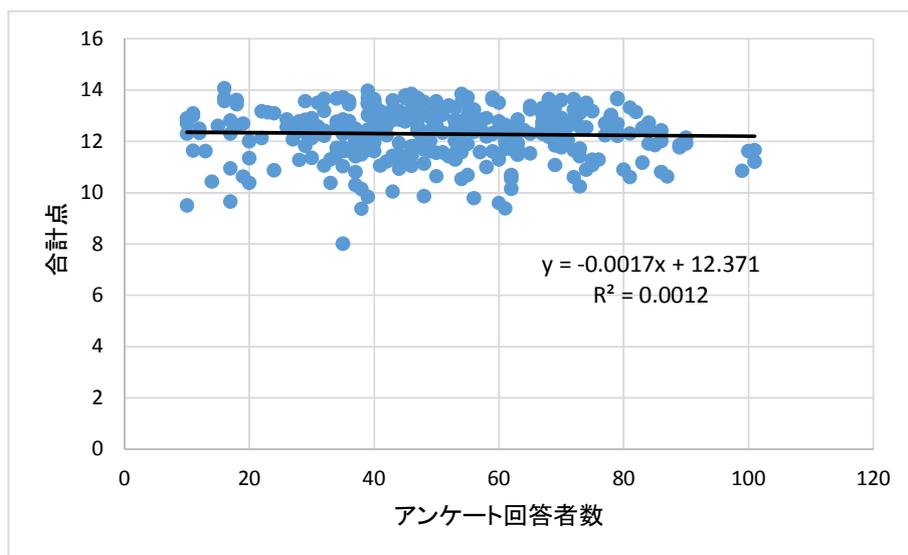
項目9：あなたは授業の内容を理解しましたか？

(実習・演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

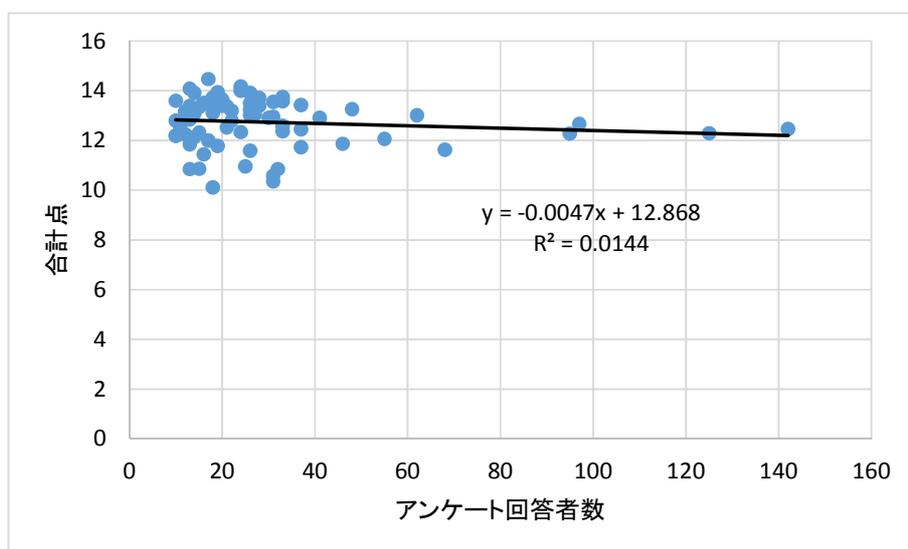
項目10：この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

の3項目の合計点を出し、アンケート回答者数と合計点の相関を考慮した補正式から補正合計点を算出する。学部ではこの補正合計点の上位10%、大学院では上位20%の授業を「優秀授業」としている。さらに各学科、各専攻で最高点の授業を「最優秀授業」として、この授業の担当教員を表彰している。

今年度の工学部と大学院博士前期課程(工学系)の授業について、上記3項目の合計点と授業評価アンケート回答数の相関を以下の示す。学部は343科目、大学院は75科目である。



合計点と回答者数の相関（工学部）



合計点と回答者数の相関（大学院）

学生に対する質問の回答では「そう思う」が5点、「ややそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「そう思わない」が1点である。したがって、合計点が9点以上12点未満であれば概ね良い評価、12点以上であれば良い評価と考えて良い。

工学部では12点以上の科目が232科目、9点以上12点未満の科目が109科目、9点未満の科目が1科目であった。68%の科目が良い評価を受けている。また全体の平均値は12.3点であった。大学院では12点以上の科目が61科目、9点以上12点未満の科目が14科目、9点未満の科目が0科目であった。81%の科目が良い評価を受けている。また全体の平均値は12.7点であった。以上のように、工学部、大学院ともに学生からの評価は総体的に良好である。しかしながら、このような評価に満足せず、今後も授業改善のための活動を進めていきたい。

次ページに平成26年度の工学部および大学院の優秀授業の一覧を記載する。

平成 26 年度工学部優秀授業

	開設科目名	主担当教員名	学科	コース	区分	Z値	備考
1	流体工学I	望月 信介	機械工学科	航空宇宙コース	講義	13.77	
2	流体工学I	望月 信介	機械工学科	生体・ロボットコース	講義	13.67	
3	工業熱力学I	田之上 健一郎	機械工学科	航空宇宙コース	講義	13.62	
4	材料力学I	古賀 毅	機械工学科	生体・ロボットコース	講義	13.58	
5	建設情報基礎工学	鈴木 素之	社会建設工学科		講義	13.763	
6	構造力学I	清水 則一	社会建設工学科	東アジア国際コース	講義	13.757	
7	土質力学演習I	中田 幸男	社会建設工学科	東アジア国際コース	演習	13.73	
8	構造力学演習I	清水 則一	社会建設工学科	東アジア国際コース	演習	13.72	
9	防災工学	鈴木 素之	社会建設工学科		講義	13.72	
10	土質力学I	中田 幸男	社会建設工学科	東アジア国際コース	講義	13.64	
11	配位化学	中山 雅晴	応用化学科		講義	13.94	
12	遺伝子工学	赤田 倫治	応用化学科		講義	13.71	
13	物理化学I	森田 昌行	応用化学科		講義	13.61	
14	数理計画法	若佐 裕治	電気電子工学科		講義	13.78	
15	電気回路II	山田 陽一	電気電子工学科		講義	13.76	
16	半導体工学I	山田 陽一	電気電子工学科		講義	13.63	
17	プログラミング演習I	瀧本 浩一	知能情報工学科		演習	13.82	
18	プログラミングI	瀧本 浩一	知能情報工学科		講義	13.79	
19	建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科		講義	13.87	
20	空間デザイン論	内田 文雄	感性デザイン工学科		講義	13.81	
21	空間心理学	松田 憲	感性デザイン工学科		講義	13.72	転出
22	建築環境工学基礎	樋山 恭助	感性デザイン工学科		講義	13.61	
23	基礎デザイン実習II	木下 武志	感性デザイン工学科		実験・実習	13.60	
24	感性心理学	松田 憲	感性デザイン工学科		講義	13.58	転出
25	空気調和計画法	小金井 真	感性デザイン工学科		講義	13.53	追加
26	界面物理化学	比嘉 充	循環環境工学科		講義	14.04	
27	東アジア文化論	今井 剛	循環環境工学科		講義	13.93	
28	応用物理学I	嶋村 修二	循環環境工学科		講義	13.80	
29	廃棄物処理工学	今井 剛	循環環境工学科		講義	13.77	
30	環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	循環環境工学科		講義	13.76	
31	循環環境工学実験II	今井 剛	循環環境工学科		実験・実習	13.65	
32	ものづくり創成実験	今井 剛	循環環境工学科		実験・実習	13.65	
33	地球環境論	三浦 房紀	循環環境工学科		講義	13.62	
34	量子力学II(電電)	仙田 康浩	工学基礎教育		講義	14.10	
35	応用物理学(電電)	真田 篤志	工学基礎教育		講義	13.73	
36	エンジニアリングコミュニケーション基礎 I (社建)	ANTHONY G HOYSTED	工学基礎教育		講義	13.55	追加
37	特許法	佐田 洋一郎	全学科共通		講義	13.64	

平成 26 年度大学院優秀授業

	開設科目名	主担当教員名	学科	Z値	備考
1	土壌環境工学特論	MD. AZIZUL MOQSUD	社会建設工学専攻	14.28	
2	構造材料学特論	吉武 勇	社会建設工学専攻	14.14	
3	都市環境工学特論	今井 剛	社会建設工学専攻	13.81	
4	地域情報システム工学特論	三石 真也	社会建設工学専攻	13.61	転出
5	地盤防災工学特論	兵動 正幸	社会建設工学専攻	13.58	追加
6	化学分析特論	吉本 信子	物質化学専攻	14.03	
7	電子化学特論	森田 昌行	物質化学専攻	13.99	
8	表面材料化学特論	酒多 喜久	物質化学専攻	13.73	
9	結晶工学特論	小松 隆一	物質化学専攻	13.70	
10	固体触媒特論	今村 速夫	物質化学専攻	13.65	
11	機能分子合成特論	山本 豪紀	物質化学専攻	13.62	
12	有機化学特論	西形 孝司	物質化学専攻	13.58	追加
13	半導体物性特論Ⅱ	山田 陽一	電子デバイス工学専攻	14.11	
14	メタマテリアル特論Ⅱ	真田 篤志	電子デバイス工学専攻	13.74	
15	感性心理工学特論	松田 憲	感性デザイン工学専攻	13.84	転出
16	システム解析学特論	河村 圭	環境共生系専攻	14.03	
17	都市防災システム特論	瀧本 浩一	環境共生系専攻	13.90	
18	科学・技術英語特論B	ANTHONY G HOYSTED		14.55	

第5節 FD実施経費報告書

今年度使用したFD実施経費は以下の表の通りである。

平成27年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
工学部	工学部ポータルフォリオ(ステップアップノート)の改訂	消耗品、印刷費	45千円	平成28年度学部生に対する教育改善の準備
計			45千円	

第6節 来年度の課題

来年度の課題として、以下のようなことを検討したい。

(1) 公開授業の参観率の向上

参観率は前年度 10%から 15%となったが依然として低い参観率である。工学部の点検・評価委員会で各学科委員を通して参観を呼び掛けているが、決定的な参観率改善にはつながっていない。引き続き点検・評価委員会で検討する。

- (2) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み
これまでも、入力率向上のために、学科長・専攻長会議などにおいて、学科長などを通して、入力を促すことをしている。今後もこのようなお願いをしていく。一方で、教員にとって負担とならない入力項目内容や項目数にしていく必要があると思われる。大学教育センターに要望したい。
- (3) 授業外学習時間の確保、適正な成績評価
工学部では JABEE に代表されるように工学教育において学習時間の確保、適正な成績評価について十分な理解とその実践がすでに行われている。これを今後も続けていくことはもちろんであるが、改善の取り組みなども点検・評価委員会で検討していきたい。
- (4) 共通教育における試験監督体制
点検・評価委員会で問題点を整理した上で検討していきたい。

第 10 章 農学部の F D 活動

第 1 節 授業公開

1. 生物資源環境学科の授業公開（ピアレビュー）

生物資源環境科学科では、年度当初の学科会議において、学科長から「ピアレビュー実施計画」が提案され、ピアレビューの授業担当教員と評価担当教員の組み合わせが決められている。授業担当教員と評価担当教員は、日程調整を行い、ピアレビューを行う授業を決定する。評価担当教員は、ピアレビュー後に「ピアレビュー実施報告書」を学科長に提出するが、本報告書はその後授業担当教員に渡され授業の改善に活かされることとなる。

本年度は、提案自体なされたものの、日程調整等の問題から非実施であった。来年度以降、学科会で実施の徹底や実施日の報告を行うなど、綿密な調整等の改善策を実施したい。

2. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学科セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員どうしの意見交換もあったが、ピアレビュー報告が行われなかった。次年度は、ピアレビュー報告を提出するように改善したい。以下に、本年度に実施した公開授業（7件）を示す。

(1) 呼吸筋のはなし

日時：平成 27 年 4 月 23 日（金）17 時～ 宮田浩文 教授

(2) 活性酸素と活性カルボニル～からだがつくる毒物のふしぎ
日時：平成 27 年 5 月 28 日（木）17 時～ 真野純一 准教授

(3) 微生物の耐熱性と高温でのエタノール発酵生産
日時：平成 27 年 6 月 26 日（火）17 時～ 山田守 教授

(4) 炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析
日時：平成 27 年 7 月 21 日（火）17 時～ 藤井克彦 准教授

(5) 酢酸菌の細胞内代謝に関する研究
日時：平成 27 年 10 月 30 日（金）17 時～ 薬師寿治 准教授

(6) 植物は臭いを出したり、時には吸ったりしている 一何のために？それに、鼻もないのにどのように？
日時：平成 27 年 11 月 20 日（金）17 時～ 松井健二 教授

(7) 鉄-ポルフィリン錯体の電子状態研究からヘムの酵素的分解過程の研究へ
日時：平成 28 年 1 月 22 日（金）17 時～ 右田たい子 教授

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

農学部では、派遣型アラカルト FD 研修会および教育改善 FD 研修会を以下の内容で開催した。

1. 平成 27 年度 派遣型アラカルト FD 研修会

「就職・採用活動時期の後ろ倒しと山口大学の就職支援 Ver2.0
(農学部 FD 研修会)

日程 平成 27 年 9 月 15 日(火)
[吉田地区] 14:30～15:30
場所 農学部本館 2F 大会議室
(吉田キャンパス)
講師 平尾 元彦先生
(学生支援センター教授)
参加者 27 名(アンケート 21 枚回収)



内容

本年度より、就職活動・採用活動の後ろ倒しが今年から始まった。現在の状況は 8 月に事実上の解禁になって一気に内定が出ているという状況で、おそらく 10 月現在の数字は昨年とそれほど変わらないと予想される。就職活動・採用活動の後ろ倒しの背

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	23.8%
良かった	11	52.4%
どちらとも言えない	3	14.3%
あまり良くなかった	1	4.8%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

景、元々は大学からの問題提起がスタートになっている。経済界が主に採用することもあり、日本経団連が中心になって採用の秩序をどのようにしていくのか、一時期協定がなくなった時期もあるが、倫理憲章と言う形で日本経団連を中心に、3年生の10月採用広報の解禁、4年生の4月採用選考の解禁となっていたのが少し後ろ倒しになり12月解禁、4月解禁というのが良く知っているルール。それに対して大学がどのように言って来たかと言うと、従来学生の就職採用活動の早期化・長期化の是正を大学関係団体の総意として経済団体にずっと要請してきていた。倫理憲章の23年3月の改訂で12月解禁にしたが、依然として大学の授業、学事日程と重複し、学生の成長が最も期待される3年次の教育に支障または留学の断念という傾向が見られるので、更に見直して欲しいということを大学側の総意として経済界に要請をしていたという経緯がある。2013年4月に安倍首相が経済界へ「学生の就職活動に関して早期化長期化を是正するよう」要請した。同時に今年は初年次なので就職活動時期の見直しにより、就職活動期間が短縮されることになるため学生に不安と混乱が生じないように、それによって学生が不利にならないようにして欲しいという要請も合わせて行われている。

当初、採用活動が後ろ倒しにされた関係で、就職できない学生が増えるのではないかと懸念された。今でもその懸念はあるが、それについてそういう事がないようにということも含めてのきめ細かな対応が求められている。就職ナビ各社はサイトオープンを3月1日にしていたことから、3月以前に学生にメールを出したり、学生から何か受け付けたりするのが企業側はかなり難しくなり、結果的に大学および政府側の要請はほぼ守られた。12~2月の学業の影響はかなり少なくなったと思われる。8月以降に採用選考を開始して欲しいという要請は、守った企業もあるが守ってない企業もあった。国家公務員採用試験、地方公務員採用試験は若干後ろに日程が下がったが、大きく変わってはいない。国家公務員は6月に試験、採用面接は8月以降で、もうほぼ国家総合職、一般職、県庁の内定が出ている状況であり、市役所もこれに続くと思われる。その一方で、3月以降でも実施可能なインターンシップの採用結果への影響が強くなってきている。インターンシップ採用、という言葉が出て来ているくらいであり、インターンシップ来た学生に特別ルートで特別な日に呼んで採用にむけた繋がりを保つという企業の活動起きている。まら、経団連の会長の記者会見の中で、平成28年度の日程は必要に応じて見直す可能性があるという話が出て来た。

他方、就職活動の時期を後ろ倒しにする要請に加えて、大学側からは、学業成果(成績や履修履歴)をもって採用選考の評価をして欲しいと合わせて要請している。今までの採用選考では4年生になってすぐと言うことで、あまり修論、卒論のことを聞かれることがなく、これに対する懸念から来た要請であった。学生から聞く限りは聞かれるケースが増えているようである。

これら以外の話題として、「オワハラ」に関する情報提供があった。4年生の12月以降になると、毎年一定数の学生が進路未定として残ることになるが、後ろ倒しの影響なのか、人手不足の影響なのかかわからないが、中小企業は非常に採用意欲が高い。人材を一人でも多く獲得したい意思が悪く表れることがあり、これがいわゆる「オワハラ」である。内定を出した学生にそれ以上他社の採用試験を受けるなという圧力的依頼である。現時点では山口大学の学生からは悪質なケースは報告されていない。他方、教員サイドが学生に卒業研究等に注力するよう指導したことが行き過ぎて、同様の「オワハラ」が発生する場合もある。学校の教員側のハラスメントにならないような配慮を心掛ける必要がある。

最後に、山口大学就職支援室の紹介と協力依頼があった。支援室では、確実に学生達が就職出来て進路得られるようにと言うことで様々な活動をしており、学内の行事、就職支援室の積極的な活用を是非促して欲しいという依頼が教員側になされた。学業と並行した就職活動を実現し、出来るだけ大学に来てもらえる会社には来てもらい、学生側が実験等との両立を効率的に出来るようなことを計画している。今年も学内業界・企業研究会、11月~2月に約500社来て頂く予定にしている。また、今年は農学部 day を12月と1月、2回に拡大しての実施できるよう準備している。進路未定学生の重点支援も重要であると思われるが、何よりも正確な把握が必要である。教員の方で研究室の学生の状況を把握して頂くと共に、それを支援していく目的でハローワークと連携し、相談日を設ける事

にした。特別な配慮が必要な学生、コミュニケーションが上手く行かない学生等については学生特別支援室と連携して早目の取組を行っていきたいので、教員側からは早目に情報提供を通して協力頂きたい、との依頼があった。

質疑では次のようなやり取りがあった。

Q: 農学部の自分の知っている範囲では、学生の地元志向、出身地への志向、公務員志向が強くなっているように思う。それが同じ学部の同窓生同士が競合してしまうことがある。下級生から視野広くしていく必要あると思うが、我々として具体的にどういうことをしたら良いか考えても良く分からないのでアドバイスがあれば教えて頂きたいことと、もう 1 つインターンシップが踏み絵になったり、成績が重要視されるのはインターンシップの学生の話聞いてもそう思うが、ちょっと変な視点だが、例えば学士力という言葉が中教審で出されて、そこでは専門性よりプレゼン能力とかコミュニケーション能力と言う事の方が重要視されて、そういう事のベースに山大では共通教育のシステムを変えたりとか、インターンシップも長期インターンシップということをいろんなところの予算に入れてきているということで、社会のものと山大の中のこと整合性が取れなくなる気がしていて、自分もそれに絡んでいたの、その辺は先生からも資料まとめて山大全体に警鐘鳴らして頂きたいところではあるなど。質問は地元志向について。

A: 地元志向は高まっているどうかは分からないが、確実に高いのは事実。調査はしてほぼ 66. 数%くらいと思うが中四国九州出身者の山大生の地元が良いですかと言うとだいたい 2/3、どこでも良いというのが 1/3 くらい。従って特に農学部と言う同じ学部の卒業生がある食品会社に競合するということは非常に有り得るような話であって、お互い辛いなという現状はあろうかと思う。一つは結果的に地元が良いと言うのはあるが、それはあり得る話なので、それは良いとしても、何も考えずに、あるいは何も知らずに、というのはあまり良くないことだと思う。我々として今やっているのは、一つは学内業界・企業研究会、これは全国から企業が来るので、5~6 年くらい前は就職活動向けと言うことで 3 年生対象にやっていたが、学年は取っ払っている。なかなか低学年は来ないが低学年の学生もちょっと話聞きに行こうということが気軽に出来るようなそんな体制づくりはとっている。今年はよりそれ強化して 1 年生向けの広報も強化して行く事になろうかと思う。従って農学部の 1 年生、2 年生の方も今日は森永製菓が来る、どんな会社かちょっと聞きに行こうでも良いし、地元の会社が来る、それも聞きに行けば良い、その上で自分はどんな可能性があるのかということをやちゃんと確かめられるそういう環境、直接企業と会うということは作って行こうと思う。

もう 1 つ我々力を入れているのは本読むと言うこと。全ての学生についていちいち我々が指導するわけには行かないので、例えば食品業界であればどんな会社があるのかなとか、食品業界で開発した人ってどういう生き方をしているのかなと言うことを本で読み理解することによって、自分の可能性って凄くあるよねって言うことを分かってもらったら良いなと言うことで、就職支援室に本を沢山入れています。今 2800 冊くらいあって貸し出しもしていますので、それを 3 年生はもちろんですけど、1 年生から読むようにと言う形で働きかけている。まだこのくらいしかできてない状況ではあるが、こういうこと推進するために先ほど申し上げた学生支援センターキャリア NEWS と言うのを 1~2 年生向けに 11 月から配信するようにしたので、1~2 年生も一応メールは来ているので、ああいうのに行ってみたいなと思えばいける状況ではあるが、なかなか思わない。就職活動まだまだだよ、みたいな、そんな感じはあろうかと思う。一応、基盤としての広報、あるいは掲示等で知らせるということ。低学年向けの物も作っている。もし、やるとすれば、より分かり易く例えば農学部の 2 年生向けに企画するとか、農学部のこういう医薬に興味のある人にこういう企画をするとか、少しそんな取り組みも発展形としてはあり得るかなと思うので、もし先生方の方でこれ良いよねというのであれば一緒に出来ると思う。もう 1 つのインターンシップ等に関しては、実際に踏み絵的になっている面はある。正直に言えばあるが、一方でインターンシップに行かないと就職できないかと言うとそれ

もないだろうと思う。特に大手の技術系を採用する会社の中でインターンシップ来てもらうとありがたいがそんなに来られない。特に優秀で一生懸命実験とかに頑張っている学生ほどなかなか来れないという面があるので、結構探していると聞いている。優秀な技術系の学生を大学に探しに行っているという面があると聞いている。インターンシップというのは一つの手段なので、行ける人は行って頂ければ良いと思うが、いけない人は無理して行く必要はない。ただ、企業の人が来た時にはちょっと会いに行くとかそのくらいはして頂かないと結局接点持てないというのはあるかと思うので、インターンシップはあくまで一つの手段であって、これじゃないといけないというものではない。いろんな接触の機会はあるが、出来れば早目に接触しておいて頂くことが、その後の効率的な就職活動に繋がっていくのではないかと思う。

Q: 本と言うのは具体的にどんな？

A: いくつかカテゴリーあるが、面接の達人とかいわゆる就職活動の本はもちろんある。あるいは業界研究、医薬品業界とか、業界本、これも結構ある。それ以外に三つ力を入れている物があって一つは理系本コーナーと言うのがある。技術者の事を書いている本を集めている。ノーベル何とか賞を受賞した人の本などがある。それから働くことを研究する本ということでこれは小説とかも含めて必ずしも就職活動ではない人の生き方を書いている本、特に稲森和夫のなんとかとか、松下幸之助のなんとかとか比較的有名な方々が本をたくさん書かれているのでそういった本を通じて働くってどういう事かなと考えるということ。もう一つのコーナーは社会人基礎力のコーナーでこれはサラリーマンの方がよく読む例えばスピーチの仕方だとか企画書の書き方であるとかそういった一般向けの本で、決して大学生向けに書かれているわけではないが、企画書の書き方の本を読んで採用面接のプレゼンテーションに臨むとかそういったことも必要かと思う。こういったジャンルの本を入れているので、山口大学の就職支援室は結構そういう意味で特徴があって一種の図書館的な情報センター的な役割も果たしている。

アンケートでは以下のような意見が見られた。(原文まま)

学生への就職指導へのヒントがいただけた

現状理解が深まった

就職活動の現状を知ることが出来た

学生にどのようにアドバイスすれば良いか、なんとなくわかった(注意点含め)

貴重な情報を得ることができました

特に目新しい内容ではなかった

今後の研修内容の希望については以下のような意見が見られた。

魅力的な講義の作り方

モチベーションの低い学生へのやる気の出させ方(研究室でのふるまい等について)

全学学生の状況などがわかるもの

就活

2. 平成 27 年度 教育改善 FD 研修会(農学部・農学研究科・医学系研究科(農学系))

日程 平成 27 年 10 月 21 日(水)

[吉田地区] 14:30～15:30

場所 総合研究棟 3F
(吉田キャンパス)

講師 林 透
(大学教育センター)

参加者 30名(アンケート 15 枚回収)



内容

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル)」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目 (共通教育) で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に評価間接評価・直接評価、横軸に心理測定的パラダイム (定量的測定)・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム (定性的測定) をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG (Progress Report on Generic Skills) テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCus についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 PROG テストは今後どのように実施してゆくのか。データを提供してもらえるのか。

A1 現在、学部 1 年生と 3 年生で実施している。今後、1 年時にテストを受けた学生が 3 年時に再度テストを受ければ、経年変化を観察できる。これらのデータは、各学部提供する予定である。

Q2 PROG テストは主に正課外学習を対象としているのか。

A2 正課と正課外の両方を対象としている。

Q3 AL ポイントについて、実験・実習は最大 14 ポイントのうち 6.99 ポイントしかないが、これは低すぎるのではないのか。

A3 講義系の科目の平均ポイントは 4.25 であるから、これと比較すると実験・実習のポイントが極端に低いとは思わない。経験的に AL ポイントが 10 ポイントを超える授業は希であることから考え

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	20.0%
良かった	7	46.7%
どちらとも言えない	4	26.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

ても、実験・実習のポイントは妥当ではないか。実験・実習について授業によってALポイントに大きなばらつきがあるが、これは今回初めて入力を行ったため、教員によってALの解釈に違いがあるためだと考えている。今後はどのような活動をALポイントに含めるかについて教員間で共通認識を深めながら、更に検討を進めてゆきたい。

Q4 ALポイントの数値には意味があるのか疑問に思う。例えば3ポイントと4ポイントでは、その差にどの程度意味の違いがあるのかわからない。また、数値が2倍になれば実際のALの割合も2倍になるのか。

A4 今後データを蓄積しながら、ALポイントがある程度の目安になるように検討したい。

Q5 ALポイントがシラバスに表示されているが、これが原因で非常に閲覧しにくくなっている。多くの学生からシラバスが見にくいとの苦情を聞いている。改善して頂きたい。

A5 問題を認識している。現在、修学支援システムの改修を進めているので、改善してゆきたい。また、学生に対してもALポイントについて説明をして理解を求めてゆきたい。

Q6-1 頑張る学生と頑張らない学生は意欲に極端な差があり、中には全くやる気がない学生がいる。ひとつの問題は、現状では学生にはどこまでがんばってどういう達成度を上げたらトータルで合格するのかという基準がわからない。従って、例えばALの一環としてグループワークで調査をさせると、「調査に行く」と言って遊んでいる学生がいる。他のグループと比較すると、このような学生はわかる。本来であれば、学生本人がこれではあまりにも恥ずかしいと思って頑張ることを期待するが、現実には全く関知しない学生がいる。このような学生を何とかしなければならないが、これについては方策があるのか。

A6-1 グループでの活動が多いとフリーライダーが出てくるので、ルーブリックの仕組みも使いながら、グループでの評価に加えて個人についてもグループにどう貢献したかを書かせるようにしている。これによって大体状況がわかるので、その結果を学生にフィードバックしている。

Q6-2 それはすでに実施した。しかし、グループ全体で口裏を合わせるので効果はなかった。したがって、グループ全体の評価を下げるしかなかった。そうすると、そのグループで頑張った学生が足を引っ張られて悪い評価になってしまう。この経験から、やはり評価は個人に対して行うべきものであると考える。よく頑張る学生はそのままにしても伸びる。そこで、まず何割ぐらいの学生をどのようにして伸ばしてゆくかについての目標が必要である。それぞれの学部で具体的に目標を決めるべきではないか。

A6-2 我々が依拠している教育理念に育成しなければいけない力を定めているので、これに根拠を持たせようとしている。各学部にはディプロマポリシーを定めてもらい、全学でも目標は必要だと思うが、何割かということになると難しい。

Q6-3 大学としての質保証ということが言われているのだから、その質に達していなければ卒業させないようにして質を保証することが強く求められている。学生に対してはこのような方針であることを具体的に説明し、文書で明示するのはもちろんのこと、どのような方法で学生を教育してゆくかを検討すべきではないか。

A6-3 そういう意味で汎用的能力についてはPROGテスト等で目標を見せるということと、CoBCusでどのように結果を判断しサポートしてゆくかを考えている。

Q7 シラバスにALポイントを掲載することは、学生にとって何のメリットがあるのか。かえって、楽をしたい学生はALポイントが小さな授業は単位取得が容易と考えて選択するのではないか。

A7 実際にそのような結果もある。ただ、ALポイントが上がれば理解度や満足度が上がるという結果もあるので、学生にもALが役立つという説明を継続的にしてゆきたいと考えている。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「カタカナ用語が多く理解できない点が多かった（リテラシー、コンピテンシー、ルーブリックなど）」、「わかりにくい用語が使われていた」、「評価についての話は初めて聞くような内容で勉強になりました」、「アクティブ・ラーニングについて認識が深まった」、「カタカナ用語が多く、わかりにくい部分があった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「ALの事例紹介」、「学内外の具体的な例を紹介頂きたい」、「ALの効果の実証」、「学生のモチベーションについて」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

1. カリキュラムポリシー

農学部のカリキュラムポリシーを改善し、内容をさらに充実されるとともに文言の修正を行った。

本学部では、人類の生存を支える安全な食料の効率的生産、生態環境の保全、生物資源の機能開発のための高度な教育を行い、先端的研究を通じて、地域、社会の発展に寄与し、国際的に活躍できる人材を養成するため、以下の方針に沿って、教育課程を編成します。

【生物資源環境科学科】

1年次には、「共通教育科目」および「専門基礎科目」を履修し、学士としての一般基礎能力を身につけ、現代農学および応用生命科学の基礎となる物理学、化学、生物学及び情報科学の基礎知識を修得します。また、生物資源環境科学の概念と学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案する能力を養います。さらに、自分の考えを相手に伝えるためのコミュニケーション能力を養うとともに、国際的な舞台で活躍するために必要な語学力を磨きます。2～3年次には、まず、専門教育の基盤となる「基礎理論系科目」を履修し、自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識やコンピュータを応用した情報処理能力を身につけ、さらに、「発展理論系科目」と「実験・実習系科目」の履修を通じ、生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて農学的諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につけます。また、将来の進路を展望し、自ら進むべき進路を決定する能力を養います。4年次には、学科教員の研究室に所属して、「特別演習」、「卒業論文」を履修し、3年次までに修得した専門応用能力のさらなる向上を図るとともに、研究成果のとりまとめ、発表、討論など一連の農学的研究能力を身につけ、多様化・複雑化する諸問題への関心とその解決に向けた自己研鑽能力を養います。

【生物機能科学科】

1年次には、「共通教育科目」及び「専門基礎科目」を履修し、学士としての一般基礎能力を身につけ、現代農学および応用生命科学の基礎となる物理学、化学、生物学及び情報科学の基礎知識を修得します。また、生物機能科学の概念と学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案する能力を養います。さらに、自分の考えを相手に伝えるためのコミュニケーション能力を養うとともに、国際的な舞台で活躍するために必要な語学力を磨きます。2～3年次には、まず、専門教育の基盤となる「基礎理論系科目」を履修し、生化学ならびに有機化学の基本的な知識を学び、さらに、「発展理論系科目」を履修し、応用生命科学ならびに環境科学の知識を習得します。また、「実験・実習系科目」では、当該分野の技術者として求められるバイオテクノロジー等の技法や考察力を身につけ、将来の進

路を展望し、自ら進むべき進路を決定する能力を養います。4年次には、生物機能化学講座または環境生化学講座の研究室に所属します。「卒業論文」、「特別演習」及び「専門英語」を履修することで、農学、生物科学、環境科学の分野が抱える諸問題について自ら解決法を模索し、当該分野の技術の発展に貢献できる人材となれるよう学修します。さらに、生物と環境の相互作用を科学的に理解し、環境問題に対応できる人材としての素養も身につけます。

2. ディプロマポリシー

農学部および各学科は以下のディプロマポリシーを策定したが、生物機能科学科の記載がややシンプルすぎるとの意見もあり、今後両学科間で統一性を持たせるように修正することもありうる。

農学部

1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけています。
2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけています。
3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけています。

生物資源環境科学科

1. 修学計画能力：生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を修得します。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できます。
2. 一般的基礎能力：語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を身につけています。
3. 農学基礎能力：自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識と応用力を身につけています。
4. 専門応用能力：生物資源環境科学科に関する総合的専門知識および技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につけています。
5. コンピュータ応用能力：生物統計学に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速的に解決できます。
6. 農学研究能力：農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができます。また、発想から成果に至るまでの研究過程を明解にレポートにまとめ、プレゼンテーションするとともに、討論できる能力を身につけています。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改善することができます。
7. 農業・農村地域の環境の課題における指導力：生物多様性をはじめ、農業、農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を身につけています。
8. 自己研鑽能力：多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心を持ち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させることができます。
9. 進路計画能力：農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できます。

生物機能科学科

1. 生化学の基本的知識とバイオテクノロジー等の技法を活用し、生物科学分野で社会貢献できま

- す。
2. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、問題の解決に取り組むことができます。
 3. 科学技術の発展に関連した社会全体の問題について、自ら課題を見出し解決に取り組みます。

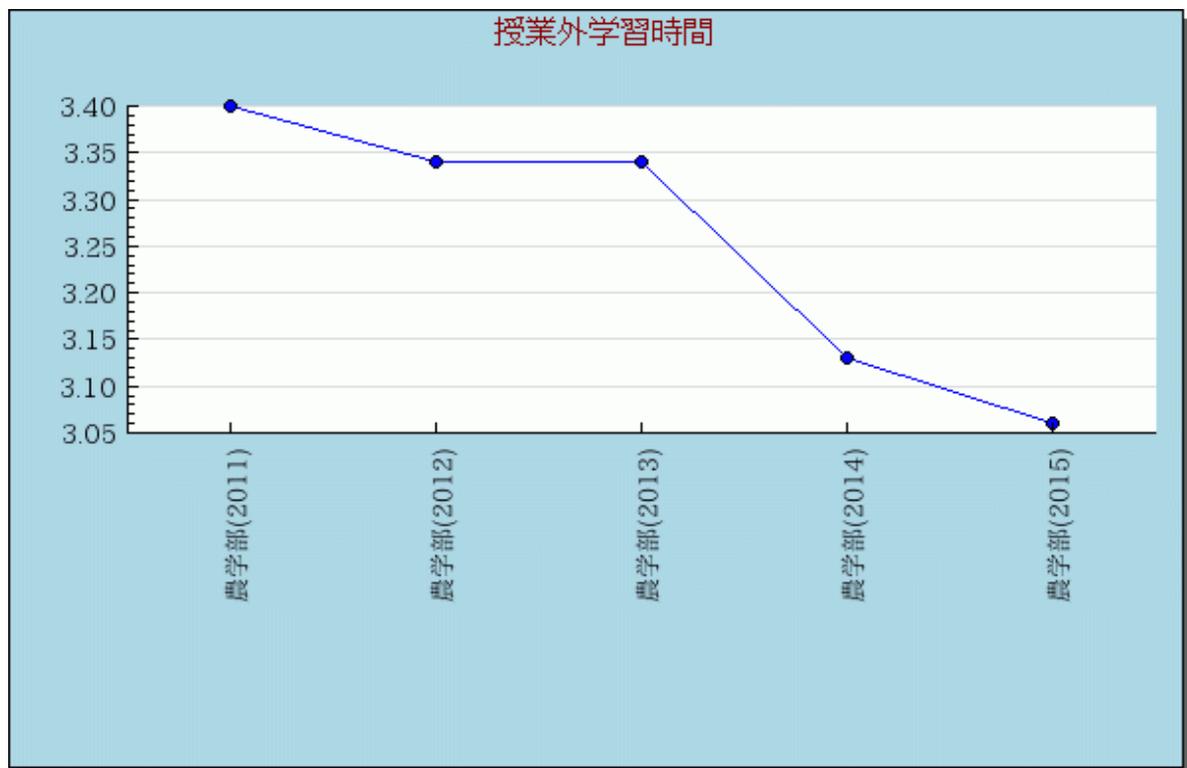
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生授業評価

5項目（学習時間、学習目標達成、理解、満足、出席）すべてにおいて、直近5年間では高い評価が得られる傾向となっている。今後もこの傾向を維持していきたい。

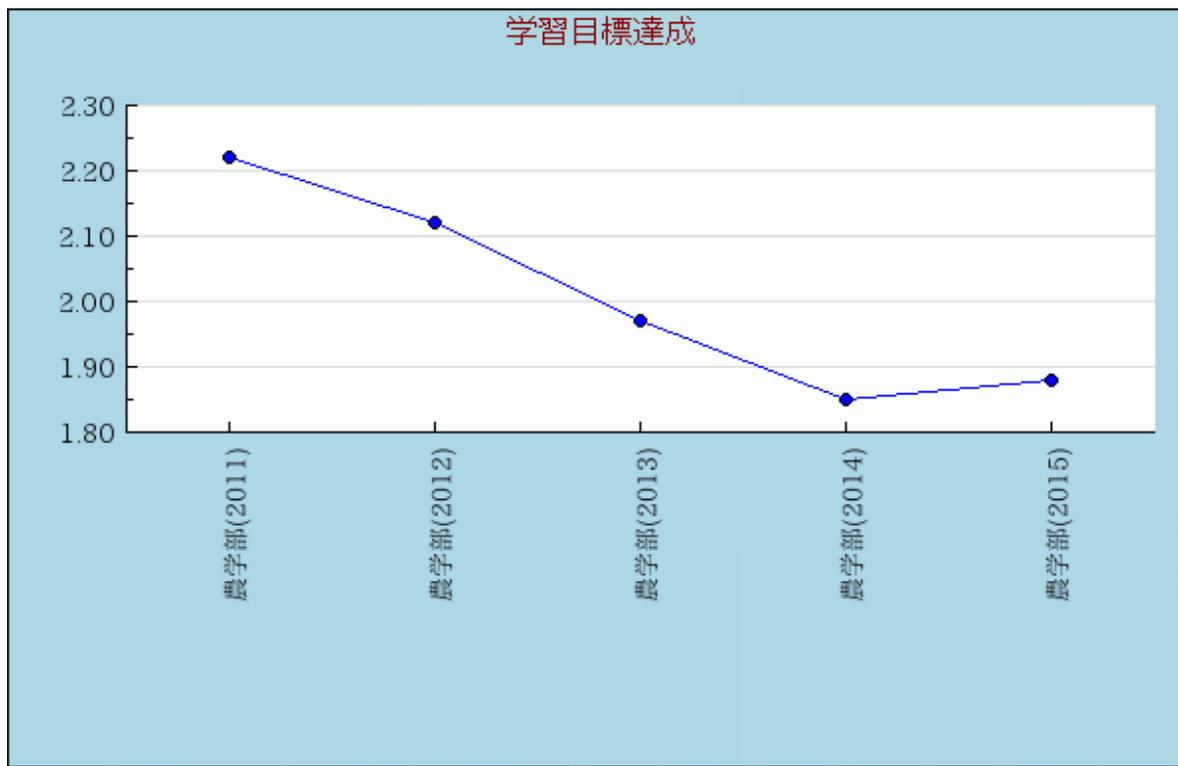
回答数

	講義	講読	演習	実験・実	語学（共	語学（農	その他	語学（人	未指定	合計
農学部(2011)	3256			619						3875
農学部(2012)	2910			399						3309
農学部(2013)	2905			467						3372
農学部(2014)	2866			610						3476
農学部(2015)	2815			535						3350



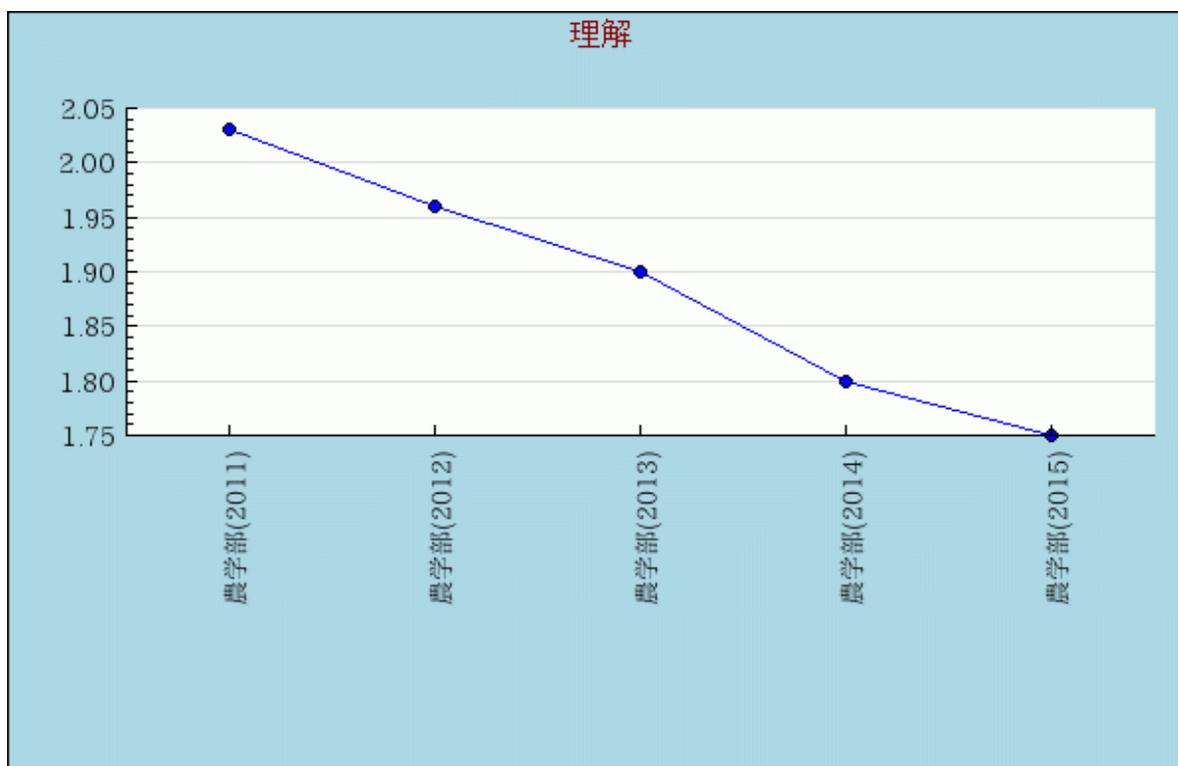
Q：毎回の授業の後に、何時間程度の授業外学習をしたか？

1：3時間程度あるいはそれ以上、2：2時間、3：1時間、4：30-50分、5：30分未満



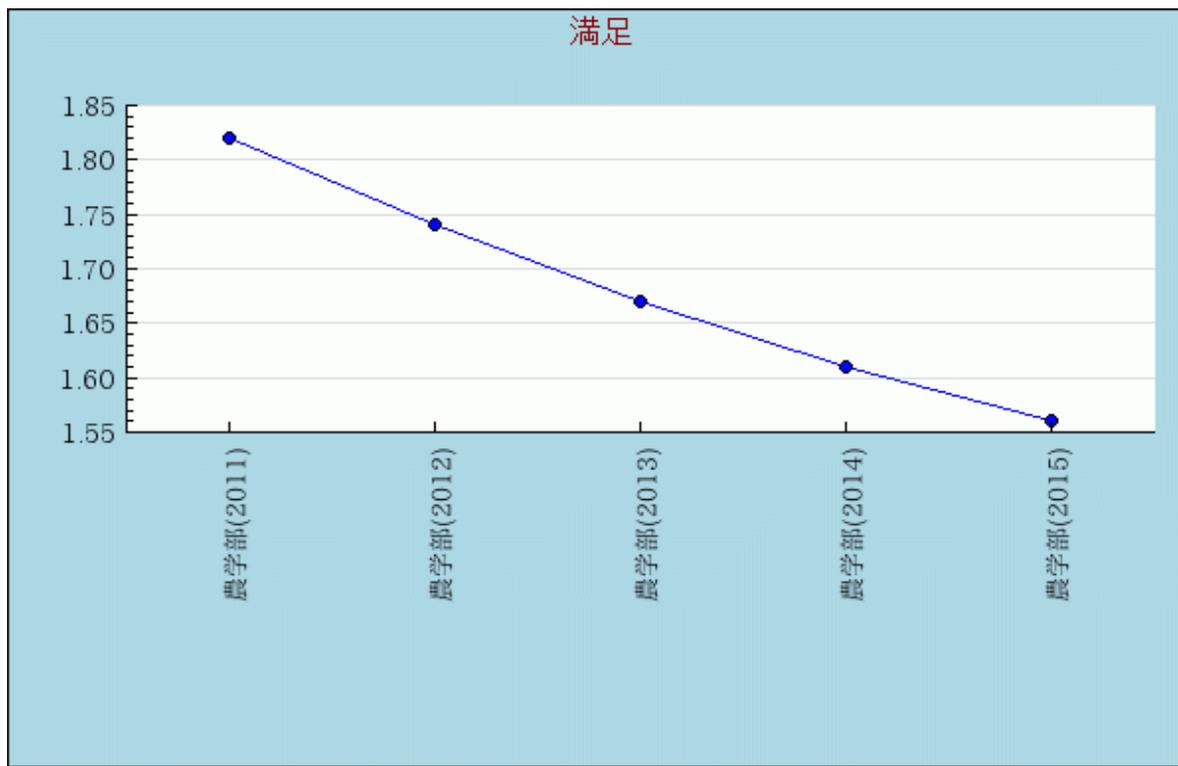
Q：学習目標を達成できたか？

1：そう思う、2：ややそう思う、3：どちらでもない、4：あまりそう思わない、5：そう思わない



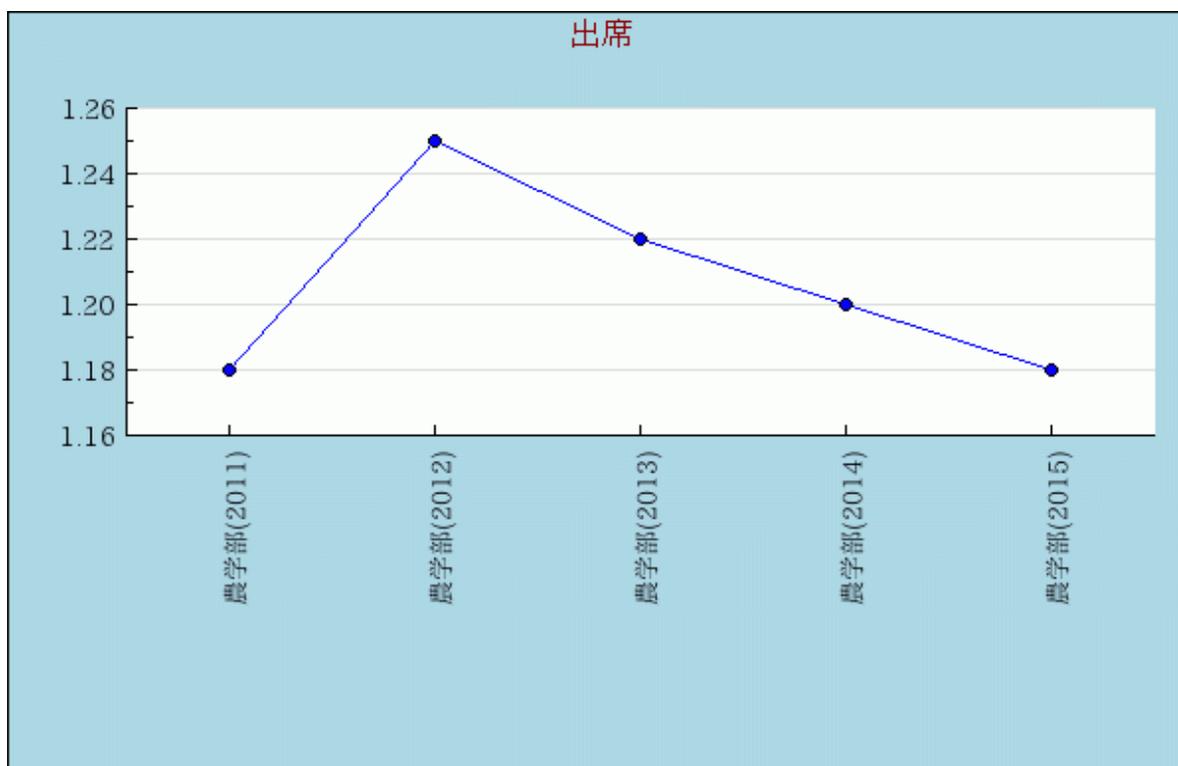
Q：授業内容を理解できたか？

1：そう思う、2：ややそう思う、3：どちらでもない、4：あまりそう思わない、5：そう思わない



Q : 授業の内容は満足いくものであったか？

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



Q : 授業への出席率ほどの程度か？

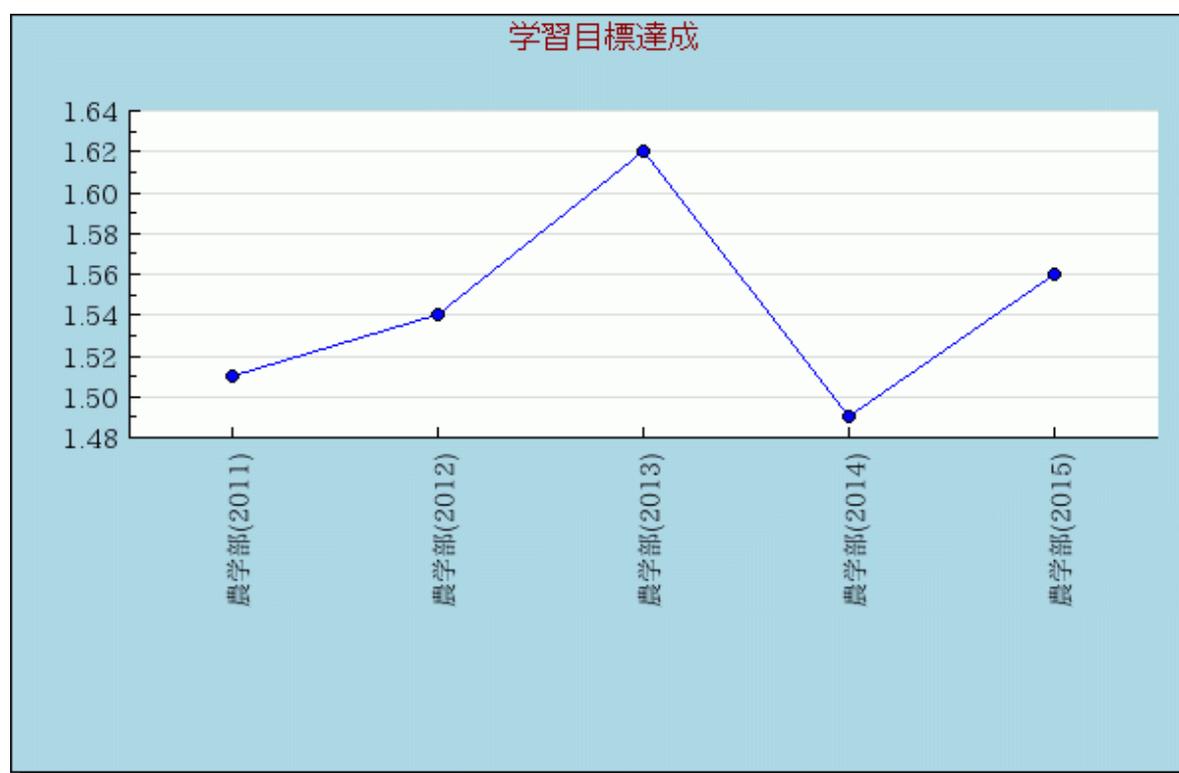
1 : 90%以上、2 : 80-90%、3 : 60-80%、4 : 40-60%、5 : 40%未満

1. 教員授業評価

3項目（学習目標達成、理解、満足）すべてにおいて、直近5年間では微増あるいは微減で横ばい傾向にある。この3項目は「学生は自分の授業についてどう思っているのか」の問いに対する教員側の印象に関する設問であることから、この5年間は教員側が高い意識を持って毎年の授業にのぞんでいるのかもしれない。次年度の結果が注目される。

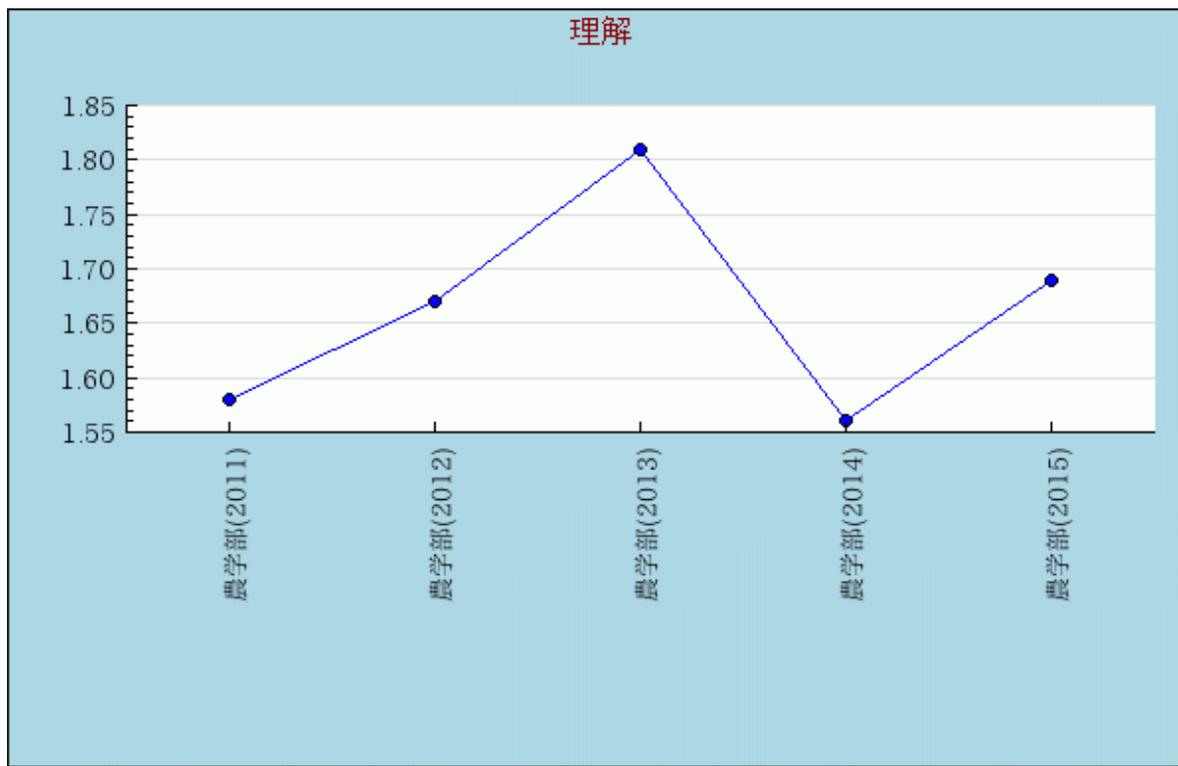
回答数

	講義	講読	演習	実験・実	語学（共	語学（農	その他	語学（人	未指定	合計
農学部(2011)	52			20						72
農学部(2012)	54			18						72
農学部(2013)	34			13						47
農学部(2014)	61			24						85
農学部(2015)	59			29						88



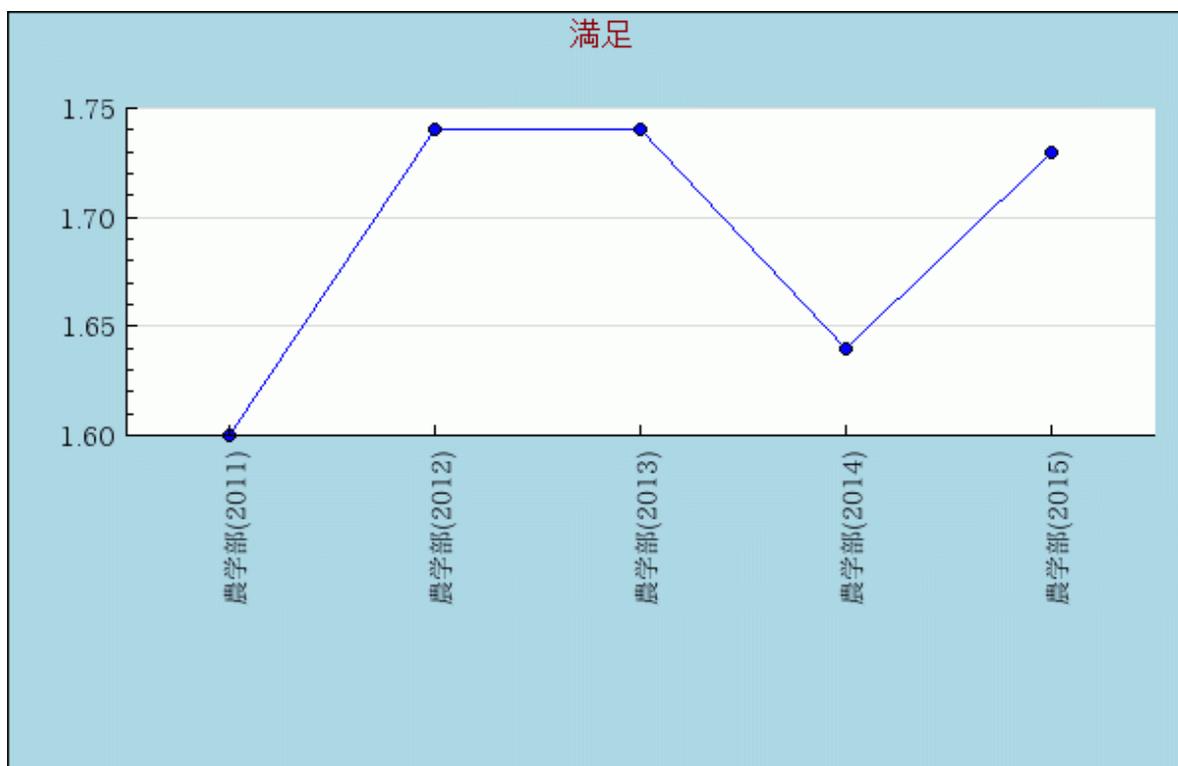
Q：受講学生は、学習目標を達成できたと感じるか？

1：そう思う、2：ややそう思う、3：どちらでもない、4：あまりそう思わない、5：そう思わない



Q : 受講学生は、授業内容を理解できたと感じるか？

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



Q : 受講学生は、授業内容に満足していると感じるか？

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない

第5節 FD実施経費報告書

本年度は、FD実施経費を申請していない。

第6節 来年度の課題

1. ピアレビュー

本年度は、学科内での意思疎通不足および日程調整のミスにより生物資源環境科学科ではピアレビューが行われなかった。例年に行われてきたので、今後は学科内教員での正確な情報共有に再度努め、次年度のピアレビュー実施につなげたい。

第11章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) 授業公開（獣医学セミナー）

1) 「マダニ媒介性感染症を知る！」

講師：高野 愛 先生（感染症学）

日時：平成27年4月15日（水）17:00～18:00

場所：iCOVER 1階101 形態構造学実習室

2) 「食品の国際規格策定プロセス～FAO/WHOからのScientific adviceとCodexによるリスク管理」

講師：豊福 肇 先生（公衆衛生学）

日時：平成27年5月27日（水）17:00～18:00

場所：iCOVER 1階101 形態構造学実習室

3) 「すごい人工授精～産業動物から伴侶動物までの人工授精法の違いと課題～」

講師：谷口雅康 先生（動物医療センター）

日時：平成27年6月24日（水）17:00～18:00

場所：iCOVER 1階101 形態構造学実習室

- 4) 「マダニ、蚊、動物、人を渡り歩くウイルス感染症」
 講師：下田 宙 先生（獣医微生物学）
 日時：平成 27 年 7 月 21 日（火） 17:00～18:00
 場所：iCOVER 1 階 101 形態構造学実習室
- 5) 「エピジェネティクスはメラノーマ治療の標的となりうるか？」
 講師：野口俊介 先生（臨床病理学）
 日時：平成 27 年 10 月 21 日（水） 17:00～18:00
 場所：iCOVER 1 階 101 形態構造学実習室
- 6) 「三次元オルガノイド培養を用いた肺がんモデル作製」
 講師：臼井達哉 先生（毒性学）
 日時：平成 27 年 11 月 18 日（水） 17:00～18:00
 場所：iCOVER 1 階 101 形態構造学実習室
- 7) 「急性腎障害にまつわる諸問題」
 講師：下川孝子 先生（獣医内科学）
 日時：平成 28 年 1 月 27 日（火） 17:00～18:00
 場所：iCOVER 1 階 101 形態構造学実習室

(2) 授業公開（総合臨床セミナー）

- 1) 第 6 回 山口大学動物医療センター総合臨床セミナー
 日時：平成 27 年 7 月 26 日（日） 12:30～16:55
 場所：連合獣医棟 4F 大講義室
 演題：・教育講演
 「慢性の下痢に対するアプローチ～内視鏡検査の前にはすること、後にはすること～」
 馬場健司（山口大学）
 「クリッカーを用いた参加型セミナー 続・院内細胞診：細胞の見方、再確認してみよう ～独立円形細胞腫瘍+ちょっと複雑な病変 編～」
 平岡博子（IDEXX ラボラトリーズ）
 ・臨床例総合検討会（第 136 回 CPC）
 「肥満細胞腫」
 ・内科診療オープンカンファレンス
 呼吸器編～最近こんな症例診ました～
- 2) 第 7 回 山口大学動物医療センター総合臨床セミナー
 日時：平成 27 年 12 月 13 日（日） 12:30～17:00
 場所：連合獣医棟 4F 大講義室
 演題：・教育講演
 「急性腹症の診断と治療～初心に戻ってもう一度～」
 原口友也（山口大学）
 「病理組織検査の上手な使い方 ～生検サンプルの採取・提出時のポイント～」
 中嶋朋子（IDEXX ラボラトリーズ）

- ・臨床例総合検討会（第 137 回 CPC）
「胆のう疾患」
- ・内科診療オープンカンファレンス
眼科編～よく頂く眼科領域の質問に対するご返答～

3) 第 8 回 山口大学動物医療センター総合臨床セミナー

日時：平成 28 年 3 月 13 日(日) 12:30～17:00

場所：連合獣医棟 4F 大講義室

演題：・教育講演

「人獣共通感染症」

「犬と猫の感染症」

「フェレットの感染症」

前田 健（山口大学）

・企業セミナー

「狂犬病ワクチンについて -副反応を中心に-」

土屋耕太郎（日生研）

「犬バベシアの疫学情報」

相馬武久（マルピーライフテック）

「小動物におけるカナリア痘ベクター技術を用いたワクチンの安全性と有効性」

井澤 智（メリアル）

「FIV ワクチンの必要性とその効果」

岩花倫生（ゾエティス・ジャパン）

(3) 授業公開（共同獣医学部特別セミナー）

- 1) 「最近確認された国内外の新興・再興ウイルス感染症（エボラウイルス病, MERS, SFTS 等）の流行状況と今後の課題」

講師：西條政幸 先生（国立感染症研究所ウイルス第一部長）

日時：平成 27 年 10 月 17 日（金）16:30～18:00

会場：連合獣医学研究科棟 4 階 大講義室

- 2) 「FMD（プロモーションビデオ含む）、PED、HPAI」

講師：高山 博 先生（宮崎県都城家畜保健衛生所 防疫課）

日時：平成 27 年 11 月 25 日(水) 15:00～16:30

会場：連合獣医学研究科棟 4 階 大講義室

- 3) 「人ごとではない！？ 類鼻疽菌 *Burkholderia pseudomallei* の拡がり」と類鼻疽における生体防御」

講師：阿戸 学 先生（国立感染症研究所免疫部長）

日時：平成 28 年 2 月 17 日(水) 15:30～17:00

会場：連合獣医学研究科棟 4 階 大講義室

4) 「ヒト臨床における 酸化・炎症とリポ蛋白」

講師：小谷和彦 先生（自治医科大学 地域医療学（兼） 医学部臨床検査医学 教授）
日時：平成 28 年 2 月 22 日（月）17:00～18:30
会場：連合獣医学研究科棟 4 階 大講義室

5) 「HIV 感染症の現在：「死の病」から「根治可能な感染症」を目指して」

講師：明里宏文 先生（京都大学霊長類研究所 ウイルス研究所 教授）
日時：平成 28 年 3 月 10 日（木）17:00～18:30
会場：連合獣医学研究科棟 4 階 大講義室

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

(1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

平成 27 年度 教育改善 FD 研修会(獣医部・連合獣医学研究科)

日程 平成 28 年 1 月 13 日(水)
[吉田地区] 13:00～13:50
場所 農学部本館 2 階大会議室
(吉田キャンパス)
講師 林 透
(大学教育センター)
参加者 22 名(アンケート 20 枚回収)

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	10.0%
良かった	13	65.0%
どちらとも言えない	4	20.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	5.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%

内容

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル)」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験的に一部の科目 (共通教育) で AL ポイントを導入してい



る。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に間接評価・直接評価、横軸に心理測定学的パラダイム (定量的測定)・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム (定性的測定) をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG (Progress Report on Generic Skills) テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCuS についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 今までの座学で一方通行のところに AL を取り入れることは良いことだと思う。ただ、獣医の講義は、古くから座学による講義とその科目に対する実習が対になって行われてきた。従って、座学にも AL を取り入れよと言われるのは違うと思う。実習が対になっているわけであるから、獣医は既に AL の割合も相当高いと思われる。このシステムに獣医の教育をどのようにフィットさせるのか。

A1 現在の授業実践を大幅に変えてほしいとは考えていない。科目の特性に応じた授業で良いと思う。ただし、既に実践されていると思うが、授業の中で AL や振り返りの場を設けると学生の理解が深まると思うので取り入れることを推奨する。

Q2 後半の部分に関する質問であるが、さまざまな評価の手法を示されて、現在は基本的に共通教育関連 (キャリアの形成も含めて) で実施されていると理解した。これは将来的に、例えば獣医の場合だと Day One スキル、Day One コンピテンシーといわれる評価があつて、卒業時に獣医として持つべき能力が示されている。今、それに向けて学部として検討しているが、現在やっていることをこれらの評価に対応させてゆくことは可能か。

A2 学習到達度調査 (PROG テスト) については 3 年生についても実施している。学部からの要望があれば、これらのデータを学部を提供するので活用してほしい。また、今後説明をするが、CoBCuS についてもデータを提供する。支援をさせてもらえればと考えている。

Q3 学習環境整備について、iPad を使用した支援システムとは具体的にどのようなものか。

A3 教員が問題を作成しておき、授業中に課題として学生に提示してその場で答えさせる、教員や学生の書き込み内容や習熟度等をその場で掲示するなどの機能を有する授業支援システムである。また、クリッカーにも対応している。なお、学生の書き込みに関しては、匿名化して掲示することもできる。関心がある教員は試用も可能である。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については、「今回お話のあった iPad の教育コンテンツに興味を持ちました」、「e-Learning などの具体的な方法論」、「共通教育の内容や目指すことなどを説明していただければと思います」、「PROG テストやクリッカーの使用など興味のあるトピックを提供していただけたが、それぞれについてもう少し詳しい話をききたかった」、「わかりにくい」、「FD が多すぎると思います」、との回答があった。また、今後希望する研修会については、「評価の手法。ICT システム」、「実際に行われている授業の事例を学べる場があると良いかと思います」、「教育ツールに関して」、「支援機器のワークショップ」、「iPad を使ったシステム」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

鹿児島大学共同獣医学部との共同FD研修会を開催した。以下に、その報告書の抜粋を記載する。

1. はじめに（目的および概要）

平成24年度から設置された鹿児島大学および山口大学共同獣医学部では、情報通信技術（Information and Communication Technology; ICT）のひとつである双方向遠隔授業システムが導入されて、両大学の教員による講義・実習が実施されている。また一方、平成25年度からは、帯広畜産大学、北海道大学、山口大学および本学の4大学によって、欧州獣医学教育認証機構（EAEVE）による認証獲得に向けた教育改革事業（文部科学省国立大学改革強化推進事業「国立獣医系4大学群による欧米水準の獣医学教育に向けた連携体制の構築」）が開始されており、南に位置する山口大学および本学は合同でこれに取り組んでいる。これらはいずれも質の高い世界標準の教育の上で成り立つものであり、教員の技術の向上、すなわちFaculty Development（FD）がより一層求められることとなる。

そこで、通常両大学で独自に行うFD活動に加えて、平成26年度より合同で行う研修会を実施することが合意された。これによって、両大学教員のコミュニケーションを一層深めることができ、共通あるいは個別に抱える課題や問題点を把握し、相互の協力あるいは補完によって、教育レベルを向上させることが可能となる。平成27年度は、鹿児島大学共同獣医学部主催により、平成27年9月14日（月）に鹿児島大学で実施され、それに山口大学共同獣医学部教員10名が参加した。望月雅美学部長挨拶の後、鹿児島大学法科大学院研究科長の米田憲市教授による講演が、遠隔システムを用いて両大学へ配信され、その後3分野（食品衛生、産業動物臨床、学生生活）に分かれてワークショップが実施された。両大学を合わせると50名程度が本研修会に参加した。以下に、本年度実施された合同FD研修会の詳細について報告する。

2. 研修会次第

日時：平成27年9月14日（月）13時-17時

場所：鹿児島大学共同獣医学部（鹿児島大学主催）

13:00-13:05 302教室（遠隔システムにより山口大学に第4講義室に配信）

学部長挨拶（鹿児島大学 共同獣医学部 学部長 望月雅美 教授）

13:05-14:35 302教室（遠隔システムにより山口大学に第4講義室に配信）

基調講演（鹿児島大学法科大学院 研究科長 米田憲市 教授）

14:50-16:50 教育ワークショップ 32～34 セミナー室

- ・ 食品衛生関連
- ・ 産業動物臨床関連
- ・ 学生生活関連

3. 各部の内容

1) 鹿児島大学共同獣医学部長挨拶（13:00-13:05）

鹿児島大学共同獣医学部の望月学部長の挨拶により研修会が開始された。望月学部長は、自身の民間会社での経験を通じて、研修の重要性と必要性について強調された。鹿児島大学での参加者は三十名程度であった。山口大学の参加者は来鹿者が10名、山口大学第4教室での聴講者が数名で、合計十数名であった。両大学を合わせると四十数名から五十名が本研修会に参加した。

2) 基調講演（13:05～14:35）

講師：米田憲市 鹿児島大学法科大学院 研究科長／教授（法社会学）

演題：鹿児島大学法科大学院のICTを用いた教育実践の経験

要旨：鹿児島大学法科大学院は、2004年の設置に向けた準備段階から九州大学法科大学院との協議を進め、遠隔講義システムを用いた授業を展開することを含む様々な方法で、それぞれの長所を共有し短所を補うカリキュラムを構築しました。設置申請までに、この連携に熊本大学が参加し、設置後に琉球大学が参加することとなりました。この連携を支えたICTの活用の経験とその成果や課題のほか、鹿児島大学法科大学院内部でのICTの活用について紹介したいと思います。法科大学院設置とその教育改革事業についての経緯について説明された後、その教育改革で必要とされた複数大学（鹿大、九大、熊大、琉大）との連携およびICTシステム（双方向遠隔講義システム、共同獣医学部に導入されたシステムのプロトタイプ）の導入に関する経緯が説明された。その後、法科大学院の教育改革事業で行われてきたFD活動について個別の説明があった。それらは、双方向システムの実践的な活用法（様々な講義スキルを共有する研修会の実施）、新たなシラバスシステムの導入（メディアミックスによる教育効果の向上）、新たなアンケートシステムの導入（形骸化されにくいシステムの考案）等であった。これらは、いずれも教員が積極的に授業改善に取り組むように工夫されたものであった。法科大学院は共同獣医学部とは分野がかけ離れているが、置かれた状況（教育改革事業、大学間連携、ICTシステム導入）が近似しており、そのFD活動は共同獣医学部のFDに非常に有益な情報となった。講演にはスライドおよびアンケート実例やニューズレターなどが用いられた。

3) 教育ワークショップ（14:50～16:50）（参加者敬称略）

・食品衛生（33 セミナー室、鹿大参加者：望月、中馬、小原、三好、小尾、松鶴、有村、河野、山大参加者：豊福、佐藤(晃)、渋谷、下田）

テーマ：公衆衛生&食品衛生学のHands-on 実習に向けた各対応について

・産業動物臨床（32 セミナー室、鹿大参加者：三角、帆保、窪田、安藤(貴)、山大参加者：田浦、高木、角川、檜山）

テーマ：共同獣医学部における産業動物臨床獣医学カリキュラムの調整

・学生生活（34 セミナー室、鹿大参加者：遠藤、白石、松尾、小澤、河本、鬼塚、山大参加者：柳田、日下部）（鹿大学生参加者4年生：中村昂、林原安里、3年生：大重春菜、佐多美咲）

テーマ：A. 1年次の専門科目について、B. 研究室配属について

上記のテーマについて、担当者同士で直接の話し合いを持つ良い機会となった。今後のカリキュラム運営を円滑にすすめるためにも、継続して2大学での合同FD研修会を実施していく予定である。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

（1）学生授業評価アンケート

平成27年度の学生授業評価アンケートについては、対象科目数が前年度から大幅に増加したにもかかわらず、実施率は90%であった。アンケート実施率は、平成25年度から継続して概ね90%程度で推移している（表2）。

表 2. 学生授業評価アンケート実施状況の推移

2013 年度			2014 年度			2015 年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
26	25	96%	27	23	85%	83	75	90%

全学共通の質問 5 項目（授業外学習時間、目標達成、満足度、理解度、出席）については、授業外学習時間を除く 4 項目については全て 4 点以上で、特に出席率は 4.8 と高い数値を示した（表 3）。講義と実験・実習を比較すると、授業外学習時間以外では全て実験・実習の方が高い数値となった。2013 年からの経年変化を見ると、授業外学習時間以外の項目については上昇傾向にあった（図 1）。授業外学習時間については、平成 26 年度からは上昇したものの、平成 25 年度から見るとほぼ横ばいとなっている。今後は、特に講義において学生の目標達成率、理解度、満足度が高まるよう努力する必要がある。教員からの促しによって授業外学習時間を大幅に増加させることは困難だと考えられるが、2016 年から獣医学共用試験（CBT と VetOSCE）が始まるため、学生が自主的に学習時間を増加させる可能性も考えられる。

表 3. 平成 27 年度の学生授業アンケート全学共通項目における全体平均

授業外学習時間		目標達成率		理解度		満足度		出席率	
講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習
3.13	3.07	4.03	4.22	4.08	4.32	4.22	4.42	4.82	4.92

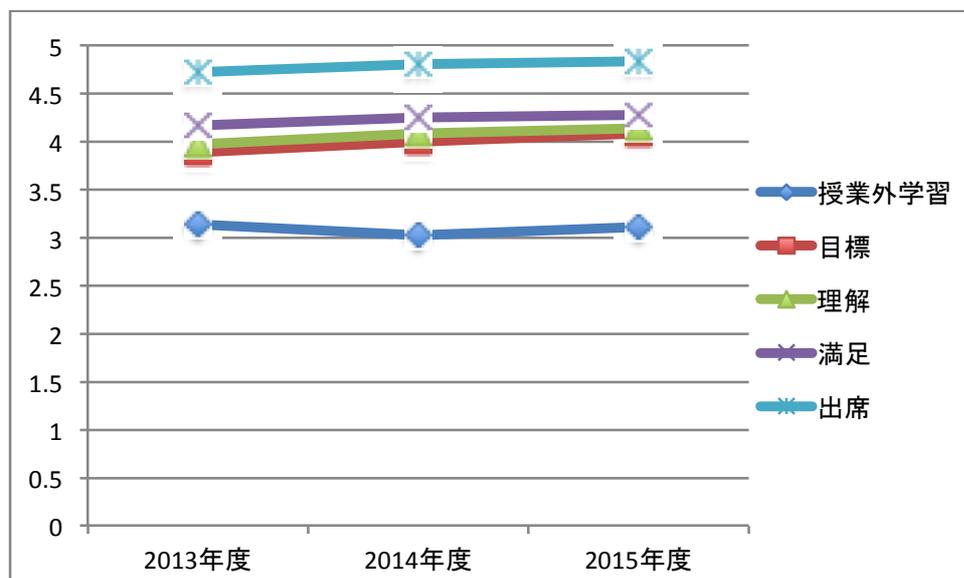


図 1. 学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均の推移

(2) 教員授業自己評価

平成 27 年度は、教員授業自己評価の実施率が 93.2%であった（表 4）。平成 26 年度分からは、未入力の教員に対して FD 担当委員が個別に入力を依頼しており、90%以上の実施率となっている。今後も、同様の取り組みを継続して行う。

表 4. 対象科目における教員授業自己評価実施状況の推移

2013年度			2014年度			2015年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
15	9	60	34	32	94.1	59	55	93.2

第5節 FD実施経費報告書

平成 27 年度の FD 実施経費は以下の表 5 のとおりである。

表 5. 平成 27 年度 FD 実施経費

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部	獣医学特別セミナー	講師謝金・旅費 4名	206	学外講師を招くことで、各分野の先端的な研究に対する理解を深めた。
	鹿児島大学との共同FD研修会	学部教員旅費9名	373	鹿児島大学共同獣医学部の教員と種々のテーマで話し合いを持つことで、今後のカリキュラム運営を円滑に進めることができる。
計			579	

第6節 来年度の課題

共同獣医学部では、鹿児島大学共同学部との間で双方向遠隔授業システムを用いた講義・実習を行っている。また、欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)による認証獲得に向けた教育改革事業にも、鹿児島大学と合同でこれに取り組んでいる。そこで、世界標準の教育を担保するために教員の技術向上を図ること、またカリキュラム運営を円滑に進めることなどを目的とし、平成26年度より合同FD研修会を実施している。平成28年度は山口大学で開催されるため、両大学の教員にとって有益な研修会となるよう準備を進めていく。

教員授業自己評価については、平成26年度分から90%以上の入力率となっている。FD担当委員が未入力の教員に対して個別に依頼することで、今後も高い実施率を実現できると考える。

授業外学習時間については、現在は概ね1時間となっている。各講義を録画していつでも学生が見直しをできるようにしたり、GLEXAを利用したEラーニングのコンテンツを充実させるなど、授業外で学生が学習しやすい状況づくりを進めていく。

2 大学間および科目間で試験の実施・評価に関して、未だ若干の認識の違いが存在している。適正な成績評価が行われるよう、両大学共通の成績評価基準を設けるなどの工夫が必要である。

平成24年度からスタートした共同獣医学部の有効性を証明するためには、最初の卒業生を輩出するまでの6年間は特に重要となる。より質の高い教育を学生に提供できるよう、各教員が一体となって努力していく必要がある。

第12章 国際総合科学部のFD活動

第1節 授業公開

当初ピア・レビューの計画はあったが、新設学部ということもあり、個々の科目の授業設計や頻繁に開催される学部FDに時間が割かれ、実施には至らなかった。ピア・レビューとまではいえないが、唯一他の教員の参観が行われた授業は国際総合科学概論である。1年前期に開講されるこの授業は、本学部の主要講義科目のさわりの部分を概観できるオムニバス講義であり、新任教員を中心に、学部コンセプトとカリキュラムの全体像を把握するために毎回数名の教員が参観した。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 概要

開設初年度である本学部では、特徴的なディプロマ・ポリシーにもとづくカリキュラムの全体像を教職員全員が理解した上で学修指導を実践していく体制を整えるために、平成27年度は頻繁にFD研修会を開催しなければならなかった。たとえば2年次後半から1年間にわたる交換留学や4年次のプロジェクト型課題解決研究など本学部の目玉ともいえる学修プログラムは、学部教職員が一丸となって指導体制を整えていく必要がある。同一の科目を複数のクラス・担当教員で開講する科目が多く、授業形態や評価基準を一定にしなければならない。それらの科目の多くはグループワークやフィールドワークを含むアクティブ・ラーニングである。加えてYU CoB CuSやポートフォリオなどの独特な学修指導・評価システムを運用していかなければならない。そうした本学部の特徴的なカリキュラムや授業形態を教職員全員が理解し動かしていくためには、FD研修会を繰り返し開催する必要があったし、この状況は少なくとも完成年度までは続くと考えられる。

2. 学部教育改善に関わるFD研修会

(1) 新任教員FD研修会

日時：平成27年4月1日（水）13：40～14：50

会場：国際総合科学部事務室

参加者：国際総合科学部新任教員10名

講師：北西功一教授

内容：課題解決科目と基礎セミナー

平成27年3月4日、他学部等から本学部に移行する教員に対して実施した同内容のFD研修会を新任教員向けに開催した。

課題解決科目は講義科目ではなく、グループワーク等を通して学生が能動的に実践スキルを修得するアクティブ・ラーニングの学習スタイルをとる。情報収集、レポート作成、プレゼンテーション等の基本的技能を学ぶ一年次の基礎セミナーにはじまり、社会調査法、課題解決能力演習、地域理解・

連携演習、海外留学と高年次になるほど高度な学習機会を用意し、4年次のプロジェクト型課題解決研究では実社会で通用する成果を出すことを目指す。

以上のような課題解決科目の全体像が提示された上で、基礎セミナーの具体的な運営方法について、北西教授自身の教育学部での実践例を用いた説明を受けた。情報収集1回、レポート7回、プレゼンテーション7回という授業回数、レポートは必ず添削して学生に返す、共通の評価シートの使用（学生への提示を含む）を共通事項とし、課題設定や運営方法は担当教員の自由である。担任制と連動しており、担当教員が必要に応じて履修指導をしたり生活上の相談に応えたりすることが確認された。

(2) 第1回学部FD研修会

日 時：平成27年4月30日（木）13：40～15：00

会 場：共通教育棟15番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：川崎勝教授

内 容：YU CoB CuS とその活用法

能力基盤型カリキュラムシステム=YU CoB CuS は、本学部ディプロマ・ポリシー（以下DP）で提示する、学生が卒業時に修得しているべき能力（Competency）を想定し設計された成績評価システムである。川崎教授から、まずその基本的概念および背景についての解説があり、さらに YU CoB CuS にもとづく修学指導についての説明を受けた。

本学部DPは、①幅広い学識とその活用能力、②コミュニケーション能力と共働力、③デザイン思考と課題解決能力、④科学的思考と調整・統合能力の4つの大項目からなり、さらに各大項目は4つから5つの小項目（能力）から構成されている。各授業科目には、それぞれ修得が期待できる小項目（能力）が割り振られており、そのバランスを考えながら履修・修得していくことで、卒業時にはディプロマ・ポリシーに謳われた能力が身についたことになる。DP小項目ごとに、最終的に獲得すべき基準スコアが設けられており、各小項目の個人スコアが基準スコア以上もしくは大項目基準スコアの1.1倍になることが卒業要件となる。

クォーターごとに学生および担任教員には、その時点でのCoBCuSにもとづく個人スコアのシートが渡され、学生がこれにもとづき作成するリフレクション・シートとあわせて、担任は指導にあたる。

(3) 第2回学部FD研修会

日 時：平成27年7月8日（水）16：30～17：30

会 場：事務局1号館4階 特別大会議室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：セントラルフロリダ大学副学長 原 忠之先生

内 容：米国大学学部経営モデルと日本の大学の戦略的機会について

本学部特別講義を担当されている原先生より、米国での経験にもとづき、これからの大学経営戦略がどうあるべきかについて講演があった。

氏によると、米国の大学のビジネスモデルにおいては、顧客は学生ではなく産業界であるという考え方が育ってきている。大学において産業界のニーズに応えることができるような人材を育成するためには、インターンシップを活用するなどしてアカデミックな知よりも実践的な知の修得を促し、また地域社会との共存共栄を意識した大学経営戦略を展開しなければならない。また少子高齢化する日本の将来を想定するならば、学生が日本語を話すことを条件とする大学の現状を脱却し、世界を意識したマーケティング発想で大学を再設計するべきであるとされた。

講演後の質疑応答では、実践的な知のみならず、木の根ともいえる人や社会への洞察も身につける

べきではないかという意見が多くあり、積極的な議論がなされた。

(4) 第3回学部FD研修会

日 時：平成27年7月15日（水）14：30～15：30

会 場：事務局1号館4階 特別大会議室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：福屋利信教授、中村岳詳（学務係）、DINH QUANG HOP（留学コーディネーター）

内 容：留学について

2年次後半から1年間にわたる留学は本学部の大きな特徴的なカリキュラムの一つであるが、初年度ということもあり、不確定な部分も多い。そのため情報共有すべくこのFDは開催された。まず現時点での提携校のリストと留学に至るまでのスケジュールが提示され、これについて中村氏より解説があった。つづいてHop氏より、危機管理体制についてのミニ・レクチャーがあり、留学先ではどのようなリスクがありえて、そのリスクに対して、担任として学部としてどのような対応体制を準備しておかなければならないかについて情報を共有した。

(5) 第4回学部FD研修会

日 時：平成27年8月5日（水）13：30～14：30

会 場：共通教育棟14番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：星野晋講師

内 容：「山口と世界」について

「山口と世界」は本学部が主担当の共通教育科目であると同時に、本学部生にとっては他学部の学生とともに学ぶ授業である。同一科目を複数クラス・教員で担当する科目であり、ある程度授業スタイルと評価基準をそろえる必要があるため、FD研修会を開催することとなった。星野講師より、小グループワークを主とする、フィールドワークを含むといった授業携帯上の条件、加えて共通の評価基準としてコモン・ルーブリックが提示され、それらについて解説があった。

(6) 第5回学部FD研修会

日 時：平成27年8月10日（水）13：30～14：30

会 場：共通教育棟26番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：北西功一教授

内 容：「課題解決能力演習」について

1年次後期の「課題解決能力演習」では、学生は7クラスに分かれ、1クラスにつき教員3名がこれを担当する。内容は、「山口と世界」同様、クラス間の授業運営や評価基準を揃える必要もあり、FD研修会を開催した。

北西教授より、まずこの授業がディベート、プランニング、PBLの3つから構成されること、授業形態は小グループ・ワークを主とするアクティブ・ラーニングであることなど、シラバスに即した概要の説明があった。さらにディベートやPBLのテーマ設定や運営方法について具体的事例の紹介があり、また本科目のコモン・ルーブリックや3つのセッションごとの評価シートが示され、それらについての解説があった。そしてクラスごとの3名の教員で、どのようなテーマ設定や運営をするかについての打ち合わせが必要であることが了解された。

(7) 第6回学部FD研修会

日時：平成27年12月2日（水）13：40～14：50

会場：共通教育26番教室

参加者：国際総合科学部教員

講師：福屋利信教授、川崎勝教授

内容：「プロジェクト型課題解決研究」について

4年次の「プロジェクト型課題解決研究」がどのような科目であるかについて、情報を共有し理解を一致させるための第一歩としてのFD研修会であった。

まず川崎教授が、本科目のカリキュラム全体における位置づけについて解説した。本科目は、課題解決科目で得られたデザイン科学の思考や手法に基づくグループでの課題解決能力と、コア科目や展開科目で修得した理系・文系を融合した知識・理解を踏まえた、4年次の全カリキュラムの総まとめである。通常の学部における卒業研究・卒業論文に替わるもので、5名程度の学生グループが実社会に存在する課題をテーマに取り上げ、プロジェクトに挑み遂行する。学生が中心となって、企業・行政・NPOなどの外部社会との関わりながらプロジェクトを展開していく点が特徴的である。学生が自ら企画・立案し、コンペで採用されたプロジェクトを実施するオリジナル・コースと企業や行政等の連携先がある程度用意したプロジェクトを遂行するプログラム・コースの二つのコースが用意されている。

福屋教授からは、この時点で了解が得られているあるいは交渉中の連携先のリストが提示され、そのうち具体的なプロジェクトの内容が定まりつつあるいくつかのプログラムについて紹介があった。プログラム・コースといっても、内容がある程度決まっているプロジェクトからある程度学生が自由に企画できるプロジェクトまで、ヴァリエーションがあるということが了解された。

質疑応答では、オリジナル・コースにおける教員の関わり方やファンドの問題などが議論され、今後さらなる検討が必要である事が確認された。

(8) 第7回学部FD研修会

日時：平成27年12月16日（水）15：30～16：30

会場：事務局1号館4階 特別大会議室

参加者：国際総合科学部教員

講師：永井涼子准教授

内容：留学生関連

本学部では交換留学のかたちで海外から留学生を受け入れる。全教員が生活指導教員として数名の留学生の面倒を見ることになり、また多くの教員が多文化コミュニケーション・セミナーをはじめとする留学生を交えた授業を担当する。これに対してどのような心づもりが必要で、どのような受け入れ体制を整えておかなければならないかについて共通認識をもつためのFD研修会であった。

永井准教授から、まず本学全体の留学生の現状と留学生支援体制について説明があった。生活指導教員は、留学生の授業の履修状況、アルバイトの状況、連絡先・居所の把握、バディ関連の情報把握、(特に夜間や休日などの)事故・急病の際の対応などを行わなければならない。とりわけ週7コマ(週10時間)以上の授業の履修、アルバイトの制限等、ビザに関わる条件については注意を払う必要がある。また宗教上の習慣や禁忌等文化について配慮しなければならないということ、「留学生は英語ができる」とは限らないため、やさしい日本語でコミュニケーションをする必要があることなどの注意事項が示された。

(9) 教育改善 FD 研修会

日 時：平成 28 年 2 月 17 日（水）14：50～16：00

会 場：共通教育棟 2 8 番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：林 透 准教授（大学教育センター）

内 容：「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」

山口大学・大学教育再生加速プログラム（以下：YU-AP）の概要とねらい、その二つの柱であるテーマⅠ（アクティブ・ラーニング）およびテーマⅡ（学習成果の可視化）について、大学教育センターの林准教授より説明があり、その後意見交換が行われた。

テーマⅠの取り組みとしては、可能な限り多くの授業におけるアクティブ・ラーニングの導入を促すべく、シラバス上で各教科のアクティブ・ラーニングの実施率を提示する AL ポイント制度が設けられた。さらにはアクティブ・ラーニングの積極的な実践事例を評価する AL ベスト・ティーチャー表彰制度を準備しつつある。テーマⅡの取り組みとして、まず「①学修到達度調査・学修行動調査」について、学修成果の評価の構図が示された上で、PROG テストを中心に説明があった。つづいてパフォーマンス評価のツールであり、国際総合科学部が主担当の「山口と世界」でも導入されている「②ルーブリックの活用」について触れられた。また「③学生のリフレクション」を支援するツールとして、e ポートフォリオや YU CoB CuS などの実装を含む「自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL）」の導入について解説された。最後に「④教員によるアドバイジング」について、IR データ等を用いた「学修・キャリア診断体制」の方向性が示された。

質疑応答では、本学部ではアクティブ・ラーニング科目が多数あることにより、宿題の量が学生の許容量を超えがちであること、とりわけグループ・ワークの宿題が同時期に複数の科目で求められているケースでは、時間割上空き時間が少ないこともあり、メンバーが集まる時間がとれず十分な準備ができない問題が生じているという指摘があった。この点については、個々の科目レベルではなく、カリキュラム・レベルでの調整が必要となりそうである。またアクティブ・ラーニング時の発達障害児等への対応についても質問があった。この点については、評価方法の検討が必要であると同時に、相談室との連携も重要になる。

(10) 第 8 回学部 FD 研修会：

日 時：平成 28 年 3 月 16 日（水）14：40～15：40

会 場：事務局 1 号館 4 階 特別大会議室

参加者：平成 28 年度「多文化コミュニケーション・セミナー」担当教員

講 師：永井涼子准教授、山本冴里講師、仁平千香子助教

内 容：「異文化間コミュニケーション・セミナー」について

平成 28 年度に多文化コミュニケーション・セミナーを担当する教員を対象に、その授業内容と運営方法についての研修を行った。

まず永井准教授より、本科目の目的と概要についての説明があった。本科目は、日本人学生と留学生によるグループ活動を通して、主にコミュニケーション能力と国際的な共働力を身につけることを目的としている。平成 28 年度の授業では、各国のニュースサイトから国際面の記事を持ち寄り、グループでそのキーワードを地域別、トピック別にマッピングをする。このようなニュースに関する作業・議論を通して、地域やニュースサイトによる傾向や互いの違いを分析し、自ら問いを立て考えることを促す。

FD の後半は、3 つのグループに分かれて、「やさしい日本語」についてのワークショップを行った。永井准教授、山本講師、仁平助教の 3 名がそれぞれのグループで留学生を演じて、新幹線から携帯電話

話で山口大学への行き方を尋ねてきたという想定で、これにどのように応えるかを練習した。

(11) 第9回学部FD研修会

日 時：平成28年3月19日（土）15：20～16：20

会 場：共通教育棟2階28番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：福屋利信教授、小川仁志准教授、徳久 悟准教授

内 容：PBLの体制等について

プロジェクト型課題解決研究に向けて、今後どのような体制でどのように準備を進めていくかについて、PBL推進チームから素案が提示された後に質疑応答が行われた。

素案の内容は、以下のとおりである。まず山口県への貢献、貢献の論理を主担当が説明できること、具体的なソリューションを連携先と学生が決めること、プロジェクトごとのマイルストーンの設定、詳細実施スケジュールを主担当と連携先が協力して決めることの五つの条件をPBLの基本原則とし、それらの条件を満たさなければプロジェクトとして承認されない。全チーム共通のマイルストーンは、中間発表、連携先へのプレ最終報告、最終発表とする。オリジナル・コースについては、学生が企画し連携先も見つけるケースと、教員のリソースを使った学生企画の二つのパターンが想定される。プロジェクトへの学生配属については、学生が希望を出し教員が面接するステップを2段階行った上で、残りの学生については推進チームと主担当が話し合っって割り振るという三段階のプロセスで決めるなどの提案があった。最後に、次年度は現状のPBL推進チームと管理チームを統合するとの報告があった。

質疑応答では、3年次後期を含めたスケジュールをどのように組むか、オリジナル・コースとプログラム・コースをひっくるめた審査・配属方法や時期をどうするか、2年次前期と3年次後期の指導体制や教員の関わり方をどのようにするかなど、多岐にわたる議論があった。今後、新しいPBL推進・管理チームが中心となって詰めていかなければならないことが確認された。

3. アイ・シー・ネットによるプロジェクト・マネジメント研修

プロジェクト型課題解決研究は、卒業研究とは異なり、担当教員の専門分野と異なるプロジェクトの指導を想定しなければならない。プロジェクトの内容や形態も多種多様であるため、プロジェクト間で一定の質が保証され、学生にとって公平な授業負担や評価方法が担保されるような、適切なプロジェクト管理方法が設定され運用される必要がある。このようなプロジェクト管理の経験がある教職員が少ないこともあり、PBL管理チームでは、プロジェクト管理のノウハウについての実績が豊富なアイ・シー・ネットの日暮良治氏のアドバイスを受け、また同氏を講師とするプロジェクト・マネジメント研修を開催することにした。

(1) プロジェクト・マネジメント研修（プレ研修会）

日 時：平成27年12月9日（水）9：00～16：00

会 場：共通教育棟2階会議室

参加者：国際総合科学部PBL管理チーム

講 師：日暮良治氏（アイ・シー・ネット株式会社 グローバル人材開発グループ）

内 容：

プロジェクト・マネジメントの本研修会に先立ち、PBL管理チームのメンバーがプロジェクト管理の考え方や方法について理解し、また本研修会におけるワークショップでファシリテータをつとめられるように、プレ研修会を実施した。

日暮氏により、質疑応答をまじえながら、①プロジェクト・マネジメント概論、②スコープ・マネジメント、③リソース・マネジメント、④スケジュール・マネジメント、⑤リスク・マネジメント、⑥コミュニケーション・マネジメント等についての講義があった。本研修会に向けて、オリジナル・コースの審査において提出を求める「構想書」、「構想書」の評価基準、「プロジェクト・フォーマット（プロジェクト・デザイン・マトリックス＝PDM）」、「進捗管理表」等のフォーマット（案）をPBL管理チームが検討・作成することが宿題となった。

(2) プロジェクト・マネジメント研修

日 時：平成28年2月18日（木）、19日（金）両日とも9:00～16:00

会 場：共通教育26番教室

参加者：国際総合科学部教員

講 師：日暮良治氏（アイ・シー・ネット株式会社 グローバル人材開発グループ）

内 容：

・2月18日（木）

まず糸長学部長の挨拶、木村PBL管理チーム委員長の趣旨説明の後に、推進チームおよび管理チームから、プロジェクト型課題解決研究に向けた準備状況の報告があった。推進チームは、福屋教授が現時点での提携先企業・団体、想定されるプロジェクトについて報告し、管理チームは、星野講師が、スケジュール（案）についての報告し、情報共有を行った。

つづいて日暮氏によりプレ研修会と同様のプロジェクト・マネジメント概論等の講義が行われた。その講義と併せて、PBL管理チームが準備した各種フォーマットについての説明があった。

・2月19日（金）

18日の講義や情報共有を踏まえて、実際に各種フォーマットを使ってみるワークショップが行われた。3つの少人数グループに分かれ、推進チームの提供するプログラム・コースの美祢市のケースについて、まず構想書からはじめて、プロジェクト・フォーマット、進捗管理表と順次作成しプレゼンテーションと質疑応答を行った。

二日間にわたる研修では、担当教員がプロジェクトをどのようにサポートし管理していくかの概要がわかり、少なくとも参加した教員にとっては有意義な研修であったと思われる。その一方で、ワークショップ等をとおしていくつかの課題も見えてきた。たとえばプロジェクトをどのように定義するか、あるいはどのような内容・範囲までプロジェクト型課題解決研究のプロジェクトとして認めるかという条件設定の問題がある。とりわけリサーチ型のプロジェクトを認めるかどうかということについては議論が必要である。またオリジナル・コースに挑戦する学生が質の高い構想を企画するには、留学から戻って数ヶ月という期限が短すぎるというスケジュール上の問題もある。

第3節 教育改善に関する活動

1. 第3クォーターの授業時間外課題についての調査

方法：フォーカス・グループ・インタビュー

対象：国際総合科学部1年生7名×2グループ

Aグループは星野講師、Bグループは上田准教授がモデレーターをつとめた

日時：平成28年2月8日11時20分～45分

場所：共通教育2番教室

内容 平成 27 年度第 3 クォーターの授業外学習の負担について

第 3 クォーターの授業外学習が多すぎるという学生の不満の声が聞かれたため、実態を把握すべくこの調査を実施した。結果、個人向けの宿題は何とかこなすことができるが、グループワークについては、授業時間外でも集まる必要がある授業が一時期に重なったことにより、メンバーが集まる十分な時間がとれなかった。もともと時間割が過密であることも、十分な授業外学習時間を確保することを困難にしている。

このことについて学部学生支援委員会で検討した結果、一部の授業時間外グループワークが必須の科目を除いて、極力グループワークは授業時間内に限定にするよう担当教員に理解を求めることになった。また今後、一時期にグループワークが重ならないようなカリキュラムの調整が必要であるということが確認された。

同一科目を複数クラスで実施している授業における授業の負担度や成績評価のばらつき、フリーライダー問題などについても話題になった。とりわけ「山口と世界」については、パソコン操作、プランニング、プレゼンテーション等の訓練をすでに受けている本学部生に他学部生が頼り切りになるケースがあることなどがわかった。

2. PBL マネジメントについての聞き取り調査

日 時：平成 28 年 2 月 22 日 10:30~12:30

場 所：佐賀大学

調査者：星野晋、冨本 浩一郎、秋谷直矩

インフォーマント：佐賀大学デザイン思考研究所ディレクター／松前あかね講師

聞き取り結果

デザイン思考研究所は、佐賀大学プロジェクト研究所において採択された期間限定（平成 27 年 4 月～30 年 3 月）の研究プログラムである。総合情報基盤センター松前進氏（代表）、松前あかね氏（デザイン思考プログラムディレクター）を中心に、佐賀大学のさまざまな部局および自治体、各種企業、NPO 等のメンバーから構成されている。事業としては、デザイン思考に基づき、アントレプレナーシップ（起業家精神）を発揮し、社会での新たな価値創造に挑戦する人材の育成を目指して、地域連携事業およびアントレプレナーシップ・プログラム等の教育プログラムを展開している。

共通教育のインターフェイス科目（選択必修）であるアントレプレナーシップ・プログラムは、学部を限定しない 2 年生から 3 年生の 2 年間にわたる、デザイン思考にもとづくプロジェクト型の学修プログラムである。社会観とキャリア指針の形成（2 年前期）、課題発見・アイデア創出（2 年後期）、アイデア実現のための事業モデルデザイン（3 年前期）、事業モデルの社会実装に向けた挑戦（3 年後期）という 4 部構成で、模擬的なファンディングを含むプロトタイピングを到達点とする。地域の企業や行政との連携も構築されており、実践的なカリキュラムとなっている。なお成績評価には、ディプロマ・ポリシーにもとづいて設計されたルーブリックを用い、学生が自己評価をしたものに担当教員が修正を加えてフィードバックし、成績を確定していくスタイルがとられる。

よく練られた学修プログラムで、本学部のプロジェクト型課題解決研究を学修プログラムとして設計していく上でたいへん参考になると思われた。ただしこの授業は、松前氏の個人的な人的ネットワークと授業設計・運営能力に負うところが多く、多種多様なテーマとスタイルのプロジェクトを多様な教員が担当して管理しなければならない本学部の PBL にそのまま応用するのは難しいかもしれない。ひとつのモデルとして、参考にしていければいいと思われる。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

同一科目を複数クラス・複数担当で開講している「山口と世界」および「課題解決能力演習」について、そのクラスごとの成績分布を学生支援委員会（学部内委員会）において比較検討し、その結果を拡大教授会で報告した。

両科目は開講前にFD研修会を開催し、授業設計の方針や評価方法について担当教員間の共通理解を形成するようにつとめたが、それでもクラスによる成績分布のばらつきが見られた。たまたまクラスのレベルに片寄りが生じる場合もありうるため、クラス間での平均化は難しいかもしれないが、他のクラスの成績分布をある程度意識するよう促した。

各授業内で課した具体的な課題や授業運営方法についてはクラスごとに異なるので、どのような課題・運営方法を用いたかについて調査し、その結果を踏まえた上で、次年度再度FD研修会を開催する必要があると考えられる。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
国際総合科学部	プロジェクト・マネジメント研修(ブレ研修会を含む)	研修実施経費	439	プロジェクト型課題解決研究の管理方法について理解が深まった
	PBLマネジメントについての聞き取り調査	調査者旅費	51	プロジェクト型課題解決研究関連のFDIに向け有意義な情報が得られた
		計	490	

第6節 来年度の課題

平成27年度は、すでに述べたように国際総合科学部は開設年度であるがゆえに、カリキュラム、授業運営、学生指導についての認識を教職員が共有する必要があり、そのためのFD研修会を繰り返し実施しなければならなかった。計画されていた学修プログラムを試行錯誤しながら運用してきたのであるが、一年経って振り返ると、さまざまな課題も見えてきた。

たとえば基礎セミナー、山口と世界、課題解決能力演習などのクラスによる負担度や成績評価のばらつきをどのように調整するかということ、アクティブ・ラーニング(とりわけグループ・ワークを含むもの)が多すぎることによる学生の授業時間外学修の過剰負担をどのように解消するかということなどである。これらについては、平成27年度の実態を調査し、情報を共有し、反省を踏まえた改善を促すためのFD研修会を開催していかなければならないだろう。

また今後、2年生の留学、海外からの交換留学生の受け入れ、プロジェクト型課題解決研究の準備といった大きなイベントや事案がひかえており、それらに対する準備のためのFDも重ねていかなければならない。そのため平成27年度同様、28年度も頻繁にFD研修会を開催することになる。

その一方で、それぞれの教員が担当している個別科目の教育の質を上げるためのピア・レビューやFDを開催するだけの余裕がないという問題もある。学部全体にかかわる事案が落ち着いてきたら、徐々にそのようなFDを組んでいく必要があるようである。

第13章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

人文科学研究科としてのFD研修会は実施していない。

第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、大学院生アンケートを実施した。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOCAN2を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。平成27年度もこれを踏襲し、人文科学研究科在籍中の大学院生11名を対象に、平成27年11月9日を締切として、記述式の無記名アンケートを実施した。アンケート提出者は4名で、回収率は28.5%であった。

アンケートの質問項目と回答は以下のとおりである。

1. 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、お教えてください。
 - ・演習では、自分の研究について先生から適切な指導を受けたと思います。
 - ・少人数で授業が行えるため、疑問等を比較的早く解決しやすいのはいいと思う。
 - ・教授との少人数、時には1対1の授業により、専門的かつ自由な授業ができているところは、ぜひ続けてほしい。

2. 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えてください。

- ・特にない。
- ・特になし。
- ・全てが院向けの授業なので、基礎的なものや、大人数での講義も受けたいです。特に、他コースのもの。

3. 研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。

- ・一日も早くコピー機を使いたいです。
- ・コンピューター、印刷機の調整。
- ・人文棟の書庫に夜中の時間でも入れるよう、学生証でも鍵が開けられるようにしてほしい。
- ・特にないです。人文図書館が、いつでも利用できればなお良いです。

4. その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えてください。

（2）教員授業自己評価

人文科学研究科の在籍学生数は14名で、授業数も限られている。27年度の実施率は28.5%であった。

第5節 FD実施経費報告書

人文科学研究科で実施したFD活動に伴う経費執行はない。

第6節 来年度の課題

規模が小さいため研究科独自のFD活動は展開しにくいですが、少人数であるがゆえに、よりきめ細やかな大学院生アンケートを継続させて、学生の要望をよく聴取し、学生の研究や研究環境の充実・改善に向けた提言を行っていくべきである。

第14章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

教育学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

教育学研究科主催のFD研修会は実施していない。

第3節 教育改善に関する活動

教育学研究科の改組により、修士課程が教科教育専攻教科教育専修に一本化され、教職大学院が設置される。このための準備が行われた。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

教育学研究科学生授業評価は、『受講者数が5名未満の場合、裏面の質問項目について、受講者と教員とが話しあってください。教員はその結果をもとに、教員授業自己評価の自由記述欄：「29. 授業実施上の工夫」と「30. 授業実施上の問題点・改善点」を記入します。この場合、アンケートシートに記入する必要はありません。』という形で行われている。

平成28年4月にIYOCAN2システムで確認した平成27年度前期の学生授業評価、教員授業自己評価の実施率は、学生授業評価が71.3%、教員授業自己評価が47.5%であった。

第5節 FD実施経費報告書

平成26年度は教育学研究科のFD活動においては経費を使わなかった。

第6節 来年度の課題

教育学研究科の改組により、修士課程が教科教育専攻教科教育専修に一本化され、教職大学院が設置される。大学院としてのFD活動の策定・実施に向けた取り組みを進める必要がある。

第 15 章 経済学研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい教員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのもとなつて実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあつたため、見直しをすることとなつたが、よりよい具体的な改善案がでてこなかった。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

- 「企業経営基礎研究に関する FD 研修会」平成 28 年 3 月 29 日 (火) 14:30~16:00, 第一会議室
 - ・ 渡日前入試入学者に対する大学院基礎教育について新たな試みを行い、藤田・柳田両准教授の成果報告会および F D 研修会を行った
 - ・ 参加者は 11 名
 - ・ 一般留学生との違いや入学後のケアの重要性など細かな報告と議論が行われた
- 「公共管理コース担当教員のための語学 F D 研修」
 - ・ 大学院公共管理コースでは、全ての講義を英語で開講している。担当教員の英語能力を高め、留学生とのディスカッションをより円滑にするため同研修を執り行った。
 - ・ 9 月 15 日 (火) 13:00~15:00 東アジア・経済学研究科棟 205 研究室
 - ・ 9 月 17 日 (木) 13:00~15:00 東アジア・経済学研究科棟 205 研究室
 - ・ 9 月 18 日 (金) 13:00~15:00 東アジア・経済学研究科棟 205 研究室
 - ・ 9 月 28 日 (月) 13:00~15:00 東アジア・経済学研究科棟 205 研究室
 - ・ 9 月 29 日 (火) 13:00~15:00 東アジア・経済学研究科棟 205 研究室
 - ・ 方法：参加者が講義の内容の一部をプレゼンし、それに対する質疑応答を行った。
 - ・ 講師：尊田望
 - ・ 参加人数：平均して、毎回 5~6 人程度
 - ・ ディスカッションを円滑にするためには、言いたい内容を瞬時に英語で話せることが必要であるが、うまく言えないとき、表現に誤りがあるとき、また、より効果的な表現についても講師からその場でアドバイスがもらえ、英語のディスカッションの能力の向上には効果的だと思われる。英語能力の向上に終わりはなく、持続的な研修が必要とされる。



第3節 教育改善に関する活動

経済学に関する基礎知識のない学生（特に留学生）の基盤教育をどのようにするべきか議論をした。大学院共通科目のようなものを設置して基盤教育を支える仕組みが学部同様に必要なのではないかということになった。

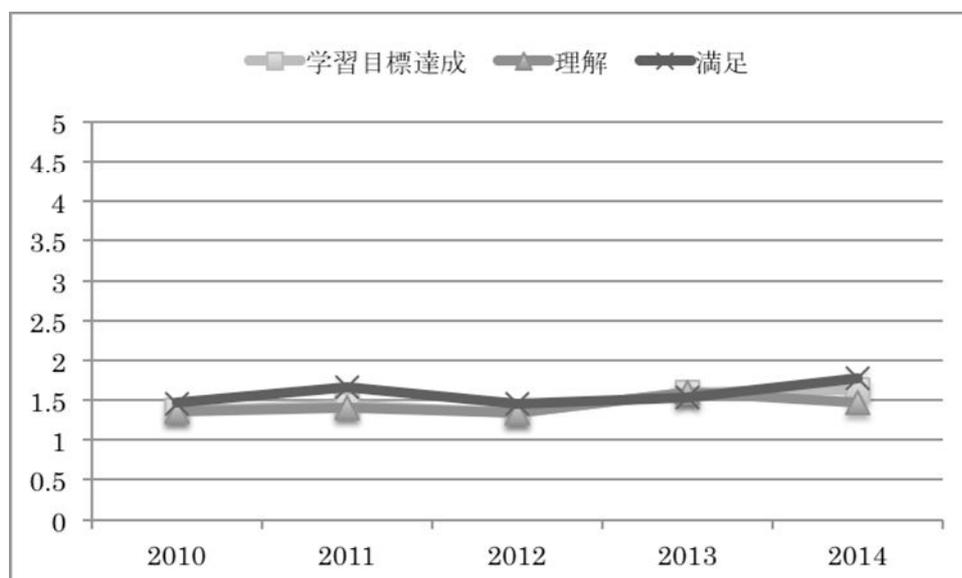
さらに、論文作成時の倫理問題（引用と盗作の違いなど）をどのように指導するかなども議論の対象となった。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

大学院講義については3人未満の受講生がほとんどであり、正確な授業評価となりにくいという判断で授業評価を執り行っていない。

教員入御自己評価をみると以下の点が特徴的である。

1. 学部教育と比較して学習目標達成、理解、満足ともに自己評価点が非常に低い。
2. 経済学研究科の場合、留学生の比率が高く、日本語での講義に学部教育にはみられない問題が潜在している可能性がある。
3. 公共管理コースにおいては、教員側が英語で講義をする必要があり、その苦勞が低い自己評価につながっている可能性がある。
4. 多くの講義が少人数による受講であることで、従来とは逆に何らかの非効率性を生み出している可能性がある。



グラフ1 教員授業自己評価

第5節 FD実施経費報告書

語学研修のために、外部講師を招き、講師料として5回分6万円を支払った。また、諸経費（印刷・ポスターなど）に2万円経費計上させていただいた。

第6節 来年度の課題

- ・ 教員授業自己評価の入力率向上を目指す
- ・ 学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・ 低い自己評価の実態を共通認識とし、改善点を追求する
- ・ 学生、教員の語学研修について新しいシステムを考える
- ・ 外部研究費獲得のための工夫
- ・ 公開授業（ピア・レビュー）のあり方について議論する

第16章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは理工学系研究科（第17章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは農学研究科（第18章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 17 章 理工学研究科の F D 活動

理学系

第 1 節 授業公開

1. 物理・情報科学専攻のピア・レビュー

理工学研究科（理学系）として物理・情報科学専攻の情報科学ゼミナール I, II のピアレビューを実施した。その他の理学系教員は、理学部のピアレビューに参加した。詳細は第 7 章の理学部の FD 活動を参照されたい。

（1）実施科目「情報科学ゼミナール I、II」

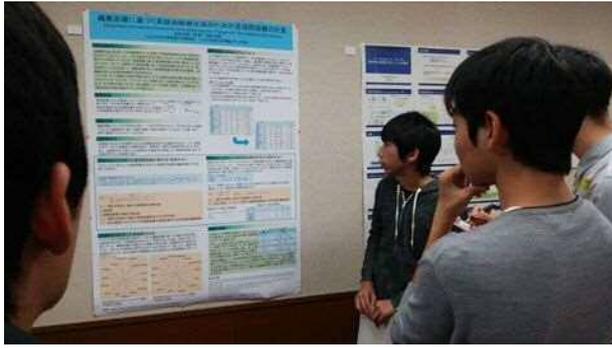
1) 概要

- ①日時：平成 27 年 12 月 4 日（金）
- ②対象学生：M1, M2
- ③授業概要：情報科学ゼミナール I, II の履修者が、各自の研究課題に関するポスター発表を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。
- ④授業の到達目標：
 - ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
 - ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。
- ⑤授業担当教員：西井 淳（分野長）
レビュアー：山本隆、内野英治、松野浩嗣、末竹規哲、浦上直人、川村正樹
- ⑥レビューの方法：授業に出席の後、授業改善点等について議論する。

2) レビュー結果

- ① 授業内容
 - ・学生は 4 グループに分かれ、ポスター発表を 30 分間行った。発表者以外の学生は、レビュアーとして、質疑応答を行った。
 - ・総発表件数と発表スケジュールは以下の通りである。
 - 第一グループ：14：40－15：10（発表 4 件）
 - 第二グループ：15：10－15：40（発表 3 件）
 - 第三グループ：15：40－16：10（発表 4 件）
 - 第四グループ：16：10－16：10（発表 3 件）

(a) 授業の様子



② 授業の進め方

- ・ 学生は4グループに分かれ、30分間のポスター発表を行う。発表グループ以外の学生は、レビュアーとして参加し、発表者に質問等を行う。
- ・ 各レビュアーはそれぞれ発表に対して採点を行い、授業の成績にも反映させた。
- ・ 研究発表能力の向上、および聞き手として友人の研究に建設的・批判的にかかわる態度の養成を目指した。

③ その他、改善点

- ・ 昨年度の反省点から今年度は、1グループあたりの発表者を少なくし、レビュアーの人数を多くした。
- ・ 数年前までは、教員がレビュアーとして積極的に参加することで発表を行っていたが、近年は教員が参加しなくても学生間で自由な意見交換が行われている。情報科学ゼミナールI, IIを通してM1とM2が参加し、またM2は2度目の参加となることから、より良い議論の場ができあがっていると思われる。
- ・ 発表時間が30分間と少し短めであることから、発表内容によっては議論する時間が少なかったようにも感じられる。ただ、発表時間を長くするためには発表グループ数を少なくする必要があるため、当面は、この方法で様子を見たいと考える。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

理学部教育改善FD研修会

講師派遣型アラカルト研修会「大学における精神障害の実態と支援」

第3節 教育改善に関する活動

理工学研究科単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

理工学研究科理学系（数理科学専攻，物理・情報科学専攻，地球科学専攻）で開講している授業科目の学生授業評価の結果を以下に示す。数値は、正規化した指標である。図1から図5における学生の自己評価において、図1の「学生の授業外学習時間」以外の評価項目は上昇傾向にあり、学生自己評価全体では良い方向に向かっていると思われる。しかし、教員側の評価は昨年度上昇したが、今年度は全ての項目で数値が下降している。このデータ通りであれば、来年度は実質的な改善を検討する必要があるが、まずはデータの信頼性を調査する必要がある。

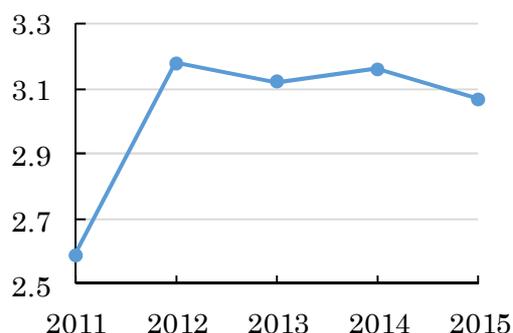


図1 学生の授業外学習時間

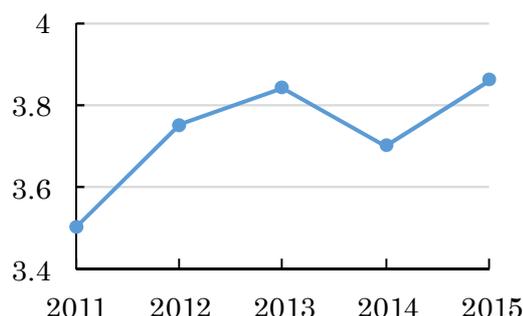


図2 学生の授業目標達成の自己評価

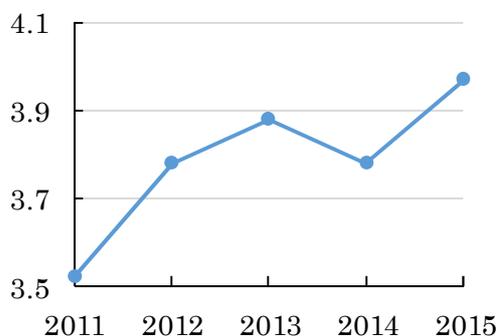


図3 学生の授業理解度の自己評価

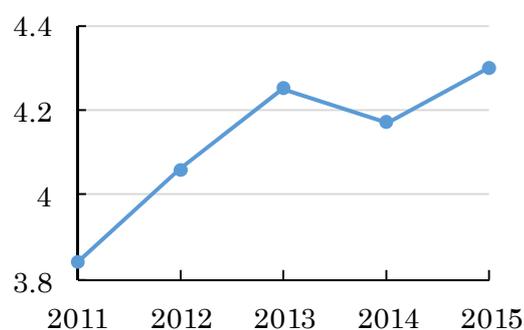


図4 学生の授業満足度の自己評価

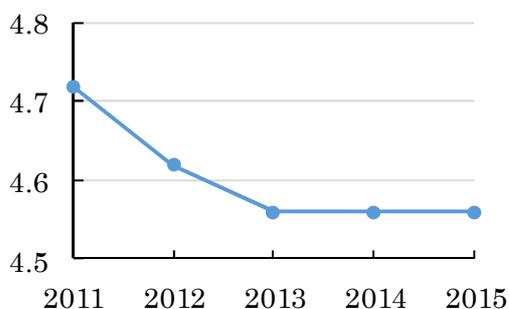


図5 学生の授業出席の自己評価

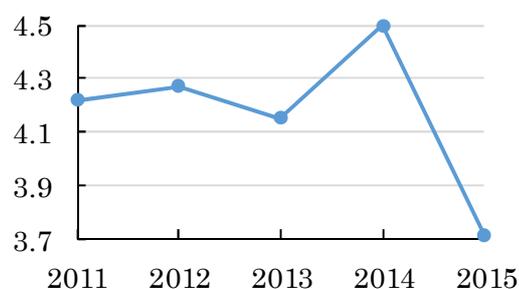


図6 教員からみた学生の授業目標達成

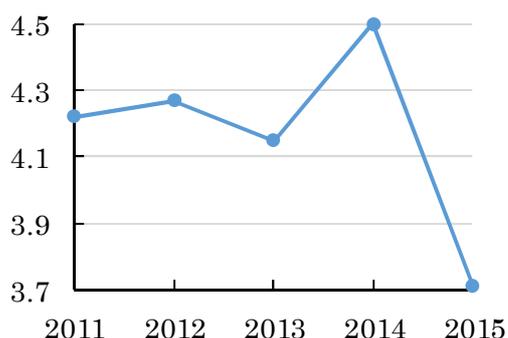


図7 教員からみた学生の授業理解度

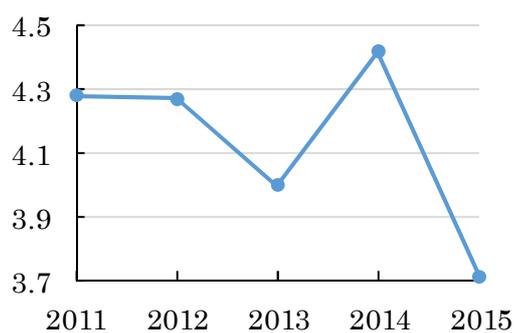


図8 教員からみた学生の授業満足度

第5節 FD実施経費報告書

理工学研究科（理学系）単独では、FD 実施経費を使用していない。理学部と共通で使用した。したがって、実施経費報告は理学部第5節のFD活動を参照されたい。

第6節 来年度の課題

学生授業評価においては、全体的に数値が年々上昇している。授業出席の自己評価は、ほぼ横ばいではあるが、低数値のため出席率を上げる授業展開が必要と思われる。教員の自己評価においては、実施全項目で例年より大幅に下降している。データの信頼性を含めて、その原因を調査する必要がある。

来年度、理工学研究科は理系大学院の再編により、新たに理・工・農学系専攻を統合した創成科学研究科となる。それぞれの専攻の壁を越えて、成績評価の適正化につき議論する必要がある。

工学系

第1節 授業公開

理工学研究科（工学系）では毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も学部の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に実施した。参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配布され、授業改善に役立てている。

第9章第1節では、学部と研究科を合わせた今年度の参観者数と参観率を示した。参観者数は参観した教員の主担当学科で集計している。全体的な参観率は15%であった。今後、大学院科目の参観率を高めるために、工学部の点検・評価委員会において大学院科目も併せて検討していく必要がある。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

FD研修会は、学部と研究科が合同して主催し、実施した。実施した以下の研修会の詳しい報告については、第9章の第2節に記した。

第3節 教育改善に関する活動

第9章の第3節で工学部における教育改善活動について報告した。工学部附属の「工学教育研究センター」では、学部の教育改善だけでなく、大学院の教育改善も対象にしている。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の授業と同様に、理工学研究科の授業の学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。第10章の第4節で、学部と研究科の優秀授業表彰について報告した。ここでは、大学院の75科目の分析データを示し、今年度の大学院の優秀授業、最優秀授業の一覧表も記載した。

記載したデータから判断すると、理工学研究科のほとんどの授業は概ね良い以上の評価であり、8割の授業は良い評価を受けている。このような学生授業評価結果に満足せず、今後も大学院の授業改善のための活動をさらに進めていきたい。特に来年度は創成科学研究科となり、新たな試みの科目も多い。これら新科目も良い評価を受けるよう努力を続けていく必要がある。

第5節 FD実施経費報告書

工学部・理工学研究科(工学系)の経費報告書は、第9章の第5節に記載した。

第6節 来年度の課題

来年度の課題として、

- (1) 授業外学習時間の確保
- (2) 適正な成績評価

が挙げられる。今後、点検・評価委員会で、問題点の整理をした上で検討していきたい。

また、第4節で述べたように新しい研究科である創成科学研究科ではこれまでの理工学研究科にはなかった新たな取り組みの科目が多く存在する。これら科目が院生にとって有益な科目となり、さらに高評価を得るような努力を続けていく。

第 18 章 農学研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。

1. 呼吸筋のはなし
日時：平成 27 年 4 月 23 日（金）17 時～ 宮田浩文 教授
2. 活性酸素と活性カルボニル～からだがつくる毒物のふしぎ
日時：平成 27 年 5 月 28 日（木）17 時～ 真野純一 准教授
3. 微生物の耐熱性と高温でのエタノール発酵生産
日時：平成 27 年 6 月 26 日（火）17 時～ 山田守 教授
4. 炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析
日時：平成 27 年 7 月 21 日（火）17 時～ 藤井克彦 准教授
5. 人工光型植物工場における植物生産技術の開発
日時：平成 27 年 9 月 16 日（水）16 時～ 佐合 悠貴 助教
6. 酢酸菌の細胞内代謝に関する研究
日時：平成 27 年 10 月 30 日（金）17 時～ 薬師寿治 准教授
7. 植物は臭いを出したり、時には吸ったりしている 一何のために？それに、鼻もないのにどのように？
日時：平成 27 年 11 月 20 日（金）17 時～ 松井健二 教授
8. 鉄-ポルフィリン錯体の電子状態研究からヘムの酵素的分解過程の研究へ
日時：平成 28 年 1 月 22 日（金）17 時～ 右田たい子 教授
9. 青果物の品質保持研究に携わって
日時：平成 28 年 3 月 5 日（土）14 時～ 山内 直樹 教授

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

農学研究科では、派遣型アラカルト FD 研修会および教育改善 FD 研修会を以下の内容で開催した。

1. 平成 27 年度 派遣型アラカルト FD 研修会

「就職・採用活動時期の後ろ倒しと山口大学の就職支援 Ver2.0

(農学部 FD 研修会)

日程 平成 27 年 9 月 15 日(火)
[吉田地区] 14:30～15:30
場所 農学部本館 2F 大会議室
(吉田キャンパス)
講師 平尾 元彦先生
(学生支援センター教授)
参加者 27 名(アンケート 21 枚回収)



内容

本年度より、就職活動・採用活動の後ろ倒しが今年から始まった。現在の状況は 8 月に事実上の解禁になって一気に内定が出ているという状況で、おそらく 10 月現在の数字は昨年とそれほど変わらないと予想される。就職活動・採用活動の後ろ倒しの背景、元々は大学からの問題提起がスタートになっている。経済界が主に採用することもあり、日本経団連が中心になって採用の秩序をどのようにしていくのか、一時期協定がなくなった時期もあるが、倫理憲章と言う形で日本経団連を中心に、3 年生の 10 月採用広報の解禁、4 年生の 4 月採用選考の解禁となっていたのが少し後ろ倒しになり 12 月解禁、4 月解禁というのが良く知っているルール。それに対して大学がどのように言って来たかと言うと、従来学生の就職採用活動の早期化・長期化の是正を大学関係団体の総意として経済団体にずっと要請してきた。倫理憲章の 23 年 3 月の改訂で 12 月解禁にしたが、依然として大学の授業、学事日程と重複し、学生の成長が最も期待される 3 年次の教育に支障または留学の断念という傾向が見られるので、更に見直して欲しいということを大学側の総意として経済界に要請をしていたという経緯がある。2013 年 4 月に安倍首相が経済界へ「学生の就職活動に関して早期化長期化を是正するよう」要請した。同時に今年初年次なので就職活動時期の見直しにより、就職活動期間が短縮されることになるため学生に不安と混乱が生じないように、それによって学生が不利にならないようにして欲しいという要請も合わせて行われている。

当初、採用活動が後ろ倒しにされた関係で、就職できない学生が増えるのではないかと懸念された。今でもその懸念はあるが、それについてそういう事がないようにということも含めてのきめ細かな対応が求められている。就職ナビ各社はサイトオープンを 3 月 1 日にしていたことから、3 月以前に学生にメールを出したり、学生から何か受け付けたりするのが企業側はかなり難しくなり、結果的に大学および政府側の要請はほぼ守られた。12～2 月の学業の影響はかなり少なくなったと思われる。8 月以降に採用選考を開始して欲しいという要請は、守った企業もあるが守ってない企業もあった。国家公務員採用試験、地方公務員採用試験は若干後ろに日程が下がったが、大きく変わってはいない。国家公務員は 6 月に試験、採用面接は 8 月以降で、もうほぼ国家総合職、一般職、県庁の内定が出ている状況であり、市役所もこれに続くと思われる。その一方で、3 月以降でも実施可能なイ

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	23.8%
良かった	11	52.4%
どちらとも言えない	3	14.3%
あまり良くなかった	1	4.8%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

インターンシップの採用結果への影響が強くなってきている。インターンシップ採用、という言葉が出て来ているくらいであり、インターンシップ来た学生に特別ルートで特別な日に呼んで採用にむけた繋がりを保つという企業の活動起きている。また、経団連の会長の記者会見の中で、平成 28 年度の日程は必要に応じて見直す可能性があるという話が出て来た。

他方、就職活動の時期を後ろ倒しにする要請に加えて、大学側からは、学業成果(成績や履修履歴)をもって採用選考の評価をして欲しいと合わせて要請している。今までの採用選考では 4 年生になつてすぐと言うことで、あまり修論、卒論のことを聞かれることがなく、これに対する懸念から来た要請であった。学生から聞く限りは聞かれるケースが増えているようである。

これら以外の話題として、「オワハラ」に関する情報提供があった。4 年生の 12 月以降になると、毎年一定数の学生が進路未定として残ることになるが、後ろ倒しの影響なのか、人手不足の影響なのかかわからないが、中小企業は非常に採用意欲が高い。人材を一人でも多く獲得したい意思が悪く表れることがあり、これがいわゆる「オワハラ」である。内定を出した学生にそれ以上他社の採用試験を受けるなどという圧力的依頼である。現時点では山口大学の学生からは悪質なケースは報告されていない。他方、教員サイドが学生に卒業研究等に注力するよう指導したことが行き過ぎて、同様の「オワハラ」が発生する場合もある。学校の教員側のハラスメントにならないような配慮を心掛ける必要がある。

最後に、山口大学就職支援室の紹介と協力依頼があった。支援室では、確実に学生達が就職出来て進路得られるようにと言うことで様々な活動をしており、学内の行事、就職支援室の積極的な活用を是非促して欲しいという依頼が教員側になされた。学業と並行した就職活動を実現し、出来るだけ大学に来てもらえる会社には来てもらい、学生側が実験等との両立を効率的に出来るようなことを計画している。今年も学内業界・企業研究会、11 月～2 月に約 500 社来て頂く予定にしている。また、今年は農学部 day を 12 月と 1 月、2 回に拡大しての実施できるよう準備している。進路未定学生の重点支援も重要であると思われるが、何よりも正確な把握が必要である。教員の方で研究室の学生の状況を把握して頂くと共に、それを支援していく目的でハローワークと連携し、相談日を設ける事にした。特別な配慮が必要な学生、コミュニケーションが上手く行かない学生等については学生特別支援室と連携して早目の取組を行っていききたいので、教員側からは早目に情報提供を通して協力頂きたい、との依頼があった。

質疑では次のようなやり取りがあった。

Q: 農学部の自分の知っている範囲では、学生の地元志向、出身地への志向、公務員志向が強くなっているように思う。それが同じ学部の同窓生同士が競合してしまうことがある。下級生から視野広くしていく必要があると思うが、我々として具体的にどういうことをしたら良いか考えても良く分からないのでアドバイスがあれば教えて頂きたいことと、もう 1 つインターンシップが踏み絵になったり、成績が重要視されるのはインターンシップの学生の話聞いてもそう思うが、ちょっと変な視点だが、例えば学士力という言葉が中教審で出されて、そこでは専門性よりプレゼン能力とかコミュニケーション能力と言う事の方が重要視されて、そういう事のベースに山大では共通教育のシステムを変えたりとか、インターンシップも長期インターンシップということをいろんなところの予算に入れてきているということで、社会の事と山大の中の事整合性が取れなくなる気がしていて、自分もそれに絡んでいたの、その辺は先生からも資料まとめて山大全体に警鐘鳴らして頂きたいところではあるなど。質問は地元志向について。

A: 地元志向は高まっているどうかは分からないが、確実に高いのは事実。調査はしてほぼ 66. 数%くらいと思うが中四国九州出身者の山大生の地元が良いですかと言うとだいたい 2/3、どこでも良いというのが 1/3 くらい。従って特に農学部と言う同じ学部の卒業生がある食品会社に競合するということは非常に有り得るような話であって、お互い辛いなという現状はあろうかと思う。一つは結

果的に地元が良いと言うのはあるが、それはあり得る話なので、それは良いとしても、何も考えずに、あるいは何も知らずに、というのはあまり良くないことだと思う。我々として今やっているのは、一つは学内業界・企業研究会、これは全国から企業が来るので、5~6年くらい前は就職活動向けと言うことで3年生対象にやっていたが、学年は取っ払っている。なかなか低学年は来ないが低学年の学生もちょっと話聞きに行こうということが気軽に出来るようなそんな体制づくりはとっている。今年はよりそれ強化して1年生向けの広報も強化して行く事になろうかと思う。従って農学部の1年生、2年生の方も今日は森永製菓が来る、どんな会社かちょっと聞きに行こうでも良いし、地元の会社が来る、それも聞きに行けば良い、その上で自分はどんな可能性があるのかということをやちゃんと確かめられるそういう環境、直接企業と会うということは作って行こうと思う。

もう1つ我々力を入れているのは本読むと言うこと。全ての学生についていちいち我々が指導するわけには行かないので、例えば食品業界であればどんな会社があるのかなとか、食品業界で開発した人ってどういう生き方をしているのかなと言うことを本で読み理解することによって、自分の可能性って凄くあるよねって言うことを分かってもらったら良いなと言うことで、就職支援室に本を沢山入れています。今2800冊くらいあって貸し出しもしていますので、それを3年生はもちろんですけど、1年生から読むようにと言う形で働きかけている。まだこのくらいしかできてない状況ではあるが、こういうこと推進するために先ほど申し上げた学生支援センターキャリアNEWSと言うのを1~2年生向けに11月から配信するようにしたので、1~2年生も一応メールは来ているので、ああいうのに行ってみたいなと思えばいける状況ではあるが、なかなか思わない。就職活動まだまだだよ、みたいなの、そんな感じはあろうかと思う。一応、基盤としての広報、あるいは掲示等で知らせるということ。低学年向けの物も作っている。もし、やるとすれば、より分かり易く例えば農学部の2年生向けに企画するとか、農学部のこういう医薬に興味のある人にこういう企画をするとか、少しそんな取り組みも発展形としてはあり得るかなと思うので、もし先生方の方でこれ良いよねというのであれば一緒に出来ると思う。もう1つのインターンシップ等に関しては、実際に踏み絵的になっている面はある。正直に言えばあるが、一方でインターンシップに行かないと就職できないかと言うとそれもないだろうと思う。特に大手の技術系を採用する会社の中でインターンシップ来てもらうとありがたいがそんなに来られない。特に優秀で一生懸命実験とかに頑張っている学生ほどなかなか来れないという面があるので、結構探していると聞いている。優秀な技術系の学生を大学に探しに行っているという面があると聞いている。インターンシップというのは一つの手段なので、行ける人は行って頂ければ良いと思うが、いけない人は無理して行く必要はない。ただ、企業の人々が来た時にはちょっと会いに行くとかそのくらいはして頂かないと結局接点持てないというのはあろうかと思うので、インターンシップはあくまで一つの手段であって、これじゃないといけないというものではない。いろんな接触の機会はあるが、出来れば早目に接触しておいて頂くことが、その後の効率的な就職活動に繋がっていくのではないかなと思う。

Q: 本と言うのは具体的にどんな？

A: いくつかカテゴリーがあるが、面接の達人とかいわゆる就職活動の本はもちろんある。あるいは業界研究、医薬品業界とか、業界本、これも結構ある。それ以外に三つ力を入れている物があって一つは理系本コーナーと言うのがある。技術者の事を書いている本を集めている。ノーベル何とか賞を受賞した人の本などがある。それから働くことを研究する本ということでこれは小説とかも含めて必ずしも就職活動ではない人の生き方を書いている本、特に稲森和夫のなんとかとか、松下幸之助のなんとかとか比較的有名な方々が本をたくさん書かれているのでそういった本を通じて働くってどういう事かなと考えるということ。もう一つのコーナーは社会人基礎力のコーナーでこれはサラリーマンの方がよく読む例えばスピーチの仕方だとか企画書の書き方であるとかそういった一般向けの本で、決して大学生向けに書かれているわけではないが、企画書の書き方の本を読んで採用面接のプレゼンテーションに臨むとかそういったことも必要かなと思う。こういったジャンルの本を入れているので、山口

大学の就職支援室は結構そういう意味で特徴があって一種の図書館的な情報センター的な役割も果たしている。

アンケートでは以下のような意見が見られた。(原文まま)

学生への就職指導へのヒントがいただけた

現状理解が深まった

就職活動の現状を知ることが出来た

学生にどのようにアドバイスすれば良いか、なんとなくわかった(注意点含め)

貴重な情報を得ることができました

特に目新しい内容ではなかった

今後の研修内容の希望については以下のような意見が見られた。

魅力的な講義の作り方

モチベーションの低い学生へのやる気の出させ方(研究室でのふるまい等について)

全学学生の状況などがわかるもの

就活

2. 平成 27 年度 教育改善 FD 研修会(農学部・農学研究科・医学系研究科(農学系))

日程 平成 27 年 10 月 21 日(水)

[吉田地区] 14:30~15:30

場所 総合研究棟 3F

(吉田キャンパス)

講師 林 透

(大学教育センター)

参加者 30 名(アンケート 15 枚回収)

内容

本研修会では山口大学・大学教育再生加速プログラム (YU-AP) の概要について、アクティブ・ラーニング (以下、AL) および学修成果の可視化を中心に説明が行われた。

YU-AP 事業では「既存の教育の内部質保証システム (Teaching の PDCA サイクル)」に加えてティーチングからラーニングへの転換のための「学びの好循環 (Learning の PDCA サイクル)」の構築を推進している。Learning の PDCA では AL や学修成果の可視化が有効であるとの説明があった。

本学では AL への関心は高いものの、実践する教員はまだ少ない。そこで、各授業における AL の割合を数値化して可視化する AL ポイント認定制度およびこれに基づくベストティーチャー表彰制度を設けることによって、AL 実践の動機付けを進めてゆく方針である。AL ポイント認定制度においては、毎回の授業ごとに AL ポイントを設定してもらい、シラバスに掲載する予定である。現時点では試験



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	20.0%
良かった	7	46.7%
どちらとも言えない	4	26.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

的に一部の科目（共通教育）で AL ポイントを導入している。試験的に収集データによると、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度も高くなる傾向がみられた。今後も引き続き分析・検証を行い、FD も実施してゆく予定である。また、AL を支援する ICT 機器や AL 教室についても紹介があった。

次に学習成果の評価の構図についての説明があった。ここでは縦軸に評価間接評価・直接評価、横軸に心理測定学的パラダイム（定量的測定）・オルターナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）をとって、それぞれの象限に対応する評価とその測定方法が示された。これらのうち、学修到達度調査として本学で導入されている PROG（Progress Report on Generic Skills）テスト、ポートフォリオ、これらを元にした学生支援の方向性について説明があった。また、国際総合科学部で導入された CoBCus についての言及があった。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 PROG テストは今後どのように実施してゆくのか。データを提供してもらえるのか。

A1 現在、学部 1 年生と 3 年生で実施している。今後、1 年時にテストを受けた学生が 3 年時に再度テストを受ければ、経年変化を観察できる。これらのデータは、各学部提供する予定である。

Q2 PROG テストは主に正課外学習を対象としているのか。

A2 正課と正課外の両方を対象としている。

Q3 AL ポイントについて、実験・実習は最大 14 ポイントのうち 6.99 ポイントしかないが、これは低すぎるのではないのか。

A3 講義系の科目の平均ポイントは 4.25 であるから、これと比較すると実験・実習のポイントが極端に低いとは思わない。経験的に AL ポイントが 10 ポイントを超える授業は希であることから考えても、実験・実習のポイントは妥当ではないか。実験・実習について授業によって AL ポイントに大きなばらつきがあるが、これは今回初めて入力を行ったため、教員によって AL の解釈に違いがあるためだと考えている。今後はどのような活動を AL ポイントに含めるかについて教員間で共通認識を深めながら、更に検討を進めてゆきたい。

Q4 AL ポイントの数値には意味があるのか疑問に思う。例えば 3 ポイントと 4 ポイントでは、その差にどの程度意味の違いがあるのかわからない。また、数値が 2 倍になれば実際の AL の割合も 2 倍になるのか。

A4 今後データを蓄積しながら、AL ポイントがある程度の目安になるように検討したい。

Q5 AL ポイントがシラバスに表示されているが、これが原因で非常に閲覧しにくくなっている。多くの学生からシラバスが見にくいとの苦情を聞いている。改善して頂きたい。

A5 問題を認識している。現在、修学支援システムの改修を進めているので、改善してゆきたい。また、学生に対しても AL ポイントについて説明をして理解を求めてゆきたい。

Q6-1 頑張る学生と頑張らない学生は意欲に極端な差があり、中には全くやる気がない学生がいる。ひとつの問題は、現状では学生にはどこまでがんばってどういう達成度を上げたらトータルで合格するのかという基準がわからない。従って、例えば AL の一環としてグループワークで調査をさせると、「調査に行く」と言って遊んでいる学生がいる。他のグループと比較すると、このような学生はわかる。本来であれば、学生本人がこれではあまりにも恥ずかしいと思って頑張ることを期待するが、現実には全く関知しない学生がいる。このような学生を何とかしなければならぬが、これについては

方策があるのか。

A6-1 グループでの活動が多いとフリーライダーが出てくるので、ルーブリックの仕組みも使いながら、グループでの評価に加えて個人についてもグループにどう貢献したかを書かせるようにしている。これによって大体状況がわかるので、その結果を学生にフィードバックしている。

Q6-2 それはすでに実施した。しかし、グループ全体で口裏を合わせるので効果はなかった。したがって、グループ全体の評価を下げるしかなかった。そうすると、そのグループで頑張った学生が足を引っ張られて悪い評価になってしまう。この経験から、やはり評価は個人に対して行うべきものであると考える。よく頑張る学生はそのままにしても伸びる。そこで、まず何割ぐらいの学生をどのようにして伸ばしてゆくかについての目標が必要である。それぞれの学部で具体的に目標を決めるべきではないか。

A6-2 我々が依拠している教育理念に育成しなければいけない力を定めているので、これに根拠を持たせようとしている。各学部にはディプロマポリシーを定めてもらい、全学でも目標は必要だと思うが、何割かということになると難しい。

Q6-3 大学としての質保証ということが言われているのだから、その質に達していなければ卒業させないようにして質を保証することが強く求められている。学生に対してはこのような方針であることを具体的に説明し、文書で明示するのはもちろんのこと、どのような方法で学生を教育してゆくかを検討すべきではないか。

A6-3 そういう意味で汎用的能力についてはPROGテスト等で目標を見せるということと、CoBCusでどのように結果を判断しサポートしてゆくかを考えている。

Q7 シラバスにALポイントを掲載することは、学生にとって何のメリットがあるのか。かえって、楽をしたい学生はALポイントが小さな授業は単位取得が容易と考えて選択するのではないか。

A7 実際にそのような結果もある。ただ、ALポイントが上がれば理解度や満足度が上がるという結果もあるので、学生にもALが役立つという説明を継続的にしてゆきたいと考えている。

研修会後のアンケートには、本研修会の感想については「カタカナ用語が多く理解できない点が多かった（リテラシー、コンピテンシー、ルーブリックなど）」、「わかりにくい用語が使われていた」、「評価についての話は初めて聞くような内容で勉強になりました」、「アクティブ・ラーニングについて認識が深まった」、「カタカナ用語が多く、わかりにくい部分があった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「ALの事例紹介」、「学内外の具体的な例を紹介頂きたい」、「ALの効果の実証」、「学生のモチベーションについて」との回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

農学研究科および医学系研究科（農学）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

また、平成28年度より開始される創成科学研究科（農学専攻）に関する以下のディプロマポリシーならびにカリキュラムポリシーを作成した。

ディプロマポリシー

【農学系専攻】

本専攻は、農学系分野に関する高度な専門知識と能力を備え、国際感覚を持ち、自立的で人間性豊かな研究者・技術者を育成することを目的としており、所定の期間在学し、所定の単位を修得し、本専攻の人材養成目的に適う、以下の知識・能力などを身に付けた上で、学位論文の審査及び最終試験に合格することが課程修了の必須条件となる。なお、本専攻では、「農学コース」は農学に関する授業科目系のカリキュラムを編成しているため、授与する学位は「修士（農学）」とする。「生命科学コース」においては現在の医学系研究科応用分子生命科学系専攻における教育研究を継承し、食料や医療等に利用可能な有用機能分子をはじめ生命科学に関する授業科目を中心としたカリキュラムとなっているため、授与する学位は「修士（生命科学）」とする。

○農学コース

1. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境及び食料問題に対処する能力
2. 生物生産・環境科学に関する専門知識及び技術を修得し、持続可能で豊かな社会の形成に貢献する能力
3. 科学技術に関連した国際的・社会的問題について、研究者あるいは高度職業人として解決しようとする姿勢

○生命科学コース

1. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境及び食料問題に対処する能力
2. 生物機能科学に関する専門知識及び技術を修得し、持続可能で豊かな社会の形成に貢献する能力
3. 科学技術に関連した国際的・社会的問題について、研究者あるいは高度職業人として解決しようとする姿勢

カリキュラムポリシー

【農学系専攻】

本専攻は、農学系分野に関する高度な専門知識と能力を備え、国際感覚を持ち、自立的で人間性豊かな研究者・技術者を育成するため、以下の方針に沿って、教育課程を編成する。

○農学コース

1. 「研究科共通科目群」を履修させることで、理工農学分野の研究者及び高度専門職業人として共通に必要なとされる倫理規範および社会的・職業的自立への心構えを涵養し、知的財産やイノベーションに関する知識や方法を修得させる。
2. 「専攻基盤科目群」を履修させることで、食料、生命、環境に関するコース横断的な幅広い専門知識とグローバル人材として必要不可欠な専門英語を修得させる。
3. 「特論」および「特別講義」を履修させることで、生物生産・環境科学に関する最先端の科学的専門知識と社会問題に対する理解を深めさせ、持続可能で豊かな社会の形成に貢献する研究者あるいは高度職業人を目指す上で必要な素養を身につけさせる。
4. 「特別演習」と「特別研究」で、指導教員の教育・研究指導の下、修士論文作成を行わせ、専門的で高度な技術・知識とそれに基づいた課題解決能力を修得させる。
5. 「長期インターンシップⅠ」および「学外特別研修Ⅰ」により、国内外の企業や海外の大学での研修の機会を与え、大学内では得られないグローバルな経験による国際的視野の涵養や職業理解を図る。

○生命科学コース

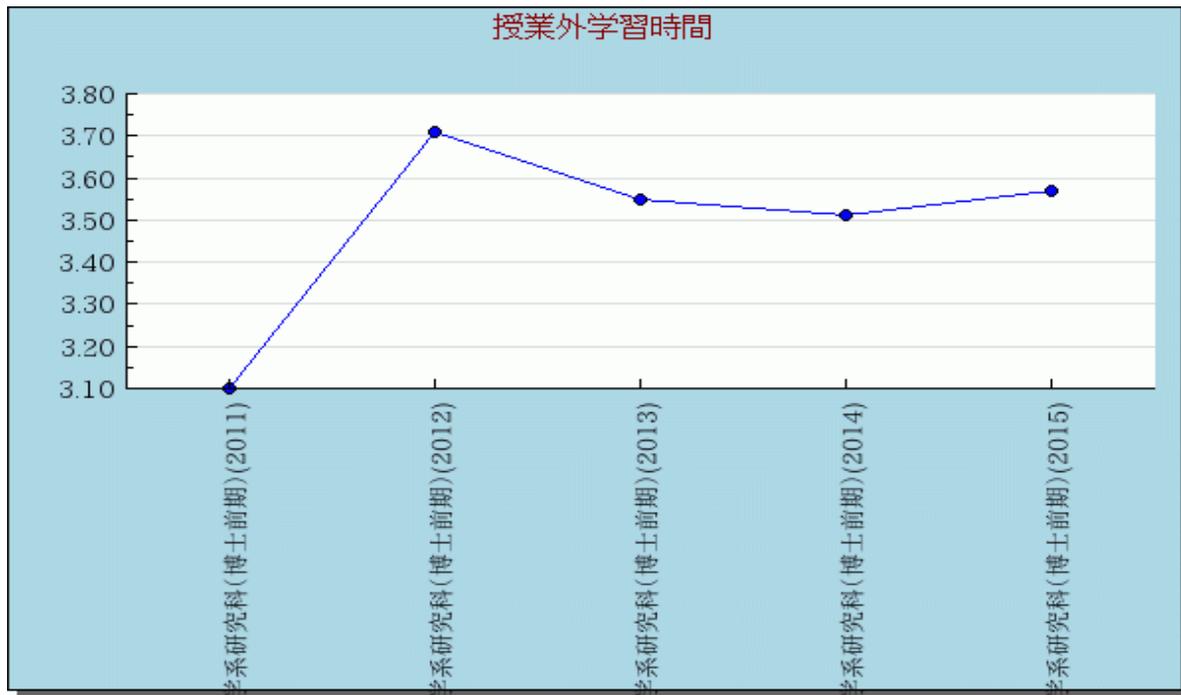
1. 「研究科共通科目群」を履修させることで、理工農学分野の研究者及び高度専門職業人として共通に必要な倫理規範および社会的・職業的自立への心構えを涵養し、知的財産やイノベーションに関する知識や方法を修得させる。
2. 「専攻基盤科目群」を履修させることで、食料、生命、環境に関するコース横断的な幅広い専門知識とグローバル人材として必要不可欠な専門英語を修得させる。
3. 「特論」および「特別講義」を履修させることで、生物機能科学に関する最先端の科学的専門知識と社会問題に対する理解を深めさせ、持続可能で豊かな社会の形成に貢献する研究者あるいは高度職業人をめざす上で必要な素養を身につけさせる。
4. 「特別演習」と「特別研究」で、指導教員の教育・研究指導の下、修士論文作成を行わせ、専門的で高度な技術・知識とそれに基づいた課題解決能力を修得させる。
5. 「長期インターンシップ I」および「学外特別研修 I」により、国内外の企業や海外の大学での研修の機会を与え、大学内では得られないグローバルな経験による国際的視野の涵養や職業理解を図る。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生授業評価

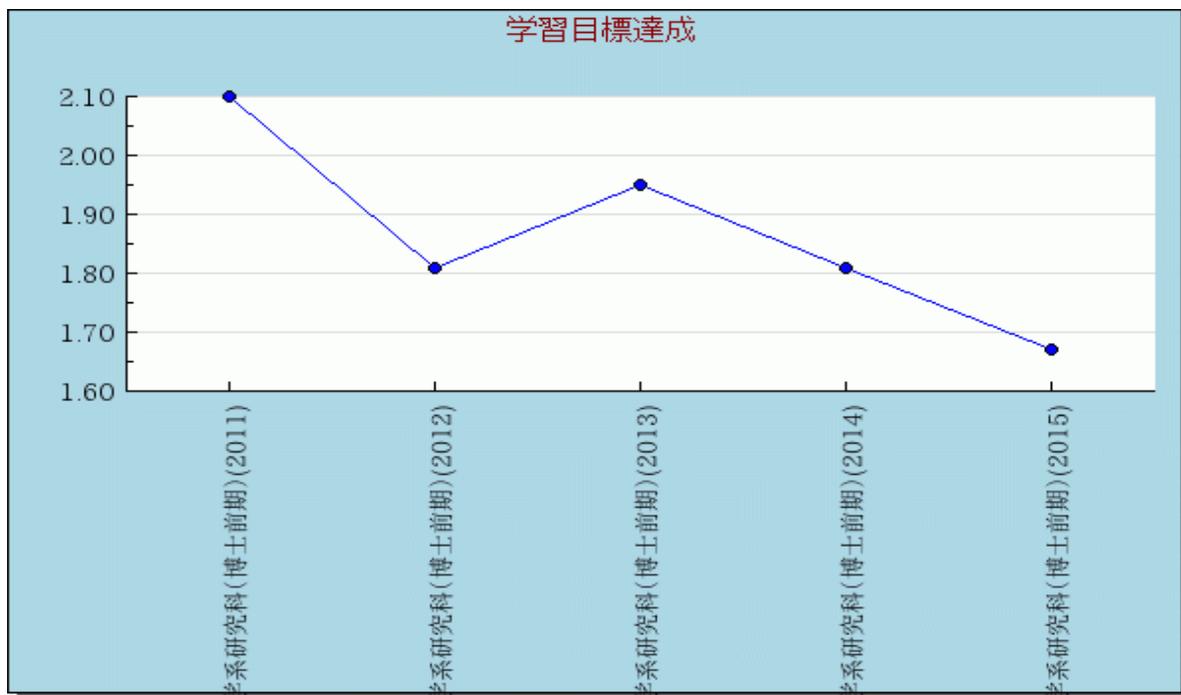
医学系研究科（農学）はIYOCAN、農学研究科は紙媒体により、それぞれ独自に学生授業評価を実施しており、学生による自由記述欄の内容をもとに、授業に対する評価を確認し、改善努力を行っている。IYOCANで集計できる医学系研究科（農学）について先年と比較したところ、学生の授業外学習の時間は減少する傾向が見受けられたが、それ以外の項目については評価が改善される傾向にあり、教員の授業改善の成果が表れる結果となった。

	講義	講読	演習	実験・実	語学（共	語学（農	その他	語学（人	未指定	合計
応用分子生命科学(2011)	50		30						11	91
応用分子生命科学(2012)									103	103
応用分子生命科学(2013)	80		19							99
応用分子生命科学(2014)	126		55							181
応用分子生命科学(2015)									87	87



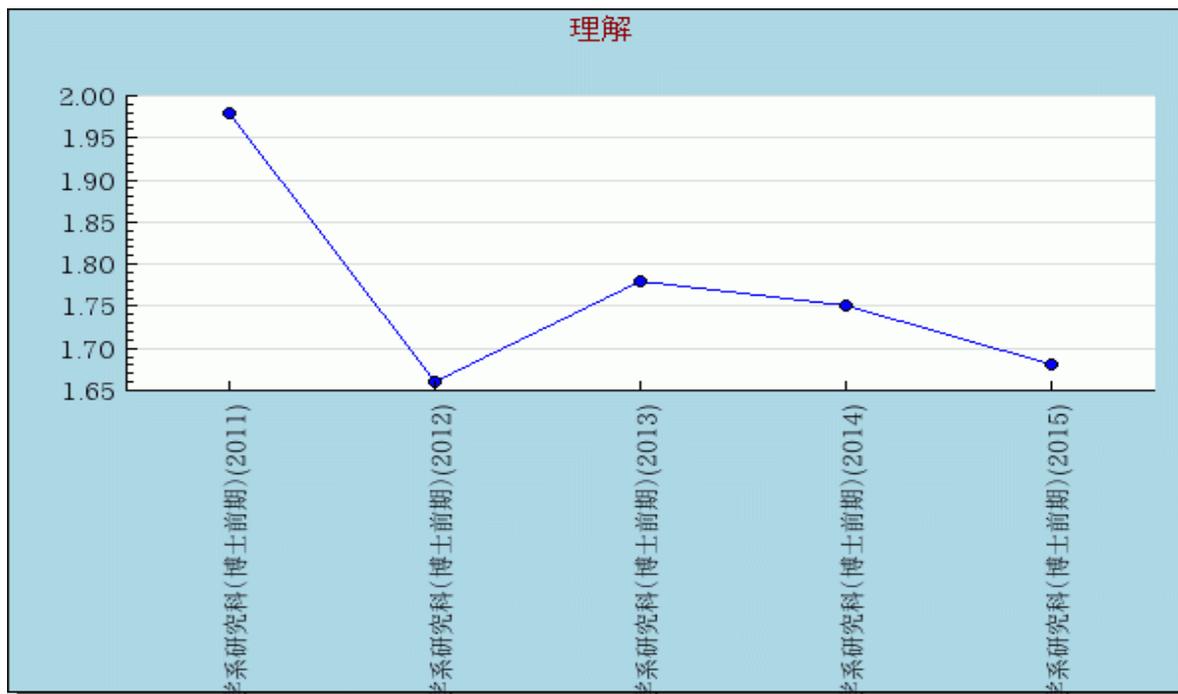
Q：毎回の授業の後に、何時間程度の授業外学習をしたか？

1：3時間程度あるいはそれ以上、2：2時間、3：1時間、4：30-50分、5：30分未満



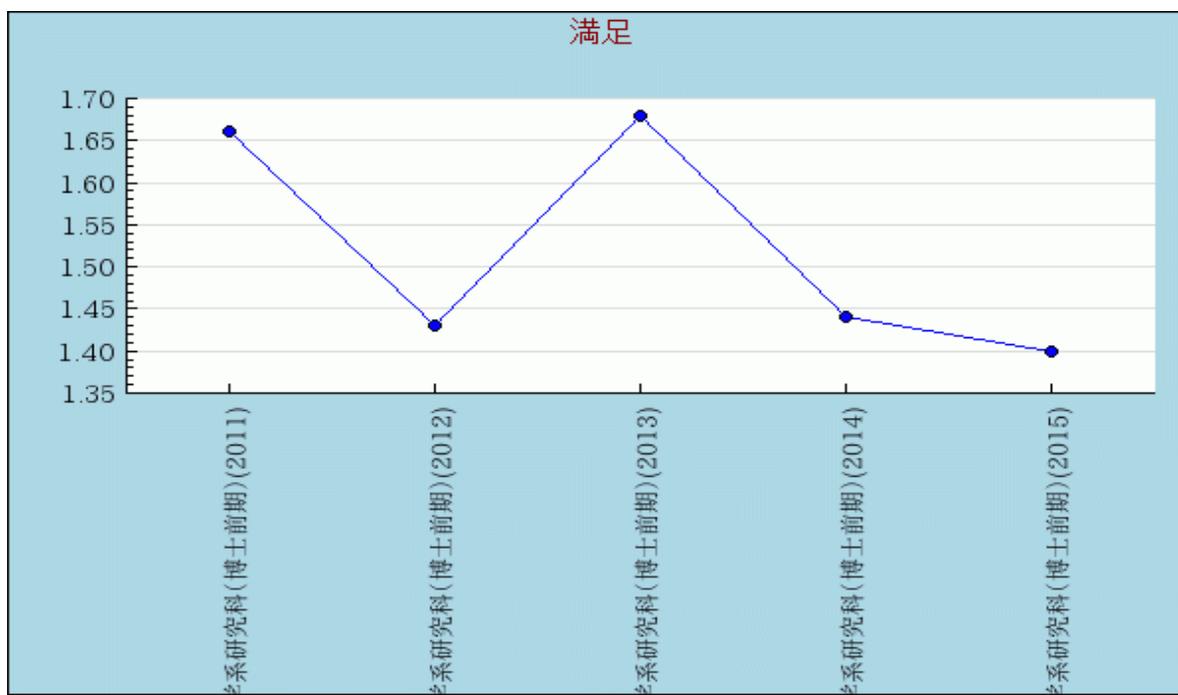
Q：学習目標を達成できたか？

1：そう思う、2：ややそう思う、3：どちらでもない、4：あまりそう思わない、5：そう思わない



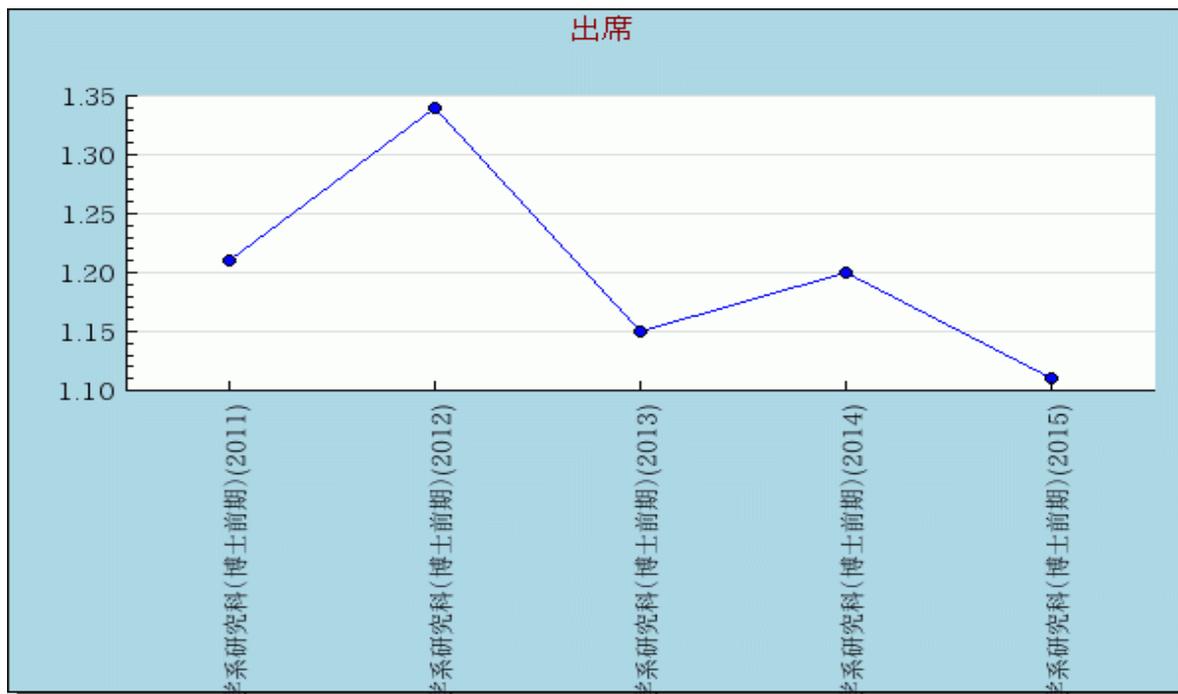
Q : 授業内容を理解できたか?

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



Q : 授業の内容は満足のいくものであったか?

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



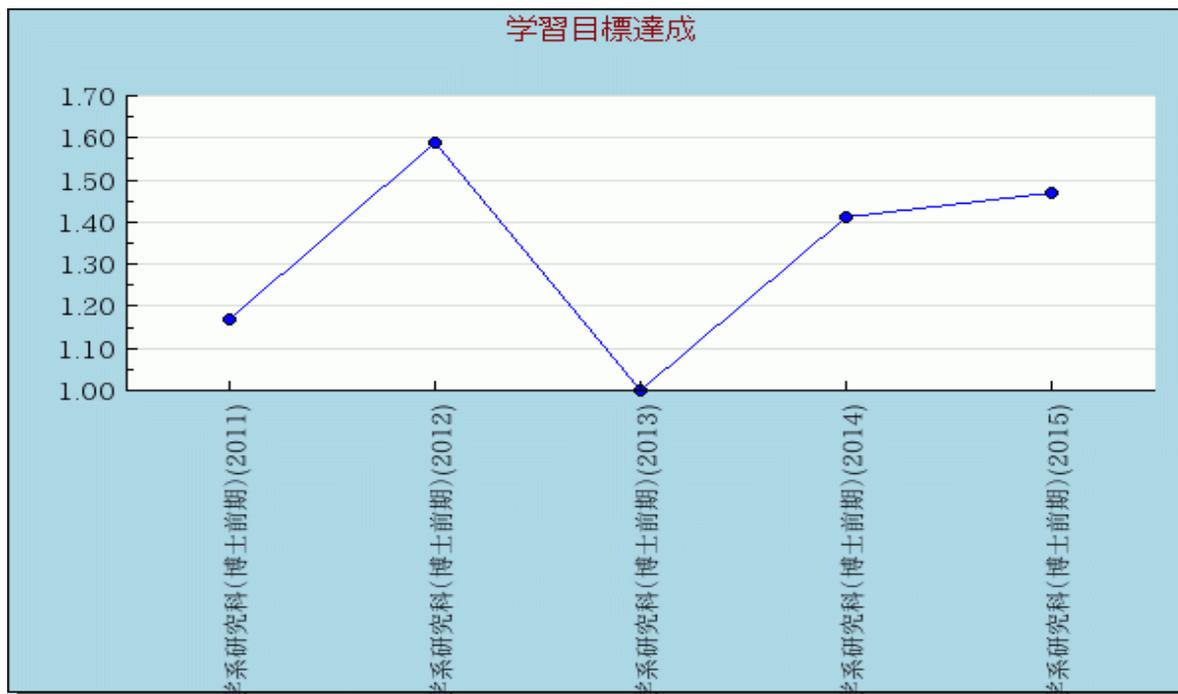
Q : 授業への出席率はどの程度か？

1 : 90%以上、2 : 80-90%、3 : 60-80%、4 : 40-60%、5 : 40%未満

2) 教員授業自己評価

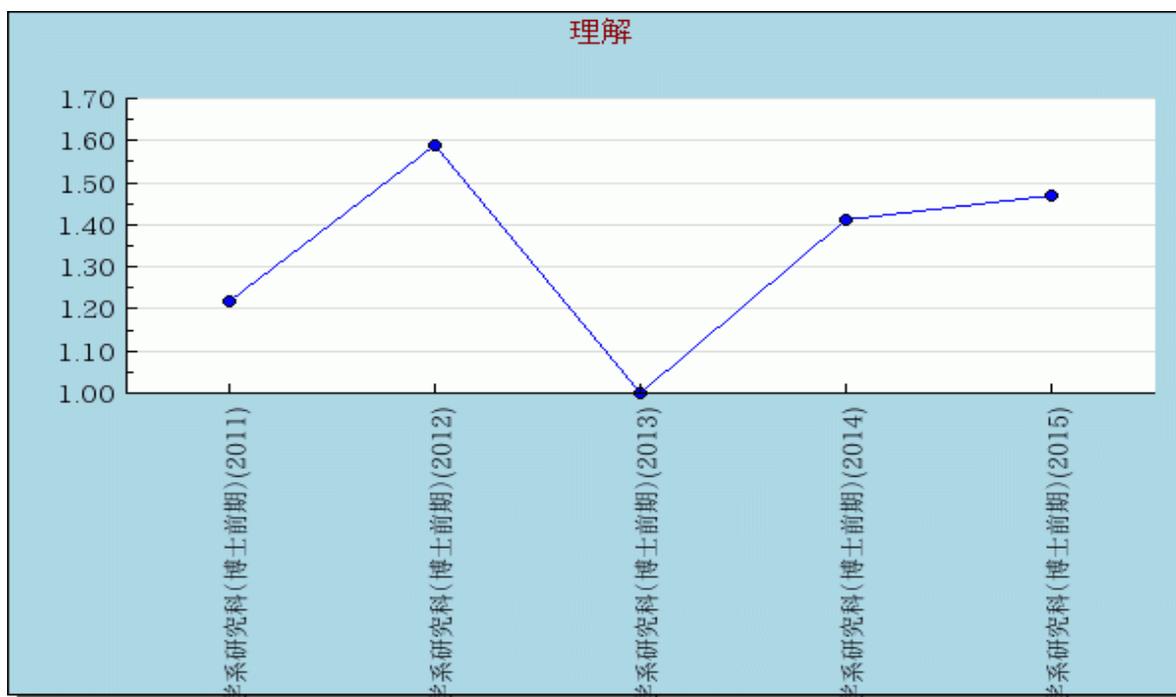
医学系研究科（農学）は、いずれの場合も微減・微増を含む横ばい傾向が見られており、

	講義	講読	演習	実験・実	語学（共	語学（農	その他	語学（人	未指定	合計
応用分子生命科学(2011)	10		10						3	23
応用分子生命科学(2012)									17	17
応用分子生命科学(2013)	4		6							10
応用分子生命科学(2014)	7		10							17
応用分子生命科学(2015)									30	30



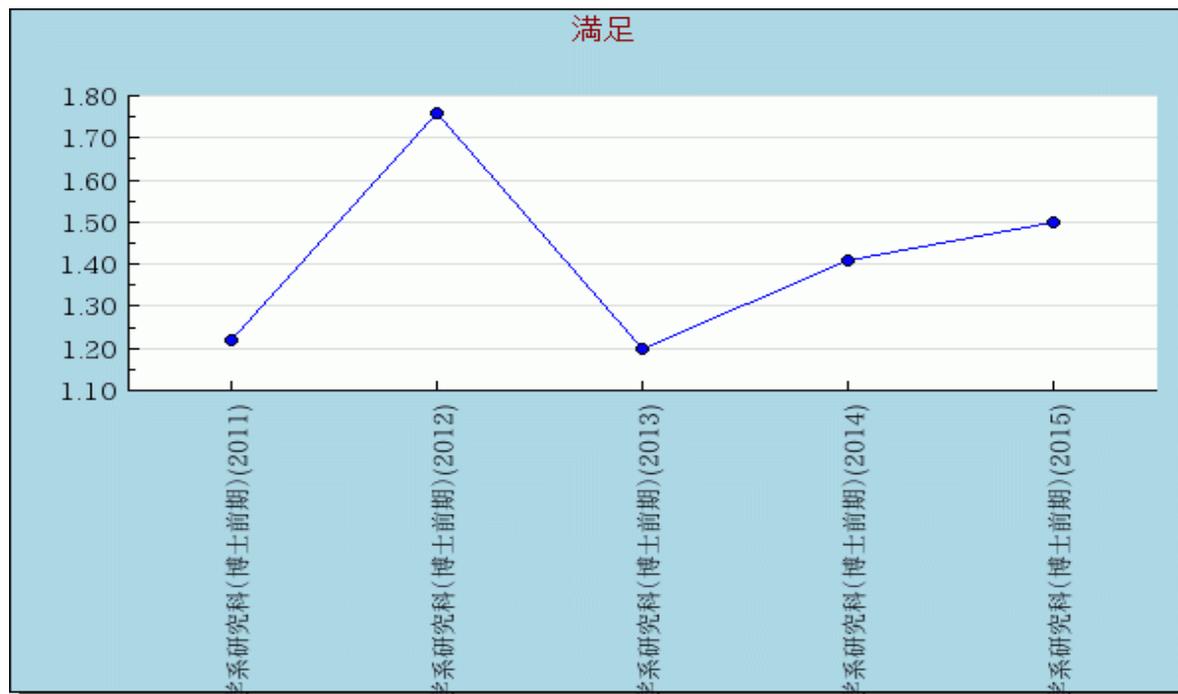
Q : 受講学生は、学習目標を達成できたと感じるか？

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



Q : 受講学生は、授業内容を理解できたと感じるか？

1 : そう思う、2 : ややそう思う、3 : どちらでもない、4 : あまりそう思わない、5 : そう思わない



Q：受講学生は、授業内容に満足していると感じるか？

1：そう思う、2：ややそう思う、3：どちらでもない、4：あまりそう思わない、5：そう思わない

第5節 FD実施経費報告書

本年度は、FD実施経費を申請していない。

第6節 来年度の課題

昨年度の報告も記載したが、研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間においてもカリキュラムや教育方針が同一でない。このため、FD活動についても研究科独自の取り組みが今後必要になるように思われる。

第 19 章 東アジア研究科の F D 活動

第 1 節 東アジア研究科の教育改善活動

博士課程のみの独立した大学院として、学生に対する研究指導が主たる教育活動となっている本研究科の現実に鑑みて、27年度も引き続き、「研究指導演法についての検討会」(研究指導レビュー)を企画・実施した。同検討会は、毎年11月に、本研究科のアジア比較文化コース、アジア経済・経営・法律コース、アジア公共管理コース、アジア教育開発コースのそれぞれにおいて行われている準備論文報告会の場を利用し、当該報告会の終了後に行うものである。今年度も26年度と同様、発表を行う学生が多く、報告会が長時間にわたることが予想されたため、参加教員に対し、学生の報告及び主指導教員の指導演法に関するアンケート調査を実施し、指導演法に関する情報の共有に努めることとした。

第 2 節 博士課程での F D 活動

東アジア研究科は博士課程(後期3年)のみを持つ独立研究科であり、教員は基本的に人文・経済・教育学部を本務とする。したがって、所属学部で学士課程・修士課程教育についての F D 活動は行われていると考えられ、本研究科が担うべきは博士課程に特化した F D 活動である。

このため、博士課程教育の中核部分である研究指導に焦点を絞った F D 活動を行ってきた。その流れは、後述するが、本年度はこの F D 活動が固有の課題と困難を抱える点を明らかにし、そのうえで博士課程固有の F D 活動の新しい展開を説明したい。

1. 博士課程の「教育」

大学院設置基準に明記されているとおり、博士課程の目的は「専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行い、又はその他の高度に専門的な業務に従事するに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする」(第四条)とされ、「研究能力」「学識」の養成が謳われており、修士課程のように「学識を授け」ること(第三条)は問題にされていない。つまり、教育機関として「教える」のではなく、**自立的研究者**たれるように「学び方」を「学ぶ」ところに立脚点がある。

「教えすぎではならない」のであり、あるいは「教える」ことさえ、学生の研究者としての自立を阻害する恐れがある。したがって大学院・博士課程は極めて逆説的な「教育」機関であり、「教」より「育」が、しかも「育てる」というアクティブな活動よりも、「育つ」という学生に期待したパッシブな活動が要求される。さらに、本研究科のような人社系研究科では研究課題や研究枠組みは基本的に学生の知的関心や研究動機に依存しており、他者が介入すべきでない事項とされている。

したがって指導教員は、極言すればお産における助産師のような役割しか果たし得ない。そういう条件の下で、本研究科教員が学生に対して行うべきことは自ずと限られてくる。知の助産師であることは、古くはソクラテスの「産婆術」に見られる知の探求方法であり、それ自体が奇異なものではない。ただ、21世紀の大学の中で、しかも多くが留学生や社会人である学生を相手にそうした知の探求法を展開することには大変な困難がある。

2. 師弟関係

ソクラテスの「産婆術」は別名「対話法」とも呼ばれるように、自由なコミュニケーションに基づいて形成される。ところが、学生と研究指導を行う指導教員との関係はこのような自由なコミュニケーション

ョンが生じるイコール・フッティングなものとは言い難い。指導教員は専門分野での研究についての豊富な経験・絶大な知識・高い技能を持ち、学生を圧倒しており、非対称な質疑という関係は生じるとしても、対話など存在する余地はない。さらに指導教員は教育制度上も、事実上、学生の生殺与奪の権を握っている。

ここに博士課程「教育」の際どい課題が暗示されている。教育目的は「自立的研究者」の養成であるが、ということは学生は未だ「自立的」ならざる研究者候補に過ぎないのであって、一人前の研究者並みの対話を求めるまでには成長していないのである。そして、特定の専門領域の専門研究者に生長するためには、明示的(articulated)な知識や技能の他、その分野の専門家独特のものの見方や行動のルールなどの明示的でない(un-articulated)要素を身につけることが必要だとされ、それは基本的に「師事」つまり、先任者を完全に信頼し、その見解を無条件に受け入れることで獲得されると言われている(マイケル・ポラニー『パーソナル・ナレッジ』)。

未だ自立的研究者になっていない学生は、「対話法」とは対極にある「師事」——無条件の受容・模倣を経なければ、自立的研究者に生長できないとすれば、その過程である博士課程教育は「対話法」と「師事」という極端な二極に分化したものだということになる。

だから、師弟関係は決して悪いものではなく、むしろ博士課程には必然的に付随する「師事」の基盤であり、その中で指導教員は模範となるべき正しい研究者の像、ものの考え方、行動規範を示すべきだということになる。これが、博士課程の研究指導に際し、指導教員に求められる第1の条件である。

3. 徒弟関係

師弟関係の現実にはむしろ対極に偏る恐れがある。それは研究指導が極めて閉鎖的で非対称的な人格関係であるため、人格も含めて指導教員が学生を支配することが簡単にできてしまうからである。そうすると研究指導は一種の「徒弟制」(学生の人格を無視した隷属関係)に転化する。指導教員が「師事」を乱用すれば、学生の知的活動は著しく制限され、自立的研究者の養成という博士課程の目的は達成不可能となる。

これは露骨な隷属を強いる人格的支配に留まらない。ともすれば指導教員は学生の研究活動に過剰介入し、指令を下すことで学生の「学び」の機会を奪ってしまう。教員の側から見れば、学生の「学び」は危うく、遅々たる歩みで拙い。経験豊かな教員は自ら学生に君臨する意図がなくても、学生が「学び」の困難に陥っている救済策として指令を出してしまうことがある。学生が迷い、行き詰まっても、それは基本的に研究者として自立するために必要なハードルと考える必要がある。そこで学生が挫折して修学を放棄することになると、安易な解決策を提示してはならないと考えるべきである。こうして徒弟制は学生の「主人」たろうとする意思によらなくても、純粋な善意からでも生じる。この点に留意しないと、博士課程はその目的を果たせない。

4. 指導しない指導教員

他方、対照的に何も指導しない指導教員も存在する。研究課題や研究枠組みは基本的に学生の知的関心や研究同期に依存しており、他者が介入すべきでないという原則が「何もしない」指導教員を容認している。これは自然科学系ではまず見られない状況であるが、自然科学系では博士課程であっても、研究課題や研究方法への他者の介入が是認されていることと関連していると言えそうである。

とはいえ、学生の「主人」でないとしても、学生の模範となることと助産師であることは必要である。指導放棄は徒弟関係よりもむしろ悪い結果をもたらす。

徒弟関係による指導教員の強権は学生が自立的研究者として自発的に問題意識を発展・深化させ、修了後も研究を継続して研究者として成長していく妨げになることはあるが、現在の学位審査方式ではむしろ学位取得の確率を高める可能性がある。これは学位審査が学生の実際の自立的研究者としての能力を問うのではなく、成果物、つまり論文を通じて間接的に学生の研究能力を測定しているからであり、指導教員が強く介入するほど成果物たる論文は学生ではなく指導教員の成果に近づくので、質が向上する可能性が高くなるためである。修了後には学生が徒弟関係の拘束から逃れることができ、なおかつ自立的に研究を行おうとする意思を継続させることができれば、やがて自立的研究者に成長

することも期待できる。

他方、指導放棄は学生を戸惑わせ、多くの場合、挫折させる。自力では抜け出せないような、研究上の陥穽にいと容易に落ち、そこを抜け出せないのである。こうした陥穽は、実は研究上大きな問題ではないことが多い。ある課題解明に幾つかのアプローチが存在する場合、それを学生に提示することは指導教員の義務である。そうでなければ、アプローチを自分で探し、ようやく問題を解いたとしても、それは既存研究でとっくに解決されていたり、論駁されつくしていたりする恐れがあるからである。

そして、こうして膨大な時間が費消されるが、それは学生にとって貴重なもので取り返しがつかない。3年間の博士(後期)課程の在学年限の中で、学位取得にこぎ着けるためには時間を無駄にしてはならない。この時間的制約は過剰介入を招きやすい誘因でもあるが、指導放棄は確実に時間の空費を引き起こし、研究が進捗しない状況に追い込まれた学生は絶望的な状況に追い込まれる。したがって、実害の程度から言えば、過剰介入より指導放棄の方が大きいと言える。

5. 研究指導に関連した困難の整理と「研究指導 FD」の内実

以上、見てきたように、「教える」より「育つ」のを待つのが基本であるが、「教えない」のは最悪。「教え」過ぎは悲惨な徒弟関係を招き、自立的研究者の養成という目標を損ねる。さらに、人社系研究者にとって最も重要な資質である、問題意識と研究への視点を獲得させる。この最後の点は、どのような教育によっても直接育成することは難しく、ただ自ら研究を進める中で獲得されるものであり、指導教員はそのロール・モデルにも、反ロール・モデル(反面教師)にもなりうる。

こうした両義性の中にある人社系博士課程の教育方法を定型的に「開発」するとか、教員の技能を「向上」させるなどという課題を立てるとすれば、「開発」や「向上」をそもそも定義することすら難しいという困難に逢着する。そうした苦慮の末、東アジア研究科が FD の手法として採用したのが「研究指導 FD」である。

上述のように、博士課程なので講義は重視されない。代わりに研究指導が教育活動の中心なので、これを採り上げようということになった。

当初「研究指導 FD」は指導教員(本研究科では主指導 1 名、副指導 2 名)が研究指導上の困難やアイデアを出し合って、研究指導についての意見交流を行うという趣旨だった。だが、「研究指導 FD」は、回を重ねる内に「進化」した。「研究指導 FD」とは言っても、内容は次第に「研究指導」という事柄から、研究指導を通じた指導教員と学生との「師弟関係」の良好さ、あるいは「教えすぎていないか」や「指導不足」ではないか、といった批評が出てくるが多くなった。つまり、上述の博士課程での研究指導が陥る様々な陥穽を診断する場となる面が出てきた。指導している学生の研究進捗状況について何か言われるということに対し、博士課程では「学生が勉強しないから」という言い訳は通用しない。「方法論がはっきりしない」という学生への指摘は「教員が方法論をしっかり教えていない」という指導教員の問題の言い換えに過ぎない。そういうことが教員集団での共通了解となると、「研究指導 FD」は教員の指導力、あるいは指導が良好な関係の下で行われているかの判断の場となっている。通常はさほど厳しい批判が出ることはないとはいえ、指導教員自身が評価され、指導の方法や学生との距離の取り方を再考する機会になっている。これは、人社系博士課程における、特色ある FD として重要な点である。

第 3 節 平成 27 年度の「研究指導 FD」の実施状況

平成 27 年度は次の 3 回にわたり「研究指導 FD」を実施した。

1. 平成 27 年 11 月 6 日(金)20:30～22:00(経済・経営・法律コース)／社会動態講座(307 演習室) 準備論文報告会(18:00～20:30)での 6 名の報告後、その指導教員との「研究指導」を巡る討論 参加教員:11 名
2. 平成 27 年 11 月 9 日(月)19:00～19:45 (比較文化コース)／比較文化講座(307 演習室) 準備論文報告会(18:00～18:50)での 2 名の報告後、その指導教員との「研究指導」を巡る討論 参加教員 8 名
3. 平成 27 年 11 月 13 日(金)19:20～20:10(教育開発コース)／社会システム分析講座(307 演習室) 準備論文報告会(18:00～19:15)での 2 名の報告後、その指導教員との「研究指導」を巡る討論 参加教員 8 名

第 4 節 平成 27 年度の「研究指導 FD」で表明された「研究指導」に対する意見等

1. 社会動態講座の「研究指導」FD について

社会動態の「研究指導 FD」で表明された研究指導上の問題に関わる主な意見は以下である(研究指導が明示的に問題にされたのは 6 名中 4 名のみ)

- a. 学生 A : (外国人留学生)研究内容について高く評価する意見もあった。
 - a-1.業種で状況が異なる。業種を絞るべき(→やや指導不足との感触)
 - a-1'.実態調査が必要では？抽象論では意味がない(→指導不足)
 - a-2.報告内容が学位論文の体系とどう関係するかが、不明確(→報告内容や報告技法への指導不足)
 - a-3.主指導教員より、2 年次から主指導を交代し、研究テーマも変更したので、まだ十分な学習時間が取れておらず、現実には踏み込めていないという釈明があった。
- b. 学生 B : (外国人留学生)報告に具体性がなく、評価は非常に低かった。
 - b-1.報告に具体性がなく／報告が無内容(→厳しい指導不足の指摘)
 - b-2.報告すべき内容はあるが、表現できていない(学生の擁護→教員の指導法への疑問)
 - b-3.主指導教員より、学会報告で報告の仕方を経験させている、という反論があった。
- c. 学生 C : (外国人留学生) 中国での研究動向の報告のみで、問題意識も明確でなかった。
 - c-1.ずっと研究動向の報告に留まっていて、自己の問題意識も独自の研究枠組み提示もない(本人の問題[もともと問題意識が無かった]／指導教員の放任という厳しい批判)
- d. 学生 D : (外国人留学生)非常に能力の高い学生であるが、教員の移動により主指導教員を交代したため、研究がやや遅れている。
 - d-1.研究内容は明確だが、研究計画では予定されているデータ収集(アンケート)は実施が難しい。再考を要する。(→指導不足、しかし現指導教員の力量から見て指導が難しいのは否めない)
- e. その他、FD で出された主要な意見について
 - e-1.英語の論文の手直しは大変である。修士課程レベルで良いから、ネイティブ・スピーカーのチェックで支援して欲しい。肝心の研究指導よりも、文章の訂正などに時間を割かれていて、非効率。
 - e-2.留学生はほめて励ませば頑張る。その分こちらも、やりがいがある。(→どちらかというとい

入気味のスタンス←その方が少なくとも短期的には学生の状態は良好である。)

e-3.厳しく指導すると学生が逃げる。(←明らかに**過剰介入**の事例)

e-4.日本語の書けない学生には、毎日、メールを書かせている。メールならば、短いので添削に時間がかからない。そのほか、査読論文や学位論文で日本語の訂正作業が減り、効率的。

2. 比較文化講座の「研究指導 FD」について

比較文化講座の「研究指導 FD」で表明された研究指導に関わる主な意見は以下のようなもの(この会合では明示的に研究指導を問題にする意見は出なかった。直前の準備論文報告会からも、学生はよく指導されており、学会報告に準じた準備が行われていると推定される。これは教員指導力の問題というより、研究が進捗している学生だけを報告会に出そうという発想が講座の中にあるためだと思われる。

- f. 学生 F:(外国人留学生)中国人留学生で中国研究を行っているが、日本語で論文を書く必要があるという矛盾した状況にある。
 - f-1.: 指導教員は(主・副共に)中国語が堪能であるため、実際の指導は中国語で行っていて、その点では不都合はない。
 - f-2.: 中国語の資料を確保する必要があるが、(中国など海外も含めて)図書館では間に合わない。中国の古書店などを利用しているが、近年、資料が高騰していてその購入代金に窮している。
 - f-3.: 非常にまじめだが、やはり日本語能力がボトルネックになっている。事の性格上、指導教員が学生を支援して、日本語を直すのが大変である。(報告書は正確で標準的な日本語で記されていたから、指導教員が相当手を入れたと考えられる)
- g. 学生 G:(外国人留学生):比較文化論で日本文化を扱うので、日本語を直接研究対象にしている。
 - g-1.: 日本語が堪能なので指導しやすい。日本語直しは必要だが、さほど問題ではない。
- h. その他の意見:概して外国人留学生が多い状況では、日本語を直す作業の負担が一般に重い、代わりに誰かにお願いすることは難しいのではないか?

3. 社会システム分析講座の FD

社会システム分析の FD では 3 名のうち 1 名について、明示的に指導上の問題点が指摘された。他、1 名については、問題点ではないが研究内容に若干の意義に近い意見が出された。

- i. 学生 I:(外国人留学生):教育学
 - a-1.: **問題意識が乏しい**。実証のための調査が必要だが、十分でなく、甘い。(→**研究指導以前の問題?**)
 - a-2.: 日本語で査読論文を書く必要があるが、日本語能力が不足していて困難である。(→教員の問題というよりも、語学力不足で**コミュニケーションが難しいという指導上の問題**がありそう)
- j. 学生 J:(一般学生):教育学、社会学の新しい理論を利用して学校改革の主体を究明
 - J-1.: 社会学の理論に精通していて、理論志向が強い。優秀な学生。ただし、「学校改革」とは何かという基本的な課題について質問されることが多く、それに答えるのが課題である(主指導教員より指摘)。
- k. その他の意見:英語で教育している学生について、投稿論文や学位論文に関してはネイティブ・チェッカーが必要である。

第 5 節 平成 27 年度の「研究指導 FD」の成果分析と課題

1. 東アジア研究科の「研究指導 FD」の特色

上述の内容からみて明らかなように、「研究指導 FD」ではそれぞれの教員と指導学生が抱える問題や課題が共有される。問題があるとされた学生が必ずしも修了が困難になったり、在学期間が長くなったりするという訳ではない。結果的にそうであるのは、指導上の問題が「研究指導 FD」を通じて共有され、とくに主・副の指導教員にはっきり自覚され、後の研究指導に活かされるためだともいえる。通常「師弟関係」は閉鎖的・排他的で、その中で行われる研究指導の内容を伺い知ることは困難だが、本研究科の「研究指導 FD」はそうした閉鎖性を打ち破り、研究指導上の問題を教員集団で共有し、さらに教員に問題の所在の自覚を促している。こうした特色は、教員の研究指導能力の向上一般に貢献するだけでなく、個別学生に対する具体的な指導にも役立っており、研究指導を直接強化している。こうした特異な実効性を有するのが、本研究科の「研究指導 FD」である。

2. 指導に対する厳しい指摘

「準備論文報告会」では順調に研究が進捗していない学生に対し、厳しい質問が出る。これは、取りも直さず指導教員の指導法への叱責を含むものであり、続く「研究指導 FD」では(主・副)指導教員からの釈明や事情説明が行われることになる。上述のような閉鎖的で他者に余り知られることがない研究指導がここでは直接素材となり、改善の必要や改善方法その他が議論される(前節の学生 A、B、C の場合)。こうした機会は余りないと思われる。なお、この点から見て、研究が順調に進捗している学生だけを準備論文報告会に出すという比較文化講座のやり方(前節 2. を参照)よりも、問題があっても一定の研究進捗がある学生を出来るだけたくさん、「準備論文報告会」で報告させた方がよいということになる。言い換えれば、研究指導上、より大きな問題がある学生は「準備論文報告会」に出ないことになり、そうすると研究指導上の問題が教員集団に共有される機会を逸することになる。

3. 指導力の限界が確認される

前節の学生 D の事例であるが、この学生については主指導教員が他大学へ転出したため、本研究科内では適切な指導ができないことが明らかになった。そこで、以前の主指導教員を非常勤講師として招聘し、当該学生にこれを受講させることで事実上、研究指導を継続して貰うこととした。もちろんそれだけでは十分とはいえないので、主・副指導教員を含めて、研究の進捗を注意して見守ることとしている。こうしたことは、「研究指導 FD」でなければなかなか問題を共有できなかったと思う。こうした副次的な効果もある。

4. 問題意識の欠如という問題

「研究指導 FD」を通じて明らかになったことの一つは、問題意識を欠いた学生の存在である(前節の学生 C、D)。人社系大学院の考え方では、問題意識の欠如した学生は如何ともし難い。問題意識や問題を考える視点は学生が自分で持ってくるもので、教員はそれに影響を与えることもあるが、それを与えることはできない。

ということは、実は問題意識が欠如した学生を入学させたことが間違いだということになる。したがって、これは随時、入試の選抜方法に反映されることになるろう。こうした形で、「研究指導 FD」は種々のフィードバックの回路に結びつき、本研究科の様々な課題の明示化に役立っている。

第6節 まとめ

東アジア研究科の「研究指導 FD」は研究指導を教育活動の中心とする後期3年のみの博士課程の特質を反映したものだったが、「研究指導」という閉鎖的で特殊な人格関係を明るみに出し、種々の助言や支援、さらに研究指導に限らず、種々の問題を発見し解決する機会として、ユニークな機能を果たしている。

第 20 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

大学院技術経営研究科の授業は、社会人を対象とするものを広島・福岡の教室において行っているが、年度の途中で着任した新任教員 2 名があったので他の教員による授業の実施状況や特定課題研究の指導について参観を行う機会を設けた。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

1. 平成 27 年度教育改善 FD 研修会（大学教育機構との共催）

日程：平成 27 年 12 月 1 日(火) 14:30～16:00

場所：技術経営研究科会議室

講師：林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）

技術経営研究科の教職員

10 名（アンケート回収 10 枚）

【内 容】

冒頭、FD コーディネータより、本研修会の趣旨について、平成 26 年度に本学が採択された文部科学省・大学教育再生加速プログラムを取り上げ、本事業取組のテーマ I（アクティブ・ラーニング）の主要課題である AL（アクティブ・ラーニング）ポイント認定制度の概要、及びテーマ II（学修成果の可視化）の主要課題である学修成果測定の概要の紹介を通じた意見交換、共通教育へのアクティブ・ラーニング導入を巡る課題等について協議する研修である旨説明された。本研修会のアンケートでは、8 割以上の参加者が、「非常に良かった」「良かった」、今後の研修会に「できるだけ参加したい」と答えており、満足度の高い研修会となった。

次に、林 透 大学教育センター准教授（IR 室長）より、「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）によるアクティブ・ラーニングの推進と学修成果の可視化」と題して報告があった。まず、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の全体概要について、テーマ I（アクティブ・ラーニング）、テーマ II（学修成果の可視化）それぞれの取組について説明があった。続いて、YU-AP 事業を通して「ティーチングからラーニング」の一環として「学びの好循環（Learning の PDCA サイクル）」を回すことについて説明があり、併せて既存の教育の内部質保証システム（Teaching の PDCA サイクル）について紹介があった。

次に、テーマ I（アクティブ・ラーニング）の取組報告として。まずは本学におけるアクティブ・ラーニングの定義について確認がされ、AL に関する意識として、関心はあるものの実践についてはまだ十分ではないと認識されていることが報告された。AL ポイント認定制度では、AL の可視化や現在設計中のベストティーチャー表彰制度を通して、AL 実践への動機付けをさらに進めていく方向性

が述べられた。

続いて、AL ポイント認定制度の運用状況としてAL ポイントのシラバスへの入力率、一部の科目（共通教育科目）のAL ポイントが紹介された。AL ポイント認定制度では、自己評価によってAL ポイントをシラバス明示するものであるが、AL を前提とした科目については、他の科目に比して高めにポイントが設定されており、科目特性（AL 科目や実験・実習など）が反映されていることが見られ、AL ポイントのあり方について一定の妥当性があるといえる状況であることが述べられた。次に、AL ポイントの分析では、AL ポイントが高ければ、到達度、理解度、満足度が増加するという相関があることが確認されており、引き続き分析・検証を進めていくことが述べられた。AL ポイント認定制度はAL を推進する取組の一環であり本制度の整備を進めると同時に、AL を推進するFD も展開していることが説明された。また、実施済みのFD 取組として、大人数授業と理系基礎科目のAL に関するFD、10月実施予定のICT 活用のFD を展開することが述べられた。AL を授業に導入する第一歩として、ペア及びグループワークや振り返り、予習・復習課題（宿題）など少しの工夫を取り入れた授業が望まれることが述べられた。さらにAL を進める方策としてクリッカー、ICT 機器（タブレット）、AL 教室を活用するAL があることが説明された。



次にテーマⅡ（学修成果可視化）について説明があり、学修成果の評価の構図を、間接評価・直接評価の縦軸と心理測定的パラダイム（定量的測定）・オルタナティブ・アセスメントのパラダイム（定性的測定）の横軸による4象限を用いて、多角的な学修成果測定を進める方向性について紹介があった。具体的には、学修到達度調査としてPROG（Progress Report on Generic Skills）テストが実施されていることが述べられ、PROG では、知識を基に問題解決にあたる力などのリテラシーと、経験から身につく行動特性としてのコンピテンシーが測定できることが説明された。次に、ポートフォリオについて、可視化された学修成果を蓄積して、個別の学生に対してポートフォリオを踏まえたエビデンスベースの学生支援、学修アドバイスを展開する方向性について説明があった。最後に、学修支援の一環として、山口大学・学士課程教育の質保証体系としてのアセスメント・ポリシーについて述べられ、正課外での学びを含めた幅広い学修については学修到達度調査と学修行動調査で測定し、正課教育（あるいは学部教育）では国際総合科学部で進められているCoBCuSを活用していく方向性について説明があった。

質疑応答では以下の通り【コメント】及び【質疑応答】があった。

【質疑応答】

Q. DP について文科省のガイドラインが出てきてから、DP、CP、AP（3P）を作り直すという話があり、検討を進めようと考えているが、ガイドラインが出てから作り直しをするようになるのか。

A. 3P のなかでも DP が重要になっている。高大接続審議まとめでは DP に盛り込む要点が出ているので、ガイドラインについてもこれを踏襲したものが予想される。基本的には大学ごと、研究科ごとで決める事項なので、事前に準備するのは問題ないと考えられる。

Q. AL ポイントや 3P の見直や CoBCuSなどを整備するとなると、運用をしながら調整を重ねて、いくつかの変更を経て進めていくことが想定され、相当の時間がかかることが予想されるがどの程度

の作業スピードが求められるのか。

A. まず、AL ポイントについては、授業で行われているアクティブ・ラーニングを可視化している仕組みなので今後大きな変更が生じることはない。3P の見直し、策定の作業については、3P の見直し、策定をし、DP を定めた後に CoBCuS を導入していく方向性が考えられる。

Q. クリッカーが導入されているが使用状況についてはどのようになっているか。

A. 吉田キャンパスでの貸出となっているが、国際総合科学部、農学部、教育学部、または日本語教育などで活用されており、活用方法も学生とクリッカーの ID を紐づけるなどして工夫がなされており活用が進んでいる。

Q. 電子黒板はすでに導入されているか。

A. 電子黒板についてもすでに共通教育棟 26 番教室、15 番教室導入されており、今後の活用が期待されている。

【コメント】

MOT では、ほとんどの科目がアクティブ・ラーニング科目になっているかと認識しているが、個人の工夫で行っており、組織レベルでの推進はこれからになっている。今後は、組織レベルの推進を考えるうえでも AL ポイント認定制度は重要だと思う。

ミニッツペーパーなどの振り返りを繰り返しながら学生の変化を確認しながら授業を進めていくと教育効果は高いと思う。

今回の FD 研修会についての感想を終了後のアンケートで見ると、以下のように「非常に良かった」、「良かった」の合計が 80%に達しており、有意義なものであったといえる。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	10.0%
良かった	7	70.0%
どちらとも言えない	2	20.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

2. 平成 27 年度教育改善 FD 研修会（研究科独自開催）

日程：平成 27 年 6 月 16 日(火) 15:00～16:30

場所：常盤キャンパス第 3 会議室

講師：橋本 孝志 氏 (公益財団法人) 大学基準協会 大学評価・研究部 審査・評価系主幹

参加者：研究科教員 11 名、

内容：「大学基準協会の経営系専門職大学院認証評価の説明および専門職大学院の認証評価を取り巻く状況について」

<概要>

専門職大学院は法令により少なくとも 5 年に一度、認証評価機関による認証評価を受けることが義務付けられている。山口大学大学院技術経営研究科は 2005 年度の創設以来、本年度で 11 年目に入ったが、2009 年度と 2014 年度の 2 回にわたり大学基準協会により認証評価を実施した。2014 年度の評価受審に当たり評価を担当していただいた大学基準協会の事務局を務める橋本孝志 氏を招き、専門職大学院認証評価にかかわる他大学での実態や今後に向けての課題などをお話しいただいた。さらに橋本氏を交えて意見交換を行ない、今後の当研究科のあり方を考える機会とした。

この中で橋本氏は、山口大学大学院技術経営研究科の今後の課題について「私見」としながら以下のような問題を提起された。

① 研究科の規模＝研究科としての今後の戦略

<現状維持>

⇒研究科運営の独立性、教育研究環境の維持・充実

<入学定員の増加>

⇒さらなる学生確保へ向けた取組み

入学者の質の維持、各教室での競合関係の分析

地域ニーズの把握、MOT ニーズの掘り起こし

<博士課程の設置の是非>

⇒専門職大学院の博士課程設置 (DBA) の課題

学生のニーズと研究科の教員育成、教員の負担増

<参考：福岡地区>

・九州大学大学院経済学府産業マネジメント専攻

・北九州市立大学大学院マネジメント研究科

・グロービス経営大学院

<参考；広島地区>

・広島大学大学院社会科学部研究科マネジメント専攻

・県立広島大学 (専門職大学院設置認可申請中)

<参考；MOT>

・東京工業大学大学院イノベーションマネジメント研究科

・東京理科大学イノベーション研究科技術経営専攻

・新潟大学大学院技術経営研究科

② 学習成果の測定

ディプロマポリシーの明確化

⇒中教審の審議事項の一つ

今後の認証評価における課題

学生・教育の質の維持

・山口大学における学習成果の測定方法の先導に期待

③ 知財人材の育成

⇒知財人材の育成急務 (知的財産専門職大学院認証評価委員会での議論)

⇒知的財産専門職大学院の不振（知的財産専門職大学院認証評価結果参照）

⇒中国地方以西での知的財産大学院の不在

・山口大学 MOT における知財人材育成に期待！

④ MOT 教育の普及、広報

⇒NOT そのものの認知度が低い（経営系専門職大学院認証評価委員会での議論）

⇒各大学院の努力では限界：例えば、山口大学 MOT と他の MOT とで教育の相互連携

⇒MOT 協議会だけでの限界；JUAA（大学基準協会）も協力していく必要

・山口大学 MOT には一層の尽力に期待！

第3節 教育改善に関する活動

当研究科においては2013年度から14年度にかけて研究科の教育上の理念、ミッション、ビジョン、カリキュラムポリシー等の見直しを行ったところであり、本年度においては特段の変更・見直し等は行っていない。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価アンケートは社会人学生に対して基本的にすべての科目において実施しているが、対象とする社会人学生の学習意欲は高く、過去5年の平均データで「学習目標達成」、「理解」、「満足」のいずれの項目においてもすべて4点以上の高い評点となっている。ただし、上記の3項目で2014年度以前にはすべて4.5点以上であったところが、2015年度のデータにおいては3項目とも4.5を下回る数値となっていることが見受けられる。そのため今後その原因を探るとともに改善すべき点を検討していきたい。

<学生授業評価アンケートの経年変化> 問4. 「満足度」



第5節 FD実施経費報告書

2015年6月に実施した研究科独自のFD研修、および新任教員2名のための授業および特定課題研究指導の参観のために以下の費用を支出している。

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
技術経営研究科	大学基準協会橋本 孝志 氏講演会	講師旅費	40	専門職大学院認証評価に係る他大学での実態や今後の課題などを把握
	授業参観、特定課題研究指導参観	旅費2名×2回	55	新任教員2名が授業や特定課題研究指導について参観
		計	95	

第6節 来年度の課題

本研究科は2005年度の発足以来10年余りが経過し、広島・福岡教室における社会人向けの日本語での講義と、常盤キャンパスにおける留学生向けの英語での講義という運営方式を確立してきた。この成果については2014年度に実施した認証評価結果に見られるように外部からも相応の評価を得られ、西日本における技術経営教育の拠点としての地位を確保している。ただ、留学生向けコースは2013年10月にスタートしてから日が浅く、学生数の確保とともに今後はグローバル化に対応した一層の内容の充実を図ることが必要と考えられる。このため2014年度には前述の大学基準協会による認証評価に加え、「ABEST21」という経営分野の国際的な認証評価機関による評価も受審し(2014年12月実地調査)、こちらについても2015年3月に「適合している」との評価結果を得ている。これらの外部からの評価を受けることにより国際的にも評価される技術経営の専門職大学院となるよう教育内容の充実を図るための方策を進めていくこととしている。

このための具体的な施策として2015年度より研究科内に「アジアイノベーションセンター」を新たに設置し、同センターは、アジアを中心に活躍するイノベーション人材を育成するための教育プログラムの開発・実践を行うとともに、教育研究体制を整備することを目的として活動している。

第21章 連合獣医学研究科のFD活動

第1節 授業公開

山口大学大学院連合獣医学研究科は、山口大学を基幹校に鳥取大学および鹿児島大学を構成大学とした連合大学院であり、修業年数4年の博士課程からなる。学生は各所属大学において担当教員の授業を受け、授業公開も行われている。下記教育活動においては三大学共通で実施されており、他大学の教員間での授業公開も行われている。

- 1、 共通ゼミナール
- 2、 特別講義
- 3、 Eラーニング

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第12章 共同獣医学部FD活動の項を参照。

第3節 教育改善に関する活動

年1回開催される共通ゼミナールおよび年3回開催される特別講義では、毎回学生アンケートを実施し、教育改善にフィードバックしている。

(1) 平成27年度山口大学大学院連合獣医学研究科 獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果

期 日	平成27年8月19日（水）～8月22日（土）		
場 所	鹿児島大学		
参加学生	66名	アンケート回収	41名分

- 1) 英語論文執筆のすすめについて

1. 時間がなかったので仕方ないと思いますがもう少し具体的なことも聞きたかったです。
2. 大変参考になった。指導教官に相談すべきことが明白になった。
3. 初めのお話で大変勉強になりました。Scientistとは何か？Scienceとは何か？というもっと根本的な話も聞いてみたいです。
4. 講義タイトルと講義内容が異なっていたので、一致しているのが望ましいと感じた。
5. 概論としてとてもわかりやすかった。話し方も熱意を感じた。もう少し時間があれば、具体的な内容についてもっと話して欲しかった。

2) 実践プレゼンテーション論

1. 今後のプレゼンにとっても役に立つ話しが聞けて良かったです。
2. 普段の症例発表にも活かせそうな有意義な講義でした。
3. 非常に明快なお話で聞き入ってしまいました。Kiss は実践しようと思います。” Keep it simple and smile”
4. 教員の熱意が感じられた。シンプルなスライドが重要という内容が強く印象に残った。
5. とてもわかりやすかった。講師の先生の熱意が伝わってきた。次からは、参考にしてよりよいプレゼン作成に心掛けたい。

3) セミナーC, D

1. アルボウイルス感染症は臨床現場でもしばしば見られる病気であるので参考になった。アカバネウイルスの生後感染による牛の起立不能など以前は報告のなかったような病気の出方が報告されるようになっている。気候の変化などでベクター生息域にも変化が起こる可能性など、今後も注視していかなくてはならないところを再認識させられた。
2. 臨床に近い部分からの研究で、治療に直接的につながらなくても症例の理解において重要だと強く感じました。
3. C- Very useful seminar for sharing Experiences about Arbovirus. D- Case to Cure: The good message was about being Clinician and researcher at the same time.
4. I enjoyed both seminar from the lecture of Professor Yamato. I realized the importance of clinical practice in relation of development of research idea. Really it was interesting.
5. 遺伝性疾患についての講義はあまり聞きなれない症例について勉強する機会になり、今後の業務に活用できそうな内容でした。

4) 学生研究紹介について

1. 質問があっても、英語で会話できないため、質問できない。せめて来年は例外を設定する(たとえば1年生だけは日本語で質問可) 方法に変えてはどうか。
2. Too short time for lection and answer. I think the moderators should translate to Japanese speakers the question if it is not clear to save time.
3. Good because everyone was trying their best to present in English. Although some tended to speak in Japanese during Q&A in which I think it was reasonable.
4. それぞれの研究がとてもわかりやすくプレゼンされてとてもよかった。プレゼンテーション論は1年生だけが必要に応じて2年生がもう1度受講するなどしてプレゼンテーションスキルを上げられる取り組みをしてもいいのではと感じる。

5. おおむね良かったと思うが、中には声が小さくて聞き取りにくく、せつかくの内容であるのに、聴衆に伝わりにくかったのではないかと思う。発表者は話し方にも気を配った方が良いと思う。

6. 様々な研究内容に触れて勉強になった。分野は違うが、自分の研究に活用できそうな内容もあり、またディスカッションも有意義なものであった。

5) フラッシュトーク、ポスター研究紹介について

1. 質問に自分なりに精いっぱい対応することができた。自らの研究の不足部分、問題点をしることができた。問題点の解決と、コミュニケーション能力の向上を目標に来年まで努力したい。

2. One minute for flash talk is too short to give the over view of the research. My opinion the time should be increased to two minutes.

3. フラッシュトークの時間が人によってすごくバラついていたので1分ならば1分を厳守するようにした方がスケジュール管理がしやすいと感じました。ポスターの数に対して人数が多かったので、ポスター数が少ないときは、一度にしてしまって時間を長くした方が良いと思います。

4. The flash talk poster is a nice training for summarizing research presentations.

5. Flash talk is a very funny and important part of the seminar within a very short time it give an idea of inherent about the research topic.

6. フラッシュトーク 去年はきっちり1minだった気がするのですが、今年はあまり厳しくなかったのですが、いいのですか？

7. 活発にディスカッションができてとてもよかった。また、フラッシュトークである程度興味のあるポスターが絞り込めるので、ポスター数が多くて、時間が短いときにはとてもいいやり方だと感じる。1分間という限られた時間である為、理解するために、自分の英語力を上げないといけないと痛感した。

8. フラッシュトークは1分だと急ぎ足になり、早口でわからないときがあるので1分半~2分くらいに設定してもいいのでは？と思います。

6) 特別講演について

1. It was very interesting. It gave us new idea and thinking about selecting media, transgenic mows development, etc. overall. It increases an research interest.

2. 長かった。時間を半分にして2人の先生に違う分野の話をしてもらった方が、学生がより質疑応答をして盛り上がれると思う。

3. 大阪大学の松浦先生という最先端の研究をされている方の、最新のトピックをきけて、とても刺激を受けた。自分もそういう世界で戦える様な研究をしたいと思った。

4. 獣医学外の先生の講演は次回以降も続けて欲しいと感じた。

5. 最新のC型肝炎ウイルスの話がきけて大変興味深かった。今回は研究紹介も感染系のものが多かったためまとめのような形で流されてもいいように感じた。

その他全体に関する意見、要望など

1. I wish to express my cordial thanks for considering the restrictions in food for Muslims and providing

Halal Food. Thanks for responding to our previous requests. Overall seminar was sell organized and very nice.

I hope to include these two parts for international students also to improve their knowledge

about writing excellent paper and presenting good presentation. Thanks

2. 活発なディスカッションが多く、有意義なセミナーであった。演題ごとの時間管理はしっかり行った方がよいと思う。
3. ポスター発表の時に日本人だけになるとどうしても日本語を使ってしまいがちなので、フラッシュトークを入れるようにしたのは英語を使う機会としてとてもよかったと思う。
4. 各院生の研究内容が知ることができ、興味深く参考になった。ちょっとした案内(懇親会のお知らせ等)も英語で伝えてあげた方がよいと思いました。

(2) 平成27年度第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

(授業科目名) 平成27年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義
(実施日) 平成27年6月5日(金) 10時30分~12時00分
(実施大学) 鹿児島大学
(担当教員名) 山口大学 水野 拓也 教授
『Novel therapies for the treatment of canine cancer』
鳥取大学 今川 智敬 教授
『Rat models of Alveolar Echinococcosis』
(受講者) 学生10名 その他4名

(アンケート回答者)

1. 連合獣医学研究科1年生	3名
2. 連合獣医学研究科2年生	3名
3. 連合獣医学研究科3年生	2名
4. 連合獣医学研究科4年生	2名
5. その他	4名
合計14名	

(特別講義はあなたにとって有意義でしたか?)

1. はい	14名
2. いいえ	0名
3. 無回答	0名

(講義についての意見・感想)

- ・他大学の先生の講義を聴けてよかった。また、自分の研究との比較もできて、今後のはげみになると思う
- ・英語での授業は貴重なため、大変有意義な時間を過ごせました。
- ・The lecture were really interesting and I would appreciate to have some more of such seminars.
Thank you.

(3) 平成27年度第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成27年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成27年10月2日(金) 10時20分～11時50分

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 竹内 崇 教授

『Possible Effects of Iron-binding Protein “Lactoferrin” on the Central Nervous System』

鹿児島大学 中馬 猛久 教授

『Antimicrobial resistance of food-borne Salmonella enterica』

〈受講者〉 学生13名 その他6名

〈アンケート回答者〉

- | | |
|----------------|-----|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 5名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 2名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 3名 |
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 1名 |
| 合計 | 11名 |

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|--------|----|
| 1. はい | 8名 |
| 2. いいえ | 2名 |
| 3. 無回答 | 1名 |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ Yes, It was very topic. I learned many things from this seminar
- ・ 興味深かった。冷房が強かった。
- ・ 他の大学の先生の研究に関する講演はあまり聞く機会が多くないので、とても興味深いものでした。
- ・ Yes, It was very topic. I learned many things from this seminar

(4) 平成27年度第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義アンケート結果

〈授業科目名〉 平成27年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成27年11月6日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 鹿児島大学 小原 恭子 教授

『The regulatory role of 4E-BP1 in metabolism;
white adipose tissue differentiation』

山口大学 山本 芳実 教授

『Novel protease inhibitor-its inhibition mechanisms and functions』

(受講者) 学生3名 その他7名

(アンケート回答者)

1. 連合獣医学研究科1年生	1名
2. 連合獣医学研究科3年生	1名
3. 獣医学科6年生	1名
合計	3名

(特別講義はあなたにとって有意義でしたか?)

1. はい	3名
2. いいえ	0名
3. 無回答	0名

(講義についての意見・感想)

- ・講義は良かったです。
- ・勉強不足のため英語が聞き取れない部分もあったが、図を交えた講義で理解しやすかった。
- ・It is better if there are more students come to such lecture.

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価 (結果)

<授業科目名> 平成27年度獣医学共通ゼミナール セミナー (平成27年8月20日実施)

<担当教員名> 鹿児島大学産学官連携推進センター(福島、高橋)、岐阜大学連合獣医学研究科(伊藤)

参加学生 66名 アンケート回収 42名分

<学年>

1. 1年生	18人
2. 2年生	10人
3. 3年生	11人
4. 4年生	2人
5. 無回答	1人

<学生区分>

- | | |
|---------|------|
| 1. 一般学生 | 17 人 |
| 2. 留学生 | 10 人 |
| 3. 社会人 | 15 人 |
| 4. 無回答 | 2 人 |

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 17 人 |
| 5. そう思う | 21 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 2 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 7 人 |
| 4. ややそう思う | 17 人 |
| 5. そう思う | 16 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 2 人 |
| 2. 余りそう思わない | 5 人 |
| 3. どちらとも言えない | 9 人 |
| 4. ややそう思う | 15 人 |
| 5. そう思う | 10 人 |
| 6. 無回答 | 1 人 |

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 4 人 |
| 3. どちらとも言えない | 0 人 |
| 4. ややそう思う | 12 人 |
| 5. そう思う | 26 人 |

6. 無回答 0 人

5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

1. そう思わない 0 人

2. 余りそう思わない 3 人

3. どちらとも言えない 1 人

4. ややそう思う 12 人

5. そう思う 25 人

6. 無回答 0 人

6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

1. そ
う思わない 0 人

2. 余りそう思わない 2 人

3. どちらとも言えない 0 人

4. ややそう思う 16 人

5. そう思う 24 人

6. 無回答 0 人

7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

1. そう思わない 1 人

2. 余りそう思わない 0 人

3. どちらとも言えない 5 人

4. ややそう思う 11 人

5. そう思う 25 人

6. 無回答 0 人

8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？

1. そう思わない 3 人

2. 余りそう思わない 3 人

3. どちらとも言えない 7 人

4. ややそう思う 22 人

5. そう思う 7 人

6. 無回答 0 人

9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 3 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 6 人 |
| 4. ややそう思う | 17 人 |
| 5. そう思う | 16 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 2 人 |
| 2. 余りそう思わない | 3 人 |
| 3. どちらとも言えない | 8 人 |
| 4. ややそう思う | 13 人 |
| 5. そう思う | 16 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価 (結果)

<授業科目名> 平成27年度獣医学特別ゼミナール (平成27年8月18日、19日 実施)

<担当教員名> 鹿児島大学担当教員及び連携大学院客員教授

(叶内、白石、有村、高橋、小尾、松鶴、堀江、正谷、丹羽、矢吹、藤木、安藤)

参加学生 21名 アンケート回収 21名分

<学年>

- | | |
|--------|-----|
| 1. 1年生 | 7 人 |
| 2. 2年生 | 6 人 |
| 3. 3年生 | 6 人 |
| 4. 4年生 | 0 人 |
| 5. 無回答 | 2 人 |

<学生区分>

- | | |
|---------|-----|
| 1. 一般学生 | 7 人 |
| 2. 留学生 | 7 人 |
| 3. 社会人 | 6 人 |
| 4. 無回答 | 1 人 |

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. ややそう思う | 5 人 |
| 5. そう思う | 14 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

2) 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. ややそう思う | 8 人 |
| 5. そう思う | 11 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 4 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 5 人 |
| 4. ややそう思う | 3 人 |
| 5. そう思う | 6 人 |
| 6. 無回答 | 3 人 |

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. ややそう思う | 6 人 |

- | | |
|---------|------|
| 5. そう思う | 14 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. ややそう思う | 14 人 |
| 5. そう思う | 6 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 0 人 |
| 4. ややそう思う | 7 人 |
| 5. そう思う | 14 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 0 人 |
| 4. ややそう思う | 5 人 |
| 5. そう思う | 15 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 3 人 |
| 3. どちらとも言えない | 3 人 |
| 4. ややそう思う | 11 人 |
| 5. そう思う | 4 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 1 人 |
| 2. 余りそう思わない | 0 人 |
| 3. どちらとも言えない | 1 人 |
| 4. ややそう思う | 9 人 |
| 5. そう思う | 10 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？

- | | |
|--------------|------|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 2 人 |
| 4. ややそう思う | 8 人 |
| 5. そう思う | 10 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

第5節 FD実施経費報告書

該当無し

第6節 来年度の課題

(1) 教育改善について

各大学の代議員で構成される学務担当者会議を毎月開催し、教育の改善を図っており、FD に関しても更なる充実を図りたい。

(2) 授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）について

Eラーニングの対象科目をさらに広げるとともに改善、充実を図りたい。

平成 27 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職名	氏名	任期	備考
	副学長（教育学生担当）	瀬 瀬 厚		大学教育機構長
大学教育機構	大学教育センター長	朝 日 孝 尚		
〃	学生支援センター長	宮 田 浩 文		
〃	保健管理センター所長	奥 屋 茂		
〃	留学生センター長	葛 崎 偉		
人文学部	教授	Hintereder-Emde, F	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	池 園 宏	27. 4. 1～29. 3. 31	
教育学部	教授	白 石 敏 行	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	佐 野 之 人	27. 4. 1～29. 3. 31	
経済学部	教授	鍋 山 祥 子	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	石 龍 潭	27. 4. 1～29. 3. 31	
理学部	教授	宮 川 勇	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	石 黒 勝 也	27. 4. 1～29. 3. 31	
医学部	教授	田 中 満由美	26. 4. 1～28. 3. 31	保健学科
〃	教授	山 崎 隆 弘	27. 4. 1～29. 3. 31	医学科
工学部	教授	中 山 雅 晴	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	南 和 幸	27. 4. 1～29. 3. 31	
農学部	教授	竹 松 葉 子	27. 4. 1～28. 3. 31	
〃	准教授	藤 井 克 彦	27. 4. 1～29. 3. 31	
共同獣医学部	教授	森 本 將 弘	26. 4. 1～28. 3. 31	
〃	准教授	柳 田 哲 矢	27. 4. 1～29. 3. 31	
国際総合科学部	教授	川 崎 勝	27. 4. 1～28. 3. 31	
〃	教授	マルク・レール	27. 4. 1～29. 3. 31	
事務局	学生支援部長	村 田 三 郎		
〃	学生支援部教育支援課長	三 浦 勝 弘		
〃	学生支援部学生支援課長	佐々木 義 正		

平成 27 年度 山口大学 学部・研究科 FD コーディネータ 名簿

部 局 等	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	准教授	森野 正弘	
教育学部 教育学研究科	准教授	笠井 伸一	
経済学部 経済学研究科	教 授	兵藤 隆	
理学部 医学系研究科(理学) 理工学研究科(理学)	教 授	内野 英治	
医学部(医学科) 医学系研究科(医学)	教 授	松山 豪泰	
医学部(保健学科)	教 授	廣瀬 春次	
工学部 理工学研究科(工学) 医学系研究科(工学)	教 授	朝位 孝二	
	教授	中山 雅晴	
農学部 農学研究科 医学系研究科(農学)	准教授	藤井 克彦	
共同獣医学部	准教授	柳田 哲矢	
国際総合科学部	講 師	星野 晋	
東アジア研究科	准教授	石川 耕三	
技術経営研究科	教 授	向山 尚志	
連合獣医学研究科	教 授	山本 芳実	

平成 27 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	朝 日 孝 尚	
〃	主 事	野 村 厚 志	
〃	主 事	星 野 晋	
〃	教 授	小 川 勤	
〃	准教授	木 下 真	
〃	准教授	林 透	
〃	講 師	岡 田 耕 一	
〃	助 教	河 島 広 幸	

平成 27 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
平成 28 年 11 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)